

イ！・ジ！・ホワイト 著  
山崎 郁山 譯

# 福音宣傳者

末世之福音社出版

# GOSPEL WORKERS

Instruction for All Who Are  
“Laborers Together With God”

Compiled From the Complete Published  
Writings of the Author, and From  
Unpublished Manuscripts

---

BY E. G. WHITE

---

1920

Printed and Published by  
S. D. A. MISSION PUBLISHING HOUSE  
171 Amanuma, Suginami-Mura, Toyotama-Gun,  
Tokyo, Japan

## 復刻再刊にあたって

本書は、一九二〇年（大正九年）の発行以来、実に半世紀以上も絶版になっていたものの、写真による復刻版です。

福音宣伝のためのこの上ない手引きとして、すでにいわば伝説的な貴重書となっていた本書を、早く再刊してほしいという各方面からの要望がきわめて強く、また実際、世界総会の良書リストの中でも推薦されている必読書であることから、なんとかして早く再刊したいと種々の面から検討を加えました。その結果、字体は古く、かなり読みにくいという欠点があるにしても、旧版をそのまま復刻して再発行するほうが時間や労力、費用の点でプラスが大きいということになり、このような写真による復刻再刊という形をとることになった次第です。こうした事情をご理解くださったうえで、読みにくいながらも本書を丹念に繰り返しお読みになり、備えられた大きな霊的利益を十分にお受けになられますように。

一九七五年（昭和五〇年）三月

発 行 者

# 書 名 対 照 表

\* 本書に出てくる順序に従っています。

\* 明らかにわかるものは除いてあります。

|      |        |        |        |
|------|--------|--------|--------|
| 以西結書 | エゼキエル書 | 腓立比書   | ピリピ書   |
| 哥羅西書 | コロサイ書  | 哥林多書   | コリント書  |
| 提摩太書 | テモテ書   | 馬可傳    | マルコ伝   |
| 馬太傳  | マタイ伝   | 何西阿書   | ホセア書   |
| 羅馬書  | ローマ書   | 彼得書    | ペテロ書   |
| 以賽亞書 | イザヤ書   | 雅各書    | ヤコブ書   |
| 出埃及記 | 出エジプト記 | 以弗所書   | エペソ書   |
| 利未記  | レビ記    | 但以理書   | ダニエル書  |
| 約翰傳  | ヨハネ伝   | 撒母耳書   | サムエル書  |
| 希伯來書 | ヘブル書   | 以士喇書   | エズラ書   |
| 加拉太書 | ガラテヤ書  | 哈巴谷書   | ハバクク書  |
| 西番雅  | ゼパニヤ書  | 耶利米亞書  | エレミヤ書  |
| 路加傳  | ルカ伝    | 馬拉基書   | マラキ書   |
| 猶太書  | ユダ書    | 帖撒羅尼迦書 | テサロニケ書 |
| 亞麼士書 | アモス書   | 撒加利亞書  | ゼカリヤ書  |



## はしき

本書の原本が米國に於て最初出版されしは、千八百九十年にして、爾來現代の眞理宣傳者は、其教職にあると平信徒たるとを問はず、本書の教ゆる實際的指導を仰ぎ成功ある奉仕の實を舉げつゝあるものゝ數は頗る多い。以て本書の價値の如何に大なるかを知る事が出来る。

尙本書は、著者が記者及講演者としての活動的生涯を了りし後完結したものであるから、著者の全著述の代表とも云ふ可く、『預言の靈』の結晶と稱するも蓋し過言ではあるまい。又或人が、本書を評して、『神が豊に祝福し給ひし一大福音宣傳者の晩年に結べる熟したる果である』と云ひしは、遺憾なく本書の價値を表現して居る。

かゝる名著を翻譯する事は、甚だ名譽であると同時に、甚だ難事にして、重大の責任を有する事は言ふ迄もない。されば、譯者は原文の意を失はん事を恐れ、殆ん

ど遂字譯となし、敢て技巧を弄せず、祈禱と共に筆を採り、且つ先輩の校閲を乞ひ  
茲に此邦譯を公にした次第である。讀者もし譯文の拙劣を咎むる事なく原著書の大  
精神に接し、其齋らす使命を信受せば、實に譯者にとりて本懷の至である。

一九二〇年九月

譯者識

# 福音宣傳者 目次

## 聖召を以て召さる

キリストに代りて……………一

靈的の番兵——神に事ふるに忠實なれ——堅忍不拔の實例

働の神聖……………二三

イザヤの任命

畑は此世界なり……………一九

萬國に宣傳せらる可き福音

教役者の責任……………二九

靈魂に對する重荷——飢渴く如く生命のパンを求む——キリストの働の緊急

現狀と前途……………三九

## 義の役者

我等の模範なるキリスト……………四五

基督の教訓の單純——主は貧富の別なく傳道したまへり

教師としてのキリスト…………… 五

現時代に對する教訓…………… 六

エノクの經驗——バプテスマのヨハネの經驗

異邦人に遣されたる使徒パウロ…………… 七

## 必要な準備

聖職にある青年…………… 七

重荷を負ふものたるべき青年…………… 八

働人を養成する必要

傳道事業に備ふる教育…………… 九

軍隊的教練——訓練を容易ならしむる法——小成に安ずる勿れ

青年傳道者…………… 一〇

外國語——困難なる場所に要せらるゝ青年

教役者の音聲の練習…………… 一五

缺點を矯正せよ——明白なる發音振り

神に悦ばるゝ者とならん事を務めよ…………… 二五

淺薄なる知識

聖職の教育機關としてのキャンパス事業…………… 三一

|                           |     |
|---------------------------|-----|
| 能率増進に缺く可らざる聖書研究……………      | 一三五 |
| 青年教役者は経験ある教役者と共に働くべし…………… | 一四〇 |
| 聖職にある青年……………              | 一四五 |

『慎むべし』——無智の辯解を許さず——厚遇に酬ゆる事——堅忍不拔の必要に缺く可らざるもの

## 資 格 篇

|          |     |
|----------|-----|
| 献 身…………… | 一五四 |
|----------|-----|

更に献身の念を熱くせよ

|            |     |
|------------|-----|
| 理智に富め…………… | 一六三 |
|------------|-----|

深慮あるパウロの態度——新傳道地の働

|            |     |
|------------|-----|
| 禮讓の美德…………… | 一七〇 |
|------------|-----|

|               |     |
|---------------|-----|
| 教役者の舉止動作…………… | 一七五 |
|---------------|-----|

教役者は價值ある模範を示せ

|            |     |
|------------|-----|
| 社交的關係…………… | 一八三 |
|------------|-----|

|            |     |
|------------|-----|
| 決斷と正確…………… | 一八九 |
|------------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| 果實採集夢物語…………… | 一九四 |
|--------------|-----|



奉仕に缺く可らざるもの……………二〇一

同情——廉潔——キリストとの結合——謙遜——熱心——堅實——日常生活

## 講壇の人としての教役者

『汝道を宣傳ふべし』……………二二一

神聖な事柄に於ける政策——鋭き矢の如くに

生命のパンを裂き頒與ふる事……………二三一

基督を宣べ傳へよ……………二三六

神の愛——基督に到る道

信仰によりて義とせらるゝ事……………二四四

傳道者某に與ふる書……………二三八

實際的參考……………二四二

形式的講演——神に對する敬畏の念——不敬虔なる物語——聽衆の隋氣に打勝つ法

——少數の會衆——短い説教——直截的なれ——集中——單純——リバイバル——

安息日の集會

作法及び服裝に注意せよ……………二五三

公の祈禱……………二五八

祈禱に於ける敬虔——祈禱に於ける我等の態度



# 牧 者

善き牧羊者……………二六六

個人的傳道……………二七三

## 家庭訪問

牧羊者の働……………二八一

家庭に於ける聖書研究……………二八五

個人的努力の價值……………二八九

## サマリヤの婦人

働の區分……………二九三

教會助手を教育する事——他を救はんとして自ら救ふ——教會は神聖なる信託なり

教役者の妻……………三〇二

家庭に於ける教役者……………三〇六

## 家庭に於ける禮儀

『我が羔を牧へ』……………三二一

小兒に對する傳道——少年の感情を察知せよ——少年をして教會の働に與らしむべし

病者に對する祈禱……………三三二

罪の告白——聖旨に服從せよ——治療機關

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 物客せぬ様教育せよ.....      | 三三六 |
| 福音の維持.....          | 三三九 |
| 什一献金の用途——嚴肅なる義務     |     |
| 食餌と健康.....          | 三四七 |
| 衛生改革と教役者.....       | 三五一 |
| 衛生改革は如何に宣傳すべきか..... | 三五五 |
| 教役者と作業.....         | 三五七 |
| 健康維持に對する吾人の義務.....  | 三六五 |
| 不充分なる食料             |     |
| 過勞の害.....           | 三七二 |

## 福音宣傳者の助け

|            |     |
|------------|-----|
| 聖書研究.....  | 三七九 |
| 密室の祈禱..... | 三八七 |
| 信  仰.....  | 三九六 |
| 不信と懷疑      |     |
| 勇  氣.....  | 四〇五 |

|                                       |     |
|---------------------------------------|-----|
| 『主にありて男々しかれ』——信任と特權の時機                |     |
| 神は働人を如何に訓練し給ふか                        | 四二三 |
| 充分時間を費やして神と語れ                         | 四二七 |
| 最大の必要物                                | 四二一 |
| 自省                                    | 四二五 |
| 自己改善                                  | 四二八 |
| 寸暇の利用——精神的修養の必要                       |     |
| 聖靈                                    | 四四〇 |
| 神の約束は條件付なり——教師たる聖靈——聖靈を受くる事の効果——終末近けり |     |
| 進歩と奉仕                                 | 四五〇 |

# 福音宣傳者

# 福音宣傳者

## 聖召を以て召さる

「なんぢらはエホバの祭司さいしとなへられ、われらの神かみの役者つかへびさよばれん。」

## キリストに代りて

神は此地球の歴史の各時代に於て、其時機に應じて神の御用を務めし人を有し、之に、「汝等なんぢらは我證人わがあかしびとなり。」と仰せ給ひました。何れの世に在りても敬虔なる人々があつて、自己が進路に閃きし光を集めて、神の言を民衆に語りました。エノク、ノア、モーセ、ダニエル其他多數の家長や預言者達は、孰れも正義の役者つかへびでありました。とはいへ此人々と雖誤りない者とは云へません、矢張り弱點も缺點もありました。然し神は此人々が神の御用に献身せし時、之を通して働き給ひました。



教會の大なる首、キリストは其昇天以來選び給ひし使者により、此世に神の働を進行せしめ給ひます。又キリストは此等の使者を通して世人に語り、其需用に奉仕し給ひます。

神の教會を建設せん爲、言を傳へ教をなして努力すべく神より召されし者の地位は、重大なる責任の一であります。

彼等はキリストに代りて、世の男女を勧めて神と和やはらがしむる事をなすべく、又上よりの智慧と能力とを受くる事によりてのみ、其使命を果し得るものであります。

神の役者つかへびざは七の星を以て表象されてあります、且つ最初にして最後なるキリストの特別の監督保護の下に置かれてあります。

教會内に充溢みちみるべき美はしき感化は、神の愛を代表すべき、此等の神の役者に望まざるを得ません。

彼の天に輝く星は神の統御の下にありて、神は光を以て之を充たせ、其運動を指導し給ひます。若しさうでなければ、諸の星は皆落て仕舞はなければなりません。



神と其役者との關係も亦之と同じ事にして、彼等は神の聖手にある器機に過ぎず、隨つて其成就げた善事は悉く神の力によりて爲れたものであります。

神が聖靈の働を通して、其役者をして星が此世界に對するより、更に大なる祝福を齎らすものとならしめ給ふ事は、キリストの譽であります。救主は神の役者の力の根元にして、若し彼等が主を仰ぎ望む事が、主の天父を仰ぎ見給ひしが如くなれば、必ず主の聖業を爲す事が出来ます。

神の役者が神を己が信賴とする時、神は其光輝を與へて世に反射せしめ給ひます

### 靈 的 の 番 兵

キリストの役者は、其保護の任を託されし民の靈的守護者であります、其働は番兵の其に酷似て居ります。

昔時は、屢々邑の城壁上に哨兵が立つて居つて、要害の爲肝要な部所を見張り、萬一敵が近いて來た場合には、早速警戒を與へる事が出来る様になつて居りました

即ち城壁内の安全は一に此番兵の忠實に頼りました。哨兵等は時を定めて相互に應呼し、一同警醒し無事なる事を確めました。故に安寧を報ずる聲なり、又は警戒の叫びなり、各々之を傳達し、邑中に反響する様に致しました。

凡の神の役者に、主は左の如く宣給ひました。

『人の子よ、我汝を立てイスラエルの家の守望者となす。汝わが口より言を聞き我にかはりて彼等を警むべし。我惡人に向ひて、「惡人よ、汝死ざるべからず。」と言んに、汝その惡人を警めてその途を離るゝやうに語らずば、惡人はその罪に死ん、なれどその血をば我汝の手に討問むべし。然ど汝もし惡人を警めて翻へりて、その途を離れしめんとしたるに、彼その途を離れずば、彼はその罪に死ん、而して汝はおのれの生命を保つことを得ん。』<sup>1</sup>

預言者の此等の言は、教會の保護者又は神の奧義を司ぐる家宰として任命されし者の上に、重大なる責任が負はされてある事を示して居ります。彼等は敵の近ける際には、警告の喇叭を吹鳴すべく、シオンの城壁に立てる守望者と同じ地位に置か

れたものであります。若し何かの理由で其靈的の感覺が鈍り、危険を辨へる事が出来なくなり、警告を與へなかつた爲滅ぶるなら、神は滅されし人々の血を彼等の手に求め給ひます。

シオンの城壁に立てる守望者の特權は、神の御側みそばに斯く近く居り、又神の靈を感じるに鋭くして、神が彼等を通して罪人に其危険を告げ、安全の場所を示さしめ給ふ事であります。

彼等は神より選ばれ、献身の血を以て印せられたるものにして、將に臨まんとする滅亡より男女を救済すべきものであります。

又其同胞に對し罪の確實なる結果を忠實に警戒し、且つ忠實に教會の利益を擁護すべきものにして、如何なる時も其警醒を弛める事は出来ません。其働は全力を傾注して之に當らなければなりません。又其聲は喇叭の響の如くに擧げられ、決して動搖する不確な調子を出してはなりません。又給料の爲に働くのではなく、福音を傳へなければ禍である事を痛切に感じ、止むに止まれぬ所より働くのでなければな



りません。

### 神に事ふるに忠實なれ

キリストと偕に働く者なる教役者は、己の働きの神聖なる事と、之を成功せしむるには勞力と犠牲との必要である事を深く自覺しなければなりません。自分の安逸や便益を計らず、自己を忘れ、亡はれたる羊を探す爲には、自分の疲れて居る事や寒い事、又は餓ゑて居る事に氣が付かない位でなければなりません。其目的とする所のものは、唯一つ即ち失はれたる羊を救ふ事であります。

苟いさしくもイムマヌエルの血染の軍旗の下に神に事ふる者は、屢々義勇的努力と持久忍耐とを要する仕事に出遇ふ事があります。然し十字架の軍人は陣頭に立つて毫も臆するものではありません。若し敵が激しく迫つて攻寄せる場合には、神てふ要害に助を仰ぎ、聖言の約束を信じて神に依頼む時、目前の義務を果すに足る力を受ける事が出来ます。

彼は上よりの力が無くて叶はぬ事を悟ります。されば勝利を得ても、之により自慢する様な事なく、彌が上にも全能者の聖手に縋る様になります。

此方に依頼む時は、對手の心の琴線に觸れ得る様力強く救の使命を宣傳することが出来ます。

神の其教役者を遣はし、生命の言を紹介せしめ給ふは、『虚しき哲學』や、『智識と偽り稱ふる辯論』に非ずして、『すべて信ずる者を救はんと神の大能』なる福音を宣傳へしめ給ふのであります。

パウロはテモテに左の如く書贈りました。

『われ神の前および顯るゝ時、その國に於て生る者死る者を審判するキリストイエスの前にて爾に求む。なんぢ道を宣傳ふべし、時を得も時を得ざるも勵みて之を務め、各様の忍耐と教誨を以て、人を督し戒め勸むべし。それ人眞の教を容す耳を悦ばしむる言を好み、其私慾に循ひて己が爲に師を増加する時來らん。かれら耳を眞理より背け奇き談に向ふべし。然ぞ爾すべての事に慎み苦難を忍びて傳道

者の工をなし、爾の職を盡せ。」<sup>8</sup>

此訓戒中に、凡の教役者のなすべき働の大體が示してあります。——其働は即ちイエスが、「夫われは世の末まで常に爾曹と偕に在なり。」<sup>4</sup>と仰せ給ひし聖約束の成就によりてのみ爲し得るものであります。

福音の役者即ち神の使命を同胞に宣傳する者は、決して己が任務と責任とを忘れてはなりません。若しも自分と天との關係が絶えて仕舞ふ時は、他の者より一層危険にして、惡き事の方面に一層強き感化を及ぼし得るものであります。

サタンは絶えず教役者を看視し、何處かに其弱點を捕へ之を發達せしめ、其處から付込んで成功ある攻撃をしやうと計畫して居ます。而して成功した曉には、苟もキリストの全權大使たるものが油斷した爲敵に處を得させ、多の靈魂を惡魔に屬けさせるのでありますから、サタンの凱歌を奏するは當然であります。

眞正の教役者は自己が神聖なる職務を賤むる様な事は何もしてはなりません。慎重な態度と機敏な行動とを以てキリストが爲し給ひし如く立働き、全力を盡して福



音を知らぬ人々に救の音を傳へなければなりません。又飢渴く如く切に義を求むるの情念に充べく、又其必要を感じれば先づ熱心に神の力の賦與を仰ぎ、而して後イエスが爲し給ひし如く、單純に、忠實に、又謙遜に眞理を紹介し得るものであります。

### 堅忍不拔の實例

神の僕は世俗よりの尊敬や稱賛を受くべきものでありません。ステパノはキリストと其十字架に釘けられ給ひし事を宣傳へた爲石にて打殺されました。又パウロが牢に入れられ、鞭や石にて打たれ最後に死刑に處せられたのは、忠實に異邦人へ神の使命を齎らしたからでありました。又使徒ヨハネは、『神の道かみとイエスの證こころの爲あかしに、』バトモスの孤島に流竄されました。斯く神の力により堅忍不拔の人物があつた實例は、此世に對し、神の約束の忠實と其臨在及び支へ給ふ恩恵とを證明するものであります。

榮光ある永生の希望は神の敵の前途を輝かしません。曾ては諸國を滅し世界の半を震駭せしめた事のある大英雄も、孤島に流竄せられ失望の中に死んだ例もあります。又宇宙間の事物に通曉し、神の力の發現に觸れ其調和に感心して居つたに拘らず、此等の驚くべき事柄を通して、萬物を形造り給ひし神の聖手を認める事が出来なかつた哲學者もあります。『尊貴<sup>たうき</sup>なかにありて曉<sup>ささ</sup>らざる人<sup>ひと</sup>は滅<sup>ほろ</sup>びうする獸<sup>けもの</sup>のごとし。』然し神に屬する信仰の勇者は、如何なる地上の富に比ぶるも、更に大なる價值ある嗣業を受るものにして、——此嗣業こそ靈魂の願望を満足せしむるものであります。然し天の記録の書には天の市民として登記せられ、偉大と永遠の重き榮光とは彼等のものであります。

人が従事し得る仕事の内で最も大きく又最も貴いものは、罪人を導いて神の羔に到らしめる事にして、眞の教役者は神の目的を成就する事に於て神と共に働くものであります。

神は教役者に、往いて教へ而してキリストを宣傳へよ、神の恩恵、仁慈及愛憐を

知らぬ民を教訓せよと宣給ひます。『然ば未だ信ぜざる者を何で願求ることを得んや、未だ聞ざるものを如何で信ずる事を得んや、未だ宣るものあらすば如何で聞ことを得んや、』『よろこびの音信をつたへ、平和をつげ善おとづれをつたへ、救をつげ、シオンに向ひてなんぢの神はすべ治めたまふといふものゝ足は、山上にありていかに美しきかな。……エルサレムの荒廢れたところよ、聲をはなちて共にうたふべし。エホバその民をなぐさめ、エルサレムを贖ひたまひたればなり。エホバそのきよき手をもろくの國人の目のまへにあらはしたまへり。地のもろくの極までもわれらの神のすくひを見ん。』

キリストの爲に働く者は決して自己が働の失敗を考へてはなりません、況て語る事は禁物であります。主イエスは凡の事に於て我等の力であり、其靈は我等を感動せしめます。而して我等を聖手に委ね奉り、光明の徑路となる時には善を行す力は

決して盡さず、主の満足れる徳より無限に恩恵を受ける事が出来ます。

- 1 以西結書卅三章七・九節
- 2 哥羅西書二章八節(改正譯) 提摩太前書六章廿節 羅馬書一章十六節
- 3 提摩太後書四章一・五節
- 4 馬太傳廿八章二十節
- 5 默示錄一章九節
- 6 詩篇四十九篇二十節
- 7 羅馬書十章十四節
- 8 以賽亞書五十二章七・九・十節



## 働きの神聖

教役者は民の前に立ち神の言を傳達するものであります、随つて思想に於ても、言語に於ても、將又行爲に於ても、彼の主を代表すべきものであります。

モーセが契約の使者として選ばれし時、彼に與へられし言は、『汝民のために神の前に居れ。』<sup>1</sup>でありました。

神は曾てモーセを選び給ひし如く、其使者として幾多の人を撰び給ひます。されば其聖き召を辱かしめ、又は神の子の生涯と働により、己が爲に定められた標準を低くする者の上に下る禍は重大であります。

アロンの子なるナダブとアビウが罪せられし事は、聖職を瀆す教役者に對する神の御所存を示して居ります。此の人々は献身して祭司の務をして居りましたが、自己を御する道を學ばず、私慾に耽る永年の習慣に捉はれ、聖職の重任を帶ぶる者も

之を破る力がありませんでした。

禮拜の最中、民の祈禱と讚美が神の聖前に上りつゝある時、ナダブとアビウとは酒氣を帶び、香爐を取り馨しき香を焚きました。然るに彼等の神御自身が點じ給ひし聖き火、即ち神が此目的の爲に用ひる様命じ給ひしものゝ代りに、『異火』を用ひて神の命令を犯しました。

此罪の故により火はエホバより出で、民の前にて兩人を燒盡しました。「モーセアロンに言けるは、エホバの宣ふところは是のごとし。云く我は我に近づく者等の中に我の聖ことを顯はし、又全体の民の前に榮光を示さん。』」

## イザヤの任命

神は其民に對する使命を負はしてイザヤを遣さんとし給ふに當り、先づ異象を預言者に與へて聖所の中なる至聖所を見る事を許し給ひました。突然聖殿の門と内なる幕とは引上げられた様に見え、イザヤは預言者の足すらも入る事の出来ない、至



聖所の内部の光景を見る事を許されました。彼は高くあがれる御座に、エホバの坐し給うて其榮光の衣裾は殿にみちたのを示されました。

聖座の周圍には大王の警護者の如くにセラビムが居りまして、彼等を圍繞する榮光を反射しました。其讚美の歌が重々しい崇嚴の調子を反響した時、恰も地震の如くに闕しきみのもどろが揺動しきみきました。

此等の天使等は、全然罪により汚されざる唇を以て神を讚美し、『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな萬軍はんぐんのエホバ、その榮光えいこうは全地ぜんちにみつ。』と叫びました。

寶座の周圍に居るセラビムは、神の榮光を見て畏敬の念に打たれて居りますから一寸でも自分を顧み稱讚する様な事はありません。彼等の讚美は萬軍のエホバに對してのみにして、頓つがて全地が神の榮光を以て充さるべき將來を憶ふとき、凱歌は妙なる頌謠となり、『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな萬軍の主。』と一人より一人へと反響します。

此等の天使等は神の聖前に並し、其嘉納ほいねみの微笑を受けつゝ、神を讚美するを以て、

無上の光榮となし、それ以上何ものをも望まず、神の御像を保ち、神の命じ給ふ事をなし、神を拜む事により、彼等の最高の希望は達せられて居ます。

イザヤは聽いて居ると、神の榮光、權力及び稜威は彼の視覺に開かれましたが、此啓示の光景に接し、彼自身の肉汚穢が頗る明白に見へ、彼が發する言すら彼を汚すが如く思はれました。茲に於て彼は只管恐縮し、「禍なる哉、我はほろびん我は……穢たる唇の者なるに、我眼萬軍のエホバにまします王を見まつればなり。」と叫びました。

イザヤの此謙讓は眞實にして、人の性質と神の品性との相違が明に示された時、彼は全然己が無能無價值なる事を悟りました。彼は如何にしてエホバの聖き要求を民に告げる事が出来ましたでせうか。

彼は下の如く陳述しました。「爰にかのセラピムのひとり、鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手になづさへて我にとびきたり、わが口に觸れていひけるは、視よこの火なんちの唇にふれたれば、既に汝の惡はのぞかれ、汝の罪はきよめられた

りど。』

其時イザヤは、『われ誰をつかわさん、誰か我らの爲に往べきか。』との聲を聞き、神に觸れられたと思ひ、力付けられ、『われ此にあり、我を遣はし給へ。』と答へました。

神の教役者が、信仰により至聖所を窺ひ、天の聖所に於ける祭司長の働を見る時自は汚れたる唇の民にして、其舌は屢々空しき事を語る人なる事を悟らざるを得ません。彼等が自分の價值なき事と、キリストの完全とを對照して失望し、彼等の大なる働に對し、全く無能、不適當である事を感じ、『我ほろびん。』と叫ぶは當然であります。

然しイザヤの如く神の前に己が心を卑くすれば、預言者になされし業は彼等にも就げられ、其唇は壇の上よりとりたる熱炭を以て觸れられ、神の偉大と、能力と、彼等を助け給ふの敏速とを深く感じて、自己が見へない様になります。斯くて己に委ねられた働の神聖を悟り、苟も神即ち其の使命を託して派遣し給ひし御方を、辱



しめる様な事になる凡の物を憎むに至ります。

完全なる献身を爲し、神が彼等の唇に觸れ給ふ事を得る者に對し、『收穫かりいれの畑はたに行け、我汝われなんぢと共に働はたらく可し。』との御言葉が掛ります。

此準備の出來た教役者は、此世にありて善を爲すの力となる事が出來ます。彼の言には誤りなく、純潔、真正にして、同情と愛とを以て満ち、又其行爲も正しく、弱者に對する助と祝福となるのでありませう。

キリストは彼に臨在し、其言行及び思想を統御し給ひます。

彼は又傲慢・貪慾・我慾に打勝つべき契をなし、且つ此契を果さんと務むる時、靈的能力を受けます。又日毎神に見ゆる事により、聖書の知識が深くなり、父と子の交際に與り、絶えず彼が神の旨に従ふ時、迷へる靈魂をキリストの教會に導く言を語るに、日一日と一層適したものととなります。

1 出埃及記十八章十九節

2 利未記十章一―七節參照

3 以賽亞書大章一―八節參照



## 畑は此世界なり

『イエス、ガリラヤの海邊を歩て、ペテロと云シモン、その兄弟アンデレと二人にて海に網うてるを見たり、彼等は漁者なり。之に曰けるは、我に従へ、我爾曹を人を漁る者と爲ん。彼等やがて網を棄てイエスに従ふ。此より進けるに、又外の兄弟二人、即ちゼベダイの子ヤコブと其兄弟ヨハネ、父ゼベダイと偕に、舟にて網を補へるを見て之を召しに、彼等も頓て舟と父とを置てイエスに従へり』  
此人々が給料の約束もなく、何も疑はずに迅速に服従した事は、顯しい様に思へますが、キリストの招の言に抵抗すべからざる力があつたのであります。  
キリストは此等の見る影らない漁夫をして御自身に結合せしめ、幾多の人をサタンの部下より救援け出し、神の奉仕に任ずる手段となし給ひました。

彼等は人の傳説や曲論の雜らぬ神の眞理を世に紹介し、神の證人となり、其任務

を果すのでありました。即ち主と共に歩み、共に働き、主の徳を實行する事により人を漁る者となる資格を得るのでありました。

斯くして最初の弟子は福音宣傳の働に任命され、三ヶ年間救主と共に働きました。且つ主の教訓、<sup>いやし</sup>癒の働及び實例により、彼等は主の始め給ひし事業を進行する準備が出来ました。

又信仰の單純、潔くしく謙遜なる奉仕により、弟子等は神の道の爲に責任を負ふ事を教へられました。

使徒等の經驗より、私共の學ぶべき教訓があります。此人等は主義に對しては、飽迄も忠實でありました。彼等は弱つたり落膽したりする人でなく、神に對し敬虔の念厚く、又熱心で高尚な目的と希望に充ちて居りましたが、彼等と雖も<sup>うまれつき</sup>生來は弱い助けなき人々にして、今日働に従事して居る人々の誰とも異りはありません。とは云へ、彼等は神に全き信賴をして居りました。又富も持つて居りました。然しそれは心靈の修養より成立つたもので、<sup>いやし</sup>苟も神を凡ての最初・最後・最善となす者に

は、誰でも此種の富を持つ事が出来ます。

彼等はキリストの膝下において（直譯、學校において）與へられたる教訓を學ぶ爲永く努力し、凡の力の中の最大なるものと密接に結び付けられ、此窮乏の世に真理の寶を紹介するに成功せん爲、永遠の實體に關し、一層深く、高く、又廣き理解を得んと絶えず追求致しました。此種の働人、即ち姦惡なる世に、神の王國を代表する働の爲に、一切を舉げて献身した人のみが要されてあります。

世は思想の人・主義の人・又絶えず知識と聰明に進歩發達する人を要して、真理を諸民・諸音・諸國に迅速に流布せしめ得る人を大に要して居ります。

### 萬國に宣傳せらる可き福音

何處にも真理の光は照輝き、人の心を警醒し、悔改めしむる様にせねばなりません。即ち福音は萬國に宣傳せらるべきものであります。神の僕は葡萄園の既に耕作された部分を擴げねばなりません。即ち遠近に働き、又海を越えて遠く異郷に行か



ねばなりません。又間もなく誰も働く事の出来ない夜が來ますから、日の續く限り働かねばなりません。

斯くて、十字架に上げられ給ひし救主を罪人に示し、『世の罪を任ふ神の羔を見よ』。と聲を合せて招かねばなりません。又教會を組織し、又新しく組織されし教會員によりて爲さるべき働を計畫する筈であります。

働人が熱心と神の愛に滿されて出で行く時、教會は必ず振ひ興ります。是働人の成功は、教會員各個人の重大なる利害問題として認められるからであります。

神の許に行き、泣き叫び、涙を流して滅亡の崖際に居る人々の爲に懇求する、熱烈にして献身的の男女が要されてあります。種を蒔かなければ收穫を得る事は出來ず、努力なくしては何の結果を見る事も不可能であります。

アブラハムは異邦人に光を輝す者として、『其故郷より出でよ。』との命を蒙り些の異議なく之に従ひ、『其往くところを知ずして出ゆき。』しました。

されば今日の神の僕等は神の召し給ふ所へは、唯其導と働を成功せしめ給ふ事と



を信じ、何處へでも行かねばなりません。

世界の畏ろしき状態を見ると、キリストの死は殆ど無益の業にして、サタンが凱旋したかの如く思へるかも知れません。實際此地上の住民の大多數は敵に服従して仕舞ひました、然し私共は欺かれませんでした。

如何にもサタンが勝利を得た様に見へるに拘らず、キリストは天の聖所と地上に於て、其聖業を進行せしめつゝ居給ひます。神の聖言は、末の世に現出する暴虐・腐敗の狀を寫し出して居ります。而して私共は預言の成就を見るにつけ、キリストの王國の最後の勝利に對する信仰が強められ、新しき元氣を以て任命されたる働をなす爲に出行かねばなりません。

警戒の嚴肅にして神聖なる使命は最も困難なる傳道地、最も罪深き都市、及び大なる三重の福音使命の光が未だ少しも照らぬ凡の所に宣傳せられ、一人残らず羔の婚筵に對する最後の招を聞かねばなりません。即ち村々、町々、國々に、現代の眞理の使命は外見の虚飾でなく、靈の力に依りて宣傳せらるべきものであります。私

其の救主が言行に於て示すべく此世に來り給ひし神の原則が、單純なる福音によりて紹介せられる時、使命の力は自然と感ぜられます。

此時代に於ては、凡の生命の源なる神より來る新しき生命は、凡の勸人に賦與せられねばなりません。私共が使命の大きさを悟る事の鈍いのは實に驚くより外ありません。私共の要するものは、熱誠堅固の信仰と動かざる勇氣とにして、最早働をなし得る時は幾何もありませんから、旺盛なる熱心を以て働かねばなりません。

『<sup>はた</sup>烟は此<sup>この</sup>世界なり。』<sup>4</sup>此聖言は當時福音宣傳の使命を受けた使徒等が理解したよりも、私共の方は一層其意味を善く悟る事が出来ます。全世界は一個の大傳地にして、永き以前より福音の使命を知つて居るものは曾て近寄る事の困難であつた傳道地も、今や容易に入る事が出来る様になつた事を想ひ、獎勵されなければなりません。

從來固く門戸を鎖し福音を拒んだ國々も、今は神の言を説明して呉れと哀願する様になつて來ました。又王侯等も永く閉ぢて居つた門を開放し、十字架の<sup>おこづれ</sup>音の入



來を歡迎する様になり、收穫は實に大したものであります。今爲す秩序ある努力の結果は、獨り永遠のみ之を顯す事が出來ます。

神の攝理は私共の前に行く道を備へ、無限の力なる神は、人間の努力と共に働き給ひます。然れば此際神の働を認むる事の出來ない目は盲目あくらにして、眞の牧羊者が其羊を呼び給ふ聖聲を聽かぬ耳は聾みしひであると言つて差問さしかへありません。

キリストは其勢力を凡の人心に及ぼし、其像と品性とを凡の者に印せんと希望し給ひます。主は地上に在り給ひし時、神の王國が擴張され、全世界を抱合し得る様にと同情と努力とを切望し給ひました。抑も此の世界は主が贖うて己がものとなし給ひしものなれば、之は人が束縛なく純潔ならん事を冀ひ給ひます。『彼は其前かれ そつまへに置くところの喜樂よろこびに因りて、其恥そのはぢをも厭いとはず、十字架じしかを忍びしのび給ひました。

キリストの此世に於ける生活は、其一切の苦難は決して無駄にならず、再び人を引戻して神に忠實ならしめ得るこの思想により鼓舞されました。且つ世界の爲に流し給ひし血により成就さるべきもの、即ち神と羔に、永遠の榮を歸すべき勝利が残

つて居ります。

異教徒は主の嗣業として與へられ、地の極も主の所有として與へられます。斯くてキリストは、『己がたましひの煩勞を満足』し給ひます。

『起よひかりを發て、なんぢの光きたりエホバの榮光なんぢのうへに照出たればなり。見よくらきは地をおほひ、闇はもろくの民をおほはん。されどなんぢの上にはエホバ照出たまひて、その榮光なんぢのうへに顯はるべし。もろくの國はなんぢの光にゆき、もろくの王はてり出るなんぢが光輝にゆかん。なんぢの目をあげて環視せ、かれらは皆つごひて汝にきたり、なんぢの子輩はとほきより來り、なんぢの女輩はいだかれて來らん。そのときなんぢ視てよろこびの光をあらはし、なんぢの心おどろきあやしみ、且ひろらかになるべし。そは海の富はうつりて汝につき、もろくの國の貨財はなんぢに來るべければなり。』『地は芽をいだし、畑はまけるものを生ずるがごとく、主エホバは義と譽をもらくの國のまへに生せしめ給ふべし。』



昔の弟子等に與へられた使命は、又私共にも與へられて居ります。今日も昔の時の如く十字架に釘<sup>つ</sup>けられ、又甦<sup>よみが</sup>り給ひし救主を、世の神無く望なきものに高く掲げて紹介せねばなりません。主は牧師・教師・傳道者を要し給ひます、而して戸毎に主の僕は救の使命を宣傳し、諸國・諸族・諸音・諸民にキリストを通して罪の赦を受くべき事を布告し、而も之を爲すや、緩漫、不活潑な調子でなく、明確にして、刺戟的に叫ばねばなりません。

今や無數の人は生を全ふすべき警戒を待望んで居ります。全世界は基督教の力の證據をクリスチャンによりて見なければなりません。單に數ヶ所のみならず、世界を通じて恩惠の使命は要されてあります。



救主の比類なき愛を見る者の思想は高尚にせられ、心は潔められ、品性は變化さ

れ、而して或る程度迄此不思議の愛を反射せしめん爲、世の光となり出で行きます  
私共はキリストの十字架を想へば想ふ程、一層深くパウロが、『我<sup>われ</sup>には惟<sup>ただ</sup>われらの  
主<sup>しゅ</sup>イエスキリストの十字架<sup>じか</sup>の外<sup>ほか</sup>に誇<sup>ほこ</sup>る所<sup>ところ</sup>なからんことを願<sup>ねが</sup>ふ。』と云ひし言に一致  
する事が出来ます。

- 1 馬太傳四章十八・廿二節
- 2 約翰傳一章廿九節
- 3 希伯來書十一章八節
- 4 馬太傳十三章卅八節
- 5 希伯來書十二章二節
- 6 以賽亞書五十三章十一節參照
- 7 以賽亞書六十章一・五節 同六十一章十一節
- 8 加拉太書六章十四節

## 教役者の責任

パウロはテモテに左の如く書贈りました。

『われ神の前および顯るゝ時その國に於て生る者死る者を審判するキリストイエスの前にて爾に求む。なんぢ道を宣傳ふべし、時を得るも時を得ざるも勵みて之を務め、各様の忍耐と教誨を以て人を督し戒め勸むべし。』<sup>1</sup>

テモテの様な熱心にして忠實な人に對する此嚴肅な命令は、福音の役者の働の重大と責任とに對する強き證明であります。

パウロはテモテを神の聖前に呼び出し、人の議論や習慣などを説くのではなく、神の言を傳へ何時でも機會さへあれば——多人數の會集の前にも亦内輪の會合に於ても、道傍にまれ、爐邊にまれ、安全の場合にも又は困難、危険に、侮辱、又は損失に出遇つた時にも、神の爲に證を爲す事が出来る準備をして置けと命じました。



パウロはテモテの溫順にして讓歩し容い性質が、彼をして其働の重要な點を蔑ないがしろにせしめはしまいかと氣遣ひ、忠實に人の罪を戒め、殊に大なる罪を犯して居る者に對しては鋭く之を譴責すべき事を勧めました。然し此とても『各様の忍耐さまぐらひと教誨おしへを以て』爲し、神の眞理まことにより彼の譴責を説明し、且つ勵行しつゝ、キリストの忍耐と愛とを顯はさなければなりませんでした。

罪を惡にくみ之を譴むると同時に罪人に對して愛憐と親切とを表する事は、仲々六ヶ敷い仕事であります。心と行爲との潔めを得んと努力すればする程、罪に對する知覺が益々鋭くなり、之を惡む情が一層痛切になつて來ます。

私共は非行者に對する嚴格が過度にならぬ様警戒せねばなりません。又罪と云ふものは甚しき惡むべきものである事を見失なはぬ様に注意せねばなりません。

誤れる者に對しキリストの様な忍耐と愛とを示す必要があると偕に、之を閑却し過ぎ當人を　て譴責せらるゝに當らぬ者との觀察を抱かせ、要らざる世話で而かも不都合な關涉として之を却けしむる危險があります。



## 靈魂に對する重荷

神の役者<sup>つかへびこ</sup>はキリストと密接<sup>まじはり</sup>の交際に入り、凡の事——潔き生涯・克己・仁慈・精勵及び忍耐に於てキリストに従はねばなりません。人を神の國に導く事は教役者の先づ第一に考ふ可き大切な事柄であります。彼等は罪に對する悲と忍耐<sup>たへしお</sup>ぶ愛とを以て不撓不屈の努力を盡して、キリストが働き給ひしが如くに働かねばなりません。

ジョン・ウエルチと云ふ教役者は、人を救に導かん爲に大なる重荷を感じ、夜中起きて人の救の爲に神に禱告した事が屢々で有ました。或る折に其妻が彼に少しは自分の健康の事も顧み、そんな眞似をしなくてもよからうと頼む様にいひましたが彼は、『妻よ私は三千人の靈魂の責任を有つて居るが、其人々がどんな風になつて居るか知らない。』と答へました。

曾て或る處で井戸を鑿<sup>ほ</sup>り殆んど工事が終る頃、未だ底に一人の男が居つた時、土が崩れ其人を生埋にしたので、繩よ階子よ鍬よと騒ぎ、職人も、農夫も、法律家も

其附近の人々が息もつかず現場に駆付け、『彼を救ひ出せ。』と異口同音に呼び、一同必死となり、汗だら／＼になり、腕がぶる／＼と震ふ迄働きやつとの事でパイプを地中に挿込み、埋没した人が未だ生きて居るか否やは、之を通して此方から叫べば返事をする筈と思ひ、試みた處、『生きて居るが早く助けて下さい到底も堪まらない。』と返事をしたので一同は大に喜び更に元氣を出し發掘し終に彼を救出しました、而して喜の叫は天地を震ひ、『彼救はれたり。』との語は町中に響き渡りました。

一人の生命を救ふに此丈の努力と熱心とを顯はすは過分でありましやうか、決してさうではありません。然し此世の生命の失はるゝと永遠の亡と比較すれば如何であります。人一人が助かるか死ぬかと云ふ際に、斯くも人の心を衝動し、熱烈に其救済に奔走せしむるならば、尙一層の努力を以てキリストより離れ滅亡に行く者を其危険より救出す爲に熱中せねばなりません。苟しくも神の僕たるものは、彼の井戸の底に埋没した人に對して示した様な熱心を以て、靈魂の救の爲に盡力せね

ばなりますまい。

### 飢渴く如く生命のパンを求む

曾て或る敬虔なる婦人が左の如き希望を陳べた事がありました。

「どうかして以前講壇より説教された様な純粹の福音を聴きたいものであります私共の牧師は善い御方ではありますが、人の靈的に要するものを悟つて呉れませんどうもカルバリの十字架に美<sup>うつくし</sup>い花を被せ、凡の恥辱を覆ひ隠して仕舞ひます。若し正當に心の養となる單純・明瞭なる聖書的の話を聞く事が出来たなら、私と同じ様な多の憐なる靈魂にとりてどんなに嬉しい事でありませう。」

處で唯説教する許りでなく、實際民に任<sup>まか</sup>ふ所の信仰の人、日々神と共に歩み天と活ける交通をなし、隨て其語が人の肺肝を貫き、之に罪を認めさせる力を有する人が要されて居ります。教役者は己の智慧力量を自慢する爲ではなく、眞理が恰も全能者の放ち給ひし矢の如く、人の心に突入らす爲に働く可きものであります。



或牧師が聖書に基き説教をした處、聽衆の一人は大層感じ、説教が濟んで後に、

『貴君は説教した事を實際信じて居りますか。』と問ひましたから、

『勿論です。』と答へると、又疊みかけて

『然し實際そうなのですか。』と問ひました。牧師は、

『そうですとも。』と云ひ乍ら聖書に手を掛けました。

其時其人は『若し是が本當なら、どうしたら我々はよからう。』と叫びました。

牧師は何んだつて『私』と云はず、『我々』と云つたのであらうか、と變に想ひ

ましたが、此問題は深く牧師の心を動かし家に歸り如何にすべきか教へ給へと神に叫びました。祈つて居ると、彼は此じび行く世に紹介すべき重大なる永遠問題を有する事を力強く示されました。三週間彼は講壇に缺席しました、彼は其間『我等は何をなすべきか。』の質問に對する答を求めて居たのでありました。

やがて牧師は聖靈の油を注がれて戻つて來ましたが、今迄の説教は聽衆を一向動さなかつた事を悟ると共に、今は靈魂の重荷を顯しく感じ、講壇に來りましたが、



獨りではありませんでした。爲すべき大なる働がありました。が牧師は神が決して自分棄て給はぬ事を知りました。彼は聽衆の前に救主と其比類なき愛を高调し、神の子を顯はしました。斯くてリバイバルが起り近隣の各地方の教會に周く傳播しました。

### キリストの働の緊急

若し我教役者にして世人が神に審判かるゝ日の間もない事を悟つたなら、もつと熱心に多の男女をキリストに導く筈であります。最後の試験は凡の者に臨むのも最早眼前に迫つて居ります。恩恵の聲の聞ゆるも今少の間であります。『人もし渴かば我に來りて飲め。』てふ有難い招待の與へられて居るのも今少の間であります。神は福音の招待を何處の民にも送り給ひます、然れば主より遣されし使命宣傳者は調和的に又倦む事なく働き、凡の人々をして此等の教役者はイエスと共にありて主より學んだものである事を認めさせる様にしなければなりません。

イスラエルの祭司長アロンに就て、斯く記してあります。『アロン聖所に入る時はその胸牌にイスラエルの子等の名を帶て、これをその心の上に置きエホバの前に恒に記念とならしむべし。』キリストの其教會に對する愛は此によりて實に美しく又適切に顯はされて居るではありませんか。我等の祭司長キリストは其心の上に其民を置き給ひます、アロンは即ち此祭司長の型であります、然らば地上にある主の僕なる教役者は、主の愛と同情と配慮とを共にせずして濟みましようか。

罪人の心を溶かし、之を悔改めさせキリストの聖許に導くものは神の力のみであります。ルーテル、メランクトン、ウエスレー及ホイットフィールドの様な大改革者大教師等と雖も、自分の力では決して人の心を動かし、あれ丈の結果を見る事は出来ませんが、其成功は神が彼等を通して語り給うたからであります。人は人間以上の力に感じ、我識らず之に服従しました。今日も己を忘れ神に依頼み救靈事業に成功せんと冀ふものは、必ず神の補佐を得て其努力の結果は美事に顯はれて盛に人を救に導きます。

私（ホワイト夫人）は遺憾ながら、我教役者の多の働は、力を缺いて居ると云はざるを得ません。神は彼等の上に恩恵を與へんと待ち給ふのに、彼等は冷淡な形式許りの信仰を有し、空しく日を送り眞理を傳へては居るが、理窟許りで天來の活力が無いから、對手の心に何の印象も與へません。即ち彼等は自分の周圍には暗黒と誤謬の裡に滅びつゝある多の靈魂があるに拘らず、半分眠つて居るのであります。

キリストと同胞とに對する愛が燃えて居る教役者は、愆と罪とに死んで居る人々を警醒せんと努めます、諸君の熱心の勧めと警戒により、世の人の良心を刺戟し、諸君の熱き祈禱は彼等の心を溶かし、罪を悔改めて救主に來る様に導かねばなりません、諸君は救の使命を宣傳するキリストの全權大使であります、諸君の献身的精神と知慧との缺乏は他人の形勢を一變し、之を永遠の死に陷れる事があるものである事を経験なさし、然れど到底不注意、無頓着で居られるものではありません、諸君は力を要しますが、神は喜んで之を諸君に與へ給ひます。神の要め給ふものは唯謙讓の心即ち神の約束を信じ之を受くるを肯ずる事であります。諸君の達し得る範

園内に置き給ひし方法を用ひさへすれば必ず祝福を受ける事が出来ます。

1 提摩太後書四章一・二節

2 約翰傳七章三十七節

3 出埃及記二十八章一・九節



## 現 状 と 前 途

今や私共は世界歴史の終結に近きつゝあります、而も眼前には一大事業——罪の世界に宣傳すべき最終 警告的使命を完結する事業を控え 居ります。鋤鋤を取つて田畠に働いて居る人、其他各種の事業に従事する人が主に召され、此使命を世に傳ふる爲遣されるものがあります。

世の現状は全く亂調子となり、前途頗る暗澹たるものでありますが、キリストは實際私共の勇氣を挫く其人々に希望ある保證を與へ之を迎へます。

主は是等の人々の中に主の葡萄園に働き得る資格を認め給ふが故、若し彼等が常に喜んで教訓を受けるなら、主は其攝理を通し彼の力量相當の働を爲し得る者と成らしめ、且つ聖靈を賦與して辯舌の力をも與へ給ひます。

未だ傳道を試みた事のない多い新開地は、初心の教役者により開拓せられねばな

りません。キリストの此世に對する希望に満ちたる觀察は、多の働人の確信を鼓舞し、若し其人々が謙遜と努力とを以て其働に當るなら、必ずや適所適材たる事を發見するであります。

キリストは世の悲慘なる亡狀を具さに知り給ひます、之を見て大なる力量を有する働人の或者は任重くして途遠きの感に打たれ、如何にして世の男女を梯子の第一段にすら導く可きかに惑ふものがあります。色々綿密に作戰計畫して事は一向甲斐なく、梯子の最低の段の上に立ち、『我等が居る茲迄來れ。』と云ひますが、可愛さうに多くの人々は何處へ足を掛けてよいか判らずに居ります。

基督の心は凡の點に於て貧しき者を見て勵まされ給ひます。又柔和にして虐待された者、渴ける如く義を慕ふも兎角満足せざる者、事を始むる力量なき者共をあこが勵まして勵まされ給ひます。主は多の教役者が失望する様の狀態ですら歡迎し給ひます。主は又我等の誤れる敬虔を訂正し、逆境にある憐むべき人々に對する重荷を與へ、無學者及び福音に接し難い人々に同情を寄せしめ給ひます。主は主の助けんと望み

給ふ人々を、如何に導く可きか其方法を働人に教へ給ひます。此等の働人は、醫事傳道を爲し得る地に入る可き門戸の開けるを見て大に勵を受けます。又彼等は自己を頼む所少くして凡の榮光を神に歸します。其手の工は粗野にして不熟練であるかも知れないが、其心は憐を感じ易く山なす禍を少しでも平ぐ<sup>たいら</sup>る爲、何かしやうとする熱望を以て滿されて居り、且つキリストは彼等を助けんと臨在し給ひます。主は悲慘の裡に憐を解し、凡の物の損失の中に利得を認むる者を通して働き給ひます。

世の光なるキリストが通過し給ふ時顯れるものは、凡の困難の中には特權、混亂の中には秩序、又一見失敗と思はれる所に成功と神と智慧とであります。

我兄弟姉妹よ、世人に接觸してお働きなさい。逆境に沈んで居る人を引上げ、災害を轉じて祝福となし、失望を希望に變へる様な方法を以て働きなさい。

普通の平信徒も働人の地位を取らねばなりません。キリストが人類の悲を共にし給ひし如く、同胞と悲を願ふ事により信仰を以て彼等と共に働き給ふキリストを見る事が出来ます。



『エホバの大なる日近づけり。近きて速に來る。』凡の働人に私は左の如云  
ひたい。『謙遜なる信仰を以て行け、主は汝と共に行き給はん、目を醒し且祈れ  
是れ汝の働の基礎なり。力は神より出づ、汝は神と共に働くもいたることを記憶し  
て主に依頼して働け、彼は汝を助け給ふ者なり。汝の力は主より出づ、彼は汝の智  
慧、義、潔又贖なり、キリストの轡を負ひて日毎主の謙遜を學べ、主は汝の慰安又  
平安となり給はん。』 教會の證七卷二七(一)二七二頁)



救主は世の悲慘と不幸の深さを知り、又如何に之を救済すべきか其方法を知り給  
ひます。主は到る處暗黒の裡に彷徨し罪と悲と苦の下に壓伏されて居る人々を見給  
ひますが、同時に彼等の可能性即ち何處迄向上せしめ得るかを見給ひます。人は神  
よりの恩恵を誤用し、其力量を徒費し、神に似たる性の權威を失つたとは云へ、  
創造主は人類の贖罪によりて崇められ給ひます。



キリストは其信者が乞ひ又は考ふる以上 事を、彼等の爲に爲し得給ふ事を喜び給ひました。主は聖靈の全能力を以て装はされし眞理は罪惡との争闘に於て勝利を得、血染の軍旗は主の僕の頭上に翻へりて凱旋すべき事を知り給ひました。又主は彼の信頼し給ふ弟子等の生涯が、主の夫の如く即ち連続せる勝利の生涯であらねばならぬ事を知り給ひました。

キリストは仰せになりました。『われ此事を爾曹に語りしは、爾曹をして我に在て平安を得させんが爲なり。爾曹世に在ては患難を受けん、然れど懼るゝ勿れ、我すでに世に勝てり。』キリストは失敗し給うた事も落膽し給う 事ありません。主の弟子等は此同じ忍耐深い性質の信仰を顯はし、主を送り給ひし如き生涯を送り主が働き給ひし如く働き、萬事主を師表と仰ぎ之 倣はねばなりません。

彼等は勇氣と活氣と持久力を有し、其前途に一見越ゆ可らざる如き障礙物が横はつて居ても、主の恩恵により之を突破せねばなりません。困難に辟易せず之を制

御し、何事にも失望せず、凡の事は希望を以て迎ふ可きものであります。キリストは匹類なき愛てふ金の鎖を以て、彼等を神の寶座に結付け給ひました。凡の力の源なる神より出づる宇宙間に於ける最高の感化が、彼等のものであらん事は主の目的であります。彼等は惡に抵抗する力、此世の死も地獄も其上に權を取る事能はざる力、キリストが打勝ち給ひしが如くに打勝つ事を得しむる力を有つべきものであります。

1 西番雅一章十四節

2 約翰傳十六章卅三節

## 義の役者

『我等の思得るは神に因り、かれ我儕をして新約の役者となるに足しむ。』

### 我等の模範なるキリスト

我等の主イエスキリストは此世に來り、人の必要に事へて毫も倦み給ひませんでした。主は此目的を達せん爲、『自ら我儕の恙を受けわれらの病を負』ひ、疾病悲慘及び罪惡の重荷を除去せんとして來り給ひました。人類を完全に恢復し健康、平和及品性の完全を與ふる事は實に主の使命でありました。

主の助を求めに來た人々の境遇及び其要する所は千差萬別でありましたが、主の恩恵に浴せずして空しく去つたものは一人もありませんでした。醫癒の力は主より泉の如く滾々と湧き出で、人の靈肉を健全に致しました。



救主の働は時や場所に限られず、其同情は境を知りませんでした。主の癒と教の働とは實に大規模にして、主の許に踵を接して來る群衆を容るゝに足る建物を、パレスチナ全國に見出す事が出来なかつた程でありました。

さればガリラヤの緑の丘、人通り繁き往來、湖邊、會堂其他何處でも病者が連れ來られし所は即ち主にとりて病院となりました。

都會にまれ村落にまれ何處でも其過ぎ給ひし處に於て、病者の上に聖手を置き之を癒し給ひました。又主の使命を受ける準備の出來て居る人には、天父の深き愛を説き之を慰藉し給ひました。斯くて終日御許に來る者の爲に事<sup>つか</sup>へ、夜に入りてからも晝の間は生計の爲勞働して居る者共に目を懸けさせ給ひました。

イエスは人の救に對し極めて重き責任を感じ、人類の主義と目的とに斷乎たる變化がなければ、是れが主の聖心の重荷にして何人も到底其重さを察する事は出来ません。

イエスは小兒の時も青年時代にも大人となり給ひし時にも孤獨の歩を續け給ひま

したが、主の聖前に出づる者は恰も天に居るかの感が致しました。主は日毎各種の試練を受け各種の罪惡に遭遇し給ひました、而して祝福し又救はんと欲し給ふ者の上に其の力を顯はし、一回も其の責任を避け又落膽し給ひし様な事はありませんでした。

主は何を爲し給ふ時にも己が希望を嚴密に其使命に服せしめ、萬事天父の旨に服従する事を以て其の生涯を榮あるものとなし給ひました。曾て少年時代に當り、母マリヤはイエスがラビを相手に問答し給ふを見、『子よ、何ぞ我儕に如此なしたるや』と申しました時、之に答へて、『何故我を尋るや、我は我父の事を務むべきを知らざる乎。』と答へ給ひましたが、此答こそ主の全生涯を通じての働の主調であります。

キリストは又絶えず克己犠牲の生涯を送り、同情者の好意で御宿を供給され給ひし場合を除きては、此地上に定まれる作家を有し給はず、私共の爲に最貧しき生涯を送り、悩み苦める者の間に身を置き、世間よりは一向認められず又崇められもせ

す、民の中に出入して活動盡力し給ひました。主は常に忍耐深く嬉々として事に當り給ひしが故に、世の惱苦なごみくるしめる者は生命と平安の使者として之を歓迎致しました。主は男女、幼少のなくてならぬ者を知り、『我われに來きたれ。』との招待を凡の者に與へ給ひました。

イエスは其公生涯中、説教よりも病者を癒す事に一層多の時間を費し給ひました。斯くて主の奇蹟は滅す爲でなく救ふ爲に來り給うたとの聖言の虚いつはりならざる事を證明し、何處に行き給ふも其恩恵の音は既に響き渡り、主の過ぎ給ひし處は何處にも主の同情を辱うし、健康を與へられ、新に見出した力を試みて喜よろこびに溢れて居るものがあり、群集は此等の人々の唇より主のなし給ひし奇くさしき聖業を聽かんとて之を圍みました。

多くの聾者は癒され始めて聽きしものは主の聲であつた、又啞者は言い始めしが始めて口に上げしものは主の聖名にして、瞽者が目開けて始めて見しものは主の聖顔でありました、又其聖顔は始めて見たものであります。彼等は如何でイエスを愛



し又讚美せず居られませうか、主が都市村落を過り給ふ時は、恰も電流が活動するかの如く生命と喜悅とを賦與し給ひました……………。

救主は癒の働を爲し給ふ毎に、之を心靈に神の原則を植付ける機會となし給ひました。是は實に主の働の目的にして、人の心に神の恩寵の福音を受入れしめん爲に肉体に屬ける恩恵を賦與し給ひました。

キリストはユダヤ國民中にありて最高の地位を占むる事が出來たに相違ありませんが、寧ろ貧者に福音を宣傳する方を選び、處々を巡廻り大路や小道に居る者に真理の言を聽かしめ、或は海邊に、或は山麓に、或は人足繁き街に、或はユダヤ人の會堂にありて聖書を説明し給ふ主の聖聲は聞えました。イエスは又聖殿の外庭で教へ給うた事も度々ありましたが、是は異邦人をして聖言を聽かしめんが爲でありました。キリストの教訓は當時の學者やパリサイ人の聖書研究とは、全く其選を異にして居るので民の注意を喚起しました。ラビ等の説く所は、言傳や人の議論や推測に重を措いて居りましたが、兎角人の聖書に關し言つたり書いたりした事が、聖書

其物の代となる事が度々ありますが、キリストの教訓の主眼は神の言でありましたから、質問者に對し、『聖書に斯く録されたり。』『聖書に何と云へるや。』『汝如何に讀むや。』と明瞭なる語を以て之に應じ、同情者にせよ、反對家にせよ、感興が起つた場合には何時も神の言を紹介し、はつきりと且つ力を以て福音の使命を傳へ給ひました。主の聖言はペトリアークス（アブラハム其他ユダヤ人の父祖）や預言者の教訓に一段の光明を添へ、舊約聖書が全く新しい默示の如くに人に紹介され、イエスの聖言に接せし者は、未だ曾て神の言の意味を斯くも深く悟つたものはありませんでした。

1 馬太傳八章十七節

2 加傳二章四十八・四十九節

## 基督の教訓の單純

キリストの様な傳道者は未だ曾てありませんでした。主は天の王で在<sup>ま</sup>しませしに

人類の居る所に來り之に遇はんが爲、自己を卑うし私共の性質を取り、富者、貧者を問はず自主奴隸の別なく、凡の民に契約の使者となりて救の音おこづれを傳へ給ひました。斯くてイエスの大なる癒主であると云ふ評判はバレスチナの津々浦々にまで擴がり、病者は主の助を仰がん爲其通經し給ふ場所に來りました。其他聖言を聽かんとし、又は聖手に觸れられん事を切望して來るものは其數を知りません。斯く主は——卑しき人類の姿を取り給へる榮光の王は、町より町、村より村へと福音を傳へ病者を癒して廻めぐり行り給ひました。

主は又ユダヤ國民の大年祭しゅうなにも列り、外形の儀式に氣を奪はれて居る群集に、天に屬つける事を語り、永遠問題を彼等に示し、凡の者に智識の庫より寶を取出して之を與へ給ひました。又極めて單純平易な語を用ひ給ひしが故、理解に苦む様な者は一人もなく、イエス獨特の方法により悲嘆と苦難との中にある凡の者を助け、慈愛と奨勵との籠れる恩恵を以て、癒と力とを與へて罪に悩む者の爲に盡し給ひました。教師中の教師なるキリストは、民と最も親しく交りて之を教導し、一度傳へ給ひ



し眞理は其聽者の心を深く感動せしめ給ひました。又主は對手の人々をして、主が飽迄も彼等の利益と幸福とを増進せんが爲盡し給ふ事を感ぜしむる様に教へ給ひしが故、其教訓は直接に其説明は適切に、又其言は同情に富み、且つ快活にして其聽者をして恍惚たらしめました。斯くて主の一言一句は單純と熱誠とが籠つて居りました。

### 主は貧富の別なく傳道したまへり

キリストは實に忙がしい御方にして、いかなる日でも賤が伏屋に入り世の落伍者悲境に呻吟せる者に希望の聖言を語り給ふ御姿を見ない事はなく、悲しめる者を慰め、行き給ふ先々で祝福を賦與し給ひました。

主は貧者の爲に盡し給ひしと共に富者に接するの途を學び、富且つ教育あるバリサイ人やユダヤの貴族や羅馬の宰とも交はり、彼等の招待を受け其饗宴に列り、彼等の業務や職掌を熟知し、以て其心に滅びざる富を紹介せんと務め給ひました。

キリストは天よりの力を受ける事により、人は汚辱なき生涯を送り得べき事を示さんとして此世に臨り給ひました。主は倦怠を知らざる忍耐と同情に富める助力とを以て、人類の需むる所に應じ、其優握なる接觸により人の胸中より不安と疑惑とを消滅し、怨を轉じて愛となし、不信を變じて確信となし給ひました……………。

キリストは又何れの國民にも、如何なる階級の者にも、如何なる宗教の人にも毫も其間に區別をなし給ひませんでした。當時のユダヤの學者やパリサイ人等は、天與の賜たまひを我一地方、一國のみの利益に供し、世界に於ける神の家族の餘の者、即ち他國民を除外せんと努めました。が、キリストは凡の隔の籬を撤回し、神の恩恵は恰も空氣や光線、又は地を爽にする雨の如く之を限る事の出来ない事を示す爲に臨り給ひました。

キリストの創立し給ひし宗教には社會階級の制度なく、ユダヤ人も異邦人も自主も奴隸も神の前には齊く兄弟であります。主の運動は毫も政黨などの關係で左右される事なく、親疎の別や敵味方の差を造り給はず、唯其大御心に懸け給ふ所のもの

は生命の水を得んと渴く靈魂でありました。

キリストは如何なる者に遇ふも之を價值なきものと認め給ふ事なく、凡の靈魂に應ずる治療を講じ、到る處に時機に適切なる教訓を垂れ、苟も他より閑却され若くは侮辱されし者を見給ふ時は、之に其神にして人なる同情を示す必要を一層深く感じ、最も度し難く、最も見込なき者にも神の子供として恥しからぬ立派な品性に到達し得べき確證を示し、希望を與へて之を奨勵鼓舞し給ひました。

イエスは屢々サタンの捕虜となり、其苦を毀つ力なき者に出遇ひ給ひましたが、凡て失望せるか、病めるか、誘惑させ居るか又は既に墮落せるか、何れにしても氣の毒な者に對しては同情に富んだ憫<sup>あはれみ</sup>の言を懸け給ひましたが、是實に彼等の要する言にして、一々了解し得る處のものでありました。

主は又惡魔と苦戰奮闘最中の者に出遇ひ給ふ事もありました。斯るものには屹度勝つから辛棒して戰へと勵まし給ひました。是れ天の使が彼等の側に立ち、勝利を得さして呉れるからであります。



イエスが税吏に招かれ、名譽ある賓客として彼等の食卓に就き給ふや、主の同情と社交に顯はれた愛とは、主が人類の威嚴を認め給ふ事を示し、随したがつて多の人の主の信任を受くるに足る者とならんことを切望する様になりました。

斯くて主の聖言は、彼等の渴ける心に生命を與ふる力となり、之を祝福し新しき刺戟は衝動され、社會から棄てられた人々にも、新生命を得るの途が開かれました

イエスはユダヤ人に生れ給ひましたが、パリサイ人が八ヶ間敷云ふ國俗などを度外視し、自由にサマリヤ人の間に往來し、パリサイ人等の偏見を意とせず、此賤いやしめられたる民の好意を喜び、一つ家根の下に共に寢ね、一つ食卓に就き、彼等の手により調理されし食物を共に食し、——彼等の町にて教へ、最上の親切と禮儀とを以て彼等と遇し給ひました。而して主は人としての同情の紐により彼等の心を引付け給ふと同時に、神としての恩寵を以てユダヤ人が拒みし救を彼等に與へ給ひまし

た。——ミニストリー、オブ、ヒーリング七十七—廿六頁

## 教師としてのキリスト

世の贖主は善事を爲しつゝ、處々を經行し給ひました。主は民の前に立つて永遠の眞理を説き給ふに當り、其聴衆の顔色が變化して行く狀を熱心に注視し、深き興味と喜悅とを以て傾聽して居る者の顔は、主に大なる満足を與へました。又率直なる眞理が心中に秘める罪や惡に觸れる時、其人の顔色に眞理を喜ばぬ印として、一種冷かな嫌惡の情を表する變化が起るのを認め給ひました。

イエスは又忌憚なく罪を責むる事は、主の聖言を聽く者の是非共要する處のものにして、彼等の暗黒なる心の奥底を輝らせし光は、若し之を受入れさへすれば、彼等に最大の祝福となる事を知り給ひました。

キリストの働は誰にも明瞭に了解し得るが、之に従へば平安と幸福とが受けられる眞理を單純に紹介する事にして、主は人の胸中を洞察し其品性と一生を誤り神よ

り離れしむる罪と愛着して居る事を觀破し給ふが故、之を摘發し、凡の者をして眞正の光に照されて之を見、而して之を棄てしめ給ひました。主は又一見最も難物と思はれる者の中にも見込ある者を識別し、彼等が光に來り主の眞正の弟子となるべき事を知り給ひました。眞理の矢が主の聖言を聽きし者の心を射貫き、自我の城壁を碎き、謙遜、痛悔及び最後に感謝を生ずる時、救主の心は喜ばしくなりました又主は周圍の聽集を見渡し、以前に見た事のある同じ顔を認め給ふ時は、茲に有望なる天國の臣民を見出し給ひし喜は主の聖顔に顯あらはれました。

主の代表者として派遣し給ふ使命宣傳者も、主と同じ情と同じ熱き興味とを持つべく、又骨折甲斐もなく一向働を認められずして失望しかけて居る者は、イエスも色々頑迷な人々を相手にし、他の人が經驗した以上の難事に處し給ひし事を記憶せねばなりません。

イエスは忍耐と愛を以て民を教へ、其深遠なる智慧は聽衆一人々々の要する處のものを知り給ひました。而して折角彼等に與へんとて來り給ひし平安と愛との使



命を拒む者を見給ふ時は、聖心の奥底迄苦痛を感じ給ひました。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

世の贖主は外見を飾り、若しくは世俗の智識を示して來給はざりし故、多の人は人の聖姿の内部に輝いて居る神の子の榮光を認める事が出来ませんでした。『かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患を知』り給ひました。世人の目から見れば、『燥きたる土よりいづる樹株の如く……見るべきうるはしき容』がありませんでした。然し主御自身では左の如く仰せになりました。『主エホバの靈われに臨めり、こはエホバわれに膏をそゝぎて、貧さものに福音を宣傳ふることをゆだね我をつかはして心の傷める者をいやし、俘囚にゆるしをつげ、縛められたるものに解放をつげしめ給ふなり。』

キリストは民の居る處に赴いて之に道を傳へ、最も力ある單純な言語を以て彼等の心に率直なる眞理を紹介し給ひました。故に如何に無學の者も主を信ずる事によ

り、最も高尚な眞理を了解し誰一人として主の聖言の意味が判らないからとて、學者に相談するものではありませんでした。

キリストは決して難解の引照をしたり、皆の知らぬ様な六かしい言を川ひて、無學者を悩まし給うた事はありませんでした。世界唯一の最大教師の教訓は實に最も確固として單純且つ實際的でありました。



『夫すべての人を照す眞の光は世に來れり。』此世には今迄も大教師、大學者が顯はれ、其人々の言ふ所は思想を刺戟し、若くは學術上に多大の貢獻をし、世の師表、恩人として尊敬を受けました。然し彼等に比すれば遙に優れる御方があります。『彼を接、其名を信ぜし者には權を賜ひて、此を神の子と爲り。』『未だ神を見し人あらず、唯うみ給へる獨子すなはち父の懷に在者のみ之を彰せり。』此世の智者學者は如何に古くとも、人間が創造られし以後に顯はれたものでありますが、眞

の光なるキリストは彼等の出でざる前に既に存在し給ひました。月や星が太陽の光を受けて輝く如く、世の大思想家の説く所が眞實である限り、其は義の太陽なるキリストの光を反射し、凡の思想、凡の才能は悉く世の光より發揮するものであります。

1 以賽亞書五十三章三、二節

2 同六十一章一節

3 約翰傳一章九、十二、十八節



## 現時代に對する教訓

エノクとバプテスマのヨハネとの經驗は、私共が經驗すべき事を代表して居ります。此人々の性行は既に研究して居りますが、尙一層深く研究せねばなりません。抑もエノクは如何なる人か、死なずして天に移うつされし人、又ヨハネは如何なる人か、キリストの第一降臨前に當り主の道を備へ其徑みちすじを直なほくすべき召を蒙つた人でありました。

### エノクの經驗

聖書にエノクは六十歳の後始めて男子を設け、以後三百年神と共に歩あゆんだと記してあります。

エノクは若い中から神を愛し、且つ畏れ、其誠命を守つて居りましたが、最初の

子が生れた後、彼は一層高い經驗に進み、一層深く神と交る様になりました。

子が父に對する愛、又父の保護を單純に信賴する事を見、又自分が初めて生れた子に對する深き愛情を實驗するに付け、エノクは、神が其生み給へる獨子を世に賜ひし驚く可き愛及び神の子供らが天父に信賴すべき貴重なる教訓を學びました。キリストを通して顯はし給ひし神の無限の愛は、彼が日夜の默想の主眼となり、熱心以て同郷の民に其愛を顯はさんと努力致しました。

エノクは幻象の中に神と偕に歩んだのではなく、凡の日常の義務を遂行する時でありました。彼は決して世を避けて隱遁主義の生活を送つたのではなく、此世にあつて神の働を爲し、家庭にありても、社交に於ても、夫として父として、友人として市民として彼は、不撓不屈の神の僕でありました。

エノクは活動生涯の最中にありて、儼然として神との交通を斷つことなく、働が多くなり且つ劇しくなればなる程、益々繁く、益々熱心に祈り、或る時期を定め暫時人を避け、親しく神と交りました。

彼は暫く民の中にあり、教訓と模範とにより彼等を益する爲働いた後、靜なる處に退き、饑え渴く如く神のみ與へ給ふ其神の知識を求めんが爲祈禱に時を移しました。

斯く神と交はりて出て來たエノクは、彌が上にも神の像を反射し、其顔はイエスの聖顔に輝いたと同様の神聖なる光により輝きました。されば彼が神と交はり出て來た時には、不敬虔の輩と雖も、敬畏の念を以て彼の容貌を仰ぎました。

年の進むに従ひ、彼の信仰は益々強く、彼の愛は益々熱くなり、彼にとりては、祈禱は靈魂の呼吸の如く、彼は天の雰圍氣の中に存して居りました。

未來の光景が彼の眼界に開けし時、エノクは正義の宣傳者となり、警戒の言を聽かんとする凡の者に神の使命を紹介しました。曾てカインが、神の聖前を遁れんと試みたる地方に於て、神の預言者は、彼に示された驚くべき光景を公にして左の如く陳述しました。『視よ、主其坐き萬軍と偕に來りて衆人を鞠き、神を敬はざる者の神を敬はずして行ひし惡行と、神を敬はざる罪人の主に逆ひて語れる諸の



あしきことは せめしま  
惡言を責給ふ可し。』<sup>1</sup>

神の力が神の僕の上に加つて居る事は、其言を聽ける人々によりて感ぜられ、或者は其警戒を受入れ罪を棄てましたが、大多數の者は、嚴肅なる使命を一笑に付し去り之を顧みませんでした。神の僕は、終末の時代に於ても同様の使命を宣傳しなければなりません。又社會大多數の人より、不信と嘲笑とを以て迎へられるに相違ありません。

年月を経るに隨ひ、人類の罪惡は益々増長し、神の審判の黒雲は益々厚く重つて來ました。然し信仰の證人なるエノクは、毫も倦まず或は警戒し、或は勸告し、或は教訓し、罪惡の潮流を喰止め、神の怒の下る事なからしめんと全力を盡しました。が其時代の人々は、彼が金銀を集め、貨殖の途を計らぬ愚を笑ひました。然しエノクの心は永遠の寶を慕ひ、神の京城を望み、シオンに立ち給ふ榮光の王を見、世上の罪惡が多くなればなる程、神の家郷を慕ふ彼の熱情は愈々増し、此地上に居乍ら信仰により神の國に住つて居りました。『心の清き者は福なり、其人は神を見る

イエスが税吏に招かれ、名譽ある賓客として彼等の食卓に就き給ふや、主の同情と社交に顯はれた愛とは、主が人類の威嚴を認め給ふ事を示し、随したがつて多の人の主の信任を受くるに足る者とならんことを切望する様になりました。

斯くて主の聖言は、彼等の渴ける心に生命を與ふる力となり、之を祝福し新しき刺戟は衝動され、社會から棄てられた人々にも、新生命を得るの途が開かれました

イエスはユダヤ人に生れ給ひましたが、パリサイ人が八ヶ間敷云ふ國俗などを度外視し、自由にサマリヤ人の間に往來し、パリサイ人等の偏見を意とせず、此賤いやしめられたる民の好意を喜び、一つ家根の下に共に寢ね、一つ食卓に就き、彼等の手により調理されし食物を共に食し、——彼等の町にて教へ、最上の親切と禮儀とを以て彼等と遇し給ひました。而して主は人としての同情の紐により彼等の心を引付け給ふと同時に、神としての恩寵を以てユダヤ人が拒みし救を彼等に與へ給ひまし

た。——ミニストリー、オブ、ヒーリング七十七—廿六頁

默示を學び、聖靈の導の下に預言の書を研究し、又日夜彼の研究し又默想せし所のものはキリストにして、遂に彼の胸中は、榮光の幻象を以て滿さるゝに至りました彼は、『うるはしき狀なる王』を見、自己を認めませんでした。彼は又、神の聖き稜威を見、自分の價值なく能力なき事を悟りました。ヨハネの宣傳すべきものは、神の使命にして、彼は神の力、神の義によりて立ち、神を仰ぎ望んで居りましたから、毫も人を畏れず、天の使命宣傳者として出で行く準備が出来て居りました。彼は又王の王なる神の前に畏れおのゝけるが故、地上の君王の前に毅然として立つ事が出来ました。ヨハネは其使命を宣傳するに當り、決して高尚な議論や婉曲な美辭を用ゆる事なく、嚴肅にして莊重、而かも希望に滿ちたる彼の聲は曠野より聞えしました。『天國は近づけり、悔改めよ。』是れ彼が曠野で叫びし使命にして、一種の不可思議力を以て民を感動し、ユダヤ全國を擧げて刺戟され、群集は踵を接して曠野へと赴きました。

目に一丁字なき農民、漁夫、ヘロデの陣營に屬する羅馬兵、大劔を横たへ、反逆



の香をかぎ付けて之を撲滅せんと準備せる官吏、剛愎非道に税吏、乃至聖服を纏ふた祭司など、孰れも魅せられた如くに傾聴して居ました。尙頑迷度し難きパリサイやサドカイの徒も、例の嘲笑的態度は何處かに消失せ、深く罪を責められ、すごすご去り行きました。彼暴逆無道のヘロデすら、其宮廷に於てヨハネの使命を聴き、悔改の勧告に戰慄しました。

キリストが天の雲に乗りて再び來り給ふに最早間もなき此時代に於て、ヨハネが爲しと同様の働が必要にして、神は主の大なる日に立ち得る民を準備させる人々を召して居給ひます。

キリストの公生涯に入り給ふ前に宣傳されし使命は、悔改よ、税吏及罪人よ、悔改よ、パリサイとサドカイの輩よ、『悔改よ、天國は近けり。』でありました。キリストの再臨を信する民として、私共の傳ふ可き使命は、『汝の神に會ふ準備をせよ。』であります。

私共の使命は、ヨハネの其の如く短刀直入的でなくてはなりません。ヨハネは王

者の顔を干して其非行を責め、自己の生命の危険なりしに拘らず、神の言を宣傳するに躊躇しませんでした。現代に於ける私共の働も、之と同様に、忠實に果さねばなりません。又ヨハネが傳へたと同様の使命を傳へるには、彼と同じ靈的經驗を有し、同じ働をなし、唯神のみを見て自己が見えない様にならなければなりません。

ヨハネと雖も、天性普通の人と同じく、缺點も弱點もありましたが、一度神の愛に觸るや、全く變つた人間となりました。キリストが公生涯に入り給うた後、ヨハネの弟子は、凡の人が新しき教師なるキリストに従ふ様になつたと云つて、彼に不平を訴へましたが、當時ヨハネは、彼が自己とメシヤとの關係を如何に明かに理解して居るか、又如何に彼が前以て途を備へて置いたキリストを歡迎するかを示しました。

其時彼の云つた言は是でありました、『人は天より賜ふに非ざれば受ること能ざる也。我は基督に非ず惟その先に遣されし者なりと言し事を證する者は爾曹なり。新婦をもてる者は新郎なり。新郎の友たちて其の聲を聞ば、之に縁りて喜多し。』

我われいま此この喜よろこ滿びあつることを得ねたり。彼かれは必かならず盛さかんになり、我われは必かならず衰おとろふべし。』信仰に  
より贖主を見上げたヨハネは、自己沒却の頂點に達し、毫も己に引付けんとせず、  
其思想を向上するが上にも向上させ、終に神の羔を認めしめんと努力し、自分は單  
に野に呼べる聲である事を以て足たれりとし、人が自分を顧みて呉れなくとも、凡の  
人の目が生命の光なるイエスに注がれん事を喜と致しました。

苟いさしくも神の使命宣傳者としての召に忠實ならんとせば、己の譽を求めず、自己に  
對する愛が、キリストの愛に吞まれて仕舞ひ、バプテスマのヨハネが叫んだ如く、  
『世の罪を任おふ神の羔こひつひを見よ。』と宣言するは、己が任務である事を認めねばな  
りません。

ヨハネの胸中には一點の自己なく、神の光で満たされて居りました。彼は、キリ  
スト御自身の聖言の殆んど一部分とも稱すべき言を以て證を立て、救主に榮を歸し  
左の如く申しました。『天上より來るものは萬物の上にあり。地より出る者は地に  
屬つき、其言そのいどころも地ちの事ことなり。天てんより來る者は萬物の上に在り。……神の遣はし



し者は神の言を語る。』キリストに従ふ凡の者は、此キリストの榮光に與る事が出來ます。救主は又『我わが意を行ふことを求めず、我を遣はし、父の意を行ふことを求む』と仰になり、ヨハネは『神これ（キリスト）に靈を賜ひて限量なし』と申しました。キリスト信者も又此と同様にして、私共は自己を空ふして始めて天來の光に接する事が出來、自分の考を一切棄てキリストに降服する事を肯んずる事によつてのみ、神の品性を辨へ、信仰によりキリストを受入れる事が出來るのであります。

而して斯くなす凡の者に、聖靈は限りなく與へられます。『それ神の充足る徳は悉く形体をなしてキリストに住めり。……汝ら彼にありて全備する事を得るなり。』<sup>10</sup>

ヨハネは徒に閑日月を貪り、隱遁主義の生活を送つたのではなく、常に世の人と

接觸せんが爲出で行きました。彼は又時事に對し常に興味ある觀察者にして、彼の静寂な荒野より社會の形勢を注視し、神の靈によりて輝ける眼光を以て人性を洞察し、如何にして天來の使命を其心中に傳ふ可きかを研究しました。ヨハネは自己の使命の重荷を感じ、獨り默想と祈禱により、彼の前に横はれる畢生の任務を果さん爲決心の臍を固めました。

- 1 猶太書十四・十五節
- 2 馬太傳五章八節
- 3 希伯\*書十一章五節
- 4 馬太傳三章二節
- 5 亞歷士書四章十二節
- 6 約翰傳三章二十七・三十節
- 7 約翰傳一章二十九節
- 8 約翰傳三章三十一・卅四節
- 9 約翰傳五章三十節
- 10 哥羅西書二章九・十節

## 異邦人に遣はされたる使徒パウロ

キリストの福音宣傳に召された者の中で、使徒パウロは凡の教役者に對し忠實、献身、及努力の模範として、其首位を占めて居ります。教役者の働の神聖に關する彼の經驗と、教訓とは、福音宣傳事業にたづさはつて居る人々に、多大の助力と鼓舞とを與へます。

改心前のパウロは、極力キリストの僕を、迫害したものでありましたが、ダマスコ門外に於て、天より光ありて彼の心に輝き、且つ十字架に釘<sup>つ</sup>き給ひしイエスの聖聲を聽き、其默示に接するや、心機一轉、彼の全生涯の方針を改變して仕舞ひ、今迄は主の聖徒に殘忍なる迫害を加へて居た身が、何事を措いても榮光の主を愛する様になり、『世<sup>よ</sup>の成<sup>なり</sup>ざりし前<sup>まき</sup>より隱藏<sup>かくれ</sup>たりし……奧義<sup>おくぎ</sup>、』<sup>1</sup>を知らしむる任務が與へられました。彼に付て、アナニヤに顯はれた天使は斯く申しました。『彼<sup>かれ</sup>は異邦人<sup>いはうじん</sup>



及王おとぎとイスラエルの子孫しそんの前にまへに我名わがなを擔にはしめん爲ために我選わがえらびし器うつわなり。』<sup>2</sup>

パウロは爾來永年間の奉仕に於て、一度も救主に忠順を缺いた事なく、其ビリピの信者に贈りし書の中に左の如く記しました。『兄弟よ我自われら之これを取とれりと意おもはず唯ただこの一事じを務つとむ、即ち後すなはちに在あるものを忘わすれ、前まへにあるものを望のぞみ、神キリスト、イエスに由よりて上うへへ召めして賜たまふ所の褒美ほびを得えんと標準かふしに向むかひて進すすむなり。』<sup>3</sup>

パウロは變化に富んだ劇烈なる活動的生涯を送り、町から町、國より國へと旅行し、十字架の物語をして、福音を信する者を起し、教會を設立しました。

彼は此等の教會を絶えず慮つて居りましたから、多の教訓的書簡を認め、之に贈りました。又或時は毎日のパンの代しろを得んが爲、手の工わざをした事もありました。然し凡の劇務の中に處し、彼は決して一大目的即ち神が上へ召て賜ふ所の褒美を得んと、標準に向ひて進む事を一時たりとも忘れませんでした。

パウロは到る處に天の空氣を身に着けて行きました。隨したがつて彼と接觸した凡の者は、彼がキリストと偕にある勢力を感ぜずには居られませんでした。パウロの行爲

が、其宣傳する眞理と一致して居る事實は、彼の教へが偉大な力を與へ、人をして之に服せしめました。が、眞理の力は茲に伏在して居ります。故意<sup>わざ</sup>とらしからぬ聖き生涯の感化は、基督教を擁護する最も有力の説教にして、よし議論に勝つて相手を凹<sup>へ</sup>まして、徒らに反對心を激昂するに過ぎぬ事があります。然し神々しい模範は何人も全然之を拒む事が出来ぬものであります。

パウロの心は、罪人に對する愛に燃え、其全力を救靈事業に傾注し、其克己、其忍耐に於て、彼に優<sup>まさ</sup>れる教役者を未だ見ません。彼が自分に受けし恩恵を珍重したのは、之を他人を幸福ならしめる爲に用ひて、多くの便宜があつたからで、彼は救主に付いて語つたり、又は困難の中にある者を助けたりする事に、其機會を失つた事はありません。彼は發言し得る場合を見出す毎に、必ず曲れるを矯<sup>た</sup>め、多の人々の足を正義の途に導いてやりました。

パウロはキリストの教役者として、自分に負はされた責任と、若し自分の不忠實な爲に人が滅亡に行く事があれば、神は彼に其罪を討問<sup>とが</sup>しめ給ふ事とを、決して忘



れず、『我今日なんぢらに證す、凡の人の血に於て、我は潔くして與ることなし』と言ふ事が出来ました。又彼は福音に付て下の如く申しました。『われ爾曹の爲に神の賜ふ所の職に循ひ、此教會の役者となりて、徧く神の道を傳へんとす。この道は、歴々歴代隠れたる奥義なりしが今その聖徒に顯れたり神聖徒をして異邦人中に顯れし奥義の榮のいかに豊なるを知らしめんとし給へり。此奥義は、爾曹の中に傳へしキリストなり。彼は、爾曹の望む所の榮の望なり。我儕かれを傳へ、諸人を勧め、諸般の智慧をもて、諸人を教へ、諸人をしてキリストの中に完全を得て神の前に立しめんとす。我これが爲に大能をもち我が衷に働く者の運用に循ひ、力を竭して勞する也。』以上の言に徴すれば、キリストの爲に働く者に對して置かれた標準は、仲々高いものであります。然し大教師キリストの教を仰ぎ、日々其薰陶を受ける者には、誰でも到達し得る標準であります。神の力は無限でありますから大なる必要を感じ主の御前に出で、主と偕に交る者は、其聽者に對し、生命に至る生命の香となるべきものを受くべしと確信して差支ありません。



パウロの書簡により、福音宣傳者は、其教ふる所の真理の實例となり、『職を謗らるゝこと無らん爲に、何事にも人を躓』かせてはならぬ事を學びます。彼はテトスに左の如く書贈りました。『爾また幼男に自ら制する事を勵むべし、汝何事を作にも、おのれ善行の模楷とならん事を務め、教を傳ふるに信實を以し、端壯しくし責べき所なき正言を表すべし。此は敵する者をして、我儕の惡を言ふに縁なく、自ら愧ることを爲しめん爲なり。』

又コリントの信者に贈つたパウロの書簡中には、彼自身の活動振りが躍如として顯はれて居ります。曰く、『われら凡の事に於て、己神の役者の如く行ひて、己の義を人に顯せり。即ち多の忍耐にも、患難にも、窮乏にも、困苦にも、責打にも獄に入にも、擾亂の時にも、勤勞にも、睡さるにも、食はざるにも、貞潔ことゝ、知識と、恒忍と、仁慈と、聖靈と、偽なきの愛と、眞の道と、神の能と、左右に在ところの義の武具を用ひ、また榮耀、羞辱、惡名、令聞に出て、己の義を人に顯せり。人を惑す者に似たれども、眞實、人に知られざるに似たれども、人に知

られ、死<sup>しに</sup>たる者に似<sup>に</sup>たれども、生<sup>い</sup>るもの、責<sup>せめ</sup>を受<sup>う</sup>くるに似<sup>に</sup>たれども、殺<sup>ころ</sup>されず、憂<sup>うれ</sup>るに似<sup>に</sup>たれども、常<sup>つね</sup>に喜<sup>よろこ</sup>び、貧<sup>まつしき</sup>に似<sup>に</sup>たれども 多<sup>おほく</sup>の人<sup>ひと</sup>を富<sup>とま</sup>し、何<sup>なに</sup>も有<sup>も</sup>ざるに似<sup>に</sup>たれども、凡<sup>すべて</sup>のものを有<sup>も</sup>てり。』

パウロの胸中は、他の責任の重大を感じる念を以て満たされ、正義と憐恤と、真理の源泉なる神と密接して働き、成功の唯一の保證として、キリストの十字架に絶<sup>た</sup>りました。

救主の愛は、パウロが自己と他より襲ひ来る罪惡と激戦せし時、彼を支持せし不朽の動機にして、彼はキリストに事<sup>つか</sup>へつゝ、世の無情、敵の反對とを物ともせず前進しました。

今や此危険多き時代にありて、教會の要する處のものは、パウロの如く役に立ち神の事に關し深い經驗を有し、且熱誠に働者の輩出せん事にして、潔められ、献身的の精神に富み、大膽にして忠實、キリストを『榮<sup>さか</sup>の望<sup>のぞみ</sup>』となし、其唇は聖き火に觸れ、『道<sup>みち</sup>を宣<sup>のたま</sup>傳<sup>つた</sup>』へ得る人物が必要なのであります、斯かる働人が無いと、神の

道は衰へ、社會の風儀は傷けられ、死の毒の如く、人類大部分の希望を阻害する由々敷誤を生じます。

其一生を提供し、眞理の爲盡瘁せし、忠實なる旗手に交代して起つべき者は誰でありませうか、我黨の青年諸士は其父に託されし信任を引受け、忠實なる神の僕之死により生じたる缺陷を補ふ準備が出来て居りませうか、將た又青年時代に、有勝<sup>ありがら</sup>の私慾、野心等を排し、使徒が命じた事を守り、召に應じ責任を盡すでありませうか。

- |   |              |    |             |
|---|--------------|----|-------------|
| 1 | 羅馬書十六章二十五節   | 6  | 哥林多後書六章二節   |
| 2 | 使徒行傳九章十五節    | 7  | 提多書二章六・八節   |
| 3 | 腓立比書三章十三・十四節 | 8  | 哥林多後書六章四・十節 |
| 4 | 使徒行傳二十章二十六節  | 9  | 哥羅西書一章二十七節  |
| 5 | 哥羅西書一章廿五・廿九節 | 10 | 提摩太後書四章二節   |



## 必要なる準備

「なんぢ神に悦ばるゝ者と爲んことを務め、また恥る所なき  
工人となりて眞道を正しく頌ち教んことを務むべし」

## 聖職にある青年

如何なる場合にも、福音宣傳の聖職を輕んじてはなりません。又如何なる事業を起しても、神の聖言を傳ふる事が劣つて居る事の如くに見える様に經營してもなりません。聖職を輕んずる事は、即ちキリストを輕んずる譯であります。聖職には幾多の方面がありますが、いづれも仕事の中でも、最高位を占めて居ります。されば如何なる働でも、福音宣傳事業程神に祝福されるものはない事を、常に青年子弟の前に示して置かねばなりません。

我青年諸子が聖職に従事せんとするを妨げてはなりません。兎角此世の名利に目

が眩<sup>くら</sup>らみ、神が歩めと命じ給ひし途より逸<sup>そ</sup>れる危険があります。

主は其葡萄園に働くべき教役者を、更に多く召し給ひます。『前哨を強め、世界到る處に忠實なる番兵を置け。』と云ふ語がありますが、青年よ、神は卿等を召し大なる心を有し、キリストと眞理に對し、深き愛を有する青年の全部を要し給ひます。

才能や學力の事業に及ぼす効果は、之に當る精神に比すれば、遙に劣つて居ります。聖職に要する人物は、大家や學者、又は雄辯な説教家でなく、聖靈に滿され、神に己を献げた人でなければなりません。

キリストの爲にも、人道の爲にも、潔められ、克己犠牲の精神に滿ち、『詭譎<sup>そしり</sup>を負<sup>お</sup>ひて營外<sup>わいぐわい</sup>に出で』得る人物を要して居ります。然れば、之等の人々をして、勇猛邁進、以て其職責を完ふし、其献身的奉仕により、神と契約を結ばしめねばなりません。

又聖職は怠惰者の從事すべき仕事ではなく、神の僕は、其奉仕の實績を擧げねば

なりませんから、のらくらしては居られません。必ず、神の言の忠實なる解釋者として、全力を傾注して活動し、且つ新知識を得るに吸々として居なければなりません。彼等はまた常に働の神聖と、其責任の重大とを自覺し、何時又何處に於ても、不具の犠牲、即ち勞力も祈禱をも伴はざる價值なき献物を、神に奉る事のない様にせねばなりません。主は又熱烈なる靈的生涯を送る人を要し給ひますが、凡の働人は、上より賜ふ力を受け、信仰と希望とを以て、神が歩めと命じ給ひし途に前進する事が出来、又神の言は、若き献身的の働人に宿ります。かゝる人は、萬物を誤りなく支配し給ふ神と偕にありますから、活氣と熱誠と能力とを有します。

神はキリスト再臨の切迫して居る事を世に宣傳せしむる爲、私共を召し給ひましたから、私共は、福音の響應、即ち羔の婚筵への最後の招待を、世人に發せなければなりません。然るに未だ、此使命を聞かずに居る所も頗る多く、又未だ其使命宣傳に従事しない人も澤山あります。私は再び我青年諸子の心に訴へます。神は此使命宣傳の爲に、卿等を召し給ひませんでしたか。



吾青年の中事<sup>つか</sup>はれん爲に非らず、事<sup>つか</sup>へん爲に神の召に應せんとする者が幾何ありませうか、昔は一人を救に導けば、又他の者と、『主よ、此人を救ふ爲に私を助け給へ、』と叫びつゝ、救靈に熱中した人がありました、今では餘り其例を見ません、實際罪人の危険を認めて働くものは幾人ありませうか、又危険に居る事を知り、其人の救の爲に、神に懇願禱告するものは、果して幾何ありませうか。

使徒パウロは、初代教會に就て、『彼等<sup>かれら</sup>は、我事<sup>わがこと</sup>によりて神<sup>かみ</sup>を崇<sup>あがむ</sup>る事を爲<sup>せ</sup>り。』<sup>1</sup>と云ふ事が出来ました。私共も、是と同じ事が云へる様な生涯を送らうと、努め様ではありませんか、神は全心を盡して神を求むる者には、必ず然る可き方法と手段とを授け給ひます。斯く神は私共が傳道地を準備し、之を管理し、且つ成功ある働を擧げ得る途を開き給ふ者は、神である事を認識する事を希望し給ひます。

牧師も傳道師も、一層多の時間を割き、眞理を認めし人々と偕に、熱心に祈る様

にしたいものであります。又キリストが常に卿等と共にある事を記憶なさい、實に主は忠實にして、謙遜なる働人に力を與へ、之を鼓舞せんが爲、豊に其最も貴き恩恵を與へんと用意して居給ひます、然れば神が卿等の上に輝かしの給ひし光を、他人に反射せしめなされ、かく爲す者は、即ち主に最も貴き献物を奉るのであります又救の福音を宣傳する人の心は、讚美の精神を以て輝きます……………。

聖職にある人の數は、減する事は出来ません。却つて大に増さなければなりません。今一人の教役者の遣されて居る傳道地には、尙二十人増す可き筈にして、若し神の靈が、彼等の上に臨む時には、此二十人は善く眞理を代表しますから、尙二十人が加へられる様になりませう。

主の僕は、信仰及兄弟に對する愛の完全に接近すればする程、眞理宣傳の上に、

一層の力を顯す事が出来ます。神は人間の力では、到底對抗し能はざる一切の不時の事變に對する救助法を備へ、窮迫を免れしめ、私共の希望と確信とを強め、胸中に光明を與へ、心を潔むる爲聖靈を遣り給ひます。又神は其計畫を實施する點に充分の便宜を與へ給ひます。然れば私は神の指揮を仰ぐ事を卿等に命じます。全心を以て神を求め、『<sup>かれ</sup>彼が爾曹に命ずる所の事を行よ。』と忠告致します。

(教會の證第六卷四一四・四一五頁)

我青年の如き働人の一隊が、正當なる訓練を受け、活動する時は、十字架に釘けられ、甦へり、且つ再臨し給ふ主の使命が、どんなに速に全世界に宣傳され、終末——苦、悲、罪の終末が直に來る事でありませう。又我等の小兒等は、罪と苦とに傷けられ、此地上に非<sup>あ</sup>らで、『正<sup>ただ</sup>しき者は國<sup>くに</sup>をつぎ、其中<sup>そのなか</sup>にすまひてどこしへに及<sup>およ</sup>ばん。』と云はれたる國、又、『かしこに住<sup>す</sup>るもの、中<sup>うち</sup>われ病<sup>やま</sup>りといふ者<sup>もの</sup>なし』と



云はれし所、又、『泣聲なくこゑと叫聲さけびこゑとは再び其中ふたたびそのうちにささこえざるべし。』と云はれた國の  
嗣業を受くる日はどんなに速に來るであります。

(エデエケーション二七一頁)

1 加拉太書一章二十四節

2 約翰傳二章五節

3 詩篇三十七篇二十九節

以賽亞書三十三章廿四節

同六十五章十九節

## 重荷を負ふものたるべき青年

『壯者よ、我この書を爾曹に贈しは、爾曹剛健、かつ神の道なんぢらの心に存りて、惡者に勝るに因てなり。』<sub>1</sub>

働が各方面に涉り發展し得る爲に、神は青年の元氣、熱心及び勇氣を要め、又神の道を前進する助とせんが爲、青年を選び給ひました。

明晰な頭で計畫し、勇氣ある手で之を實施するには、延び／＼とした新らしい元氣を要します。されば青年男女は、其若き時代の能力を神に獻げ、之を活動させ、且つ明快な思想と敏活な行動と相待つて、神に榮を歸し、其同胞を救に導く筈であります。

苟も高貴なる召を蒙れる我青年等は、利慾を目的とせる娛樂や、生涯を求めず救靈てふ動機に勵まされて行動し、神より受けし力により、一切の惡習、惡癖を排

し、超然と向上し、自己の踏む途は、他人又之を模範とすべき事を記憶し、毎日の歩みに、善く注意せねばなりません。

誰も、自分獨丈の生活を送るものではありません。必ずや善か、惡かの感化を他人に及ぼすものであります。パウロが、『自分を制する事をすべし。』と青年に勧めたのは、之が爲でありました。然し青年等が、自分はキリストと偕に働くものにして、主の克己と犠牲、忍耐と仁慈とに與るものたる事を記憶する時、どうしても自制の人たらざるを得ません。

今日の青年にも、テモテに告げし同じ語が與へられています。『なんぢ神に悦ばるゝ者と爲らんことを務め、また恥る所なき工人となりて、眞道を正しく願ひ教へんことを務むべし。……なんぢ幼少ときの慾を避けて、義と、信と、愛と追求め、又清き心にて、主を顧者と和ぐ事を追求むべし。』『なんぢ年幼を以て人に輕んぜらるゝ勿れ、言と、行と、愛と、信と潔を以て、信者の模範となるべし』

我等の中の重荷を負ひし人々は、漸次死亡して居ります。又斯道の爲魁せし勇者



の多も、今や老境に達し、身心共に衰弱して來ました。此際其缺之は、誰か之を補ふや、此は實に重大なる問題であります。現在の旗手が斃れた場合に、教會の死活問題を、誰に委ねませうか、此重荷、此責任を引受くるに足る人々は、どうしても之を今日の青年輩の中に物色せざるを得ません、而して此等の人々は、先輩の遺せる事業を繼續して働かねばなりません、其やり方一で、道德、宗教及び其他の善事が成就するか、又は不徳義や、不信仰が跋扈するか、ごららかにあります。年長者は、訓戒と模範を以て、青年を教育し、社會と神との要求に應じ得る様、重大なる責任を負はねばなりません。歸する處の問題は是であります。彼等は果して自己を制御し、天與の純潔を己が人と爲なりに發揮し、苟くも罪惡の香あるものは、一切之を嫌惡し得るや否やであります。今日の如く、利害問題 重大にして、特に其結果を、將に活動期に入らんとする青年に俟つ時代は、未だ曾てありませんでした。

青年は善き品性を具へずに、一瞬時たりとも人より信賴さるゝ何かの地位を占め得ると思ふてはなりません。斯かる妄想は、棘より葡萄を集め、薊より無花果を得

んと期待すると同様であります。抑も善き品性なるものは、恰も煉瓦石の上に、又他の煉瓦石を積むが如く、次第々と築き上げねばなりません。又青年をして、神の道の爲に成功ある働をなすを得しむる品性は、神が與へ給ふ凡の利を善用し、凡の知識の源なるイエスと結合し、以て彼等の能力を活動する事により得らるゝものであります。

ヨセフ及びダニエルの品性は、青年達の倣ふべき好型典にして、救主の言行は完全なる模範であります。

品性を發達すべき機會は、凡のものに與へられ、皆神の大計畫に指定されし、各自の地位を占むる事が出來ます。神がサムエルを極く幼い時より受入れ給ひしは、其心が純潔であつた爲にして、彼は生ける献物として神に捧げられ、神は彼を用ひて光を傳ふる器となし給ひました。今日の青年も、サムエルの如くに献身するならば、神は必ず之を受入れ、主の働に用ひ給ひます。斯くて彼等は、詩篇記者と共に「神よ、汝<sup>なんぢ</sup>われを<sup>おさし</sup>幼少より<sup>おし</sup>教へ給へり。われ今<sup>いま</sup>に至るまで、汝<sup>なんぢ</sup>のくすしき<sup>みわざ</sup>事蹟をの

べつたへたり。』と云ふ事が出来ます。

### 働人を養成する必要

青年輩も、間もなく今年長者の負つて居る重荷を擔はなければなりません。私共は、青年に賢實なる實際的教育を施す事を怠り、時を失ひました。神の道は間斷なく進歩しつゝあるが故、私共は、『前進せよ、』との使命に従はなければなりません、而して茲に要するものは、事情や境遇により動搖する事なく、神と共に歩み、多く祈り、凡の光を集めん爲に熱心努力する青年男女であります。

神の爲に働く者は、生れ付き、若しくは修養、及び神の恩恵により、賦與された最高の精神的道德力、及び能力を發揮せねばなりません、とは云へ、成功は天稟や修養の賜より、寧ろ其働に對する献身的努力に正比例するものであります。有用な人物となる資格を得ん爲に、間斷なく努力する事は、勿論必要でありますが、神が人と偕に働き給ふに非ざれば、何等の善事を完ふする事は出来ません。神の恩恵



は、救の力の一大要素にして、之なくしては、人の有ゆる努力も畢竟無効に歸します。

神は何か一の働を成し給はんとする時は、何時も單に司令官のみを召し給はず、一切の働人を要し給ひます。今日神は心身共に強健なる青年男女を召し、其生氣ある健康なる頭腦、筋骨の力を俟て、『斯世の幽暗を宰る者、又天の處にある惡の靈』と交戦せしめん事を希望し給ひます。然し彼等は所要の準備がなければなりません。

或る青年は、自分に到底適合せざる働に着手せんと努めて居りますが、此輩は、人に教ふるに先ち、自ら教を受く可きものなる事を、未だ解しないのであります。彼等は、些少の準備を以て相應の成功したとすれば、其は全靈、全心を働に集中して努力したからで、若し其人々が、先づ然る可き修養を受けた後に働いたら、其効果は遙に優つたに相違ありません。

神の事業は、役に立つ人を要します、教育、修養は、實業界に於て缺く可らざる

準備として認められて居ります。況して世人に最後の警告を與ふる使命宣傳者の大  
事業に於て、完全なる準備がなくては叶ひませうか、然し此修養は單に説教を聴い  
た丈で得られるものに非ずして、我青年男女は、我團體い學校に學び、神の爲め重  
荷を負ふ道を會得し、熟練なる教師の下に、完全なる養成を受け、其勉學時間を最  
善に利用し、又得たる知識を實行する事に努めなければなりません。苟いふくも教師若  
しくは其他の働人となり、神の事業に成功せんと欲せば、熱心に學び且つ努力して  
働かなければなりません。神が人の知識を發達せしめん爲に與へ給ひし賜の價值を  
増加するには、不斷の修養に如くものはありません。

我青年等にして、未だ聖書の知識充分なくして、吾人の信仰を誤りなく紹介し得  
る力量無きものに説教する事を許した爲に、大害を醸す事が往々あります。實地傳  
道に着手せし或者は、聖書に對しては全く初心にして、他の事も又未熟であります  
聖書を讀めば問へたり、發音を誤つたり、其他種々混亂を來し、神の言の尊嚴を傷  
ける様な場合があります。正しく讀む事の出來ない人は、出來る様に學び、人を教



ふるに足る資格が備はつた後、始めて公衆の前に立つ積でなければなりません。

我學校の教師は、子弟を教導する準備をなさんが爲、先自ら學ぶべき筈であります。此教師等は、嚴正なる試験に合格し、正當なる批判者により人を教ふるに足る資格ありと認定さるゝに非<sup>あら</sup>ざれば受入れられません。然らば、教役者の試験に對して、慎重の度を減ずる事は出来ません。苟<sup>いふし</sup>くも此世に、聖書の眞理を傳ふる聖職を奉せんとする者は、忠實老練の先輩により試験さる可きものであります。

我學校の教育は、他の専門學校や、神學校と同様であつたり、又之に劣る様な事があつてはなりません。神の大なる日に、民をして立つ事を得しむる準備を主眼とせねばなりません。又學生も、單に此世に於てのみならず、來世に於ても、神に仕へ得るに足る資格を得なければなりません。神は、我學校が其學生をして彼等の行かんとする王國に適する様に、養成し得る事を希望し給ひます。斯くして彼等に贖れし者の、神聖にして幸福なる一致の中に融和する準備をする事が出来ます……。

既に奉仕の訓練を受けた人々は、速に實地の働に着手し、神の爲働きなさい。今



や戸毎訪問をなし、福音を傳ふ人が必要にして、神は未だ聖書の眞理が知られて居ない場所に、手答のある働の開始されん事を求め給ひます。然れば、信者や求道者の家庭に於て、讚美、祈禱及び聖書研究が盛に行はれなければなりません。

今、たつた今こそ、『わが凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教へよ。』<sup>4</sup>てふ神の命令に服従すべき時であります。此働に従事せんとする者は、前以て聖書の知識を有たねばなりません。

「聖書に斯く記されたり。』<sup>1</sup>とは、我等の用ふる防禦の武器たるべく、神は私共が同胞に此光を配ち與へ得る爲に、聖書に對する光を私共に賜ひました。キリストの語り給ひし眞理は、人の心に達するものであります、『エホバ斯く言ひ給ふ。』<sup>2</sup>との語は、偉大なる力を以て人の耳に響き、忠實なる働がなさるゝ所には、必ず果を結ぶものであります。<sup>3</sup>（カウンセルスツーチーチャース五三五―五四頁）

1 約翰壹書二章十四節

3 詩篇七十一篇十七節

2 提摩太後書二章十五 廿二節  
提摩太前書四章十二節

4 馬太傳二十八章二十節

## 傳道事業に備ふる教育

『我等に神と共に働く者なり、爾曹は神の田、神の室なり。』<sup>1</sup>

教役者の働は決して軽いものでなく、随つてどうでもよいものではありません。

彼は高貴なる天職を有し、之に依り彼が終世の運命を形作るものであります。

苟くも斯の如き聖職に身を委ねたる者は、其完成に對し凡の能力を傾注し、其目標を高くせねばなりません。人は決して自ら定めた標準以上に到達し得るものでなく、又自己先づ光を受くるに非ずして、決して他に之を傳播し得るものでなく、他人を教ゆるに足る經驗と知識を得、暗黒に居る者に聖書を説明せんと欲せば、自己先づ之を學ばなければなりません。

若し神が人を神と共に働く者として召し給ひしならば、又神の言の神聖にして高

貴なる眞理を代表するに相應しき最上の準備をなさしむる爲にも召し給ひし事は、等しく明確な事實であります。

苟しくも神の事業に、從事せんと欲する人は、此働に關する教育を受け修養を積み、智こく從事し得る備をなし、決して一足飛に階子の顛に登り得るものと思ふてはなりません。成功する人は先づ最低の段から一段一段と上つて行かねばなりません。機會と特權とは彼等を練磨する爲に與へられたものでありますから、全力を盡し如何にせば神の嘉し給ふ働を爲し得べきかを學ぶべき筈であります。

何處に於ても我教役者の働いて居る所に於て、彼等は青年子弟を喚起獎勵し、神の大戦場に活躍する準備をなさなければなりません。凡てキリストの僕なりと稱する者は、必ず主に對する何かの働を持つて居る筈であります。『僕』と云ふ語が、既に奉仕、勞作、責任の觀念を抱かせます。神は凡の者に神の奉仕に用ゝべき力を委ね、一人々々に其爲すべき働を授け、神の榮を揚ぐる爲、凡の能力を上達せしめん事を要求し給ひます。



## 軍隊的教練

瑞西バーセルの我印刷所の向側に一大練兵場がありますが、或る期間を限り日毎に兵士が訓練を受けつゝあるを見受けます。彼等は軍律の凡を教へられ、イザ戦争が始まると云ふ場合には、直様政府の召集に應じ、活動し得る準備をするのであります。

或日の事、美事な天幕を持つて來て、其を張つたり下したりする演習が始まり、多くの兵士が各自其部署に就き、齊然たる秩序の下に行動し、幾度も張つたり下したりして訓練を受て居りました。

又或る一隊は砲車を牽ひゐて來て、士官が色々其操縦法を教へ、迅速に之を動かしたり、車を取外したり、瞬間に發砲し得る様極めて敏活に行動して居りました。

又傷病兵運搬車を用意し、衛生隊は負傷兵の手當の仕方を學び、實際戦場で負傷した者の如く、頭や手足に繃帶を施され、擔荷の上に身を横へてゐる者を運搬車に

連れて行つたりしました。

又數時間に涉り、多の兵士は背囊を降し、又速に之を背負ひ、又銃を交叉したり之を迅速に各自の手元に收めたりする法を教へられ、或時は敵に突貫する練習を致しました。尙其他一切の戰術を學んで居りました。つまり此等の練兵は萬一に備ふるに行ふものであります。

然らばイムマヌエルの軍旗の下に戰ふ神の兵士が靈的戰爭の爲、其準備を爲すに一層の勞苦を爲すべきではありませんまいか。苟も此大事業にたづさはる人々は、必用なる訓練をうけ、且つ他を統御する資格を備ふるに先達ち、服従するの道を學ばなければなりません。

### 訓練を容易ならしむる法

特種的準備事業に關し、顯著なる進歩を見なければなりません、凡の我年會に於ては、神の事業に献身せんと希望する者を、指導教訓する爲、善く組織されし計畫

を有する筈であります、我市内傳道館は、實地傳道の教育を施こすに詔向きの場所  
であります、夫れ丈では充分と云ふ事は出来ません。是非共我學校には内地及外  
國傳道に對し教役者を養成すべき最高の設備が必要です。大きい教會には必  
ず特別の傳道學校を設け、青年男女をして神の事業に關係し得る資格を造らせる様  
にせねばならぬ。尙先輩の教役者は、後進を助け、且つ教育する上に一層の注意を  
拂はねばなりません。

何處か重要な場所に、始めて眞理を紹介するが如き場合には、先輩の人々は、部  
下に働く教役者の補佐誘掖に特別注意を與へねばなりません。先輩が講壇で奉仕す  
ると共に、キャンパスなり聖書研究する人なりが各手分おのづからして活動し、人に眞理を  
紹介する事が出来るのであります。

重要な場所に遣はされ天幕集會を開く教役者の屢々陷り易い大なる誤は、説教  
にのみ凡の時間を費す事であります。

説教する事を少くし、教ふる事を多くせねばなりません——世人を教へ又後進者



に如何に成功ある働をなし得べきかを教へる事であります。

教役者は如何に聖書を研究すべきを他の人に教へ、且つ傳道事業に志す者の思想や行儀作法を訓練する點に秀<sup>ひい</sup>で、又新に信仰の道に入りし者及教役者として將來有望の人に對し、之を訓戒誘導する準備が必要です。

凡て有功なる働人とならん事を望まば祈禱に多の時間を費さねばなりません。神と靈魂との間の交通に何等の支障なく、働人は自己が司令官キリストの聖聲を識別し得る様にして置かねばなりません。又聖書研究に熱中すべく、神の眞理は黄金の如きものにして何時も一寸表面にのみ横はつて居るものでなく、深く潜んで居る場合が澤山有<sup>あ</sup>りますから、熱心に考慮し、研究する事によりてのみ之を得る事が出来るものであります。

此聖書研究と云ふものは、唯に最も價值ある知識を心に得させる許<sup>ほか</sup>りでなく、心的能力を強壯にし、且つ之を擴大ならしめ、永遠に屬する事柄の眞の價值を認めしむる様になります。若し神の教訓が、日常生活に實行され神の正義の大標準に則つ

て生活を送る事が出来る様になれば、私共の品性は全く強められ貴くされます。

又神の聖事業に身を委ねんと志す者は、俗界の悪感化を避け神に關する知識を得る助となる人々と多く交る様に求めねばなりません。

神は其愛する弟子ヨハネが、世の繁雜より離れ、外界の影響より全く閉され、彼が愛して居た働すら出来ないバトモスの孤島に流竄の身となる事を許し給ひました。神は茲に此世の歴史の終末の光景を、彼の眼前に示めし、彼と交通し給ひました。

又バプテスマのヨハネは曠野を其住家としたのは、彼の傳へんとする使命——頓て來り給はんとするキリストの爲に道を備ふ可き使命を神より受けんが爲でありました。

私共は出來得る限り、神の働から心を他に外らす一切の感化を避け殊に信仰の幼稚な人は誘惑の道に立たぬ様油斷せぬ事が大切であります。

凡て聖旨に適ひ働に着手せんとする人は一步々イエスが共に在し給ふ必要を痛切に感じ、精神及び態度の修養は神の要求し給ふ義務にして、成功ある働をなすに

缺く可らざるものである事を自覺致します。

### 小成に安ずる勿れ

傳道事業に従事せんと志す者の中には自分これだけは此丈の知識、力量があるから此上特程の訓練を受けるに及ばないと考へる人があるかも知れませんが、然し斯る思想を抱く人こそ大に養成訓練を要する所のものでもあります。

彼等はまだ尚深く眞理を辨わきまへ、働の重大を認むる時は、己が無智無能を悟るに相違ありません。又具さに自省し基督の高潔なる品性と對照し來る時『誰が是等の事に當るを得ん』と叫ばざるを得なくなり、且つ深く謙遜し、日毎にキリストと密接に交らんと努力し、彼等は生來の惡傾向けいこうに打勝ち、主の導き給ふ儘あまに歩む様になります。『聖言みことばうちひらくれば光ひかりをはなちて愚かなるものを智さとしからしむ。』<sup>2</sup>

然し自分の力量、知識を誇り、慢心して居る者には、神の言が入り之を教へ、光を與ふる機會がありません。



又多の者は、殆んど自分で智識のない事業に當り得ると妄信し、自分免許の遣り方で働を始め、キリストの許で學ぶ可き素養を全く缺いて居ります。かゝる輩は、全然不用意の多の困難に出會ひ、苦悶せざるを得ない様になります、彼等は自己の大なる無能を悟る迄は、何時迄も經驗と知識とを缺くのであります。

力量があつても然る可き訓練を経ない人々の不完全なる働により、多大の損失を斯道に與へました、彼等は如何に扱ふか知らない働にたづさはつて居る爲め、一向功を奏せず、若し最初正當なる養成を受けた後取掛かつたならば十倍の成績を舉げたに相違ありません。——彼等はホンの僅の思想を捉へ、論談の端くれを手に入れた丈で、其進歩は其處で止つて仕舞ひました、自分では一廉先生の積であつても、實は眞理のいろはすら覺束ないのであります。彼等は自分にも働にも正當の事をしない爲、何時も躓いて許り居ります。又大に元氣を出して眠より醒め、力ある働人とならんと蹶起する程に働に興味を有つて居ない様に見えます。ごうも努力して色々計畫しませんから、彼等の働は凡の方面に缺點だらけであります。

又或人は失望落膽し、其働を止め、他の事業に轉じます。然し此等の人々が忍耐し、謙讓し、梯子の最低の段から一步一步と踏み登り、自分の達し得る範圍に置かれたる特權と機會を活用したなら、必ず功績を擧げ、主の恥給はざる有爲の働人となり得る筈であります。

苟くも救靈事業に志す者が、自分の限ある知識を恃んで居れば必ず失敗しますが若し自身はつまらぬ者であると思ひ、神の約束に全く依頼するならば神は決して彼等を見棄て給ひません。『汝心を盡してエホバに倚頼めおのれの聰明に倚るなかれ、汝のすべての途にてエホバをみとめよ、さらば汝の途を直したまふべし。』私共は賢明なる大顧問官キリストの指揮を受くる特權を有つて居ります。神は卑き人を用ひて主の爲に偉大なる奉仕をなさしめ給ひます。されば義務の召に服従し自己が力量を極度に活用するものは、確に神の助を受くる事が出來ます。自分の出來る限の事を盡した後で、神に信賴し其協力を仰ぐ者を助けん爲、天使は光の使として來ります。

又神の爲に働かんと決心する凡の者は必ず自分が生れ更つた人物である實證を示さなければならぬ事を念頭に置かねばなりません。

何等高潔なる品性なき青年は決して眞理を發揮し、之を崇むる事は出来ません、凡の働人は其心潔く、其口に愆とがなく成功するにはキリストに自分の側に居て戴いたき、如何に秘密の内に行つても一切の罪に屬する行爲は、神の聖前に顯然である事を心得て居なければなりません。罪は神に象かたどり創造つくられた人の像かたちを壞こつて仕舞かたましたがキリストにより元の狀態に回復されます、然し私共が神の性質を享有し得るに至るは、唯だ熱心なる祈禱と克己によるのみであります。

主の葡萄園に於ける眞の働人は祈禱、信仰、克己の人にして肉慾肉情を抑制する人たる可く其生涯に眞理の確證を示し、他人に之を紹介すれば其勞力は決して無効に歸するが如き事はありません。

神の爲に働く者は生得、修養及び神の恩恵により與へられたる最高の心的及道德



的の能力を發揮する準備をせねばなりません。然し彼の成功は、生來若しくは修養によりて得たものより寧ろ働に従事する時の献身、克己の度に正比例するものであります。

有用な人物に爲<sup>な</sup>らんが爲、最熱心な努力を續ける事は必要であります。然し神が人と共に働き給ふに非<sup>あら</sup>ざれば、何事も成就致しません、キリストは「爾曹<sup>なんぢら</sup>われを離<sup>はな</sup>るゝ時<sup>とき</sup>は何事<sup>なにこと</sup>をも行能<sup>なした</sup>はざれば也<sup>なり</sup>、」<sup>4</sup>と仰せになりました。

神の恩恵は救の力の一大要素にして、之<sup>なく</sup>無んば凡の人の努力は更に効果がありません。(教會の證第五卷五八三頁)

- 1 哥林多前書三章九節
- 2 詩篇百十九篇百三十節
- 3 箴言三章五・六節
- 4 約翰傳十五章五節

## 青年傳道者

傳道者若しくはカンパスサーとして活動せんと志す青年は、其召に對する特別の準備をなすと同時に、先づ第一に心的修養を相當に受けねばなりません。無教育にして毫も何等の<sup>しつけ</sup>躰もなく、禮儀作法をも<sup>わきま</sup>辨へざる者は力量、教育の強き勢力が神の言の眞理に對抗しつゝある世の中に打て出る<sup>そなへ</sup>備が出来て居りません。斯の如き人は宗教及哲學の結合せる奇異なる誤謬に對抗する事が出来ません。此には聖書の眞理を<sup>わきま</sup>辨ふると共に、科學的知識をも要します。

殊に將來牧師たらんと希望せる者は、聖書的牧會法の緊要を深く感じ、心を傾けて働に従事し、且つ學校の教育を受けると同時に、大教師キリストより其從順と謙遜とを學ばねばなりません、契約を守り給ふ神は、祈禱に答へ、其靈をキリストの許にて學ぶ此等の人に注ぎ、義の役者たらしめんと約束し給ひました。

聖書の眞理と聖書の宗教を心に入れる爲、誤謬の教理を頭より放逐するのは、仲

々困難の業であります。我團體に各種の學校が設けあるは、神の定め給ひし方針に従ひ青年男女を教育し、傳道事業の各方面に備ふるが爲であります。又神は單に少數の教役者の派遣さるゝを願はず、多の働人が續々傳道地に活躍せん事を希望し給ひます。然しサタンは此計畫を覆さんと企だて、神の働に従事すれば必ず有用な働を爲し得る其者を捕へる事が屢々あります。

若し獎勵すれば神に事へて働くべき多の者があります、かゝる人は斯の如く働く事により自分の靈をも救ふ事が出来るのであります。教會は金銀と感化力とを充分に用ひ有爲の人物を傳道地に送り得る筈なるに、却つて真理の光を閉込め且つ神の恩恵を己が狭き範圍内に限つて仕舞ふ事に大責任を感ぜなければなりません。

幾百の青年は真理の種を到る處の水の邊に蒔散らす働に與かる準備をなすべき筈であります。我等は勝利の十字架を陣頭に立て、突進する勇士、如何なる困苦にも失意にも耐へ、不撓不屈の精神を有する聖徒、及び傳道界に缺く可らざる熱誠、決斷、及信仰を有する輩を要します。



## 外 國 語

我信仰の友にして外國語の習得に左まで困難を感じない人は、須らく他國民に眞理を宣傳する資格を造るべきであります。初代教會に於ける使命宣傳者は、奇蹟的に外國語の知識を與へられ、キリストの測<sup>はか</sup>る可らざる富を宣傳すべき召を受けました。若し神が昔の神の僕を斯く助け給うたとすれば、私共は外國語を學ぶ迄もなく自國語を以て自國人に眞理の使命を宣傳せんとする者を、鼓舞獎勵する吾人の働に對し神の祝福の加はる事を疑ふ事が出来ませうか。(譯者曰く、此は在米の外國人が同國に在留の自國人に對する傳道を指したものであります。) 若しかうした人々が、自分の手の届く範圍に於て其力量を振ひ活躍するなら、もつと多の宣教師を外國傳道地に派遣する事が出来る筈であります……………。

青年が外國語を學ぶ必要を認める場合は決して少くありません、外國語の習得の捷徑は其國語を話す國民と接觸し、同時に毎日相當の時間を割いて其研究に従事す

るのであります。然し是は他日外國傳道に志す者にして、正當の訓練を受くれば、教役者として奉仕すべき人々の準備教育に缺く可らざる階段としてのみ行ふべきものであります。

中年の域に達した人が、外國語を學ぼうとするは容易な業ではありません、如何に努力勉勵しても、正確に又容易に之を操り、有効なる働人とならしむるは、蓋し不可能に近いと云ふも決して過言ではありません、私共は中年若しくは老年の教役者にして、如何に訓練しても、殆んど彼等の同化を望む事の出来ない者を不適任な遠國の傳道地に派遣し、本國傳道に對する彼の感化を沒却せしむるには忍びませんかうした人々が送り出された後、其補缺となるには、無經驗の働人の決して能する處ではありません。

### 困難なる場所に要せらるゝ青年

若し教會が青年に重大なる責任を負はし得るやと問ふ時には私は答へます、神は

彼等を我學校に於て訓練し、且つ經驗ある先輩に共に働かしめ、斯道の爲め有用の地位を占むる準備をなさん事を希望し給ふと。

私共は我青年に對し、信任して居る事を顯はさなければなりません、彼等は勞力克己を要する各種の事業の先驅者となり、能く先輩の助力、忠告を仰ぎ其獎勵と祝福を受け神の爲大々的努力をせねばなりません。

此等の經驗ある先輩も、曾ては其体力、智力共に未だ充分に發達せざりし少壯時代に、困難にして責任ある地位に置かれたものであります。然し彼等に託されたる重大なる信任は彼等の能力を喚起し、且つ實地の活動は體力、智力の發達を助けました。

青年は要されて居ります、神は青年を傳道地に遣はさんと召し給ひます、青年は概して係累が少なくありますから、多人數の家族を顧みなければならぬ人に比すれば働に従事するに遙に好都合の地位にあります。加ふるに青年は、異なれる氣候と新しき社會に適合するに餘り困難ならず、且つ不便及び困難に堪ふる點に於ても容



易にして、其手練及び忍耐により、人に接し、之を主に導く事が出来ます。

力と云ふものは之を運用するによりて出来るものでありますから、神が與へ給ひし力量を活用する者は、總て其力量を増加せられ、主の御用に供する事が出来ます之に反し神の爲に何事も爲さぬ者は、恩恵と眞理の知識に成長する事が出来ません人もし横臥した儘で手足を動かす事をせざれば、間もなく手足が利<sup>き</sup>なくなつて仕舞ひます、斯くの如く神の與へ給ひし力を働かさないクリスチャンは、唯主にありて成長する事が出来ないのみならず、今迄持つて居る力をも失ひ、靈的麻痺の状態に陥ります。

眞理に固く立ち得る者は、神と同胞に對する愛に勵まされ、他人を助けんと努力する者にして、眞正のクリスチャンは、決して一時の感情に驅<sup>か</sup>らるゝものに非らず確乎たる主義の上に立ち、神に事<sup>つか</sup>ふるのであります、随つて一日若しくは一ヶ月に非らず、全生涯を通して働くものであります。

主は福音の爲に働く者を召し給ひます、誰が此召に答へ奉りませうか、世の軍隊

にあるは皆將校や下士官でありません、決して凡の人が上官の責任を帯びては居りませんが其他に色々の重要な働があります。塹壕を鑿つ者もあれば、堡壘を築くものもあります。又番兵に立つものもあれば、又は傳令使として遣はされるものもあります。

將校の數は少いが、多の兵士が之に統轄され、全軍隊を編成するのであります。然し軍隊の成功は、軍人一人々々の忠實に係つて居ります。唯一人の卑怯の振舞、反逆の行爲は、全軍に災禍を及ぼすものであります。

『各々に爲すべき事を任せ』給ひし神は、忠實に義務を遂行する者に報を與へず置き給ふが如き事は決してありません。

忠實と信仰より出でし一切の行爲に對し、神は特別に稱讚の印を與へて之を嘉し給ひます『涙と共に播くものは歡喜と共に獲らん、其人は種をたづさへ涙を流して出行けど禾束をたづさへ喜びて歸へり來らん、』<sup>2</sup>とは、凡の働人に對し與へられし

約束であります。(教會の證第五卷三九〇―三九五頁)



今日の多の青年は、彼のダニエルがユダヤの家郷に在りて神の言と其業わざとを研究し、忠實なる奉仕の教訓を學んだ如くに成長し、將來法廷や宮中に立ち、諸王の王なるキリストの證を立てる事がありませう、今や全世界は其門戸を開き、福音を待つて居ります。文明・未開・半開の別なく、此地球の隅々隈々より愛の神の知識を求むる叫は、罪に惱まされた心の底より響き來ります。

(エデュケーション二六二頁)

1 馬可傳「三章三十四節

2 詩篇百二十六篇六節



## 教役者の音聲の練習

我凡の傳道事業に於て、音聲の練習に一層の注意を拂はなければなりません。よし知識があつても、音聲を正當に使用する方法を知らなければ、私共の働は失敗に歸します。

私共は適切なる言語を以て、思想を言顯はす事が出来なければ、教育があつても一向其甲斐がありません、又辯舌の力量を修練しなければ切角の知識も其効力は極めて少なくあります。然し適切なる言語を用ひ、人の注意を惹くに足る様に語り得る力量と知識とが結合する時は、偉大なる力を顯はします。將來神の爲に働かんと志す學生は、明晰に語る稽古をしなければなりません、そうでないと其善感化の半は殺がれて仕舞ひます。

聲量のたつぷりある明晰な音聲で話し得る力量は、如何なる働にも非常に價值あるものであります。殊に此資格は、傳道事業に従事せんと欲するものには、缺く可

らざる要素にして、斯かる希望を抱く者は、民衆に眞理を紹介する時、必ず善き印象を與へ得る様に音聲を用ふる事を教へ、發音の不明瞭の爲、眞理宣傳に故障を生ずる様な事があつてはなりません。

キャンバサーが、其賣らんとする書物の効用を、明瞭に説明し得るなら、其働に多大の助となる事を見出すのでありませう。彼或は其書物の一部を讀み聞かせる機會があるかも知れませんが、斯る場合に、音聲爽かに抑揚頓挫其宜しきを得、之を讀み得るときは、相手の聽者の心を動かさ、記事の光景を眼前に彷彿たらしむる事が出来ます。

又會衆の前に立ち、若しくは家庭に於て、聖書を講義する者は、聽者を魅する底の美妙の音調を以て、聖書を朗讀し得る様にせねばなりません。

福音の教役者は、永遠の言が聽者に甚大の感動を與へ、どうしても之を等閑に付する事が出来ない程に力強く語る方法を知らなければなりません。

私は我教役者の多の缺點ある聲を聽き、心を痛めます。斯の如き教役者は、若し

力ある言を出す素養があつたなら、大に神の榮を顯はす事が出来た筈であるに、然らざるが故神の榮を傷けます。

### 缺點を矯正せよ

努力の結果語調の凡の缺點に打勝たない内は、誰も傳道事業に従事する資格を得たと思つてはなりません。若し如何に語るべきかを知らずして、公衆の前に立つたら、聽者の注意の惹き方を碌に知りませんから、其感化は半失なかばはれて仕舞ひます。

職業の如何に拘らず、誰でも平素より聲を制御する事を學び、何か事故でもあつた時など、猥に激聲を發したりする事のない様にせねばなりません。

鋭い激烈な語調で語り合ふ事が間々ありますが、此が原因で友誼を破り、延ひいては靈魂を滅亡に陷れる例は、決して乏しくありません。

祈禱感話會の席上に於ては、凡の者が證を聞き、之により利益を得んが爲、特に發音の明晰を要します。かゝる集會で、神の民が各自の經驗を述ぶる時、幾多の困



難は除去せられ、助は與へられます、然るに切角の證も、言語不明瞭にして不得要領の爲、恩恵が失はれる場合が少なくありません。

祈禱若しくは感話をなす人は、發音の正格たる可きは勿論、明瞭なる語調を以て語らねばなりません。祈禱は若し正當に捧げられる時には、善を爲<sup>なす</sup>に力あるものがあります。祈禱は眞理の寶を民に紹介する爲、主の用ひ給ひし方法の一であります。然るに祈禱をする人の音聲が不完全な爲、其本質を失ふ事があります、サタンは神に捧げられたる祈禱が殆んど聞えない様な時に喜びます。

神の民は、彼等が有する大眞理を適當に代表し得る様に語り、又祈る道を學び、證も祈禱も明瞭に聽取れる様に爲<sup>な</sup>さねばなりません、斯くして神は崇められますから、各自發言の力量を最善に用ひたいものであります。

神は私共を、一層高き一層完全なる奉仕に召し給ひます。然るに努力して改良すれば、立派に神の代言者となり得る筈の人の不完全な音聲により、御榮を汚されます。眞理は之を傳達する徑路の如何により、傷けられる事は間々<sup>ま</sup>見る所であります。

主は、其僕に委ね給ひし嚴肅なる大眞理を傳ふるに際し、かゝる事をなすに應<sup>ふまは</sup>じき發音を爲し得べき様、音聲の練習に注意を拂ふ可き事を、主の御用に從事する凡の者に求め給ひます、然れば誰一人不明瞭な發音により眞理を傷けぬ様にせねばなりません。

音聲の練習を等閑に付する様な者は、聖職に從事し得べしと想つてはなりません。思想を他に傳達する力を得た後でなければ、かゝる重大な地位を占める事は出来ません。

### 明白なる發音振り

諸君が語る時は、一言一句最後の言に至る迄、明瞭確實に發音する事を努めなさい。一句の終りに近づくに隨ひ、音調が低くなり、不明瞭となり、思想の力が壞<sup>こは</sup>れて仕舞ふ事が度々あります。苟<sup>いやし</sup>くも語る價值ある言語である以上は、之を明瞭に語り出で、抑揚頓挫又其當を得る様にせねばなりません。とは云へ徒らに難解の言

辭を弄し、人に自己が學識を誇る様な事をしてはなりません。單純なればなる程、其言語は善く解されます。

青年男女よ、神は諸子の心に、神に奉仕せんと希望を置き給ひましたか、然らば全力を盡し、音聲の練習をなし、貴き眞理を他の者に明かに傳へ得る様に努めなさい、低い調子で祈禱り、通譯でも付けなければ他の人に聞へない様な、不明瞭の祈禱をなす習慣に陥らぬ様注意せねばなりません。簡單に明瞭に祈りなさい、聞へない様な低い聲で祈る事は決して謙遜の證據ではありません。

私は、將來聖職に従事せんと志す者に呉々も申し上げます、語に完全を期する爲努力なさい、集會で祈禱の時には、今自分は神に語りつゝあり、且つ神は會衆一同が貴君の祈禱を聴き、心を合せ貴君の祈禱に一致し得る事を希望し給ふ事を記憶なさい。

言急<sup>せは</sup>しく、亂雜した祈禱は、神を崇めず、又之を聴く人々にも益を與へません。教職にある者を始め、凡て公の祈禱を捧ぐる者は、神が崇められ、聴者が祝福さる



(教會の證 大卷三八〇—三八三頁)

我最も力量ある教役者の或者は、其語法に缺點がある爲、少からず害を及ぼして居ります。世人に向ひ神の律法に従ふ可き義務を説き乍ら、自分は衛生に關する神の法則を破つて居る様な事があつてはなりません。

教役者は直立し、一句毎に充分空気を吸ひ、腹部の筋肉を働かし、發聲して徐々確實明白に語らねばなりません。

もし此單純な法則を守り、兼て其他の點に於ても、衛生の道に注意する時は、他の職業に従事する人より遙に長命し、且つ有用の生涯を送る事が出来ます。又胸も

廣くなり如何に聲を使つても噎<sup>か</sup>れる様な事が無い様になり、且つ注意の仕方によれば肺病などに罹る傾向から免<sup>まぬ</sup>れる事も出来ます。

若し教役者が、自然の法則に従ひ、聲を用ふる事を學ばなければ、遂には一生を犠牲に供する様な事になり多の人より『真理の爲に殉教した』など、云つて哭<sup>なげ</sup>かれるか知れませんが、其實惡習慣に耽りし事により、自身及び代表して居る真理を傷けて死んだのでありますから、神と世人に對して、奉仕を缺いた譯<sup>わけ</sup>であります。

神はかゝる人々が、猶生存して奉仕せん事を希望し給ひしに、彼等は徐々と自殺をしたのであります。

眞理は之を宣傳する方法如何により、或は受入られ、或は拒絶されるか、ごちらかになるものであります。凡て改革の大事業にたづさはる者は、有効なる働人となる事を學び、出來得る限り多の善事を成就し、自分の缺點よりして眞理の勢を傷ぬ様に心掛けねばなりません。

教役者も教師も、一語毎に充分の音を與へ明瞭に發言する練磨を要します。咽喉

から出づる聲を以て早口に、亂雜な話し方をしたり、又は調子外はづれの高聲を發し、忽ち聲を噎からしたりすれば切角の話も靜に、明に、平調で語る半分の力を失ひます。聽者は、辯士が苦しさうであるのを見、何時聲が止つて仕舞ふか知れない事を畏れ氣の毒に感ずる様になります、猥りに大聲叱呼して激昂した身振をするのは、決して熱心の證據ではありません。

世の救主は、其同勞者が、主を代表し得る事を希望し給ひます。人は神と密接に歩あめば歩む程、其談話の仕方、態度、行儀や身振に缺點が少くなります、我等の模範なるキリストに粗野な見苦しい態度を見出す事は出来ませんでした。私共も又主の如くあらねばなりません。

主は聖靈を通して人をして主が望み給ふ事を語らしめ給ふと論ずる者があります然し主は人に爲すべく與へ給ひし働を爲さんと欲し給ひません。神は私共に理性の力と精神及舉動を教育すべき機會を與へ給ひました。

然れば自分で出来る事は全力を傾け、最善を盡した後熱心に祈り、自分で出来ない



い事を聖靈の助けにより爲<sup>な</sup>し得る様、神に助を仰ぐべきものであります。

(教會の證第四卷四〇四・四〇五頁)

## 神に悦ばるゝ者とならん事を務めよ

神の働には役に立つ人が入用であります、教師若しくは教役者として奉仕すべき訓練を受けた人を要します。仲には一向學校教育の經驗なくして、相當の成功を收めて働いた人の例もありますが、若し其等の人が最初に可然心的訓練を受けて事業に着手したなら、良好なる成績を挙げ、一層手筈ある働を爲し得た筈であります。

使徒パウロは年若き教役者なるテモテに左の如く書贈りました。『なんぢ神に悦ばるゝ者とならんことを務め、また恥る所なき工人となりて眞道を正く頒ち教へんことを務むべし』<sup>1</sup>

人をキリストに導き、救を受けしむる事業は、注意深き準備を要します。必要な訓練を受けずして、主の働に従事し、最大の成功を期待する事は出事ません、商工業家、法律家其他凡の職業に従事する人々は、皆其向々の訓練を受けないものはなく、其志す職業に秀でんがために努力致します。靴屋なり、仕立屋なりに行き、

尋ねて御覽なさい、必ず一人前の職人になる迄には、どの位苦心したかを告げませう、又建築家は趣味ある便利な家を設計し得る迄は、どの位年月を要したかを語りませう。其他如何なる職業でも皆同様であります。

キリストの僕は世俗の事業に比すれば、更に重大なる神の働に對し、其準備を<sup>ゆるが</sup>忽せにして濟みませうか。救靈の方法に關し、無學で居る事が出來ませうか、世人に近づき、彼らの永遠の幸福に關する大問題を紹介するには、善く人の性質を解し、深く學び、<sup>つひ</sup>熟ら考へ、熱く祈らねばなりません。

然るに主と共に働く可く召されし者にして、其業務を學ぶ事に失敗した者は少くありません。斯の如き人は必要なる準備を爲さずして神の働に従事せし爲、贖主の御名を<sup>けが</sup>瀆します。

或者は虚飾を厭ふの餘り極端に走り、禮節を全く棄て、顧みない様な事を致しますが、是又飛んでもない心得違にして、彼等はキリストが其子供等の有<sup>も</sup>たん事を希望し給ふ禮節を拒むものであります。教役者は、自分は人の師表として立つべき者



にして、其言語動作が粗野である時には、經驗なき未熟の徒が其惡例に倣ふ事を記憶せねばなりません。

### 淺薄なる知識

若き教役者は、何處で神の爲に證を立てる事があるか判りませんから、單に眞理の表面的の知識を有するを以て小成に安んじてはなりません。想ふに王侯・貴人の前に立ち、或は智者、學者を相手に信仰の緣由<sup>ゆゑよし</sup>を答ふる様になる人も澤山ありませう、然し眞理の知識が淺薄であるなら、恥る所なき工人となる事は出來ず、聖書を明に説明し得ずして、周障狼狽せざるを得ません。

教育ある働人の缺乏により、神の事業の進歩が妨げられて居る事は實に慨はしき次第にして、道德的及び心理的の資格を缺いて居る人は多くあります。彼等は毫も胸中に知識を藏むる事を爲さず、隠れたる寶を掘らうとせず、單に表面に浮んで居る知識を掬ひ、得々然として居るのであります。

人は、平素自己が素養、教練を等閑に付し乍ら、難局に當り、重要な地位を占め得ると思ひますが、神の働に適當なる資格を得べき機會が與へられしに拘らず、之を利用せずして靈を救ふ爲の神の器となり得ると想像する事が出來ますが、神の事業は、計畫する事も建設する事も又組織する事も、何でも出来る可能的の人を要します。現時代の働の重大を感じる人は、神の言を熱心に研究し、其要する知識を得之を世の罪の中に呻吟せる可憐の靈魂の爲に用ひなければなりません。

教役者は決して、自分は充分に學んだから今は努力を緩めてもよいなごゝ考へてはなりません、一生涯其勉強を止むる事なく、日毎に學び、而して得たる知識を實地に活用すべきものであります。

又聖職の修業中にある者の決して忘れてならぬ事は、心の準備が凡の者の中一番大切であること云ふ事であります。如何に知識が具はつて居ても、又は神學に精通して居ても、之を心の準備の代用とする事は出來ません。

神の寶座より出ずる光が教役者を通し、暗黒にある者を照らす前に、義の太陽の

❁ ❁ ❁ ❁ ❁

左の如く仰せになりました。

れた者は、誠實、克己の献身的働人であなければならぬ。



彼等は斷へず、恩惠の給與を増加して行かなければ弱くなる事を知り、其力を強<sup>つよ</sup>むる爲に熱望を抱かねばならぬ。又其働に愈々大なる結果を得んと努めねばならぬ。是が我働人の經驗である時、果は必ず顯はれ、多く靈魂は眞理を認め、之に服従するに至るものである。』

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

神の其子供等に對する理想は、最高の人の思想が達し得るものよりも、更に高いものであります。敬虔 (Godliness) —— 神の如くなる事 (Godlikeness) とは私共の到達すべき標的であります。學生の爲、茲に不斷の進歩の途が開かれてあります。彼は凡の善き事、潔き事及び貴き事を含む目的と標準に到達すべきものにして、出來得る丈速に、且つ手廣く眞の知識の各方面に進歩すべきものであります。

(エデュケーション十八頁)

## 聖職の教育機關としてのキャンパス事業

青年が聖職に適合する資格を得る最善の方法の一は、キャンパスに従事し活動する事であります、彼等を都市村落に遣はし、現時代に對する眞理を記載せる書籍をキャンパスせしむる時は、生命の言を語る機會に接し、且つ彼等が蒔いた眞理の種は、發芽して實<sup>み</sup>を結ぶに至ります。

多の人に接し、我出版物を紹介する事により、説教する事によりては得られぬ經驗を得ます。青年が同胞を救に導かんと熱情に驅<sup>か</sup>られキャンパス事業に従事する時は、彼等の努力の結果として收穫を主に捧ぐる事が出来ます。

斯く經驗を積んだ後、之を本格の傳道者として派遣し、現代の眞理を宣傳し、斷へず一層の光を世の闇路に彷徨せる者に對し、時に適へる言を語り得る様、聖靈の導を祈らしめなければなりません。

又彼等をして自分は、主の使命を帶びて遣はされた者である事を記憶し、凡の機

會を捉へ、仁慈の行爲の實行を進歩せしめねばなりません。



他日聖職を奉せんと志し、一切を神に捧げて献身せる凡の者は、キャンパスする事により、永遠未來の生命に關する多の問題に付き、語る機會に接するでありませう。

斯くして得たる經驗は、奉仕の準備を爲す者に取りて、無上の價值あるものであります。男女に拘らず神の羊群を牧する者とならん爲、働人を用意せしむるものは神の聖靈の隨伴であります。

彼はキリストが己が伴侶である事を自覺すれば自然、神聖なる畏懼の念と神聖なる喜悅の情を生じ、艱難、試練の裡に自若たる事が出來ます、又働きつゝ、祈る事を學び忍耐、仁慈、禮讓、扶助の各方面に實地教育を受けます。又其伴侶なるキリストは、不親切な言語や感情を稱賛し給はぬ事を念頭に置いて居りますから、眞正の



クリスチャン的禮讓を實行し、其言語は潔められ、言論の力は貴重なる才能として認められ、高尚、神聖なる働をなし、助となります。主の代表者は己と偕にあり給ふキリストを如何に代表すべきかを學び、且つ主の軛を負ひ、其聖き道を學んで居りますから、其見えざる聖者に對し、崇敬の意を表さねばなりません、神が偕に在り給ふ此信仰を有する者は、必ず進歩、發達し、神聖美を以て、真理の使命を飾る力を賜はります。(教會の證第六卷三三三頁)



青年よ、益々主を知る事を努めなさい、さすれば『エホバはあしたのひかり晨光の如く必ずあらはれ出し、雨の如く我等にのぞみ後の雨の如く地をうるほし給ふ、』<sup>1</sup>事を知るでありませう。絶えず進歩する事を努めなさい、贖主と密接の交をなさん事を熱心に求めなさい、キリストに於ける信仰によりて生ける主の爲し給ひし働をなし、主が生命を棄て給ひし靈魂を救ふ爲に一生を送りなさい、而して凡て自分に接觸する者

を助くる爲凡の方法を試みなさい……則のりに則のりを加へ、誠いましめに誠いましめを加へ、茲にも少しく彼處にも少しく教へて、完全なる教育を施し給ふ長兄イエスと語りなさい。

滅び行く世を救はん爲、其身を犠牲に供し給へる主との密接なる結合は、諸君を神の旨に適ふ働人と致します。(教會の證第六卷四一六頁)

## 能率増進に缺く可らざる聖書研究

聖職に献身せんと望み、若しくは既に献身せる青年は、預言的歴史の凡の系統及キリストの授け給ひし凡の教訓に通曉する様にならなければなりません。

意思は之を活用する事により、其能力、鋭敏を増すものにして、是非働かさなければなりません、然らずんば弱くなつて仕舞ひます。考へる様に訓練し、習慣的に考へないと思想力を失ふ事は少々ではありません。

若き教役者をして聖書中の難問と苦戦せしむる時は、其智力は全く開發されます彼もし聖書中にある大真理を熱心に研究すれば、手答ある使命を含む説教を爲し、聽者をして正き道を撰ばしむる事が出来ます。

神の言に關して、唯々淺薄なる知識を有するのみにして、真理を教へんと試むる教役者は、聖靈を憂へしめます。然しよし知識に乏しく、己が知れる範圍の事を教へ始むるも、同時に孜々として更に愈れる知識を求め、研鑽に怠らぬ人は、頓て更



に大なる働をなす資格を得ます、即ち自分の心に一層大なる光を受ければ受ける程一層多く天來の光明を他人に配<sup>お</sup>つ事が出来る様になります。

傳道事業に弱點を感じて居る必要は更にありません、私共の傳ふ可き真理の使命は全能力を有して居ります、然るに多の教役者は、神の深き事を學ばんが爲、其精神を傾けません、若し助ある奉仕を爲し、他人を助け得る經驗を得んと欲するならば思想を放任する惡習慣を打勝たなければなりません。

心を盡して聖書研究に努めるならば、必ず新しき力を得、神を切に求むる時に、神の力が人の働と結合し、『我<sup>わが</sup>たましひよ默<sup>もく</sup>してたゞ神<sup>かみ</sup>をまて、そは我<sup>わが</sup>望<sup>のぞみ</sup>は神<sup>かみ</sup>より出<sup>い</sup>づ、』と其心の懷<sup>うち</sup>を述べる事が出来ます。

救靈事業に従事し、好成績を舉げんと望む教役者は、聖書研究家として同時に祈禱の人でなければなりません、神の言の研究を等閑に付し、他人を教へんと企てる事は罪惡であります、靈魂の價值を認め、且つ神の知識に無頓着なる事は、由々敷大事である事に氣が付いた者は真理の要害なる神の御許に遁れ知識と能力とを得て

神の働に従事する様になり、天より聖靈の膏を注がるゝ迄はじつとしては居られなくなります。

働人は神の言を不斷の友とする時は、働く力量は愈々増加して參ります、斯く知識に進歩するに随ひ、キリストを一層善く代表する事が出来ます、彼は信仰に強くなり、キリストにある恵と愛の充滿の證據を未信者に紹介する事が出来、其心は一個の寶庫となり、他の必要を充たすものを引出す事が出来ます。

聖靈の働により眞理は深く彼の心に刻まれ、又彼が眞理を傳ふる者、即ち他日其人々に對し、審判の座の前に責任を申し開くべき人々が大に祝福を受けます。

斯う云ふ風に奉仕の準備をなす人は、多の者を義に導く者に與へられたる酬むくいを受ける事が出来ます。

我教會の信仰に關する著書や、其他の人々の筆に成る記事を熟讀する事は、頗る大なる助となります、然し是は心に最大の力を與ふるものではありません。

聖書は知的修養を與ふるに、世上最善の書物であります、其研究は知識を深くし

記憶を強くし、且つ人の哲學の凡の研究以上に才能を鋭くします、聖書が現示する大問題、又其大問題を處置するに單純に而も威嚴ある事及人生の大問題を照らす光明は、吾人の理解力に能力と元氣とを與へます。

此サタンとの大争鬭の時代にありて、常にキリストに忠實ならんと欲する者は、人の所論や教理以上に深く眞理を會得して居らねばなりません。

老若を問はず教役者に對する私の使命は是であります。——祈禱、聖書研究、及自省の時間を、此上なき大切のものとして何物にも犯されぬ様保護し、必ず毎日一定の時間を割き、聖書研究と神と交る事に専用せば、必ず靈的の力を得、神の恩恵に成長する事が出来ます、人をして貴き渴望を起さしむるものは、神のみであります、神と等しき品性を、人に賦與するものも亦神のみであります。

熱き祈禱を以て神に近づきなさい、さらば神は諸君の心に高尚、神聖なる目的と純潔と、明白なる思想に對する熱望を満たしめ給ひます。

※  
※  
※  
※  
※  
※



神の言は聖靈を通して與へられしが故、聖書の眞正の知識は、聖靈の助によりてのみ得らるべきものであります、又此知識を得るには、聖書の教訓を實行せねばなりません。神の言の命令には、一切之に従ふ可く其約束は悉く之を信ずる事が出来ます、私共は一切聖書を標準にして生涯を送る可きものであります、聖書に對しかゝる觀念を有する時、<sup>はじ</sup>甫めて之を有効に研究する事が出来ます。

1 詩篇六十二篇五節

(エデュケーション百八十九頁)

## 青年教役者は經驗ある教役者と共に働くべし

奉仕の準備をなす爲、青年は經驗ある教役者と交はる事は極めて必要であります。又實地の經驗に富む先輩等は、若き無經驗の教役者を傳道地に同伴し、如何にせば人を悔改に導き得るか、其成功の秘訣を教へ、親切と慈愛を以て後進者を誘掖し、主の彼等を召し給ふ可き働に對する準備をさせてやらねばなりません、而して後進の青年等は、能く先輩諸氏の教訓を服膺し、且つ彼等の知識は永年の實地奮闘の結果得たものなる事を記憶し、其献身的努力に對し、敬意を表さねばなりません。

教會及年會の役員に對する絶好なる忠告は、ペテロにより左の如く與へられました。『爾曹の中にある神の羊の群を牧へ、これを牧司ごるに止を得ずして爲さず、好みてなし、利を貪る爲に爲さず、樂みて爲すべし、又汝ら託せられたる者に、主と爲る可らず、羊の群の式となるべし、汝等牧者の長の顯れん時に、壞ることなき』

榮さかの冠冕かんむりを得ねん、又幼者またわかきものに勸すすむ、爾曹長老なんぢらやうらうに服したがへ、且互かつたがひにみな相服あひしたがひて謙遜けんそんを衣きよ  
夫神それかみは驕傲者たかぶるものを拒ふせぎて謙遜者へりくだるものに恩めぐみを與あたへ給たまふなり。』<sup>1</sup>

先輩たるものは、先づ自ら神の訓練に服し、以て他人を教育せねばなりません、  
又青年をして経験ある教役者の下に學ぶ事を特權と感ぜしめ、且つ其年齢及経験に  
應じた凡の責務を負はしめねばなりません。

如斯エリヤも預言者の學校に在るイスラエルの子弟を教育しました、今日も青年  
はイスラエル時代と同様の訓練を受く可きものであります。青年の行動に關し、一  
々精細の點迄之を指圖する事は、不可能であります、兎に角先輩は之に忠實なる指  
導を與へ『イエス即ち信仰すなはしんかうの先導みちびきとなりて之これを成全まっとうする者ものを望のぞむ』ことを教へねば  
なりません。

使徒パウロも後進教役者の訓練の必要を認め、傳道旅行を終るやバルナバと共に  
曾て彼等が建設せし教會を訪ひ、人を選び福音宣傳の事業に對する訓練を施しまし  
た。



實にパウロは青年を教育し、之を福音の奉仕に備へしむる事を以て、彼の働の一部として居りました故、傳道旅行には青年を同伴し、之に實地の經驗を與へ、將來責任ある地位を得る準備をなさせました、又一緒に居ない時も絶えず青年の働と聯絡を取つて居りました、彼がテモテやテトスに贈つた書簡を見ると、パウロが如何に青年教役者の成功に對し配慮して居たかど判ります、『なんぢ多の證人の前にて我より聞し所の事を忠信にして能く人を教るに足る人に託すべし』とは其一節であります。

パウロの働方の此特徴は、今日の教役者に重大なる教訓を與へます、經驗ある働人は、凡の責任を自分で引受けんと試みずに青年を訓練し之に重荷を分擔せしむる事により高尚なる働を爲し、又斯くする事は神の希望し給ふ所のものであります。

とは云へ後進教役者は、己を監督指導する先輩の思想、意見に全く同化され、自己の個人性や、判斷力を失ひ、盲從的に毫も自己の意思を發揮する事の出来ない様になつてはなりません、大なる教師キリストより直接に學ぶ特權を有つて居ります

萬一先輩の言ふ事が神の言と一致しない場合に、之を無關係の他人に吹聴する事なく、更に可然先輩の許に行き遠慮なく打明るが宜しいのであります。

斯くすれば學ぶ者は教ふる者に對して祝福となる事が出來ます、兎に角學ぶ者は忠實に其義務を果さなければなりません。苟しくも誤れる行動を採れるならば、其人が如何に勢力があつても、責任の重い人であつても之を看過する時、神は之を罪なしと爲し給ひません。

青年は老練なる旗手と相提携し、幾多の實戰を履んで來たのみならず、屢々聖靈の證により神が彼等に善惡の識別をなさしめ給ひし經驗を有つて居る此等の忠實なる先輩により強められ教へられねばなりません。

神の民の信仰を試むる様な艱難が起る時、此等の先驅者は、曾て眞理が疑はれ、神より出でざる奇怪な説が竄入した危機があつた事を想起して物語るべき筈であります。今日サタンは眞理の道標を毀たんと其機會を窺つて居りますから、私共は此際堅固なる巖の上に其家を建て惡名、令聞により眞理に立つて動かざりし老練なる

先輩の経験を大に要します。

1 彼得前書五章二―五節

2 提摩太后書二章二節



## 聖職にある青年

青年がキリストと偕に働く者として聖職に従事し、彼の克己と犠牲の生涯に與り『我彼等われかれらの爲ために自己じこを潔きよむこれ眞理しんりに因よりて彼等かれらの聖きよめられん爲ためなり』との聖言を自己が聲として叫ばねばなりません、彼等もし神に服従するならば、神は之を用ひて靈魂の救に對する神の計畫を實施する助とならしめ給ひます。

聖職を奉ずる様になつた青年は、須らく自己の召の重大なる事を深く感じ、時間も能力も勢力も一切を擧げて之を神の働に献じ、如何なる條件の下に奉仕するか明かに悟らねばなりません。

神の軍旗を翻へし、勇敢に戦つた宿將等は死去しつゝあります、されば有爲の青年は起つて其補缺となり、引續き使命を宣傳せねばなりません、今や進撃的に戦線の範圍を擴張せねばならぬ時にして、血氣壯な青年等は福音未傳の暗黒なる地方に突進し、滅び行く靈魂を悔改に導かねばなりません、然し彼等の先づ第一爲すべき

事は心の殿より一切の不潔を除去し、キリストを宿し奉る事であります。

### 『慎むべし』

パウロがテモテに告げし『なんぢ<sup>おれつ、しまたおしふ</sup>己を慎み亦教<sup>またおしふ</sup>ることを慎むべし、』この語は、傳道事業に着手せし凡の青年に適用する事が出来ます、『己』てふ語が、最初の注意を要します、先づ第一に主に一切を差出して潔めを受けねばなりません、敬虔なる好模範は、規律ある生涯の伴はざる雄辯より遙に強く眞理を辨明するものであります、心靈の燈火を掃除し、聖靈の油を以て之に満たし、成功ある働をなさしめ得る明晰なる理解力の與へられん爲、其恩恵をキリストに求め、救靈事業に従事するとは如何なる事を意味するかを主より學びなさい。

先づ『己』を慎み、然る後『教ふる事を慎め』と教へられてあります、決して罪により心を頑固にする事なく、能く自己の癖や習慣を省み、之を神の言と比較し、苟<sup>いふし</sup>しく不都合の點あらば些も未練なく一切の惡習慣、惡嗜好を棄て、神の聖前に俯

伏し、聖言を了解し得る様、切に主の助を仰ぎなさい、又真理の原則を誤りなく心得て居らねばなりません、反對者に遇つた時、凡の質問に對し答をなす助となるのは、自分の力に非ず、傍に立てる神の使であります、日毎キリストと密接に交るに隨ひ、言行共に強い善き感化を與へる事が出来ます。

### 無智の辯解を許さず

傳道事業に着手する者の中、其働の重荷を感じる事なく、教役者の資格に付て飛んでもない思ひ違ひをして居るものがあります。斯る人は傳道者となるには、世上の學術も神の言も、深く學ばずにも出來ると思つて居ります。

現代の眞理を教へつゝある者の中にも、聖書の知識の缺乏甚しく、一の聖句すら記憶により正しく之を引照するの困難なものもありますが、彼等は其見苦しき有様で澁滞する事により、神の聖前に罪を犯します、又彼等は聖書を曲解し、聖書に記



してない事を記してある様に説明します。

又或者は聖靈に満されて居さへすれば、更に教育の必要なく、又聖書に通曉せずとも大した差支がない様に思ひますが、神は決して無智を許す爲に聖靈を送り給ひません。

神は教育を受くる事の出来ない地位にある者を憐み、又之に祝福を垂れ、時々は神の力が彼等の弱に於て完全ふせられる様に取り計らひ給ふ事もあります、然し斯の如き人も、聖書を研究するは其義務であります、學問がないからと云ふて聖書研究を怠る言譯いひわけとはなりません、神の言は如何なる無教育の者にも解し得る明瞭なものであります。

### 厚遇に酬ゆる事

青年教役者は、何處にありても有用の人たらん事を心掛けねばなりません、人を其家庭に訪問する時、其厚遇に對し、何等の助けもなさず手を拱こまぬいて居てはなりません。

せん、報恩の義務は相互にあります、若し教役者が其友人より厚遇を受くるならば彼等の好意を空しくせず深く言行に由て感謝せねばなりません、先方の主人は注意深く、且つ骨身を惜まず働く人であるかも知れませんが、唯侍<sup>かし</sup>づかれる許りでなく、出来る事は何でも先方の助となる事をする精神を顯はす事により、教役者は屢々人心を收攬し、眞理を受入れしむる道を開く事があります。

安逸を貪り、手足を働かさざる懶<sup>もろ</sup>い人は、教役者として不適當な者であります、傳道に従事せんと欲する者は強い勞働に服し得る様教訓しなければなりません、かくてこそ思想力も一層強くなつて參ります。

青年等は平素の心掛に注意し、危急の場合に臨み、周章狼狽する事なく、能く發達したる體力と明晰、強健にして實際的な意思と相俟つて活動し、難局に當り得る様にして置かなければなりません。

至上よりの智慧によりてのみ當り得る様な困難が起つて來た時、平素各種の障礙に打勝ち付けて居る人は、始めて働人としての召に答ふる事が出來ます。

## 堅忍不拔の必要に缺く可らざるもの

パウロがテモテに贈つた書簡の中には、青年教役者の學ぶ可き教訓が澤山あります、老使徒は青年教役者に對し、堅忍不拔の必要に付き懇々諭しました。

其一例を挙げれば彼は左の如く書贈りました、『是故に我爾をして我按手に由りて爾が受けし神の賜を復び熾にせんことを欲しむ、そは神の我等に賜へる靈は臆する靈に非ず能と愛と謹の靈なれば也、是故に爾我等の主の證を作すことゝ其囚人なる我とを恥となす勿れ、惟神の能に循ひて福音の爲に我と共に苦を忍ぶべし。』

パウロはテモテに『福音を以て生命と壞ざる事とを明著に』し給ひしキリストの力を宣傳すべく『聖召を以て召』された事を記憶する様に勧め、語を繼いで『我この福音の爲に立られて宣傳する者となり使徒となり異邦人の師となれり是故に我これらの苦に遇ひたり然ぞ之を恥とせず蓋われ我信する者を知りかつ我彼に託したる



ものを彼かの日に至るまで守ることを爲し得るを信ずれば也、』と申しました。

パウロは何處にありても、何人の前にありても——顰顔するパリサイ人や、又は神を知らぬローマの役人の前にありても、ルステラの暴徒、マケドニヤの牢獄に於ける求道者の前にありても、又は難船の時に當りおぢ惑ふ水夫さては天下の暴君ネロの前に出で取調を受くる時にも、彼はキリストの道を毫も恥ぢませんでした、彼の基督者の生涯の一大目的は、曾て自ら侮蔑した事のあつた主に事ふる事にして、如何なる反對も迫害も彼の意志を翻へす事が出来ませんでした。

彼は尙説き進めて左の如く申しました『わが子よ爾キリストイエスにある恩に堅固なるべし又なんぢ多の證人の前にて我より聞し所の事を忠信にして能く人を教ふるに足る人に托すべし、爾キリストイエスの精兵卒の如く我と共に苦を忍ぶべし』苟くも忠實に神に事へんとするものは、骨惜しみをしたり、責任を避る様な事があつてはなりません、彼は眞心を以て神の力を求むる者を却け給はざる力の源なる神より力を受け誘惑に對抗し且つ之に打勝つ事が出来、而して神が負はせ給ひし任

務を仕遂げ得るのであります、其受る所の恩恵は、神とキリストに對する知識の容積を大ならしめ、主の嘉納し給ふ働が出来る様にと渴望し、信仰の道程が進むに従ひ『キリストイエスに在る恩恵に強く』なります。

此恩恵は教役者をして其聽きし處のものに對し、忠實なる證人となる事を得しむるものであります、彼は神より受けし知識を蔑視したり等閑に付したりする事はありません、其知識を忠實なる人に託し、又他の人を教へる様に致します。

パウロはテモテに贈りし最後の書に、キリストの役者としての義務を明かにし、

高き標準を青年教役者の前に示し左の如く記しました。

『なんぢ神に悦ばるゝ者と爲んことを務また恥る所なき工人となりて眞道を正く願ち教んことを務むべし……なんぢ幼少ときの慾を避けて義と信と愛を追求め又清心にて主を顧者と和ぐ事とを追求むべし愚なる無學なる辯論を避くべし蓋之より争競の起るを知ればなり主の僕は争ふ可らず和平に凡の人を待ひ教を善くし忍ぶ事をなし逆ふ者をば柔和を以て戒むべし神或は彼等に悔改むる心を賜ひて之に眞

理を識しめ給はん。』<sup>5</sup>

(アクトオブザアポツスルス四九九―五〇二頁)

1 約翰傳十七章十九節

2 提摩太前書四章十六節

3 同後書一章六―十二節

4 同後書二章一―三節

5 同後書二章十五節・廿一―廿五節



## 資格篇

『われら<sup>すべて</sup>凡<sup>こと</sup>の事<sup>おい</sup>に於<sup>すて</sup>て既<sup>にかみ</sup>神<sup>つかへ</sup>の役<sup>びと</sup>者<sup>こと</sup>の如<sup>おこ</sup>く行<sup>な</sup>  
ひて、己<sup>おのれ</sup>の義<sup>ぎ</sup>を人<sup>ひと</sup>に顯<sup>あらは</sup>せり。』

## 献身

人もし成功ある教役者とならんと欲せば、書物の知識以上のものがどうしても必要であります。靈魂を救ふ爲の働には、献身・誠實・敏捷・勤勉・活力及び氣轉を要します。若し此等の資格を備へて居れば、決して引<sup>ひ</sup>を取らないのみならず、善を爲すに偉大なる感化力を有するものであります。

※ ※ ※ ※ ※

キリストは自己が使命——天の徽章を帶べる使命を果さん爲には、個人としての希望や要求を全然却け、此世に成就せんとて來り給ひし其働の爲には、一切の事物を後廻<sup>あさま</sup>はしに爲し給ひました。主は幼き時、ユダヤのラビを相手に律法を論じ給へるを見、マリヤが、『子<sup>こ</sup>よ何ぞ我儕<sup>われら</sup>に如此<sup>かく</sup>行<sup>な</sup>たるや、爾<sup>なんぢ</sup>の父と我<sup>われ</sup>と憂<sup>うれ</sup>て爾<sup>なんぢ</sup>を尋<sup>たづ</sup>ねたり』と申しますと、『何故<sup>なにゆゑ</sup>われを尋<sup>たづ</sup>ねるや、我<sup>われ</sup>は我父<sup>わがちち</sup>の事<sup>こと</sup>を務<sup>つと</sup>めべきを知<sup>し</sup>ざる乎<sup>か</sup>』と答へ給ひましたが、此一語は主の全生涯を通して爲し給ひし働の主調<sup>キリスト</sup>であります。

キリストの發揮し給ひし同一の敬虔、献身、又び神の言に對する服従が、主の僕に見る事が出來ねばなりません。主は無事安泰の家郷を棄て、世の在らざりし前より、父と共に有し給ひし榮光を棄て、宇宙を統御し給ふ寶座の地位を棄て、一個の人となり、此世に降り、具に辛酸を嘗め、孤獨を生涯を送り、滅び行く此世に、涙を以て生命の種を蒔き、血を以て灌<sup>そ</sup>ぎ給ひました。

主の僕も同様に、種を蒔く爲に出行かねばなりません。アブラハムは眞理の種を蒔く者として召されし時、左の如く命せられました。『汝<sup>なんぢ</sup>の國<sup>くに</sup>を出<sup>い</sup>で、汝<sup>なんぢ</sup>の親族<sup>しんぞく</sup>に

別れ、汝の父の家を離れて、我汝に示さん其地に至れ。』<sup>2</sup>彼は神の光を輝らす者、地上に神の名を紹介するものとして『其往ところを知らずして出』<sup>3</sup>で行きました。彼は賓旅となり、寄寓者とならん爲、故郷も・家庭・親戚・友人・其他此世の樂しき關係を悉く拋棄しました。

使徒パウロも、エルサレムの聖殿で祈つて居る時、『往け、われ爾を遠く異邦人に遣はすべし。』<sup>4</sup>との使命が彼に臨みました。斯の如く、キリストと偕なる可く召されし者は、主に従はんが爲には一切を棄て、舊い交際も廢絶し、終生の計畫も中止し、地上の希望も拋擲し、辛苦勞働し、寂寞と戦ひ、全き献身を爲して種を蒔かねばなりません。

然し、全身、全靈を神に献げた者は、靈肉共に斷へず新しい力を受け、天よりの無盡藏の供給は欲する儘に授けられ、キリストは御自身の靈の呼吸 即ち生命を賦與し給ひます。されば聖靈は其最高の能力を以て心の中に活動し、神の恩寵は彼等の官能を擴大し、完全なる凡の神の性質は彼等を助けて、救靈の働をなさしめんが



爲に臨みます。キリストと偕に働く事により、教役者は主に在りて完全にせられ、弱點多き人と雖も全能者の働をなし得るに至ります。

贖主は決して貳心ある奉仕を受入れ給ひません。されば神の爲に働く者は、日毎に自己を降伏せしむる事を實驗し、神の言を研究し、其眞意を學び、其教訓に従はねばなりません。斯くして教役者は、優秀なる基督者の標準に達する事が出来、日々神は彼と共に働き、最後の日に立ち得る品性を完ふし給ひます。而して日々信者は、人と天使の前に崇高なる實驗を發揮し、墮落せる人類に對する福音の効力を示す事が出来ます。

キリストが弟子等を召して従はしめ給ひし時、毫も其言を以て此世に屬する望みなどを提供したり、利益や名譽の約束も、又將來何を受けるか、何等の契約もなし給ひませんでした。税務署に坐して居たマタイに、救主は一言『我に従へ』と仰せになりますと、彼は直に『起つて従ひ』ました。此時マタイは、主に事へるに付いては、從來の職業により得た丈の給料を頂戴したいなどと申出でませんでした。無

條件に、何等の躊躇する處なく、イエスに従ひました。救主と偕にあり、親しく其警咳けいがいに接し、共に働き得る事が、彼にとりて此上なき特權でありました。

尙其以前に召されし弟子の場合にも同様にして、主がペテロ其他のものに従へと命じ給ふや、一同船と網とを棄て従ひました。此等の弟子の中には他人を養つて居た人もありましたが、主の招に接するや、『是から先はどうして生活しますか、家族はどうして養ひますか』なご、問ふ事もせず、早速召に應じ従ひました。が其後キリストが、『我財布・旅袋・履をも帶せで、爾曹を遣し、に、事の缺たる事ありしや』と問ひ給ひし時、之に對する弟子たちの答は『無かりき』の一語でありました。今も主は、昔マタイや、ヨハネ、ペテロ等を神の働に召し給ひし如く、私共を招き給ひます。若し心に主の愛をいみじくと感じて居れば、報酬などの問題は、念頭に浮ぶ事なく、主と偕に働く事を喜び、毫も畏るゝ事なく、一切を聖手に委ねまつる事が出来ます。もし神を我力とする時は、義務の明瞭なる理解を得、無我の抱負を有する事が出来、私共の生涯は高貴の目的により刺戟され、下品なる動機は其跡

を絶つて仕舞ひます。主が用ひ得る多の者の中には、兎角主の聖聲を聞き之に従はぬ者があります。親戚・友人の關係、從來の習慣や社交などが、仲々強い感化を有し、神の教訓を受くる餘地少く、爲に神が其目的を知らしめる事が多く出来ません然し神の僕にして、もし親族及び凡て地上の關係以上に主の奉仕に重を措き、献身する者には、主は彼の爲により大なる働をなし給ひます。

### 更に献身の念を熱くせよ

一層大なる能率と一層厚き献身とは、時代の要求であります。私は神に對<sup>むか</sup>ひ左の如く叫びます。責任の觀念なく、凡の罪の基礎なる自己崇拜が十字架に釘けられ、一切を悉く神に献げ、働の神聖と責任の重大とを自覺し、努力も祈禱をも要せざる如き不具の犠牲を神に捧げざる決心を有する使命宣傳者を起し之を遣はし給へと。

曾てウエリントン侯は、或る基督信徒が會合して、異教地傳道問題に關し、果して成功の見込ありや否やを論じ、其意見を問はれし時、侯は之に答へ、左の如く言



つたと申します。

『諸君！ 如何なる進軍命令を受けたるか、勝敗成否は問ふ處ではあるまい。若し私の讀方に誤なくば其れには「偏く世界を廻りて凡の人に福音を宣傳せよ」どある、諸君よ、此進軍命令に従へ。』

兄弟よ！ 主は間もなく臨り給ひますから、私共は全力を盡して、私共の前に置かれたる働を完結せねばなりません。私は諸君が、全然この働の爲献身せん事を勧めます。キリストは、人類の利益と幸福との爲に、時も心も力も、一切を擧げて働き、終日寸暇なく活動し、又は終夜の祈禱を續け給ひし事もありましたが、是皆救を求めて主に來る者を助けんが爲でありました。水流を溯り、水源を究め得る如くキリストの慈愛の行爲は、其聖足の跡何處にも之を認める事が出來ます。されば主の行き給ふ處には、健康生じ、其過り給ふ所には幸福が従ひました。又主は神の言を、子供にも解る様、實に單純に紹介し給ひました、又年少き人は、主の奉仕の精神に捉へられ、可憐の人々を助く事により、主の模範に倣はんと致しました。又譬

者、聾者は、其不具を癒され、聖前に喜び、無學なる者及び罪ある者に對する主の聖言は、生命の泉を開きました。斯くて主は絶えず豊かに其祝福を頒ち給ひましたが、是れ實に人類に對する賜物なるキリストによりて與へられた豊なる永遠の富であります。

神の爲に働く者は、身に神の印を捺されたかの如く、自分は己自身のものでない事を明に覺り、キリストの犠牲の血を以て灑がれ、且つ全き献身の精神を以て、キリストの恩恵により、自ら活ける犠牲とならんと決心すべきものであります。然るに罪人の救てふ大事業の真相を解し、永遠より神の心に計畫されし様な觀察を爲すものが果して何人ありませうか、此將に完結せんとする嚴肅なる働に對し、キリストと同じ心を以て之に當る者が果して何人ありませうか、悲しい事には、未だ救れざる人々に對して表すべき筈の同情の十分の一も之を認める事が出来ません。警戒を與へ、之を救に導かねばならぬ人は實に澤山ありますが、彼等がキリストの贖を受ける爲には、何事をもなし、何事をも棄つる程の同情心を以て、神と心を一にす

る者は、至つて少ないとは、實に遺憾な次第であります。

エリヤはエリシヤと別れるに臨み、『我が取られて汝を離るゝ前に、汝わが汝になすべき事を求めよ、』と申しました。エリシヤは之に對して『汝の靈の二の分の我にをらん事を願ふ』と答へ、世俗的地位や名望を求めませんでした。彼の切に望んだ者は神が將に天に移さんとし給ふ程の高潔なエリヤの受け居りし靈が豊に與へられん事で、是以上他に優れる者のある事を知りませんでした。

教役者よ！もし此問が發せられたら、諸君は何と答へますか、神の事業に従事せる時の諸君の願は何でありますか。

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 1 路加傳二章四十八・四十九節 | 5 馬太傳九章九節     |
| 2 創世記十二章一節      | 6 路加傳二十二章三十五節 |
| 3 希伯來書十一章八節     | 7 列王紀略下二章九節   |
| 4 使徒行傳二十二章二十一節  |               |



## 理智に富め

救靈事業には、氣轉と思慮を大に要します。救主は決して眞理を蔽ひ隠し給うた事はありませんが、何時も愛の精神を以て之を語り給ひました。主は人と交る時、最大の氣轉を利かし、且つ何時も親切で、思慮深く、勿論禮讓を缺く様な事なく、不必要に激しき言を出したり、猥みだりに人の感情を傷ける様な事をなし給はず、又人の弱點を非難し給ひませんでした。勿論主は、偽善・不信・不徳に對して忌憚なく譴責し給ひましたが、其叱咤の聖聲の中には涙がありました。主は決して眞理を以て人を苦しめ給ひし事なく、人類に對し慈悲深き情を顯はし給ひました。主の目の前には如何なる者も貴く、御自身神の威嚴を具へ給ひしに拘らず、神の家族の一人々々に對し、最も優しき同情を寄せ、之を顧み給ひました。即ち主は一切の人類を救ふ事は己が使命である事を自覺し給ひました。

## 深慮あるパウロの態度

教役者は、未信者に對し眞理なら時と場合を問はず、何んでも話すべきものであると思ふてはなりません。言ふ可き時、語るべき事、語らずに置くべき事等、吳々も注意して、其宜に合ふ様にせねばなりません。是は決して對手を欺く譯でなく、パウロも此方針で働きました。コリントの信者に贈つた書を見ると、左の如く書いてあります。『我衆の人に向て自主の者なれど、更に多の人を得ん爲に、自ら己を衆の人の奴隷となせり。ユダヤ人には我ユダヤ人の如くなれり、此ユダヤ人を得ん爲なり。又律法の下にある者には、我律法の下に在ざれども、律法の下にある者の如くなれり。是律法の下にあるものを得ん爲なり。律法なき者には、我律法なき者の如くなれり。是律法なき者を得ん者なり。然ど我神に向ひて律法なきに非らず、即ちキリストの律法の下に在なり。柔弱者には我柔弱者の如くなれり。是柔弱者を得ん爲なり。又すべての人には、我その凡の人の狀に循へり、是いかにもして、彼

等數人<sup>ら</sup>を救<sup>すく</sup>ん爲<sup>ため</sup>なり。』<sup>1</sup>

パウロはユダヤ人に近づくに當り、彼等の反感を買ふ様な、拙劣な方法に出でませんでした。彼はいきなりユダヤ人に對ひ、ナザレのイエスを信ぜよと叫ばず、預言に基きて、キリストと其使命及其事業を紹介し、神の律法を敬ふ事の重大なるを示し、一步一步と聽者の注意を惹き、又モーセの律法に對しても、相當の敬意を拂ひ此等のユダヤ人の奉仕はキリストの奉仕の型である事を説明し、進んで主の第一降臨に説及ばし、終にキリストの生涯と其死は、舊約の凡の奉仕を成就したものである事を懇々と説明しました。

然し異邦人に接する時は、キリストを先にし律法の問題は後廻<sup>あとまは</sup>しとなし、カルバリーの十字架により反射されたる光は、全ユダヤ制度に、意義と榮光とを與へし事を説きました。

斯くパウロは、時と場合により、働の方法及使命の傳へ方を變へました。パウロは忍耐して働いた結果多大の成功を収めました。が、それでも眞理を受入れぬ者も澤



山ありました。今日でも、如何なる方法により眞理を紹介しても一向之を信ぜぬ人がありますから、教役者たる者は、最上の方法を講じ、反感や爭論の起らぬ様、大に注意せねばなりません。然るに此點に失敗するもの多く、兎角に己が性癖に従ひ傳道する爲、もし他の方法でやれば導ける筈の人の前に、門戸を閉ざして仕舞ひます。

教役者は多方面の人、即ち度量の廣い人でなければなりません。琴柱に膠した様な働振りでなく、對手の人や境遇に應じ、臨機應變の策を講じ、之に適する様に眞理を紹介する事が出来ない様であつてはなりません。

教役者は反對や攻撃に遇ふ時、慎重の態度を採り、且つ何物よりも要するものは『上よりの智慧』にして、即ち『第一に潔く、次に平和・寛容・柔順かつ矜恤と善果みち、人を偏視す、また偽なきもの』であります。雨露が、枯れんとする草木の上に靜かに落つるが如く、眞理を宣傳する者の言も、柔かくなければなりません。教役者の任務は、人を惹付けるので、決して之を追返へす様な事があつてはなりません。

ません。勿論人に接するに、一々規則を設ける事は出来ませんから、其機に臨み、然る可き方法を取り得る様に平素熟練して置く事が必要であります。

教役者に、手練と知識が缺けて居た爲、救はる可き者を取逃がし、其人の前途を全く誤らせ、随つて神の事業に損失を來たす場合が澤山あります。氣轉と健穩なる識別力とは、働人を百倍も益に立たせます。適當なる時に適當なる言を出し、適當なる精神を示す時には、相手の人の心を動かすに偉大な力を顯はすものであります。

## 新傳道地の働

新傳道地に働く時、直に我等はセブンスデー・アドベンチストで、七日日安息日を信じ、又靈魂不滅説を否定するものであると公言する事が義務であるなど心得てはなりません、斯する事が、切角導かうと目指す人々と、教役者との間に、大なる障碍物を築く事となります。先づ機會があれば、一致し得る教理に付て語り、兎に角實行的信仰の必要に重を措き、對手の人をして、貴君がクリスチャンにして、平

和を冀ひ、彼等の靈魂を愛する誠實の人である事を悟らせ、彼等の信用を得た後、除々に教理問題に移つても決して遅くはありません。先づ人望を得、土地を能く耕やした上で、イエスが爲し給ひし如く、愛に基き眞理を紹介し、種を蒔くのが順序であります。

神は、智慧を賜らん事を求むる者を確に助け給ひます。機會は待つべきものにあらずして、求むべきものであります。而して私共は何時も、私等の中にある希望の緣由ゆゑよしを語り得る準備をして居らねばなりません。若し教役者が、常に祈禱の精神を有つて居るなら、神は必らず、適當なる時に適當なる言を語り得る様に助け給ひます。

\* \* \* \* \*

人を矯正せんとするに當りては、殊に言語に注意せねばなりません。物の言ひ様一つで、或は生命に至る生命の香となり、或は死に至る死の香となります。兎角人



を譴責し、又は忠告する時、鋭く厲しい言を出す者が多くありますが、是は決して傷める靈魂を癒すに相應しきものでありません。言語の使ひ方が悪い爲、相手を怒らせ、反抗心を起さしめる事が間々あります。

真理の原則を鼓吹する凡の者は、天來の愛の油を受け、如何なる事情の下にも、愛の精神で人を譴責せねばなりません。斯くすれば、決して人の感情を害する事なく、成功ある忠告をなす事が出来ます。又キリストは聖靈により能力を供給し給ひます。是れ即ち主の働であります。

1 哥林多前書九章十九―廿二節

2 雅各書三章十七節

## 禮讓の美德

苟くもキリストの爲に働く者は、主義を確く取つて動かざる事磐石の如く、實直にして事を托するに足る人物であると同時に、親切にして禮儀の厚い人でなければなりません。

抑も禮讓は聖靈の賜の一にして、人の心を取扱ふ事は人に與へられた仕事の中最大のものでありますが、斯かる重荷を委ねられた人は『爾曹みな心を同うし互に體恤兄弟を愛し憐み謙遜、惡を以て惡に報ゆる勿れ』<sup>1</sup>なる命令を眷々服膺せねばなりません、愛は議論で仕遂ない事を成就します。然るに瞬間の短氣、一言の厲しき答や其他何か一寸した事に基督者的の禮儀を缺いた爲、友人を失ひ且つ感化力を損するに至る事があります、教役者はキリストが地上に在り給ひし時の通の事をしやうと努むべく、主は其純潔、無垢の點に於けるのみならず、忍耐、溫柔、快活の

點に於ても又私共の模範にして、主の御生涯こそ實に真正なる禮讓の標本と云ふ可く何時も親切なる容貌と、慰安を與ふる言語とを以て惱める者、苦しめる者に接し給ひました。去れば主の臨在は、家庭に潔き雰圍氣を生ぜしめ、主の御生涯は社會の要素の中に活動する酵母の如く純潔無垢の主は辨へなき野人、不正直な税吏や、不義なサマリヤ人、神を知らざる異邦の軍人、さては無禮な農夫其他各種の群集の中に往來し、此處彼處に同情の言を漏らし給ひました。主は重荷を負はされ、苦しめる人を見給ふ時は、其重荷を分擔してやり、之に自ら自然界より學び給ひし教訓を教へ、神の慈愛と恩恵とを説明し、又最も粗暴にして最も見込なき様な者に對して神の子供として恥かしからぬ品性に到達し得べき事を保證し、之に希望を與へんと努力し給ひました。

抑もイエスの宗教は、如何に頑固で荒々しい人でも、角ばつた鋭い人でも之を和げ穩にし、其言語、行動を靜肅優雅に致します。去れば純潔、誠廉なる高貴の精神と、快活な性質とを如何に結合すべきかをキリストより學びたいものであります。



親切にして禮讓厚きクリスチャンは、人をして基督教に好意を表せしめ得る最も有力な議論であります、親切なる言語は人心に對する慈雨甘露であります。

『主エホバは教をうけしものに舌をわれにあたへ言をもて疲れたるものを扶支ふることを知得しめ給ふ』とはキリストに付いて記されたものであります。又主は私共に『時に従ひて人の徳を建べき善事をいひ聽者をして益あらしめん爲』『爾曹の言つねに恩を用ひよ』と命じ給ひました。

諸君の接觸する多の人の中には、粗暴倨傲のものもありませう。然しこれが爲にこちらでも謙讓を缺く様な事があつてはなりません。苟くも自尊心ある者は又猥りに他人の自重を傷けぬ様に注意せねばなりません。殊に最も痴鈍の者に對し、此規則を神聖視し、之を嚴守すべく神は此等見込なく見ゆる者に對し、如何なる希望を囑し給ふかは人には判りません。

神が過去に於て一向役に立ちそうにもない人物を召して御用の器となし給ひし實例は、決して乏しくありません。神の靈が一度人の心に臨む時には、全身の官能が

悉く活躍します。神は此等の荒石を磨き、風雨寒暑にびくともせぬ様に鍊<sup>きた</sup>へ上げ給ひます、神は人の見る如くに人を見給はず、又人の外見によりて判断を下し給ふ事なく、心<sup>こころ</sup>を探り給ふが故、其判断に誤りはありません。

※ ※ ※ ※ ※ ※

主イエスは私共が凡の人の權利を認める事を要求し給ひます、人の社交上の權利及クリスチャンとしての權利を斟酌し、凡の人を神の息子、息女として尊重し、之を遇すべき筈のものであります。

基督教は人を紳士と致します、キリストは己を迫害する者に對しても禮讓を失ひ給ひませんでした、然れば主の僕たる者も主と同じ精神を顯はすべき筈であります幾多の王侯の前に引出だされしパウロを御覽なさい、アグリツバ王の前に於ける彼の演説の如きは、對手を説伏し得る雄辯と同時に、厚き禮讓の好實例であります、勿論福音は世俗的の追従輕薄を獎勵するものでありませんが、心中に宿る真正の慈

愛より湧出する禮儀を鼓吹するものであります。

又如何に外形の禮儀に最上の注意を拂ふても、夫れ丈では決して凡の不平、酷評及不都合なる言語を抑制する力はありません、自己てふ者が最大の目的となつて居る限は、眞正の禮法は決して顯れるものでありません、愛は心の底に潜むべきものにして、徹底したるクリスチャンは、其主に對する深き心の愛より其一切の行動をなすものであります。此キリストに對する敬愛の念に根ざして、同胞に對する無我の興味が喚起するものにして、愛は其所有者に優雅、禮讓、端正等の美德を賦與し且つ其容貌に光輝を與へ、其音聲を和げ、其人爲（ひとゝなり）を全く優美高尚に致します。

1 彼得前書三章八・九節

2 以賽亞書五十五章四節

3 以弗所書四章廿九節、哥羅西書四章六節



## 教役者の舉止動作

『エホバの器うつわになふ者ものよ、なんぢら潔きよくあれ』<sup>1</sup>とは神聖なる事業に關係かはる人々に對して下された嚴肅なる命令であります。

神より特に重大な任務を負はされた光榮を有する者は、一層其言行に注意周到たるべく、信仰篤く其正義、純潔の行爲、誠實の言語により同胞を向上せしめ、世の浮薄なる誘惑により心を動さるゝ事なく、堅忍不拔の精神を有し、人をキリストの救に導を以て最高の目的とする人でなければなりません。

サタンは教役者を陥んと特別の誘惑を仕向けます、サタンは教役者も人間である以上は自ら何等の美德と純潔も有せず、福音の寶が土の器に藏められたもので、神の力のみ能く之を貴き用に供し得るものである事と神は教役者を用ひて人を救ふ有力な機關となし給ひしが故教役者にして神意に服従して活動すれば、必ず成功する

事をも知つて居ります。又教役者が罪を犯せば他の人に比して一層罪深くなる事を知つて居りますから、極力之を誘惑して罪に陥らせ様と致します。

神より傳道事業に召されし人々は、須らく聖職を奉ずるに適せる證據を示さねばなりません、神は『爾曹を召給ふ聖者に效ひて凡の行を潔くすべし』と命じ給ひました。又パウロも左の如く書贈りました。『言と行と愛と信と潔を以て信者の模範となるべし……なんぢ己を慎み亦教ることを慎むべし恒に此等の事を務めよ如此おこなふ時は己を救ひ亦なんぢに聽者を救はん』『萬物の末期邇けり是故に慎みて自ら制する事を爲して祈禱すべし』<sup>4</sup>

私共は品行方正に純潔な生涯を送る爲に、多大の注意を拂ひ、此姦惡なる時代の罪に感染せざる様警戒し、苟くもキリストの全權大使としあるものが、既婚、未婚を問はず婦人に狎れ冗談等言ふ様な事があつてはなりません。

又教役者は相當の威嚴を保ち、自重せねばなりません、とは云へ同時に凡の人に親切に禮儀を以て親しむ事が出來ます、而かも餘り狎々し過ぎて禮讓を缺いてはな

りません。此は神の憎み給ふ行爲にして此を犯す事は甚だ危険でありますから、凡の言語、凡の行動をして人を向上高貴ならしむる様努めねばなりません。斯かる不注意なることは實際罪であります。

パウロはテモテに純潔卓越せる事物に心を寄せ、専ら之を務め、自己が上達、すべての人に明ならしめん事を勧告しましたが、此忠告は、今日大に要する所のものであります。

私（ホワイト夫人）は、我教役者諸君に、凡の思想と行爲に、純潔を要する事を切に勧告せざるを得ません、私共は神に對して個人的の責任と、他人に代理を頼む事の出来ない個人的の仕事即ち世界を改善する働を持つて居ります、されば私共は社交的精神を養ふ可きでありますが、單に娛樂の爲でなく、更に高尚な目的に之を爲さねばなりません。

私共の周圍に起つて居る事柄は、此注意の必要を示すに充分ではありませんまいか  
到る處に墮落した人や、家庭の神聖は無視せられ、其團練は破壊され、主義を棄て



道德の標準を低くする事は、實に驚く許りにして、全地の趨勢は、日に／＼ソドム化しつゝあります。

ノアの時の民に神の刑罰を招き、ソドムを火を以て全滅せしめし罪惡は、益々増加し、地上が火により潔めらる可き終末の日は愈々切迫して参りました。

されば神より眞理と光を照すべき委任を受けた人々は、一切の罪惡より絶縁し、正義の途を歩み、少しでも神の働を傷け、其神聖を汚す恐のある凡の慾情と習慣とに打勝たねばなりません。

己が前途に横はれる誘惑に拮抗し、精神を低き標準に置かしめんとする一切の傾向を打破するは教役者の任務にして、目を醒し祈禱する事により、己が最弱點を變じて、最強點とする事が出来ます、即ちキリストの恩恵により人は道德的本質、意思の力及鞏固なる目的を有する事が出来るのであります、此神の恩恵には、實に人をしてサタンの巧妙なる誘惑を退け、忠實熱誠のクリスチャンと成らしむる力があります。

## 教役者は價值ある模範を示せ

教役者たるものは、須らく己が聖き召に相應はしき價值ある模範を示し、青年輩を導き、彼等をして胸襟を披き、人と交るも、謹嚴の態度を保ち得る様に之を助けてやらねばなりません、彼等の日々蒔いて居る種は、やがて生へ出で果を結ばざるを得ません、故に教役者たるものは、我は人を教育する者である事と、己が言行は接觸する人々に、或は生命の香となり、或は死の香となる事を記憶し、凡の卑猥、凡の痴戲を棄てなければなりません。

精神を訓練し、思想を純潔にする事は、頗る大切にして、高潔なる道德は正しき思想と、正しき行爲によるものであります。思想を正當に統御すれば、主の爲に調和的に働く事の出来る準備をしますが、惡しき思想は人を破滅に導くものでありますから、一切の思想はキリストに降服せねばなりません。

又眞理を教へる人は、其言行に注意深き、賢い人にして、時に及び神の民に糧を

與へ、僅なりとも人生の標準を下げる事に同意せず、愛によりて働く信仰を有し、凡の肉に屬する思想と、欲望より潔められた人でなければなりません、斯う云ふ品性の人なら決して地上の事物に眷戀けんれんする事なく、随つて人の束縛を受けたり、サタンの誘惑に陥る様な事なく振舞ひ、其顔を義の太陽なるキリストに向け、靈的及道德的の汚穢より、全く脱却する事が出来ます。

聖書の教訓を主義とする者は、其道德力は決して弱き事なく、聖靈の恩化の下に其趣味も嗜好も高潔となります、世の基督の宗教の如く、慈愛の念を強らしめ、動機の奥底に觸れ、人生に偉大の感化を及ぼし、堅忍不拔の品性を與ふるものはありません。基督教は之を信する者を常に向上せしめ、高貴の目的を抱かしめ、禮節を教へ、威あつて猛たけからざる人物とならしめます。

青年は如何にして其惡癖を抑制し、高潔なる品性を發達せしむる事が出来ましや



うか、左の聖句に注意なさい。『爾等食ふにも飲むにも何事を行ふにも、凡て神の榮を顯はすやうに行ふべし』。是れ實に凡の動機、思想及行爲の基礎的原則にして、苟くも潔からざる慾望は一切之を十字架に釘けねばなりません、神は心の中に高潔な目的と希望とを植付け給ひしが故、不潔の慾望を逞ふせんとするも、最早出来ぬ様になります。

私共の墮落するのは理性と良心の統御に従ふ事を拒む時であります、使徒パウロは『我は我に力を與ふるキリストに因りて諸の事を爲得るなり』と申しました。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

若しキリストに密接し、秩序ある生涯と敬虔なる談話を以て、己が信仰告白と一致せしめんと計るなら、滅多に神の禁じ給ひし途に足を踏込むものではありません。若し斷えず警醒祈禱し、實際神の直ぐ御前にある如くに感じ、凡の事をなすなら、誘惑に陥る事もなく終迄、汚なく垢なく保たるべき望を抱く事が出来ます。若

し最初の確信を翻へす事なく終迄之を保つなら、其爲す所は神にありて鞏固になり終に聖國に榮光の冠を受くるに至ります。

『靈の結ぶ所の果は仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節かくの如き類を禁ずる律法はある事なし、夫キリストに屬する者は肉と其情及慾とを十字架に釘けたり。』

- 1 以賽亞書五十二章十一節
- 2 彼得前書一章十五節
- 3 提摩太前書四章十二・十六節
- 4 彼得前書四章七節
- 5 哥林多前書十章三十一節
- 6 腓立比書四章十三節
- 7 加拉太書五章廿二・廿四節

## 社 交 的 關 係

既婚未婚を問はず青年教役者は、屢々若い婦人から親したしまれ、其感化力を破壊される事があります、かゝる婦人は人目がある事を悟らず、其爲す事が教役者の勢力を傷きづけるものである事に氣が付かないのであります。若し婦人等が嚴格に禮節の法則を守るならば當人等の爲にも、教役者の爲にもどんなに善いか分わかりません、然るに此點を誤る爲、教役者は飛んでもない誤解を受け、非常に迷惑致します、然し教役者自身にも責任があります、若しかゝる婦人の行爲に對し、嫌惡の情を示めし、神の思召し給ふ道みちに歩みさへすれば、永くは煩はされるものではありません、教役者は一切惡の類に遠かり、若し若い婦人などが餘り親しくして來たら、其非を示す事は教役者の義務にして、假令無禮の様に思はれても、神の事業を汚さざらしめんが爲には、其無遠慮を掣肘しなければなりません。而して實際眞理を受入れ、神を



信じて居る婦人なら、其訓戒に聽従ひ、行を改めます。

冗談や世俗的の會話は、此世に屬するものにして、胸中に神より賜はりし平和を有するクリスチャンは、輕々しい戲談などに耽らなくとも、喜ぶ事も楽しむ事も出來、目を醒<sup>さま</sup>し、且つ祈ると同時に、胸中何等のわだかまりなく、眞の平安を得、世俗に超然たる事が出來ます、教役者の胸中若し敬虔の奧義を藏むる時には、地上の肉的快乐等に心を奪はるゝ事なく、此世の腐敗より脱却し、神の品性を享有する事が出來ます。

教役者と神との間の交通の道が開かれて居れば、神の聖旨を豊に識<sup>し</sup>り、實際問題に關する智識の寶庫は開かれ、之を紹介する事により、人心を嚴肅ならしめ、以て神が彼等の愛情と生命の上に置き給ひし神聖なる要求に對し、道德的感覚を鋭敏ならしめます、苟<sup>いさし</sup>くも神の道の爲に働く者は、心身共に潔き神の人であらねばなりま

せん。(教會の證第三卷二四一頁)

神の働に従事せんとする青年にして、其事業の神聖と責任とに關し、殆んど何等の感覺を有<sup>も</sup>たぬ者が現れつゝあります、彼等は信仰を働かせ、饑渴くが如く神の靈を慕ふが如き經驗は、殆んど有せず、力量もあり、随つて重要な地位を占めて居る人の中にも、其精神を辨へざるものがあります、彼等は八方美人主義にして、殆んど日毎嚴肅なる眞理を聽き、心を刺戟され居るに拘らず、下<sup>くだ</sup>らぬ話をしたり、若い娘など、戯れたり致します、斯る輩は頭に宗教を有するのみにして、其心は毫も眞理によりて潔められて居りません、斯の如き人は、自ら活ける泉の水を飲むに非らざる以上は、決して人をキリストに導く事は出来ません。

今は輕佻浮華な事に心を寄せる時でありません、世の終末は益々切迫せる此際、放縱に慣れた精神は、之を引き締めねばなりません。

使徒ペテロは申しました「爾曹心の腰に帶して慎みイエスキリストの顯れ給ふ時なんぢらに來らんとする恩恵を疑はずして望むべし、なんぢ孝子なるに因りて從前の蒙昧時の慾に效ふことなく爾曹を召給ふ聖者に效ひて凡の行を潔くすべし、そは録して我潔ければ爾曹も潔くすべしと有ばなり」<sup>1</sup>

散逸せる思想は之を統一し、神に集中し、衷心から神の旨に服従せねばなりません。それ人は滅多に其長所等を稱賛し又はこれを期待すべきものでありません、是は其人々の自慢心と、腐敗とを助長する懼があります。然し神の働に携つて居る事を感じ、實際に其資格を有する人は、働の如何に神聖であるかを、深く心に銘じます、今は肉情に打勝つ可き最も熱烈なる努力を要するの時であります。』

(教會の證第三卷四七三・四七四頁)

世を警告する嚴肅な使命を帶ぶる教役者が知己又は信仰の友より響應でも受けた



時、牧者としての義務を怠り、言行を謹まず、年若き人々と共に下らぬ冗談や駄洒落を言つたり、滑稽な話として人を笑はせ、打興する者は、福音宣傳者としての資格なき者にして、先づかゝる心を改むるに非らざれば、羊や羔を牧する重任を委ねる事は出来ません。苟しくも忠實なる牧者として果すべき責務を等閑にする者は、彼等が人に傳へて居る眞理によりて潔められて居ない證據にして、教役者の働が如何に神聖なものであるかを深く自覺する迄は、主の葡萄園で働かして置く事の出来ないものであります。(教會の證第三卷二三三頁)

教役者は、祈禱の人、敬虔の人にして、快活なるも決して粗暴に渉らず、冗談なごをせぬ人でなければなりません、輕浮の言行は、藝人風情の者には適當であるかも知れませんが、生ける者と死せる者との間に立ち、神に代りて聖言を傳ふる者の威嚴を損する事は夥おびただしいものであります。

キリストの福音を宣傳する教役者の心に啓發された敬虔の奥義は、彼をして地に屬ける淫蕩的の娛樂より超然たらしめ、且つ神の品性を享有し、肉慾より生ずる世俗の腐敗より免かれしめます。而して神と彼の心靈との間の交通は、益々彼をして神に關する知識を深からしめ、實際的問題の寶庫を彼の前に開くが故、其説く所は自ら人の思想を嚴肅ならしめ、神が人生の上に課し給ふ神聖なる要求に對する道德的知覺を惹起せしめ、随つて輕跳浮薄の念を除去します。苟しくも神の言を傳へ教をなす者は、須らく神の人たるべく其思想も其行爲も潔きよくなければなりなせん。

1 彼得前書一章十三―十六節

## 決 斷 と 正 確

今は獨立不羈の精神に富み熱誠奮闘的人物が必用であります、無定見にして進取の氣象なき人は何の益にも立ちません、單に充<sup>まて</sup>はれた仕事丈を爲し、一定の働と一定の給料を希望し、同化若しくは修養の勞を取らずして、適任者たらん事を冀ふ者は、神が其御事業に召し給ふ處の人でありません。若し必要に迫られた時に、如何なる仕事にも當り得ざる人は、現時代に必要な人物ではありません。神は優柔不斷にして意思、道德の鞏固でない人を其御事業に用ひ給ひません……。

世には若し異なる境遇に置かれさへすれば、立派な善事を爲し得べしと自負し乍ら、天與の地位にありて、其既<sup>すで</sup>に有する力量を毫も用ひない人々があります……獨立不羈の能力は、現今の必要なる資格であります、決して個人性を沒却するには及びませんが、之を調節、練磨し向上せしめねばなりません。



神の事業には機<sup>き</sup>を洞察するに敏にして、時を誤らず且つ全力を盡して直ちに活動し得る人が必要であります。もし凡の困難、障碍を顧慮し、之が爲め躊躇するものは、決して大事を爲す事は出来ません、諸君は到る處にて各種の困難に遇ひ奮闘せねばなりませんから、是非共鞏固なる決心を以て之に打勝たん事を期せねばなりません。さも無いと困難は諸君に打勝ちます。

又神の御事業に關し其目的や方法が種々あつて、孰<sup>たゞ</sup>れが正當であるか見當の付き兼ねる場合が起りますが、斯かる時こそ最も緻密なる識別力を要します、又苟<sup>い</sup>くも目的を立て遂行せんとするならば、決して機會を逸してはなりません、爲すべき事か、爲す可らざる事か、其細密の點を察し、若し爲すべしと定めたら、直ぐ取り懸らねばなりません、躊躇して長引く事は、天使を倦怠せしめます。

時には何時迄も愚<sup>ぐ</sup>圖<sup>づ</sup>々々する事より誤れる決斷をした方が恕す可き事さへあります。躊躇すると、今日は此方針を取るかと思へば、明日は他の方針に違へるので、一向其目的が定まりません、斯く狐疑逡巡する事より起る困難不幸は、性急に事を

やり過して生ずるそれよりも多い事があります。

私は僅々數分時間の遣方次第<sup>やりかた</sup>で最も目覺しい勝利を得るか、最も見苦しい失敗を招くかになる事を示されました。神は敏活を要求し給ひます、延引、疑惑、躊躇及不決斷は、屢々敵に有利の機會を與ふるものであります。

時機に適した遣方<sup>やりかた</sup>は、眞理宣傳の上に大なる利益を與ふるものであります、折角得らるべき勝利も、躊躇逡巡した爲失ふ例は少くありません、時々神の働は危機に遭遇するに相違ありません、而して時機を逸せざる敏活にして決斷的の行動は、榮光ある勝利を得れども躊躇怠慢は大失敗を惹起し神の御名を汚<sup>け</sup>がす事が夥<sup>おびただ</sup>しい、大切な瞬間に迅速な運動をする事は、屢々敵の武裝を解<sup>と</sup>かしめます。是れ敵が何等策を施す暇のない中に乗ずるから失意し、敗走するの外ないのであります。

危難の時に最も大切な事は、極度の敏活であります、勿論然る可き結果を見んと慾せば、用意周到の準備は必要であります、然し之を實施するに少しの手遅<sup>ておくれ</sup>があつた爲め、全然計畫が齟齬<sup>そご</sup>して仕舞ふ事が度々あります、當然手に入れる事の出來た

筈の事柄が、先見と機敏が缺<sup>か</sup>けて居った爲、失つて仕舞ふのであります。

然れば此優柔不斷の惡癖を矯正する爲に多大の功績を擧ぐる事が出來ます、勿論注意を加へ熟考を要すべき時があります、然しさう云ふ場合ですら餘り躊躇し過ぎると損失を招きます、或る點迄の用心は必要でありますが、特別の場合に躊躇し考へ込む事は急激にやつて仕損ずるより、更に大なる損害を招いた事もありました

(教會の證第三卷四九六―四九八頁)

\* \* \* \* \*

一時は己の我慾や安逸と奮闘して成功する人々があります、其人々は誠實にして熱心でありますが、日々己を十字架に釘け、絶えざる苦戰奮闘に、何時しか倦<sup>うみつか</sup>疲れ安逸がして見たくなり、克己が嫌になり、遂に隋氣漫々として眠氣ざし、誘惑を拒絶する力を失ひ、之に降服する様になつて仕舞ます。

神の聖言に基づく指導は、毫も罪惡と妥協する餘地を與へません、神の子キリスト



は凡の人を御自身に引付けん爲に顯はされました、主の臨り給ひしは、此世を眠に  
陥らす爲でなく、神の京城の門に到達せんとする者の是非共踏まねばならぬ穿き路  
を指示す爲でありました、苟くも神の子供たる者は主の導き給ふ聖足の跡に隨ひ、  
如何に自己の安逸や嗜慾の犠牲が大きくあつても、苦戰奮闘の價が如何に高くとも、  
常に自我に對する戰爭を繼續して止める様な事があつてはなりません。

## 果實採收夢物語

千八百八十六年九月二十九日、私に與へられた夢に、私は多の人々と共に木莓を探<sup>さ</sup>がして居るのを見ました、此果實採收に列らなつた一行中には、青年男女が澤山居りました。處は空地が少くありましたから、何んでも市中らしくありました、其周圍には廣々とした野や美しい森や耕地がありました、而して一行の辨當を載せた大な荷車が、私共の先に進みました。其中に車が停りましたが、一同果實を見付ける爲四方八方に散りました、車の近所一面に莓の樹があり、丈の高いのも低いのもありました、然るに皆之に氣付かず遠方へ探しに行きました、私は手近の果實を採收し始めましたが、熟したのと混つて居る不熟の果を採<sup>と</sup>らぬ様注意し、一房から一二顆しか集める事が出来ませんでした。

又大な美しい實が地上に墜ち、半は蟲に食はれて仕舞つたのがありました、之を

見て私は、『若し此處へもつと以前に來たなら一つ残らず此結構な果を失はずに濟んだに相違ないが、もう今となつては遅い、然し兎に角幾何か益いくらかに立つものがあるか探つて見やう、假令全然駄目であつても、兄弟たちに之を示めし、若しもつと早く來たなら、こんな立派な果を見出す事が出來た筈である事を示すには足る』と心中に思ひました。

其中に一行中の二三人が私の居た處へぶらぶらやつて來ましたが、連しきりに何か話し乍ら交際の事のみに耽つて居た様に見へました、彼等は私を見て『彼方此方に行つて見ましたが一向果實を見出す事が出來ません』と申しました、そして私が收めた果實の分量を見て驚きました、私は『まだ此木から集める事が出来る』と申しましたので、彼等は採集し始めました、間もなく止めて『此處は貴女が發見した場所で果實は皆貴女の屬もつですから、私共が集めるのは宜しくありません』と申しました。私は之に答へて『そんな事は構ひません、見付ける事が出来る處で集たら好いでせう茲は神の畠にして、此等の果實は神のものでありますから、之を採集するのは皆様



の特権であります』と申しました。

然し間もなく私は再び獨ひざりになつた様でありましたが、車の方で笑い聲が時々聞へましたので、私は其處に居る人に『貴君方は何をして居りますか』と問ひました、彼等は之に答へ『私共は一向莓を採收する事が出来ず、疲れて空腹になりましたから、車へ來て辨當でも使ひ、暫時休息した上で出直でなはさうと思ひます』と申しました。

私は其人々に對ひ、『然し貴君方は未だ何にも採收しないのに、私共に食物を與へずに皆んな食べて仕舞ふのでありますか、私は今食事する事は出来ません、まだ採收すべき果が澤山あります、貴君方は充分側によつて熟見よくみないから見出す事が出来ないのであります、果は木の外側にのみ下つて居ませんから、之を探がさなければなりません、勿論集める度毎に、手に一杯になる譯には行きますまいが、不熟の果の中を探がすと實に上等なのを見出す事が出来ます。』と申しました。

私の小さい手桶は間もなく莓で一杯になりましたから、之を車の所へ持つて行き

ました、一同は之を見て『此は丈の高い莓の木の実で誠に結構です、私共は丈の高い木には逆さかもなからうと思ひ、丈の低い木の方許り探した爲、ホンの少許り集めたに過ぎませんでした』と申しました。

其時私は、『貴方等は此莓をちやんと始末し、其から私と一處に高い木にもつと果を探しに行きませんか』と申しましたが彼等は果實を整理する何等の準備もありませんでした、皿や袋は澤山ありましたが、其れは食物を入れる爲に用ひられて居りました。私は遅緩もろかしく感じ、終に『皆さんは茲に果實を採集する爲に來たのではありませんか、何故之を整理する準備がありませんか』と申しました。

さうすると一人の者は答へて『ホワイト姉よ私共は斯様な人家稠密な場所に果實を見出さうとは實際思ひませんでした、貴姉は是非とも行きたい御望の様に見受けましたから、御一緒に参つた譯であります、それで充分食物を携帯し、ヨシ果實は少しも集められなくても遊山ゆざんをしようと思ひました』と。

私は『さうですか、其は思ひも寄らぬ御話です、私は直ぐ再び採集に参ります、

もう餘程日も長<sup>た</sup>けて間もなく晩になります、さすれば最早採集は出来ません』と答へました。其時私と一緒に往つた人もありました。が他の人々は車の傍を離れず食<sup>た</sup>べて居りました。

或場所へ行きますと、數名の人々が集つて居り、何か非常に興味を以て話し合つて居りました、何事かと近づいて見ると、一人の婦人の腕に抱かれて居る小兒が、一同の注意を惹いて居た事を見出しました、私は其人々に向ひ『モ一時間は幾何もありません、働ける時に働いた方がよいではありませんか』と注意致しました。又多の人は若い男女二人が、彼の車を目標に競走するのに注意を惹かされて居りましたが、向ふへ到着すると非常に疲れ、坐して休みました、又或は草の上に身を横へ休んだものもありました。

斯くて其日も是と云ふ働を見ず、空費されました、私は終に左の如く申しました。

『兄弟よ諸君は此を不成功の遠征であると思はれますが、斯かる働方であると思はれば、成功を見ないのは怪<sup>あや</sup>しむに足りません、諸君の成功も失敗も一に仕事の遣り



方によりて定<sup>きま</sup>ります、茲に莓はあります私は之を見出しましから無いとは言へません。諸君の中或者は低い莓の木に實を求めたが何物をも得ず又或者は極僅か見出したに過ぎませんでした。然るに丈<sup>たけ</sup>の高い莓の木は諸君が到底果が無からうと斷定した爲に之を見過にして仕舞ひました。見らるゝ通り私の集めた果は大きくして且つ熟して居ます。間もなく他の莓も熟しましやうから再び採集に出懸る事が出来ます。是は私が學んだ果實採收法であります。もし諸君が車の近所を採<sup>さ</sup>がしたなら私と同様に果を發見する事が出来た筈であります。

諸君の得た此教訓は此種の働を如何になす可きかを學ばんとする人々により模倣されます。神は此等果の成つて居る樹を人家稠密の場所に置き諸君の其を採收せん事を期待し給ひます。然るに諸君は食ふ事、打興する事に熱中し、果實を見出す爲に一向努力しませんでした。

諸君は今後今迄の様な考を全く棄て、もつと熱心に働かねばなりません、さなくば、諸君の働は決して成功致しません、働き人に對し、食べたり遊んだりする様な

事は、重大な問題でない事を教へます、食物を載せた車を目的地に牽いて行くには中々骨が折れましたが、諸君は、諸君の働の結果として、家に持歸るべき果實の事よりも、食物の事の方に重を置きました、諸君は最初一番手近の所より熱心に果實を採收し、後遠方に及ぼし、其が濟んだら、又近い所を働けば成功した筈であります。

## 奉仕に缺く可らざるもの

同

情

神は同情と潔き愛を以て、神の働人を結合せん事を希望し給ひます。信者をして生命に到る生命の香<sup>かほり</sup>たらしめ、神より其努力に對する祝福を受くるに足るものとならしむるものは、彼の胸中に充滿するキリストの如き愛の雰圍氣であります。

基督の宗教は、同胞間に決して離隔の障壁を造るものでなく、人類を神と相互に結合せしむるものであります。主が如何に優しく、且つ慈悲深、人類を遇し給ふかを考へて御覽なさい。主は誤れる子を愛し歸へれと求め給ひます、實に天父の腕は、其悔改めた子を抱き、天父の衣は彼の襤褸を覆ひ、歸參の叶つた印として、指環は彼の指に嵌<sup>は</sup>められました。然るに此放蕩兒を見て、單に無頓着な許りでなく、



之を侮蔑する者は、實に多く、彼のパリサイ人の如く、「我は他の人の如くに有ざるを謝す』<sup>1</sup>と申します。然しキリストと偕に働くを稱し、滔々たる誘惑の力と奮闘しつゝあるに拘らず、彼の譬話の兄の如く一片愛の精神なく、頑迷なるものを、神は如何に憐<sup>みそな</sup>はし給ふか考へて御覽なさい。



私共は、私共とキリストの間を最も強く結合すべき點、即ち愆と罪に死んだる可憐の苦しめる靈魂に對する同情に於て、キリストと共鳴する事が實に少くあります人間が其同胞に對する無情は私共の最大の罪であります。

多の人は神の憐憫と大なる愛を、全然代表しないのに、神の正義を代表すると考へて居ります。斯の如き人が、峻嚴冷酷を以て臨む對手<sup>あいて</sup>の人々は、其時試練に苦んで居る場合が屢々あります、惡魔に散々悩まされて居る矢先に、鋭く情ない言を浴<sup>あび</sup>せ掛けられ、大に失望し、終にサタンの捕虜になつて仕舞ふ事があります。……

私共は、キリストの如き同情を一層要します、單に私共の眼に缺點なく、見ゆる人に對する許でなく、屢々過に陥り、罪を犯しては悔いたり、誘惑を受け落膽して苦戰惡闘して居る氣の毒な人に、同情を寄せねばなりません、『われらが荏弱を體恤』り給ふ祭司長の如き同情を以て、同胞に接せねばなりません。

(ミニストリーオブヒーリング一六三・一六四頁)

廉

潔

如何なる事に遇ふとも、辟易せず又飽迄も廉潔にして、正義の爲に叫ぶ事を憚らざる人が現時代に必要であります、私は左の如く云ひ度いと思ひます。諸君の取扱ふ一切の事務に於て、この場合にも廉潔を特徴としなさい。什一献金を始め、特別の目的の爲に貴君に託されたる一切の金錢は、必ず規帳面に其屬すべき所に之を納め、決して後で辨償するからと一時私用の爲之を融通してはなりません。是は飛んでもない曲事にして、サタン即惡のみを行ふ者より出づる誘惑であります。神の事

業の爲に寄附を受取つた教役者は、必ず之に對し日附して然る可き領收證を寄附者に交付せねばなりません。而して萬一使ひ込む様な誘惑でも受けぬ中に、然る可き處に保管し、必要の場合に之を出せる様にして置かねばなりません。

### キリストとの結合

大牧者キリストと結合する事により、其下に働く牧者なる神の僕は、世の光なるキリストの活ける代表者となる事が出来ます。私共の信仰の總の點に精通しなければなりません、其よりも尙大切な事は、教役者が自分の代表して居る眞理により潔められて居る事であります。

キリストとの結合の意味を知る働人は、神に對する奉仕の意義を了解せんと欲する願望と、才能が絶えず増して來ます。而して恩恵に成長すると云ふ事は、聖書の理解力の發達を意味しますから、其人の知識は富んで來ます、斯の如き人こそ、實に神と偕に働く者と云ふ事が出來ます、彼は、自身は主の聖旨の儘に用ひられる一



個の器に過ぎない事を認めます。種々試練は彼に臨みませう、さもなくば自分の知識や経験の缺乏を發見する事が出来ません、とは云へ、謙遜りてエホバを求むる時には、一切の試練は皆働きて益をなします、時としては、失敗したかの如く見える場合もありませう、然し此さへ神が彼をして眞正の進歩をなさしめんとて與へたまひし攝理にして、此が爲一層明に己を知り、一層固く天に依頼する手段となるかも知れません。彼は尙も過に陷る事もありませう、然し其過を再せぬ事を學び、惡に對する抵抗力が、益々強くなり、随つて他人が彼の模範により利益を收むるに至ります。

謙

遜

神の爲に働く者は、飽迄も謙遜でなければなりません、神の事に關し、最も深い経験を有する人は、傲慢と自尊より最も遠く離れた人であり、斯かる人は、神の榮の偉大なる事を認めて居りますから、如何に卑き地位にあつても、苟くも神の

御用をする事は、冥加の至りであると感じます。モーセは四十日間親して神に見へた後下山しましたが、其顔は榮光を以て輝き、之を見る者をして畏れしめましたが自分では毫も之を知りませんでした。

パウロは基督者の生活に於ける彼の進歩に付て、自分では毫も自負自慢する事なく、罪人の中我は首なりと稱し、又『我これらの望を既に得たりと言ふに非らず、亦既に全せられたりと云ふに非らず』と告白しました。然るにパウロは、主より甚しく崇められた人でありました。

キリストはヨハネを指して、預言者の中の最大者であると仰せになつた位の大人物でありましたが、或人が彼に汝はキリストであるかと問うた時、ヨハネは之に答へ、我は主の靴の紐を解にも足らぬ者であると申しました。又彼の弟子が来て、凡の人の注意が新しき教師即ちキリストに轉じて行くに咄いた時、ヨハネは弟子に向ひ我は其キリストの先驅者に過ぎぬと説明しました。

斯の如き精神を有する働人を今要します、自分で一廉の人物の様に成濟して居る

者は、神の働より除いて、少しも差支ありません、我等の主の要し給ふ働人は、自身キリストの贖の血の必要を感じ、毫も自負自慢の念を抱く事なく、救霊事業の知識を得るには、常にキリストの助を要する事を認め、篤き信仰を以て働に従事する人であります。

## 熱

## 心

今は一層大なる熱心を要します、光陰は矢の如く過ぎ去ります、さればキリストが働き給ひし如くの働く事を肯ずる人<sup>がへん</sup>が入用であります。静かな祈禱多き生活を送るのでは充分ありません。默想のみでは決して世の需要を満足させる事は出来ません、元來宗教は人生に、主觀的の感化のみを與ふる可きものでなく、私共は、他人に眞理を宣傳せんとする希望を以て充たされた覺醒せる奮闘的な熱心なクリスチヤンでなければなりません。

世人はキリストを信する事に依り、救はれると云ふ事を聞かねばなりませんから



熱心忠實なる努力により使命を宣傳すべき筈であります。私共は人を救に導く爲に働かねばなりません。熱烈なる祈禱を捧げ祈る可く、生命なく、氣力なき祈禱は、變じて眞心籠めた燃ゆるが如き歎願とならねばなりません。

堅

實

神を信ずると告白する者の多の品性は兎角に不充分で、偏頗であります。畢竟是等の人々は、キリストの學校に於ける生徒として、其學科を甚だ不完全に學んだ事を示します、或人はキリストの柔和を學びましたが、主が善を爲すに熱心であつた模範に従ひません。又或人は熱烈に活動しますが、自負心強くして、毫も謙遜と云ふ事を學びません、甚しきに至つては、キリスト拔<sup>ぬき</sup>の働をして居るものさへあります。彼等の態度は善いかも知れませんが、又同胞に對して同情を寄せませう。

然し彼等の心はキリストを中心として居りません、彼等は未だ天の言語を學びません。又キリストが祈つた様に祈らず、靈魂に對する評價がキリストと同じであります。

ません。随つて人を救に導かんが爲に勞苦、奮闘に耐へません。又或者はキリストの救の力を多少知つては居ても、自己中心にして、他人に對し兎角冷酷であります又或者に何等の定見なく、徒に人の歡心を買はん爲、あちらに傾いたり、こちらに動いたりします。

又眞理を宣傳するに如何に熱心であつても、其人の日常生活が潔められて居ない爲、眞理の證となつて居なければ、其説く所は一向効力がありません。自家撞着の行動は教役者の心意を頑にして、且つ狹め、接觸する人々に蹟を與ます。

## 日 常 生 活

教役者は、衣食住に關し、不必要な憂慮に捉はるゝ事なく、全然聖き召に献身せねばなりません。且つ多く祈り、神の訓練に己が身を鍛へ上げ、自制の實を擧げねばなりません。用語の如きも正確を期し、野卑、粗雜な言辭を弄したりしてはなりません。又衣服の如きも聖職の性質と調和するものたるべく、教役者も教師も須ら

く聖書に示された標準に到達せん事を期せねばなりません。兎角に小事は重要視しない傾に陥り易いものではありますが、決して之を等閑に付してはなりません。僅な事を杜漏にした結果、重大な責任を怠たる事になる例はいくらもあります。

※

※

※

※

※

※

主の葡萄園に働く者は、自分等の奨励となる美事の實際を各時代に亘り之を求むる事が出来ます。尙彼等は神の愛、天使の奉仕、イエスの同情及び人を正道に導く希望を有します。『穎悟者は空の光輝のごとくに輝かん、又衆多の人を義に導ける者は星の如くなりて永遠に到らん。』<sup>3</sup>

1 路加傳十八章十一節

2 腓立比書三章十二節

3 但以理書十二章三節



## 講壇の人としての教役者

『この職を誇らるゝこと無からん爲に、何事にも人を躓かせじ。』

『汝道を宣傳ふべし』

『われ、神の前および、顯るゝ時、其國に於て、生る者死る者を審判する、キリスト・イエスの前にて爾に求む。汝道を宣傳ふべし。時を得るも得ざるも、勵みて之を務め、各様の忍耐と教誨を以て、人を督し、戒め勸むべし。』<sup>1</sup>

キリストの福音を宣傳する教役者の義務は、以上の直截的にして力ある聖句により明白であります。教役者の宣傳ふ可きものは、『道』即ち神の言にして、決して人間の編出した空論や傳説でなく、耳を喜ばせ感興をそゝる物語や寓言ではありません。

せん。勿論自分を崇めてはなりません、神の聖前にありて、滅び行く世の前に立ち、神の言を宣傳し、聖書を説明するに當り、苟しくも輕々しき態度を示したり、妄<sup>みだり</sup>なる解釋を試むるが如き事なく、神よりの言として熱誠を以て語り、之を聽く者をして、彼等の現在及永遠の幸福に關する大問題を悟らせねばなりません。

我教役者諸君よ！ 諸君が聽衆の前に立つ時、決して漠然たる話をなす事なく、緊要にして教訓的な事を語り、生命を與ふる實際的の大眞理を紹介し、『贖<sup>あがなひ</sup>すなはち罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆるし</sup>』を與へ給ふイエスの救の力を教へ、聽衆をして眞理の力を悟らしめる様に努力なさい。

我教役者は、我團體の信仰の基礎は預言者の確<sup>かた</sup>き言である事を紹介し、但以理書及び默示録を精細に研究し、之と關聯して、『世<sup>よ</sup>の罪<sup>つみ</sup>を任<sup>お</sup>ふ神<sup>かみ</sup>の羔<sup>こひつこ</sup>を見よ』<sup>3</sup>てふ聖句の眞意を學ばねばなりません。

馬太傳二十四章は、凡の人の注意を惹起す可き大切な聖書的一部分として私に示された事は一再に止りません。御互に聖書の此章に録してある預言が續々成就しつ

ある時代に生存して居りますから、教役者たり教師たるものは、己が教を受ける人々に、能く此等の預言を説明し、彼等をして瑣々たる小問題の議論を止め、靈魂の運命を決する眞理に就かしめなさい。

今私共の生存して居る此時代は、決して油斷のならぬ時代にして、神の教役者は安息日問題に關する光を世に紹介し、キリストが權威と大なる榮光を以て再臨し給ふ日が切迫して居る事を説て、地の住民を警戒せねばなりません。世を警戒する最後の使命は、人をして神が如何に律法を重んじ給ふかを理解させ、極めて明白に眞理を紹介し、苟くも之を聽かされた人は、神の律法に服従する必要を認める事が出來ないと言譯し得ぬ様にせねばなりません。

私（ホワイト夫人）は、神が、第七日を潔め給うた事實を證明する聖句を蒐集し之を會衆の前に朗讀せよと言へと命ぜられました。されば眞理を聽かぬ凡の人に、『エホバ斯く宣給へり』てふ明白な事實を度外視する者は、必ず自己が取れる行爲の結果として苦しむべき事を示さねばなりません。いづれの時代にありても、安息



日は神に對する忠實の試金石と云ふ可く、神は『是は永久に我とイスラエルの子孫の徴たるなり。』と仰せになりました。

### 神聖な事柄に於ける政策

今や福音は到る處に反對を受けて居ります。實際今程惡の勢力が一致して強い事は、未だ曾て其例を見ず、惡の靈は人力と聯合して神の律法に對し戰つて居ります。斯くて人の言傳や虚偽の物語は、聖書よりも重んぜられ、理性と科學とは神の啓示よりも崇められ、人の力量は聖靈の教導よりも貴まれ、外形の儀式禮典は、敬虔の實力よりも稱せられて居ります。抑も人を神より遠からせしめたものは、各様の惡む可き罪であります。今や不信の潮流は、すさまじき勢を以て押寄せ、『我儕この人を王とする事を欲まず』とは、多の人の口より漏るゝ語となりました。斯かる際に當り、神に事ふる教役者は、喇叭の如くに其聲を擧げ、世人に其罪を示さねばなりません、普通ありふれた滑かな説教は、永續する印象を受くる事なく、神の言

の明白なる鋭き眞理が宣傳されませんから、毫も心を刺されません。

然るに眞理を信ずると告白する者の多は、實際の意味さへ顯はしさへすれば、何も明白に言ふ必要はなからう、バプテスマのヨハネはバリサイ人に對し、『蝮蛇まじしの裔すねよ、誰たが汝等なんぢらに來きたらんとする怒いかりより逃のがれんと警戒けいがいせしめしや』等と鋭く叱り付けなくも善いではないか、又ヘロデに對して、其兄弟の妻と同棲するの不法を直諫しヘロデアの怒を買はずとも濟すんだものを、彼は餘り直截に語つたが爲其首を失つた何とかヘロデアを怒らせずに、其非を責める事は出来なかつたであらうかと云ひます。

斯の如くにして、忠實に替ふるに政略を以てしても宜よいと論ずる人も出来、罪は毫も譴責されずに横行するに至りました。『汝なんぢは其人そのひとなり』との忠實なる譴責の聲が、今一度教會内に聞ゆるのは何時でありませうか、若し此語を屢々耳にする事が出来るなら、もつと神の力を見る事が出来る筈であります。神の使命宣傳者は、先づ人より稱賛せられんこの欲望を捨て、徒らに人の歡心を買ふの念を悔改め、神が

安しと宣給はざるに平安しと叫び、眞理を枉ぐる事を止めぬ以上は、自分等の働の不結果を歎じてはなりません。

苟しくも神に奉仕し、福音宣傳に従事する凡の者は、其働と召との神聖なる事を深く認識して居なければなりません。教役者は神より任命されし使命宣傳者として重大な責任ある地位に置かれたものにして、キリストに代り、天の奥義の家宰として働き、神に従ふ者を勵まし、従はざる者を戒めねばなりません。世俗的政界は教役者にとりて全然無用にして、イエスが歩めと命じ給ひし道以外に決して踏込んではありません。又見證人あかしびとに雲の如く圍まれて居る事を忘れず、信仰により前進し、自己の言を語らず、神即ち地上の如何なる權力あるものよりも更に大なる御方の聖言を語り、『エホバ斯く言ひ給ふ』とは彼等の使命でなければなりません。

神はナタンの如く、エリヤの如く、又ヨハネに如く、神の使命を傳ふるに當り何者をも恐れず、結果を考へず、直行邁進し、其有する一切を犠牲に供しても、神の召に應へ、眞理を傳ふる人を要し給ひます。



## 鋭き矢の如くに

キリストの聖言は鋭き矢の如くに、之を聽ける人々の心を射貫き給ひました。主が道を説き給ひし時は、聽衆の多數に拘らず、必ず誰かの心を動かし、之を救に導き、苟しくも主の聖口より漏れし使命は、立消になつて仕舞ふ様な事なく、一言一句之を聽ける者に對し、新しい責任を感ぜしめました。然れば、今日の教役者にして、若し誠實に末世の福音を傳へ、神より能力を仰ぎ、奮闘する人は、其働の空しくなる事を氣遣ふ必要はありません。真理の矢の道は、目には見えませんが、誰も其矢が標的に中り、聽ける人の心を射貫かなかつたと云ふ事は出來すまい。又斯かる人の叫は耳に聽えませんが、真理は靜かに其人の心を刺しました。斯く神は人の心に直接語り給ひしが故、忠實なる使命宣傳者は、幾多の贖はれし人々を伴ひて神の臺前に出で、キリストに榮を歸する事が出來ます。

聖靈を受けずして傳道を試みる事により、どれ丈の損失があるか、何人も之を語

る事は出来ません。大抵何れの集會にも、全然神に服従しやうと九分九厘迄決心して、尙躊躇して居る人があります。折角の決心が出来さうになつても、教役者が使命の精神と能力とを有たない爲、どうしやうかと思案して居る者に對し、適切なる勸言が出来ない場合が屢々あります。

此道德的暗黒時代に於ては、乾燥無味な、理論以上の或者でなければ、人の心を動かす事は出来ません。教役者たる者の是非有たねばならぬものは、神との活ける結合にして、自分の信ずる儘を説かねばなりません。神の人の口より迸ほとけしる活ける眞理は、罪人を戰慄せしめ、罪を認めし者をして、エホバは私の神であります、私は全然主に服従する決心を致しましたと、叫ぶに至らしめます。

神の使命宣傳者は、更に大なる光と力を求めんとする努力を決して止めてはなりません。努むるが上にも努め、祈るが上にも祈り、望むが上にも望み、失望と暗黒を排し、聖書に通曉し、賜を受け損ふ事なき様奮闘せねばなりません。一人で見込のある人が在る限り、新しき元氣を出して前進努力せねばなりません。イ

エスが『我<sup>われ</sup>汝<sup>なんぢ</sup>を去<sup>さ</sup>らず、更<sup>さら</sup>に汝<sup>なんぢ</sup>を棄<sup>す</sup>てじ』と仰<sup>おほ</sup>せ給<sup>たま</sup>ひし限は、又義の冠が勝利者に提供されてある以上は、又我等の仲保者なるキリストが、罪人の爲に執成して居給ふ限りは、主に事ふる教役者は、希望に満ち、疲を知らざる努力と、根氣強い信仰を以て働かなければなりません。

神の聖口より出でし聖言を世人に紹介する重任を負ふ者は、其傳ふる處を聽く人に及ぼす感化に對し責任があります。若し彼等が真正なる神の人であるなら、説教の目的は人を喜ばす爲でない事を知るに相違ありません。説教は單に聽衆に一種の知識を紹介する丈のものではありません。

神の言を説く事により知識を領つは當然でありますが、其以上の事を爲<sup>な</sup>さねばなりません。説教者の説所をして効果あらしめんと欲せば、聽者の肺肝に徹せん事を期し、面白い話など挿み、徒に人の耳を喜ばす事をせず、靈魂の大なる缺乏と欲求は何であるかを察するに努めねばなりません。教役者が會衆の前に立つ時は、聽衆中には、疑惑と奮闘し、殆んど落膽し、望を抛つに近い人や、斷<sup>た</sup>ずサタンの誘惑



に遭遇し、苦戦しつゝある者が居る事を記憶し、斯く悪者と力戦せる人々を強むべき語が與へらるゝ様、救主に求めねばなりません。

- 1 提摩太後書四章一・二節
- 2 哥羅西書一章十四節
- 3 約翰傳一章二十九節
- 4 出埃及記三十一章十七節
- 5 馬太傳三章七節
- 6 撒母耳後書十二章七節
- 7 希伯來書十三章五節

## 生命のパンを裂き頒與ふる事

我教役者より傳道されて居る者の多は、聖書の眞理と神の要求とを全く知らず、實行的信仰の最も單純な教訓すら、其人々にとりては新しき默示の如くに接します。斯かる人々には、眞理とは如何なるものであるかを能く理解せしめ、彼等の爲に働く教役者は、單に好奇心を唆る様な問題を捉へ來り傳道する事なく、此等の餓たる靈魂に、生命のパンを裂き與へねばなりません。聽者をして救はれん爲には何を爲すべきか、其事を一層明白にする助とならない説教は決して爲てはなりません。

多の人の要して居る所のものは、現在の試練や只緊急の要求に、時を移さず與へらるゝ助であります。教役者は想像に富む詩的な陳述をなし、思想を天外に馳せしめ、感興を唆る事が出来るかも知れませんが、然し日常の實際經驗に觸れなければ何の甲斐ありません。斯かる教役者は、其奇想を練つた雄辯で、神の羊群を養つた

と思つて居るかも知れませんが、又聴者の方でも、あんな美しき語を以て眞理を説いたのを聞いた事がないと、喜ぶかも知れませんが、斯かる説き方で一時恍惚として感情に打たれても、又或る眞理が紹介されたにしても、此種の説教は聴者をして人生日毎の奮闘に力を與へ、之を堅固にする事は出来ません。

雄辯を以て説教の最高の目的とする者は、聴者をして雄辯の方に氣を奪はれ、肝心の眞理を忘れしめます。感興が去つて仕舞ふと、折角の神の言は毫も聴者の心底に止らず、又何等の得る所がなかつた事を見出します。彼等或は教役者の能辯に賛辭を呈するかも知れませんが、イザ決心と云ふ點には一寸も近かず、恰も劇の筋にでも對する如くに、説教を批評し教役者を俳優取扱にします。彼等は重ねて此流義の説教を聴きに來るかも知れませんが、然し何等の印象を受けず、又毫も靈魂の糧を得ずして去る事でありませう。

要する所のものは、婉曲なる美辭でもなく、又無意味に語る喋々の辯でもありません。我教役者は、聴衆が自分達の死活問題に係はる眞理を握る助となる様に、道



を説かねばなりません。我兄弟よ！一般の人々の解し得ぬ様な事を説いてはなりません。よし解<sup>わか</sup>つたにせよ、決して其により益も得ず祝福も受けません。キリストの示し給ひし單純な教訓を傳へ、克己と犠牲の生涯、彼の謙遜と死、彼の復活と昇天、及び天の聖所に於て罪人の爲に執成を爲して居給ふ事をお告げなさい。

凡そこの集會にも、主の靈が働いて居る靈魂があるものですから、斯かる人々に眞理の何物たるかを理解し得る様に助け、生命のパンを裂<sup>さ</sup>き與へ、死活問題に彼等の注意を促しなさい。世には誤謬の擁護に聲を惜<sup>おし</sup>まず叫んで居る人が澤山あります。が、諸君の叫びは眞理の擁護でなければなりません。而して緑の牧場の如き問題を神の圈に在る羊群に示しなさい。諸君の話を聴かぬ以前に比して、一向活ける水の源に近いて居らぬ荒野に、諸君の聴衆を導いてはなりません。律法と福音の要求を明白にして、イエスの中にある通りの眞理を紹介し、又道であり、眞理であり、生命であるキリストを示し、凡て彼に來る者は之を救ひ給ふ主の聖力を語りなさい。我等の救の君は、彼の民の爲に執<sup>さ</sup>成して居給ひますが、父なる神の同情を得んとす

る哀願者としてではなく、彼の勝利の記念に對する要求權を有する凱旋者としてあります。主は實に彼に來る凡の者を全く救ひ得る御方なれば、此事實を最も明白にせねばなりません。

教役者は、注意して居ないと、兎角眞理を人間の裝飾の下に隠して仕舞ふ事がありますから、決して雄辯なる説教により人を悔改めさせ得ると思つてはなりません。苟しくも他人を教えんとする者は、聖靈に滿され、罪人の唯一の希望としてキリストを紹介し得る様神に懇請せねばなりません。華麗なる辭句や、面白い話や、不適當な物語は、決して人に罪を認めさせるものでありません。人は斯かる言を、恰も面白い歌でも聞く調子で聞くのであります。罪人が是非聞かねばならない使命は、『夫れ神は、其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり、此は凡て彼を信ずる者に、滅ぶる事なくして、永生を受しめんが爲なり。』<sup>1</sup>であります。人が福音を受入れる事は、立派な證言や雄辯な説教、深遠な議論によらず、福音の單純と飢渴く如く生命のパンを求むる者に對する其適合にあります。

抑も聖言の奉仕をして有効ならしむるものは、聖靈の力にして、キリストが教役者を通して語り給ふ時は、聖靈が其言を受入れる様に聴者の心に準備を與へ給ひます、元來聖靈は、僕に非らずして統御する力であります、眞理をして心に輝かしめ又教役者が、神の指導の下に全然服従する時の凡ての講話を通して語り給ひます。聖なる雰圍氣を以て心靈を圍繞し、未だ罪を悔改めざる者に警告を與へ、世の罪を<sup>お</sup>任ふキリストを指示するものは聖靈であります。

1 約翰傳三章十六節



## 基督を宣べ傳へよ

我教役者の説教は律法と云ふ事に重きを措き、イエスの事を深く言はないとの評判を度々耳にします。此は勿論事實に反して居りますが、然しさう云はれるには、何か理由がありはしますまいか、或は神の事に關し健全なる經驗を有たぬ人や、未だキリストの義を受けて居らぬ人が、講壇に立つた様な事はありますまいか、多の教役者は、單に議論體に説教を考案し、殆んど贖主の救の力を紹介せず、其證にはキリストの寶血を缺いて居ります。即ち彼等の献物は、カインの献物に酷似して居ります。カインは地の産物を献じました。立派な献物であつたには相違ありませんが、献物の精神——殺され給ひし羔の血即ちキリストの血を缺いて居りました。説教も其通り、キリストの血がなければ、人の心を刺戟しませんから、『救はれん爲に我儕何を爲すべきか』との問を出すに至りません。

基督教徒と告白する凡の者の中、セブンスデー・アドベンチストは、世にキリストを紹介する魁<sup>さきがけ</sup>でなければなりません。抑も第三天使の使命の宣傳は、安息日に關する眞理を紹介するものにして、使命に含まれて居る彼の眞理と共に、普く宣傳せねばなりません。人の注意を引く可き大中心のキリスト・イエスを閑却してはなりません。憐恤と眞理と合ひ、『正義と平和が接吻<sup>くちづけ</sup>』するのは、カルバリーの十字架の下でありますから、罪人をして是非カルバリーを仰ぎ見る様に導かねばなりません。罪人は嬰兒の如き單純なる信仰を以て、主の恩恵を信じ、其義を受入れ救主の功に依頼せねばなりません。

## 神の愛

神の愛を通して、キリストの恩恵の寶庫は教會と世人との前の開かれてあります『夫れ神は、其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信ずる者に滅ぶる事なくして永生を受けしめんが爲なり。』<sup>1</sup>私共が尙罪人たりし時

キリストをして私共の爲に死なしめた愛は、實に測<sup>はか</sup>り知る事の出来ない洪大無邊のものであります、隨<sup>したが</sup>つて神の律法の要求の強い事を承知し乍ら、罪多き所にはキリストの恩恵も増す事實を認めない人の受くる損失は莫大なものであります。

律法が正當に紹介されて居る時、必ず神の愛を顯すものであります。然し眞理と雖、冷淡な生命のない方法で之を紹介すれば、人の心が動かないに何も不思議はありません。教役者が、律法に對するイエスの關係を紹介しないなら、信仰がぐら付いて神の約束を怪しむ者のあるに不思議はありません。

或る教役者は、罪人に對し之を叱咤する事急にして、人類の爲に其子を死なしめ給ひし父なる神の愛は、之を後に隠して置きますが、そんな事ではなりません。苟しくも眞理の教師たるものは、世の罪人に神の眞相——即ち悔改めて父に歸り來る放蕩兒に怒を浴<sup>あび</sup>せ掛るのではなく、歸つて來た彼を歡迎する響應を準備して待ち給ふ慈愛の溢るゝ父として知らせねばなりません。嗚呼御互は、救靈に關し主の方法を吞込みたいものであります。



神は人が理窟で納得するよりも、更に深く、更に高く、更に潔く、而して更に榮ある認罪をする事を希望し給ひます。人間の理窟は、折角神が人の上に輝かしめんと望み給ふ光明を消して仕舞ふ事が度々あります。神は其明らかな光により、宇宙の主は萬物の創造主であるが故、凡の讚美・榮光を歸せらるべきものである事を人に悟らしめ給ふのであります。

或る教役者は、全く議論的の說教を致しますが、是は心得違と云はねばなりません。示されたる眞理を合點し、其動かす可らざる證據を見て深く感じた者が、其時若しキリストは世の救主であると紹介されると、蒔かれた種は芽を出し、終に果を結び、神の榮を揚げます。然るにカルバリーの十字架が一向示されない事が間々あります。或人にとりては、夫れが生前に聽く最後の說教であるかも知れません。

而して此の好機を一度逸せば再び取返す事が出来ません。もし理論と共に、キリストと其贖の愛が紹介されたなら、永久に失はれた心靈も主に導かれた筈であります。

## 基督に到る道

世間には、我等が想ふよりも多の人が、キリストに到る道を求めて居ります。されば末世の福音宣傳に従事する教役者は、キリストを罪人の避難所として紹介する事を忘れてはなりません。或る教役者は、悔改や信仰の話は必要がないと思ひ、さう云ふ問題は聴者が能く承知して居るから、何か目先の異つた性質のものを説かねばならぬと考へて居ます。然し多の人は實際遺憾乍ら救の計畫に付て知識がありませんから、是非共何事よりも大切な問題をもつと完全に教へねばなりません。真理の關係を示めし、其完全を認めしむる爲に教理的説話は缺く可らざるものでありますが、如何なる講話をしても、決してキリストと其十字架とが、福音の基礎である事を抜にして説いてはなりません。教役者はもつと實際的信仰に重を置いて説くと、必ず深く人を感動せしむる事が出来ます。新傳道地で真理を宣傳するに當り其説く所が主として理論に涉つて居る事が屢々あります。之を聞いた人々は心に心

に變調を來たし、兎に角眞理の力を認め、之に従ふかと決心しかけるものもありますが、此時こそ、何はさて置き深くキリストの救を信する必要を、彼等の心に印象せしめねばなりません。

又時としては、未だ罪の悔改はしないが、示された證明により眞理を尊敬するに至つた人が居ります。然し斯の如き人が、全く心を變へて新にせらるゝ迄にならなければ、教役者の役目は濟んだとは云へません。何事を説く場合にも、罪を棄てキリストに來るべき事を熱心に勧めなければなりません。今日到る處に見受ける罪惡を非難し、實行的信仰生涯に入るべき事を命じなければなりません。眞正の教役者は、己が説く所のものが如何に重大であるかを感ずるが故、人をキリストに導く爲に多大の興味を有して居る事實を隱蔽する事は出来ません。

私（ホワイト夫人）は、福音宣傳に従事する我同勞者に、其任務の如何に重大なるかを充分に印象せしめ得る様、力ある語を用ふる事の出来ない事を残念に思ひます。兄弟よ！ 諸君は生命の言葉と、又最高の發達を爲し得べき人心を取扱つて居



るのであります。十字架に釘けられ給ひしキリスト、復活し給ひしキリスト、昇天し給ひしキリスト、及び再臨し給ふべきキリストは、教役者の性情を溫和ならしめ喜に満たしめ、愛と熱誠を以て此等の眞理を人に紹介するに至ります。然すれば、教役者は一向に目立たなくなり、イエスが明あきらかに顯はれます。

人を教ふる諸君よ！ イエスを高く掲げなされ、説教に、歌に、祈禱に、主を高調しなされ、全力を傾注して滅び行く世人——何等の目的もなく、五里霧中に彷徨する世人に、『神の羔』を指示し、復活し給へる主を紹介し、之に耳を傾ける凡の者に、『我儕われらを愛し、我儕われらに代りて己おのれを禮物そなへものとなし』給へるキリストに來れと云はねばなりません。凡の説教の中心、凡の歌の題目は皆救に歸着し、祈禱の時にも此事を念頭に置かねばなりません。説教する時、神の智慧又力なるキリストに對し、何物をも補ふ必要なく、生命の言を確く握り、罪を悔いし人の希望、信者の強き要害として、イエスを紹介しなさい。憂慮、困苦の中に呻吟せる人々に平和の道を教へ、救主の恩寵と完全とを示さねばなりません。

暗黒より光明に導かれ、神の寶座に達する道は一つしかありません——信仰の道は即ちそれであります。此道は決して暗かつたり不確ふたしかであつたりする限ある人の道でなく、通行税など取る様な道ではありません。又難行苦行などの働によりて之に入る事は出来ません。

神の備へ給ひし道は實に完全無缺にして、人は何等のものを以てしても、之に附加して一層完全にする事は出来ません。此道は如何なる頑強な罪人でも、若し真正に悔改めさへすれば、之を受入れ得る程廣いが、罪其物は少しでも存在する事の出來ない程狭くあります。是が主に贖あがなはれし者の歩むべき道として備へられた所のものであります。

1 約翰傳三章十六節

2 以弗所書五章二節

## 信仰により義とせらるゝ事

キリストの義が私共に賦與せらるゝ事は、私共の方に何か功いさほしがある爲に非らずして、全然神より與へ給ふ賜でありますが、實に考へて見ると難有い事であります。サタン即ち神と人との敵は、若し人が此眞理を充分に受入れると彼の力が破られて仕舞ふ事を知つて居ますから、信仰によりて義とせらるゝ事が明白に紹介さるゝ事を好みません。神の子等と稱する者の經驗が、疑惑、不信、及び暗黒によりて成立つ様に、惡魔が人心を統御し得れば、必ず之を誘惑に導く事が出來ます。

神の聖言其儘を受け入れる單純な信仰を獎勵せねばなりません。又神の民は、神の力を握る信仰を有せねばなりません。『汝等恩なんぢらのやみによりて救すくひを得、これ信仰しんかうに由りてなり、己おのれに由よるに非ず。神の賜たまひなり。』<sup>1</sup> 苟しかしくも神がキリストの功により自分の罪を赦して下さつた事を信ずる人々は、信仰の善き戰を戰ふ事を止める様な誘惑に



は陷る事なく、其信仰は益々鞏固となり、遂に言行共に、『イエスキリストの血、すべての罪より我儕を潔む』るに至るのであります。

若し私共が、第三天使の使命の靈と力とを有たうと思ふなら、是非律法と福音とを併せて説かねばなりません。是は車の兩輪の如く、決して相離す事の出来ないものであります。地より出づる力が、眞理に従はざる人々を刺戟して神の律法を破棄せしめ、キリストが我等の義であるてふ眞理を蹂躪せしむる如く、上よりの力は神に忠實なる人々の心に働き、律法を重んじ、且つイエスを完全なる救主として崇めしめます。神の民が神の力を實驗しないと、誤れる教理や思想に捉へられ、キリストと其義が多の者の經驗より失はれ、其信仰は力も命もないものになつて仕舞ひます。

教役者は、教會に於ても新傳道地に於ても、キリストを充分に紹介し、聽者をして理智ある信仰を抱かしめ、キリストが彼等の救又義である事を是非共教へねばなりません。キリストの血が凡の罪を潔めると云ふ事實は、其効力を信じアベルが羔

を捧げた如く、キリストの血に依頼して父に祈るものは必ず受入れられるが故、人がキリストを唯一の希望として信ずる事を妨げ様とするのはサタンが深く企んだ計畫であります。

カインの捧物が神に受け入れられなかつた譯は、キリスト拔<sup>ぬき</sup>の捧物であつたからであります。私共の使命の主眼とする所は、唯神の律法許りでなく、イエスの信仰であります。今や一道の光明は私共の行程を照らし、益々イエスに對する信仰を増さしめて居りますから、私共は一切の光明を受入れ、之に歩み、審判の時罪せらるゝ事なき様にせねばなりません。私共は、眞理が明白に解る様になるに隨ひ、義務や責任が益々重くなります。又光明は、暗黒の裡に隠されて居た誤謬を指摘し之を訂正しますが、光明が來る時には、人の言行及性質は、其光明に一致する爲に變化せねばなりません。以前心が暗黒であつた時、罪と知らずして居た事も最早や其儘平氣でやつて居る譯には參りません。光が増加つた時、人は之により改善向上されねばなりません。然しもしさうならない時には、光が與へられた前より一層

頑迷となつて仕舞ひます。

1 以弗所書二章八節

2 約翰傳一章七節



## 傳道者某に與ふる書

親愛なる兄弟よ！

……此は神より貴下に宛與へられた使命であります。貴下は兎角嚴格に過ぎ、專斷的にして、言語も荒<sup>あら</sup>つぽい傾がありますから、吳々も注意し、語るに親切をもつて、行爲を溫順になさい。主は貴下に對し『誘惑<sup>まよひ</sup>に入らぬ様<sup>やう</sup>、目を醒<sup>さま</sup>し且<sup>かつ</sup>つ祈<sup>いの</sup>れ』と仰せになつて居給ひます。荒々しい物言ひは主を憂へせしめ、愚な言は害をなします。私は貴下に向ひ左の如く云へと命ぜられました。『よく語に注意して、柔順<sup>おとな</sup>しく物を言ひ、言葉の上にも、素振の上にも、決して荒々しくあつてはなりません凡て貴下の言行は、皆キリストに似たる香あらしめ、決して貴下の短所をして貴下の働を傷けしめてはなりません。貴下は誘惑されて居る人々を助け、之に力を與へねばならぬ身上でありますから、荒々しい言語を出して自己を顯はしてはなりません

ん。キリストは羊群の爲に、又貴下が働いて居る凡の人の爲に、己が生命を捨て給ひました。然れば貴下の言語で人を誤らしてはなりません。苟しくもキリストの教役者には、キリストに似た品性が顯はれて居なければなりません。

荒々しい而も忍耐なき言語は、キリストが其教役者に委ね給ひし神聖な働と調和しません。然しイエスを仰ぎ望み、彼より學ぶ事が日課となつて居れば、必ず健全なる調和的の品性を顯はす事が出来ます。必ず人に接する時柔和溫順を旨として、決して他を非難叱咤するが如き言を發してはなりません。大教師イエスを模範として之にお倣ひなさい。親切と同情の言葉は、恰も藥の如き効力ありて、失望の淵に沈んで居る人に元氣を與へます。神の言を知り之を實行する事は、一種の治癒力を有します。然し劇烈なる言語は、自分にも他人にも決して祝福を齎すものではありません。

兄弟よ！ 貴下はキリストの柔和、忍耐及良善の代表者となさねばなりません。公衆の前に立て語る時、貴下はキリストを代表して恥ぢざるものでなければなりま

せん。『上<sup>うへ</sup>よりの智慧<sup>ちゐ</sup>は第一<sup>だいい</sup>に潔<sup>きよ</sup>く、次<sup>つぎ</sup>に平和<sup>へいわ</sup>、寛容<sup>くわんよう</sup>、柔順<sup>じゅうじゆん</sup>かつ矜恤<sup>あはれみ</sup>と善果<sup>よきみ</sup>みち人を偏視<sup>ひとかたよりみ</sup>ず、又<sup>また</sup>偽<sup>いつはり</sup>なきもの也<sup>なり</sup>』と聖書に記してあります。目を醒し且つ祈り、貴下<sup>きげ</sup>が時々發し易い激しい言を抑制しなさい。貴下<sup>きげ</sup>に内住し給ふキリストの恩恵により、貴下<sup>きげ</sup>の言語は潔められませう。もし他の兄弟の行動が貴下<sup>きげ</sup>の希望と一致しない場合があつてても、決して激烈な態度で之に對してはなりません。今迄にも度々貴下<sup>きげ</sup>の激しい言行により、神を憂へしめた事がありました。

貴下<sup>きげ</sup>の意思は、主の意思に服従すべきものにして、貴下<sup>きげ</sup>は大に主イエスの助を要します。又貴下<sup>きげ</sup>の精神、行爲共に福音の役者<sup>つかへび</sup>として他人より模倣されますから、唯潔められたる言葉のみが、貴下<sup>きげ</sup>の唇より漏るゝ様にせねばなりません。何時も子供を親切に愛撫しなさい……………。

貴下<sup>きげ</sup>は自己が貴下<sup>きげ</sup>の働に雜<sup>まじ</sup>らぬ様決心するなら、神の理想に達し得ませう。貴下<sup>きげ</sup>は自分が精神と行爲とに於て、キリストに似んと努めて居る事を知ると能力も慰藉も奨勵も得ます。謙遜、柔和の心を持つ事は貴下<sup>きげ</sup>の特權にして、神の使等は貴下<sup>きげ</sup>の



リバイバル的勢力と偕に協力します。キリストは、貴下及び凡て主の御足の跡を履む者の中に活さん爲に其生命を捨て給ひました。貴下は贖主の力により、キリストの品性を顯はし、曲れる處を眞直<sup>なほ</sup>くし智慧と能力を受けて働く事が出来ます。

千九百八年八月二十二日

米國加州ローサンジエルスに於て

イー・ジー・ホワイト

1 雅各書三章十七節

## 實際的參考

形式的の講演——或る教役者は其講演を準備するに當り、恰も鑄型いかにに入れた様な原稿を作り、心に主の導を受くる餘地を餘あまさず、自分の計畫から毫も離れる事が出来ない様に致しますが、此は飛んでも無い誤謬であります。もし、さう云ふ流義で進んで行けば、教役者は、狹量になり、靈的生命と活氣とが缺乏して居ることは恰かもギルボアの丘に露と雨とがなかつた如くであります。

もし教役者にして、其講演をして鑄型から離れる事が出来ないとするれば、其結果は説教の朗讀をするに大差がありません、力のない形式一片の講演には、聖靈の活力を認むる事は殆んど出来ず、随つて此種の講演を常にして居れば、終に教役者の力量も才能も傷そこなはれて仕舞ひます。

神は又働人の全然神に信賴せん事を希望し給ひます。故に、「民に對する聖言は

何なりや」と、主に尋ね、聖旨に服従し、且つ心を聞き神よりの使命を奉じ、天より新に賜はりし眞理を民に傳達し得る様になつて居らねばなりません。聖靈は教役者に相手の需要に應じ、適切なる思想を與へ給ひます。



神に對する敬畏の念——私は、或る教役者がキリストの生涯や教訓を輕々しき態度で語り、世俗の偉人の或者と同様に取扱ふと聞きました。實際教役者が、キリストを自分等の如く一個の人間でありしかの如く紹介するのは稀ではありません。

私は、此神聖な問題が輕々しく取扱はれるのを聽く時に、實に何とも云へぬ悲を感じ、此等の人々が眞理の教師であるに拘らず、彼等の基督觀が至つて低く、事實に於て彼等はキリストと交はつて居ません。要するに彼等の思想は極めて幼稚であるから、大救世主の何たるを明に了解しないのであります。

然し、苟しくも、キリストの性質と其事業に關し正鵠なる見解を有する者は、自負自尊の弊に陥る様な事はありません。自分の弱い事や力なき事と神の子の能力と



を對照する時は、必ずや自ら卑<sup>ひく</sup>ふし、自己に依頼するの念を棄て、キリストの力を仰ぎ、其働をする様になるのであります。

平素キリストと其充<sup>みちた</sup>足れる功<sup>いさを</sup>に依頼するものは信仰を増し、靈的判斷力が益々明晰になり、主に似んどの希望が厚くなり、且つ一層熱心に祈<sup>いの</sup>禱り、之をして有効ならしめます。

不敬虔なる物語——教役者は、説教中に、不敬虔な物語を挿む事を習としてはなりません、此は折角紹介した真理の力より、人の注意を外<sup>そ</sup>らすものであります。聽者をして哄笑せしめ、少くとも輕々しい考を浮ばせる物語は、最も非難すべき事にして、真理は必ず上品にして威嚴ある言語を以て紹介し、之に用ゆる説明や例證の如きも矢張謹嚴の性質を缺いてはなりません。

聽衆の隋氣に打勝つ法——教役者は、込<sup>こみ</sup>合つて熱<sup>あつく</sup>苦しい室内で説教せねばならない

事が屢々ありますが、聴衆は兎角睡氣ねむけざし、感覺が痴鈍になり、聞いて居る真理の了解が殆んど不可能になります。

かう云ふ場合には、説教的口調を止め、會話的の調子で語り聴衆に質問をなしなごすれば、彼等の精神が活躍し出し、一層明瞭になるものであります。



少數の會衆——講話の聴衆が甚だ少數であるからと云つて、決して力を落してはなりません。よしや相手が二三人しかなくても、神の靈が争つて居る人が其中にあるかないか誰も知る事は出来ますまい。神は其一人の靈魂に對する使命を汝に與へ給ふかも知れません。もし其人が改心すれば、今度は又他の人々を導く器うづはとなりますから、汝には全く解らなくとも、汝の働の結果は千倍になる事があるかも知れません。

徒らに空席を眺め、信仰と勇氣とを挫く事をせず、須らく神は其眞理を世に與へ給ふ爲何を爲し給ふかを考へ、又自分は神の力——決して失敗しない力と共に働い

て居る事を記憶し、恰も自分の前に數千人の聴衆を控へて居るかの氣分で、熱誠を籠め、信仰と興味を厚くしく語らねばなりません。

曾て一人の教師は、雨の日の朝説教せんとて自分の教會に行つたが、聴衆としてはたつた一人しか居りませんでした、然し彼は折角來た聴者を空しく歸へすに忍びず熱心に且つ多大の興味を以て其人に説教しました。其結果として其人は、罪を悔改め、後には宣教師となり、彼の努力により幾千の人々が救の福音を聞く様になりました。



短かい説教——現代の使命を宣傳するに、長い入くんだ講話でなく、簡潔にして要領を得た話を以てせねばなりません。長説教は話す方でも骨が折れるし、聴く方でも勞れます。苟しくも説教者が彼の使命の重大を感じる人なら、特に注意して自分の體力を勞費し、且つ聴衆をして記憶し得る以上のものを説かぬ様心掛けねばなりません。



或る問題に關し、一遍通り云つた事は、聽衆が必す之を心の中に蓄へて居ると思つてはなりません。兎角、餘り早く、色々の問題を紹介し過ぎる危険があります。明白單純な用語を以て短い教訓を授け、而も屢々之を繰返す事は大切であります。要するに短い説教は、長いより遙によく記憶されます。又我教役者は、其説く所の問題は、聽衆の或者には全然初耳である事を記憶し、要點を再三繰返す必要があります。



直截的なれ——多の説教者は、序言や口上の爲に時と力とを空費し、之が爲半時間も用ひ、愈々本文に入り、聽衆に眞理の要點を捉らへさせ様となるや、一同最早疲れて居りますから、折角の使命の力を認める事は出来ません。

教役者は、聽衆の前に立つや、前置などは止めて、直截的に其云はんとする所を云ひ、神よりの使命を帯びる者である自覺を披瀝せねばなりません。同時に其使命の要點を明瞭に紹介し、誰にでも吞込める様に説かねばなりません。

又實際重大でない點や、解り切つた事をくどくどしく説明し時間を空費する事が度々あります、然し緊要の點は、其用語と云ひ、説明と云ひ、共に明白に且つ力強くせねばなりません。



集 中——或人々は、集中と云ふ事に餘り重きを置き過ぎる傾があります。勿論一の問題に力を入れ、凡て他の事を除外するは、成る程度迄は結構であります、然し一方の思想にのみ全力を傾注する者の屢々陷る弊は、他の點を全然缺く事にして斯う云ふ流義では、普通の會にしても單調に流れ相手を倦怠せしめます。又そう云ふ人の書いたものは、輕快な氣分を缺きます。又公衆に對して語る時、自分では多大の興味を有し、其問題に深入して盛に論ずるが、事實之を了解する者は甚だ少ないのであります。

此種の人が蒔いた真理の種は、餘り深か過ぎて、軟い芽が地の表面へ出る事の出來ない恐があります。單純、明白にして最も大切な真理ですら、故意に色々の言語

を以て蔽ひ被<sup>か</sup>ぶせ、曖昧不明瞭にして仕舞ふ事があります。



單——議論も用ひ處によつては益にも立ちますが、神の言を單純に説明するに越した事はありません。キリストは教訓を垂れ給ふに當り、どんな無學の人も容易く了解し得る様に明白に説明し、決して長い六ヶ敷い語などは用ひ給はず、一般の人に適する平易の語で教へ給ひました。且つ相手が吞込める以外に、其説き給ふ問題に深入し給ひませんでした。

教役者は、簡潔に眞理を紹介せねばなりません。聽者の中には、罪の悔改に要する順序に關し、よく説明せねばならぬ人が澤山あります。世の大多數の人々は、此點に於て想像以上に無識にして、堂々たる學者、政事家其他社會にありて重要な地位を占むる人々の中には、最大最重の事柄を等閑に付して居るものが少くありません。説教者は、此種の人々が聽衆の中に居ると、學者向きの話をするに力を盡し、肝心のキリストを顯さない事が屢々あります。即ち罪は律法を犯す事なるを示さず



随つて救の計畫を明に致しません。聽衆の心を動すには、是非共キリストが彼等の罪を贖はん爲に死に給ひし事を紹介する事であります。



リバイバル——神が人を用ひて働き給ふ時、即ち人が上よりの力に感じて活動する時、サタンは其部下をして『宗教狂よ』と叫ばしめ、人に極端に走る勿れと警戒させます。如何にしてかう云ふ叫を擧げるか、細心注意して觀察せねばなりません。贗造貨幣があるからと云ふて、本物の價值を無視する事が出来ない如く、偽のリバイバルや偽の改心があるからと云ふて、凡のリバイバルに對し猜疑の態度を取るは不可にして、彼のパリサイ人が、キリストを指して、『此の人は罪ある人と接はれり、』と云ひて、主を輕侮せし態度を學んではなりません。

キリストの御生涯には、私共が救靈事業を輕んじてならない事を教へる點が澤山あります。天使も、罪人が救に與かると非常に喜ぶと云ふのに、人は不信の故により此重大な働に冠するに『宗教狂』の名を以てし、神の用ひ給ふ使命宣傳者を指し

彼は盲熱心めくらねっしんの徒であると申します。



安息日の集會——安息日の集會を司つかさどる事を命ぜられた者は、如何にして其聽衆をして神の言の眞理に興味を持たしむるか、熟く其方法を講じなければなりません。司會者は何時も説教を長くして、出席者にキリストに従ふ告白をする機會を與へない様ではなりません。會衆をして、神に感謝を表白せしむる様、説教を短くする事が度々あつて宜しいと思ひます。感謝を捧ぐる事は、主の聖名を崇めます。而して聖徒の集會には、聖き天使が會衆の立てる證言を始め、其歌ふ讚美歌や捧ぐる祈禱を聽いて居ります。

されば祈禱、感話の集會は必ず特別の助と獎勵を與ふる機會たらしめ、凡の人が之にたづさはる事を以て特權であると感じ、苟いふしくもキリストの聖名を擔ふ者は、何か言はねばならぬ様にせねばなりません。言ふ迄もなく、證言は簡潔にして、他人を益する性質のものたるべく、一人で長い證言をなし、二三十分も時間を奪ふこ

と程敬虔の精神を傷そこなふものはありません。是は實に集會の靈的要素を殺すものであります。

1 路加傳十五章二節



## 作法及び服裝に注意せよ

教役者は、教壇に於ける作法、態度、話し振り及び服裝の如何により、聴衆に好感を與へ、又は惡感を抱かすものである事を記憶せねばなりません。彼は常に禮讓を重んじ、よく作法に注意し、其高潔なる天職に適はしき靜肅なる威嚴を保ち、謹嚴、溫厚其宜しきを得、加ふるに敬虔なる威力を具ふる事が彼の品性の特徴でなければなりません。粗暴、亂雜は俗事に於ても非難すべき惡行でありますから、況して聖職の上に之を許す事は出来ません。されば教役者たる者の態度は、其宣傳する聖き眞理と一致し、其口より出る一言一句は、悉く熱誠にしてよく精撰されたものでなければなりません。

教役者は單に、聴衆を感動せしむる態度や言語を弄せん爲に、教壇の上より演劇じみた行動をする事は全然禁物であります。教役者は俳優ではありません、眞理の

教師であります。威嚴を缺いた騒々しい行爲は、決して其傳ふる眞理に力を添へるものではありません、却て冷靜な判斷力を有し、正當の見解をなす人々に嫌惡の情を起さしめます。

苟<sup>い</sup>しくもキリストより學んだ教役者は、永遠に持續すべき感化力を有する働を神より委<sup>ゆ</sup>ねられた使命宣傳者である事を一刻も忘れてはなりません。故に決して自己の人物、學力及び才能を誇るが如き事なく、世の罪を負ふ神の羔を紹介し、言行の兩道により世人を悔改に導く事を以て終世唯一の目的とし、神より權力を賦與されし自覺を以て語り、彼の説教は熱烈にして人を説伏し得る力を有し、罪人を導きキリストに避難せしむるに足るものでなければなりません。

又服裝は、大に考慮を要する重大問題にして、教役者は、彼の地位の威嚴に適應せる服裝をせねばなりません。然るに此點に杜<sup>つ</sup>漏<sup>ら</sup>な教役者が間々あります。或る場合には、縞柄及色合等の選擇の知識乏しき許りでなく、自墮落なものもあります。

世界を動かし、吾人に生命を與へ、吾人の健康を維持し給ふ神は、聖職にたづさ

はる者の服裝の如何により、或は崇められ或は侮られ給ひます。神は、モーセに對し聖所の奉仕に關し細大ことなく特別の訓戒を與へ給ひましたが、其中神の聖前に出で務を爲す者の著用すべき服裝を指定し給ひました。『汝また汝の兄弟アロンのために聖衣を製りて、彼の身に顯榮と榮光あらしむべし。』<sup>1</sup>とは、當時神がモーセに與へ給ひし命令であました。要するに、祭司の服裝及び態度は、凡の點に於て、之を見る者をして神及び其禮拜の神聖並びに神の聖前に出づる者に要せらるゝ純潔の觀念を深からしめねばなりませんでした。

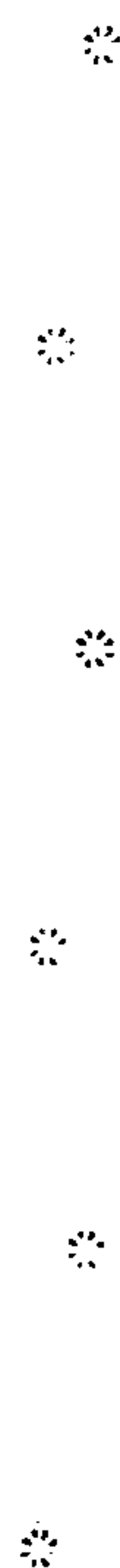
又祭司は、靴の儘聖所に入る事を許されませんでした。是は靴に附着して居る塵が聖所を汚すからであります。故に祭司は、聖所の入口で靴を脱ぎ、又幕屋若しくは燔祭の壇に於て奉仕するに先だち、其手足を洗ふ規定になつて居りました。慙くして神の聖前に來る者は、一切の汚を除かねばならぬ事を教訓しました。

服裝に無頓着なる教役者の惡感化は、神の忌み給ふ所にして、慙かる教役者は、聖職を俗務以上に神聖視して居ないと云ふ印象を其聽衆に與へます。のみならず服



装を整頓すべき必要を教へず、自墮落の惡例を示めします。而も之を模倣するに速なる人もあります。

神は教役者が其行動、其服裝に於ても、真理の原則及び聖職の神聖を遺憾なく代表すべき事を期待し給ひます。教役者は人をして高き標準に到達し得る助となる模範を示さねばなりません。



人は神の靈を消す能力を有し、撰擇の權、行動の自由は彼に許されて居りますから、キリストの聖名と恩恵により服従の生涯を送る事も出來ますが、不服従の態度に出で、其結果として禍害を招く事も出來ます。

人は、神聖且つ永遠の眞理を受くるも、拒むも、自ら其責任を負はねばなりません。神の靈は、間斷なく私共の罪を示し給ひます。而して人は眞理に服したがふか、背くか、二に一の途に決定せねばなりません。されば一生涯の凡の行動が後あとから悔ゆる

必要がないものたらしむる事は、實に大切ではありませんか、而もキリストを代表し、其大使として活躍するものにして、殊に然りであります。

1 出埃及記二十八章二節

## 公の祈禱

公開の席上で捧げる祈禱は、須らく簡潔を要します。神は長い祈事ねぎことにより、禮拜の時間を退屈ならしむる事を要求し給ひません。又キリストは、其弟子等に倦怠を催す様な儀式や、長い祈禱をせよと強ひ給ひし事なく、却つて『なんぢ祈る時に偽善者ごんしゃの如くする勿れ、彼等かれらは人に見られんが爲に會堂や街衢の隅に立て祈る事を好む。』と教へ給ひました。

パリサイ人は、祈禱の時間を定めて置きましたので、丁度其時間に外出して居る事が度々あります、然し其時間になると、路上でも市場でも多の人が忙がしくゆきかふ其中で、大聲を擧げて形式的の祈禱を繰返しました。單に自己の譽はまれを求むる爲に捧ぐる斯種の禮拜は、イエスの嚴しく責め給ひし所のものでありました、とは云へイエスは決して公の祈禱を非難し給うたのではなく、イエス御自身も、其弟子と



又群集と共に祈り給うた事がありました。然し公の祈禱は、必ず短くなければならぬと云ふ思想を弟子たちに印象し給ひました。

一般に公の祈禱の長さは、數分間で充分であります。勿論時として、神の靈に導かれ、特別の方法で祈禱する場合があります。即ち心に常ならぬ苦痛を感じ、神の助を切に求め、彼のヤコブの如く靈的の角力を取り、神の力の特別なる現示を見なければ止まないのであります。かう云ふ時には、祈禱が長くなるのは當然であります。

長たらしい祈禱には、神に己が要求を訴ふるより、寧ろ、神に對し講演を試みる様なものが澤山あります。こんな流義の祈禱をする人は、主の祈禱だけして居る方がましであらうと思ひます。長い祈禱は、之を聽く人を疲らし、随つて其後に與へらるゝ教訓に耳を傾ける様に聽衆を準備しません。

又公の祈禱が、兎角長くなるのは、密室の祈禱が等閑に付せられた結果である事が度々あります。教役者たるものは、一週間中怠つて居た義務を、一度に持出し、

御詫<sup>おわび</sup>旁々<sup>かたわ</sup>、良心を安んぜやうと試みてはなりません。かうした祈禱は、兎もすれば他人の靈的標準を降下せしむる結果を生じます。

教役者は、演壇に上る前、必ず密室に於て親しく神に見え、神と接近して置かねばなりません。彼は此密室に於て、神の前に其渴ける心を披瀝し、恩恵の露に濕はされ、爽にされる事が出来ます。斯くて聖靈に油を注がれ、靈魂に對する重荷を感じて出で來れば、會衆に罪人の唯一の避所なるキリストを紹介する事なしに空しく散會する様な事なく、再び此會衆に遇ふ事が出来ないかも知れないと云ふ感念の下に熱心に説きますから、對手を感動せずには居りません。且つ人の心を察知し給ふ主は、彼が時に適ひたる教訓を力を以て語り得る様其言ふべき言語を賜はります。

祈禱に於ける敬虔

或人々は、祈禱するに當り、人間同志の對話の如く別に改つた態度でなく語るの

は謙遜な印であると思ひますが、此種の人々は、『全能なる神』てふ語を不必用な場合に且つ不敬虔の態度を以て祈禱の中に濫用し、神の聖名を瀆<sup>けが</sup>します。此『全能なる神』てふ語は、實に神聖無比の嚴肅なるものにして、抑制せる音調と謹嚴の感じを以てせざるに非ざれば、決して唇より漏れてはならぬものであります。

言語を飾つて祈禱する事は、公會に於ても家庭の集會にありても、又密室に於ても廢すべく、殊に公の祈禱を捧ぐる人は、單純な言語を用ひ、他の人々が克<sup>よく</sup>其意味を了解し、其祈願に一致し得る様にせねばなりません。

天に響き地に應へらるゝものは、心の奥底より出づる信仰の祈禱であります。神は實に人類の必要を解し。我等が祈らぬ先に我等の欲求を知り、疑惑と試練と苦戰奮闘せる心の悶<sup>もだ</sup>を察し、祈る者の誠實を認め、聖前に己を卑<sup>ひく</sup>うし懊惱せる者を憐み『我<sup>われ</sup>はたゞ苦<sup>くる</sup>しみ又心<sup>またこころ</sup>をいため、我言<sup>わがことば</sup>を畏<sup>おそ</sup>れをのゝく者<sup>もの</sup>を顧<sup>かへりみ</sup>るなり。』と宣給ひます。

又聖靈が我等の祈事を導き給ふが故、必ず聽かれると云ふ確信を以て祈るは、我



等の特權であります。單純に其求むる所を主に訴へ、厚き信仰を以て神の聖約束の履行を期待し、會衆をして私共が祈禱により神を動す秘訣を學んだ事を認める程でなければなりません。斯くすれば、會衆も勵まされ、集會中に主の臨在し給ふ事を信じ、心を開き主の祝福を受ける様になります。随つて我等の誠實に對し、一層の信任を増し、耳を傾けて我等の説く所を聽く様になります。

又我等の祈禱には、慈愛の精神が籠つて居らねばなりません。我等が、救主の愛を一層深く又廣く意識しやうと欲求すれば、必ず更に多の知識を求めて神に叫ぶ筈であります。又もし至誠、熱烈の祈禱と説教とを要する時代があつたとすれば、それは今であります。今や萬物の終末は目睫の間に迫つて居ります。どうか主を求むるの必要を認め、之が爲に全心を傾けたいものであります。さすれば必ず主を見出す事が出来ます。

願くは、神が其民に如何に祈るべきか其術を教へ給はん事を、我學校に教鞭をとる教師も、我教會に奉仕をなす教役者も、日々キリストの學校で學びたいものであ

ります。もしかくせば、彼等の祈禱には、熱誠が籠りますから、其求むる處は必ず聽<sup>きこ</sup>居<sup>ゑ</sup>けられ、力を以て使命を宣傳し得る様になります。

### 祈禱に於ける我等の態度

神に我等の祈事を捧ぐる時は、公衆の前に在る時も、私室にある時も、聖前に膝を屈<sup>か</sup>むるのは我等の特權であります。我等の模範なるイエスは、『曲<sup>ひがま</sup>膝<sup>まつ</sup>きいのり』<sup>3</sup>給ひました。又弟子等も、『跪<sup>ひざまづ</sup>き祈<sup>いの</sup>』<sup>4</sup>つたと記してあります。而してパウロは、『此<sup>これ</sup>に縁<sup>よ</sup>りて我<sup>われ</sup>儕<sup>ら</sup>の主<sup>しゅ</sup>イエス、キリストの父<sup>ちち</sup>即<sup>すなは</sup>ち天<sup>てん</sup>と地<sup>ち</sup>にある諸<sup>しよ</sup>族<sup>ぞく</sup>の彼<sup>かれ</sup>に由<sup>よ</sup>りて名<sup>な</sup>を得<sup>ね</sup>し者<sup>もの</sup>に跪<sup>ひざまづ</sup>きて、『云々と申しました。又エズラは、神の聖前に、イスラエルの罪を告白して跪きました。而してダニエルは、『一日<sup>いちにち</sup>に三度<sup>さんど</sup>づ、膝<sup>ひざ</sup>をかゞめて禱<sup>いの</sup>り、其<sup>その</sup>神<sup>かみ</sup>にむかひて感謝<sup>かんしゃ</sup>』<sup>5</sup>しました。

神の無限に偉大に在し給ふ事を感じ、且つ其臨在を意識すれば、随つて神に對する畏敬の念が熾<sup>さかん</sup>になります。故に見えざる神が其處に居給ふこの此觀念を以て、凡

の者の心に深き印象を與へねばなりません。祈禱する時間と場處とは、其時、其處に神が臨在し給ふが故神聖にして、此場合に於ける謹嚴なる態度と動作とは敬虔の念を一層深からしめます。聖き詩人は、『エホバの名は聖にしてあがむべきなり』と申しました。又天使は、エホバの名を口に擧ぐる時は、其顔を蔽ひます。されば我等墮落せる者、罪深き者は、此尊き聖名を呼ぶ時、如何程に敬虔、恐懼の念に満されねばなりますまいか。

されば老も若も、神が特に臨在し給ひし場所は、如何に神聖視されしか左の聖句を深く玩味せねばなりません。

神は燃ゆる棘の中より、モーセに對ひ、『汝の足より履を脱ぐべし汝が立つ處は聖き地なればなり。』と命じ給ひました。又ヤコブは、天使が梯子を登り降りする幻象を示された後、『誠にエホバ此處にいますに我知らざりき、……此處、是れ即ち神の殿の外ならず是天の門なり。』と叫びました。

『エホバはその聖殿に在ますぞかし、全地その御前に默すべし。』<sup>11</sup>



長たらしい説教的の祈禱は、公の席上に不必要、且つ不適當であります。熱き信仰により捧げられたる短き祈禱は、聴者の心を和やはらげますが、祈禱が長くかゝると、彼等はおどかしがり、もう終になればよいと待つて居る様であります。

若し教役者にして、『求めよ、さらば與あたへられん、』との聖約束を、信仰により握り得し事を實感する迄、密室に於て、神と祈禱の角力をとつたなら、公會の席上に於ける彼の祈禱は、直截、簡潔にして、熱誠と信仰とを以て自分と其聴衆の爲に祈禱るに相違ありません。

- |   |                          |    |               |
|---|--------------------------|----|---------------|
| 1 | 馬太傳六章五節                  | 7  | 但以理書六章十節      |
| 2 | 以賽亞書六十六章二節               | 8  | 詩篇百十一篇九節      |
| 3 | 路加傳二十二章四十一節              | 9  | 出埃及記三章五節      |
| 4 | 使徒行傳九章四十節、二十章三十六節、二十一章五節 | 10 | 創世記二十八章十六・十七節 |
| 5 | 以弗所書三章十四節                | 11 | 哈巴谷書二章二十節     |
| 6 | 以士喇書九章五節                 |    |               |

# 牧者

『神の羊の群を牧へこれを牧司ごるに止を得ずして爲さず好みてなし利を貪るために爲さず樂みて爲すべし』

## 善き牧羊者

凡の教役者の大模範なるキリストは、御自身を牧羊者に比へ、『我は善牧者なり善牧者は羊の爲に命を捐つ、……我は善牧者にして己の羊を識る又己の羊に識る、父我を識る如く我も父を識る我羊の爲に命を捐てん。』と仰になりました。

地上の牧羊者が、自分の羊を識つて居る如く、神なる牧羊者キリストは、全世界に散ばつて居る彼の群を知り給ひます。『汝等是我羊、わが牧場の群なり、汝等是人なり、我は汝等の神なりと主エホバ言たまふ。』<sup>2</sup>

亡はれし羊の譬に、牧羊者は、たつた一匹、——即ち其以上に指を屈する事の出

來ない數、——の爲に搜索に出掛けました。彼は一匹居なくなつた事に氣付いた時漫然と檻にある羊群を見渡し、九十九匹居るから何も迷ひ出でた一匹を捜しに行くには當らない、歸つて來たら檻の戸を開けて入れてやらうとは言ひませんでした。夫れ處の話ではない、羊が居なくなるや否や、牧羊者の心は悲と心配とにより滿され檻にある九十九を其儘にして、迷ひし一匹を尋ねに出發しました。夜は如何に暗く又風吹き荒むとも、路は如何に峻しくとも、又搜索は如何に手間取らうとも、彼は亡はれた羊を見出す迄は決して逡巡しませんでした。

彼は、遙か遠くに羊の絶入る計の叫が始めて耳に入つたとき、嘸ぞほつと息をついた事でありましたらう、彼は聲をしるべに或は峻しき山を攀ぢ登り、或は一足踏外せば千仞の谷に落る様な路を通り、自分の生命を堵して捜す其中に、叫声は段々と力なくなり、羊は將に死せんとする状態にある事が解りました。

やつこの事で迷羊が見付かつた時、牧羊者は自分の後に付いて來いと羊に命じましたらうか、又は羊の爲に飛んだ苦勞をしたと云ふので、之を打擲したり、或は自



分の前に驅り立つて歩ませましたらうか、否々、牧羊者は氣息俺々たる羊を自分の肩に乗せ、折角の搜索が無益でなかつた事を喜び、勇んで檻に歸りした。彼が感謝の念と胸中の満足とは、其喜悅の語句によりて明に之を窺ふ事が出来ます。『家に歸へりて其友と其隣の人々を召集めて曰ん、我と共に喜べ、我うしなへる羊を獲たれば也。』<sup>3</sup>

亡はれた罪人が、大なる牧羊者イエスにより探し出された其時は、天も地も共に歡喜して感謝します。『此の如く一人の罪ある人悔改めなば、悔改むるに及ばざる九十九の義人よりは尙天に於て喜あらん。』<sup>3</sup>

大牧者なるイエスは、幾多の小牧者を有し、之に彼の羊や羔の世話を委ね給ひます。ペテロが再び主の奉仕に立歸つた後、キリストが彼に最初に委ね給ひし働は、羔を牧へてふ事でありました。<sup>4</sup> 是はペテロの今迄一向經驗しなかつた働にして、細心の注意と多大の忍耐を要しました。即ち、彼は、少年青年輩及び信仰未熟の人々を導き、知識なき者を教へ、之に聖書を説明し、キリストに事へて、有用な人物に

養成する召を受けたのでありました。然し、今迄のペテロは斯かる業を爲す資格なく又かうした働が重大である事を理解する事も出来ませんでした。

キリストがペテロに尋ね給ふた質問は、實に意味深長にして、主は弟子たる資格と奉仕の唯一の條件を擧げ、『爾我を愛するか、』と仰せになつた。是は缺く可らざる資格であります。たとへペテロが、他の凡の長所を有して居たとしても、キリストの愛なくしては、到底主の群を養ふ忠實なる牧羊者となる事は出来ません。智識仁愛、雄辯、満足、及び熱心等は、凡て善き働の助となります。然し心中にキリストの愛なくば、基督者的奉仕は失敗に了ります。

ペテロはガリラヤ湖畔に於いてキリストより受けし教訓を、一生涯眷々服膺しました。故に彼が聖靈に感じ教會に書贈りしものゝ中に、左の如き勸があります。

『キリストの苦を親しく見て證をなし、且顯れんとする榮に與ることを得る者なる長老たる我、汝等の中にて我と同く長老たる者に勸む、爾曹の中にある神の羊の群を牧へ、これを牧司ごるに、止を得ずして爲さず、好てなし、利を貪るために

爲さず、樂みて爲すべし。又汝等託せられたる者に、主と爲る可らず、羊の群の式と爲べし。汝等牧者の長の顯れん時に壞ることなき榮の冠冕を得ん。』

檻を迷出た羊は、凡の動物中最も意氣地ないものにして、どうしても捜し出して遣らなければ、自分で歸途を見出す事は出来ません。神より迷出た人も、恰も亡はれた羊の如く、自分ではどうする事も出来ず、若し神の愛が彼を救済せずんば、決して自分で神の御許に歸へる事は出来ません。然らば大牧者たるキリストの下に働く牧者たる我等は、同情、悲歎と辛抱の有らん限を盡し、亡はれたる靈魂を捜出し之が爲には如何なる艱難辛苦も喜んで忍耐すべきであります。

今や牧者長キリストの指揮の下に、迷出して行衛不明になつた者を搜索する牧者の必要ありますが、之に當るには、肉體の快樂を棄て、安逸を犠牲にする覺悟がなければなりません。又途を踏み誤つた者に對し、色々心配してやり、神より出づるが如き憐愍と忍耐を示し、相手の者が、種々今日の心得違ひや墮落の顛末、さては失望不幸の物語をする時、之を聽く同情の耳を持たねばなりません。



眞の牧者は、須<sup>すべ</sup>らく己を忘るゝ事を以て精神となし、神の事業の爲には、自分の事は全く思はないものたるべく、或は聖言の宣傳により、又は人の家庭を親しく訪ふ事により、彼等の缺乏、彼等の苦痛、彼等の試練を學びます、且つ人類の苦を負ひ給ふ大なる救主と共に働き、彼等の艱難を分擔し、苦痛を慰藉し、心の饑渴を醫<sup>い</sup>やし、之を神に導かねばなりません。教役者は此働をする時、天使が伴ひます。又教役者自身は、救を得しめん爲に智慧を與ふる眞理の教訓と指導を受けるのであります。

我等の働には、個人的の努力が頗る功を奏するものにして、其は思つた以上のものであります。人々の亡びつゝあるは此事が缺乏して居るからであります。人一人の靈魂の價值は、實に無限であります。キリストがカルバリーに於て十字架に釘き給ひしは、何よりの證據にして、キリストに導かれた一人は、又他の者を導く器<sup>うは</sup>と

なりますから、祝福と救霊の結果は益々増加して参ります。

- 1 約翰傳十章十一・十四・十五節
- 2 以西結書三十四章三十一節
- 3 加傳十五章六・七節
- 4 約翰傳三十一章十五節
- 5 彼得前書五章一・四節

## 個人的傳道

多の教役者の働には、兎角説教する方が多くして個人的に心情を吐露する様な働が少な過ぎます。どうしても、もつと個人的に人を導く働を見ねばなりません。教役者は、基督の様な同情を以て個人的に人に接觸し、永生に關する大問題に對し、彼等の興味を喚起せねばなりません。世には手の付けられぬ様な剛頑な心を有し、こんな人に救主を紹介するは無益の努力であるかの如くに見える人があります。論理や議論では之を動かす事が出来なくとも、個人的傳道に顯はれたキリストの愛は石の心を和らげ、真理の種を根ざしめる事が屢々あります。

傳道とは、説教する事より以上のものを意味して居ります。即ち熱誠なる個人的の努力を意味します。地上の教會に、誤多き男女で成立つて居りますから、此等は訓練、教導し此世に於て神に嘉納せらるべき働をさせ、來世に於ては、榮光と永生



の無上の賜を受くるものとなさねばなりません。茲に於て牧師、——忠實なる牧者が必要となります。彼等は素より、神の民に阿諛する事なく、又虐待する事もなく生命のパンを以て之を養ひ、日毎の生涯の上に聖靈の人心を改變し給ふ力を感じ、常に強き無我の愛を心に蓄へ、委ねられた人々の爲に働く人でなければなりません

大牧者の配下に働く牧者は、時として教會内に起る紛糾、其他各種の好しからぬ事に遭遇する場合もあらうが、かゝる時には、須らく機智を廻らし、キリストの精神を以て働き、之を順調に復さねばなりません。即ち教役者は、或は講壇より、或は個人的い働により、忠實なる警戒を與へ、罪惡は之を譴責し、誤謬は之を矯正せねばなりません。又氣儘な人は、使命に對し異議を挾み、神の僕を誤解し、批評したり攻撃したりします。かう云ふ場合に、教役者の忘れてならぬ教訓は、實に左の聖句であります。『然ご上よりの智慧は、第一に潔く、次に平和、寛容、柔順かつ矜恤と善果みち、人を偏視ず、又偽なきもの也。義の果は、平和を行ふ者の平和を以て種に由て結ぶなり。』<sub>1</sub>

抑も福音宣傳者の爲すべき働は、『イエス、キリストを以て萬物を造りし神の中に、世の始より以來、かくれたる奧義如何を衆の人に悟らしむ』る事であります。もし聖職を奉ずるものにして、献身、克己の最も少い仕事を撰び、單に講壇の人たるに甘んじ、個人的奉仕の働は之を他人に一任するが如き事があるなら、其人の働は決して神に嘉納せられるものではありません。

キリストが死んで迄も盡し給ひし多の靈魂は、適當なる個人傳道の缺乏の爲滅びつゝあります。もし聖職にあり乍ら、牧者の勤に大切なる個人的働を喜ばないものは、全く神の召に背いて居るものであります。

教役者は、時を得るも時を得ざるも、勵みて凡の機會を捉へ、神の事業の前進を計らねばなりません。『時を得る』とは、禮拜の場所や時間の特權や、人が宗教上の問題と話をして居る場合など、好機會を逸せしめぬ様刮目して居る事であります。又『時を得ざる』とは、或は爐邊に、或は野外に、或は路傍に、或は市場にありて臨機應變に人心を聖書の大問題に向はしめ、柔順しく然し乍ら熱誠に、神の要求を

彼等に激勵せねばなりません。此の如き機會は、實に幾度も空しく逸し去らしめま  
すが、此は要するに、時を得ないからこの言譯の下に其機を捉へないからでありま  
す。然し良心に訴へた賢き忠告が、時にどれ程の効果を生ずるか、誰も豫測する事  
は出来ません。聖書に左の如く記してあります。『汝朝に種を播け、夕にも手を  
歇るなかれ其はその實る者は、此なるか、彼なるか、又は二者ともに美なるや、汝  
これを知らざればなり。』<sup>3</sup>真理の種を播くものは、心に重荷を感じ、時には自分の  
努力の結果が、一向見えない場合もありまじやう。然し、若し、何處迄も忠實に働  
いて居さへすれば、必ず其働の果を見る事が出来ます。此事に付き神は、實に左の  
如く仰せになりました。『その人は種をたづさへ涙をながしていでゆけど、禾束を  
携へ喜びて歸り來らん。』<sup>4</sup>

## 家 庭 訪 問

教役者が、講壇から福音の使命を宣傳した時は、其働が始まつた許であります。



尙彼の引續き爲さねばならぬ仕事は個人的に働く事にして、民衆の家庭を一々訪問し、熱心と謙遜を以て彼等と語り、又祈らねばなりません。世間にはこちらから進んで其家庭を訪問し、向上の道を示すに非らざる限り、決して神の言の眞理を傳ふる事の出来ない處があります。然し、此種の働をする者は、キリストの心を以て心となし、主の聖旨と共鳴して居なければなりません。

『道路や籬籬の邊にゆき、強て人々を引來り、我家に盈しめよ、』<sup>てふ</sup>キリストの命令には、澤山の事が含まれて居ります。教役者は親しく、多の家族に接し、之に眞理を教へねばなりません。斯くして神と偕に働く時、神は靈的の力を彼等に賦與し、キリストは彼等を導き、聽く者に深き感動を與ふる言葉を語らしめ給ひます而してパウロと偕に左の如く言ひ得るは、凡の教役者の特權であります。

『是故に我今日なんぢらに證す、凡の人の血に於て我は潔くして與ることなし<sup>あつ</sup>蓋われ神の旨を残す所なく悉く爾曹に宣べたれば也。』<sup>なり</sup>『益ある事は残す所なく<sup>のこ</sup>之を宣べて、或は人々の前、或は家々に於て、爾曹に教へ、神に對ひては悔改め、<sup>く</sup>

主イエスキリストに對ひては信仰すべき事を……示せり。』<sup>6</sup>

キリストは、戸毎訪問をなし、病者を癒し、悲める者を慰め、苦める者を和らげ、悩める者に平和の言を賜ひました。或は嬰兒を聖腕に抱き、之を祝し、疲れたる母達に希望の言を語り、之を慰藉し給ひました。其他何くれとなく、親切と同情を以て、あらゆる人生の不幸と苦痛に接し給ひました。キリストは何時も、御自身の爲でなく、他人の爲に働き、凡の人の僕となり給ひました。されば、主に接觸せし凡の者に、希望と能力を與へ給ふ事が、彼の食物又飲物でありました。而して其聖口より漏るゝ眞理を聽いた男女は今迄ラビ等から教へられた傳説や教理と全く異り、希望が彼等の心に起りました。實際キリストの教訓には、熱誠が籠つて居りましたから、其場限りでなく、聽者の心に何時迄も感動を與へました。

使命宣傳に従事せる我兄弟よ、私の申上げたい事は、民衆の居る處に行つて、之が爲に個人傳道をなし、彼等と親めと云ふ事があります。此仕事は決して、代人では出来ません。又金錢の贈與や貸與で、成功するものでなく、又講壇よりの説教で

も出来ません。家庭に行つて、聖書を教ふる事、——此は實に傳道者の働にして、此働は説教と併び行はねばなりません。若し此事を缺く時は、折角の説教も十中の八九迄は失敗となります。

又眞理を求めて居る者には、是非機おりに協かなひる言を語り聞かさねばなりません。サタンは必ず斯かる人々に誘惑の語を囁きます。若し人を助けんと試みた時、拒絶されても、決して意に介してはなりません。又少しでも先方の利益になりさうに見えるなら、決して失望する事なく、依然働を繼續し、慎重の態度を採り、時を窺ひ或は語り、或は黙し、好く其等の人々を監守し、神の聖前に責任を負はねばなりません。又サタンが色々の計略を廻めぐらしますから、油斷なく警戒し、彼の術中に落ち義務を怠る様な事があつてはなりません。又困難の爲意氣を沮喪せしめず、強烈なる信仰と勇敢なる目的を以て、此等の困難と奮闘し勝利を得ねばなりません。信仰により、又勞力を吝まらずに種を蒔くべきであります。

※  
※  
※  
※  
※  
※



教役者が、人を訪問する時の様子や態度は、極めて大切なものであります。挨拶の仕方如何により、立處に對手の信任を得る事も出来ますし、又如何にも冷淡な素振そびをすれば、向ふでも是は誠意が籠こもつて居ないと感じます。

又貧き人々に接觸する事は、自分を卑下するかの如き考を抱いて働いてはなりません。彼等は、神の聖前に貴きものである事は、何人にも異なる事なきものでありますから、私共もそう思つて働き、私共の服裝の如きも、單純質素のものを着用し、貧民を訪問しても、彼等の身形みなりと我等の服裝とが甚しく懸隔する爲、氣兼ねする様ではなりません。貧民の享有する快樂と云ふものは、大抵甚しく限られたものでありますから、神の教役者は、是非共彼等の家庭に喜樂と光を齎あづからさねばなりません。もしイエスの同情を以て人に接する時には、必ず對手の心こゝろを開かしめ之に道を傳ふる事を得しむるものであります。

1 雅各書三章十七・十八節

4 詩篇百二十六篇六節

2 以弗所書三章九節

5 路加傳十四章二十三節

3 傳道之書十一章六節

6 使徒行傳廿章廿七・廿・廿一節

## 牧羊者の働き

眞正の牧羊者は、群を養ひ、導き、又保護し、其安寧、幸福に關する一切の事物に興味を有し、大に智慧を働かし、凡の者、殊に誘惑に遇へる者、困難に陷れる者及び元氣を失へる者に對し、同情を以て勞はらねばなりません。『此の如く人の子の來るも人を役ふ爲には非らず、反て人に役はれ、又多の人に代て生命を與へ、其贖とならん爲なり。』<sup>1</sup>『われ誠に實に爾曹に告げん、僕は其主より大ならず、又使者は之を遣はす者より大ならず。』<sup>2</sup>『彼（キリスト）は、神の體にて居しかども自ら其神と匹く在るところの事を棄難きことゝ意はず、反つて己を虚うし、僕の貌をとりて人の如くなれり。』<sup>3</sup>『然れば、我等強き者は、強からざる者の懦弱を負て己の心に悦ばざるをも爲すべきことなり。我儕おのゝ、隣の徳を建んために、善をもて之を悦ばすべし。キリストすら、尙おのれを悦ばす事をせざりし、蓋汝を謗

る者の毀謗は、我に及べりと録されしが如し。』<sup>4</sup>

多の働人は、自分達の助を最も多く要する人々と接觸しない爲、其働が失敗に了ります。聖書を手にし、慇懃に求道者を訪問し、『真理とは何ぞや』との問題を考へ始めた人々の胸中に横はる難問は、果して何であるかを學び、細心の注意と、同情を以て、恰も師の弟子に對するが如く之を導き、之を教へねばなりません、又多の者は、今迄誤謬を眞理であると妄信し、之が先入主となつて居りますから、聖書の教理に關し、自分が誤つて居た事を認める時、往々判斷に苦しみ、疑惑に陷る事があります。かうした人々は、最も溫き同情と最も賢き助けを要しますから、好く注意して教訓し、彼等の爲に祈り、又親切を盡し、配慮して之を保護監督せねばなりません。

救靈事業に於て、キリストと偕に働く事は、實に一大特權にして、救主は忍耐と



無我の努力を以て、墮落せる人類に觸れ、罪の結果より之を救はんと求め給ひました。されば、主の聖言を教ふべき主の弟子たちは、彼等の大模範なるキリストに密接に、倣ふべき筈であります。

新傳道地に於いては、多の祈禱と機敏な働が必要にして、又單に説教が出来る人計りでなく、敬虔の奥義を實際に心得、民衆の急用に應ずる人、——即ちイエスの僕としての自分の地位の重要を辨<sup>わきま</sup>へ、キリストが如何に負ふべきかを教へ給ひし十字架を、喜んで負ふ人物が必要です。

又牧師は 信者や求道者と相交はり、世態人情に通じ、意思の働を研究し、相手の才能に應じ、其教を適合すべく、随つて人の性質と需要とを精細に研究する者によりてのみ得らるべき此大慈善の何たるかを學ぶ事が出来ます。

- 2 約翰傳十三章十六節
- 3 腓立比書二章六・七節
- 4 羅馬書十五章一・三節

## 家庭に於ける聖書研究

人に聖書を講義して聽せる事は、天來の思想にして、此方面に於て傳道し得る者は、男女に拘らず澤山あります。又教役者も、斯する事により、進歩發達して、神の丈夫になる事が出来ます。又此方法によりて、神の言は、多數の人に紹介され、教役者は各種の人々と個人的に接觸する事が出来ます。又聖書が家庭内に持込まれ其神聖なる眞理は、深く心の内に沁込みます。斯くて多の人は、自ら聖書を讀み、之を批判する機會が與へられますから、神の教訓に従ふか、拒むか、其責任を負はねばなりません。神は神の爲に盡した貴き働に報を與へずしては置き給ひません。主の聖名によりて爲した努力は、如何に小さき事でも、必ず成功を與へ給ひます。



新に傳道を開始した處では、堅忍不拔の精神を發揮し、其微々たる手始めの状態に失望してはなりません。最微いささかき働が、最大の結果を生ずる事が屢々あります。世人の爲直接に働けば働く程、一層大なる成功を収める事が出来ます。元來個人的の感化と云ふものは、非常に力あるものにして、私共の近く接觸して居る人々の心には目にこそ見えね、大なる感化の印象を與ふるものであります。人は一人が群集に語り、之を一人々々密接の關係を有するものゝ如くに動かす事は出来ません。イエスは人類を罪より救はんが爲、天を棄て、此地上に來り給ひました。故に教役者たるものも、世人に密接し、之に福音を傳へ、單に彼等が教役者の聲を聞く許で無く其手を握り、其主義を學び、其同情を感ずるに至らねばなりません。

我愛する教役者諸君よ！ 説教や講演をする事のみが諸君の爲し得る働き又方法と思つてはなりません。諸君の爲し得る最善の働は、個人的に人を指導、教育する事にして、かくする機會さへあれば、必ず親しく人の家庭を訪ひ、座談の中に彼等をして眞理に關する質問を出さしめ、忍耐と謙遜を以て之に答へなさい。而して此

種の働を、今少し公の性質を帯びた働と結合せしめなさい。聖書研究を授け、家庭を訪問し、其人々や有志の小団体と共に祈り、少く説教し多く教育なさい。

キリストと偕に働いて居る凡の者に、私はかう云ひ度いのであります。爐邊などで、人に接觸し得る處では、必ず其機會を利用し、聖書を開き彼等の前に其大眞理を紹介なさい。卿の成功は、卿の知識や才能には左まで依りませんが、人の心に觸れ得る力量の如何に、大關係があります。人と親しく交はる事により、最も上出來の講演によるより、更に容易に彼等の思潮を變へる事が出來ます。爐を圍み乍ら小人數の人々を相手に、泌々しみととキリストを紹介する事は、ざは付いて居る聽衆を前に控へて、路傍説教を試みる事よりも、又は會館なり教會なりでの講演よりも人をキリストに導く點に遙に成功ある場合が度々あります。

此個人傳道に従事する者は、講壇に立つて聖言を宣傳する教役者と同じく、其働き振が機械的に陥らぬ様注意し、絶へず新知識を追求し、最高の資格を得、聖書に通曉せる人とならん爲、熱誠に努力し、知的活動の習慣を養ひ殊に能く祈り、聖書

の研究に出精せねばなりません。



## 個人的努力の價值

救靈に最も成功ありし人々は、自己の力量を誇らぬ男女にして、謙遜と信仰とにより、彼等の周圍の人々を助けんと務むる人々であります。イエス自らも、此勳をなし、彼が教へんと希望し給ひし人々に接觸し給ひました。御傍に集つた僅の人を相手に、懇々と教訓を施し給ふのを通り掛りの人が、一人、二人と足を停め、耳を傾け、終には一大群集が、此天來の大教師の聖言を、且つ驚き且つ畏れつゝ謹聽するに至りました。

※ ※ ※ ※ ※ ※

## サマリアの婦人

キリストは、會衆が集つて來るのを待つて居給ひませんでした。彼の傳へ給ひし

最大の眞理の或者は、個人に對し語り給ひしものでありました。彼のサマリアの婦に驚く可き眞理を與へ給ひしが如きは、其一例にして、キリストは、ヤコブの井戸の傍に憩ひ居給ひしに、折から水を汲みに來た婦がありました。然るに、『我に飲ませよ』と水を所望し給ひましたから、婦は大に驚きました。主は冷水一杯を要し給ひましたが、同時に此により、彼女に生命の水を與ふる路を開かんと希望し給ひました。

婦は主に對し、『爾はユダヤ人にして何ぞサマリヤの婦なる我に飲ことを求むるや、』と申しました。是は平素ユダヤ人とサマリア人とは、犬猿も啻ならぬ關係であつたからでありました。然るにイエスは、之に答へて、左の如く仰せになりました。『爾もし神の賜と、我に飲せよといふ者の誰なるを知らば、爾われに求めん然らば活水を爾に與ふべし、……凡て此水を飲む者は又渴かん。然ど我與ふる水を飲む者は永遠かわく事なし、且つ我與ふる水は其中に泉となり湧出て永生に至るべし。』<sub>1</sub>

キリストが此一婦人の爲に盡し給ひし努力は、實に大したものでありました。熱誠の籠つた主の雄辯に、深く打たれ、自分は井戸に水を汲みに來たのであつた事も全く忘れ、急いで町に行き、皆の者に、『我すべて行し事を我に告げし人を來りて見よ、此はキリストならずや、』と叫びました。

此報知を聞いた多の人々は其仕事を抛棄て、ヤコブの井の傍に憩ひ給ひし旅人なるイエスに見んとて來り、色々なる質問を出し、今迄了解に苦んで居た問題の説明をして戴き、熱心に之を謹聽しました。彼等は恰も暗黒に一道の光明を認め、夜が明けて、朝日を眺めたかの如き心地がしました。

神の僕は即座に活動し得る準備を常にして居らねばなりません。愛する兄弟等よ

！神に奉仕し得る機會は、時々刻々卿の前に開かれ、絶えず來りては又去ります故に之を最も善く利用する用意を取逃がしてはなりません。誰かの耳に生命の言を語る其機會は、再び來ないかも知れません。故に何人も『願くは我を允し給へ』と申譯を云ふ事なき様にし、決してキリストの測る可らざる富を、他人に知らしむ機



會を失つてはなりません。一旦失なつた機會は、永遠に過去り、再び取戻す事の出  
來ないものであります。

1 約翰傳四章七一三〇節

## 働きの區分

眞理の成功に對し、重大にして且つ思も寄らぬ妨害は、我等の教會其物の中に見出されます。例へば、未信者に我等の信仰を紹介する爲に特別の催でもある時、教會員は我不關焉と云ふ態度で、更に乘氣のりきにならず、一切の重荷が教役者の双肩にのみ負はされる事が屢々あります。此理由で我最も力量ある教役者の働も、時として左迄の好成績を擧げる事が出来ない場合があります。説教にも些の申分なく、民衆が要して居るあつらへむき 詭向きかうの使命が宣傳されしに拘らず、一向靈魂の收穫をキリストに献ずる事の出来ない事があります。

既に幾人かの信者が居る處で働く時、教役者は先づ教會員を教練し、シツカリとして其働をして貰へる様になし、未信者傳道はこの次にした方が善くあります。即ち個人的に教會員を導き、彼等をして自ら一層深い靈的經驗を自覺せしめ、而して

後他人の爲に働かしめねばなりません。斯して信者が祈禱により、又努力により、教役者を支えて行く様になれば、彼は着々成功して行く様になります。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

教會員が、銘々負された責任を自覺するに至らない限り、各所の教會に於て、是ぞと云ふ手答ある働は舉りません。教會員各々、自分の靈魂の救は、自分の努力に關する事を悟らねばなりません。靈魂は決して、手を拱こまねいて居て救はれるものでなく、又教役者は人を救ふ事が出来ません。但し彼は神が其民に光を與へ給ふ徑路となる事は出来ますが、光が與へられた後は、其光を我ものとするのは民の分にして彼等は今度之を又他の者に輝す爲に盡すのであります。(教會の證第二卷二二頁)

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

### 教會助手を教育する事

教役者は語る事も、働く事も、祈る事も、一切自分一人でやる事が、彼の義務で



あると心得てはなりません。須らく各教會に於て、自分を助ける人を教育し、種々の人々をして、交はる／＼司會をさせたり、聖書研究をさせたりして、神が彼等と與へ給ひし力量を活用せしめ、同時に彼等に働人としての實地訓練を受けしめる事が出来ます。牧者は或點に於て、工場に於ける職工長の如く、又は幾多の水夫の上に立つ、船長の如きものにして、部下の者は、各自に充行<sup>あてが</sup>はれた仕事を誤りなく几帳面<sup>ちやうめん</sup>になす様に監督し、何か非常の場合のみ小さい事に手を下す筈のものであります。

『或る大製粉所の持主が、或日の事工場を見廻つて居ると、折しも職工長が器械場で、單純な修繕をやつて居たが、其方面に働く六人の職工が手を拱いて之を傍觀して居るのを認めました。工場主は事實を取調した後、職工長を事務室に呼び、免職を申し渡しました。職工長は大に驚き、其理由を糺しましたが、工場主の云ふには、「私は六名の職工を絶えず働かせる爲、貴下を職工長に任じ、其の監督を命じました。然るに貴下は、一人前丈の働をして居たが、六名の者は何もして居なかつ

た。貴下のやつて居た事は、六人の職工中の誰にでも出来る仕事で、何も貴下が罷々手を下すに及ばない。私は六人の職工を怠け<sup>なま</sup>させる貴下に、七人分の給料を支拂ふ事は出来ない』と。

『此話は、當嵌る場合と當嵌らない場合がありましよう。然し多の牧師は教會員全体を各方面の働に活動せしむる術を知らず、又はさうしやうと試みません。若し牧師が部下の群を常に活動させる爲、一層の注意を拂ふなら、必ず其成績は一段と進み自家の修養や傳道訪問等の時間が澤山出来、尙軋轢の多の原因を未然に防ぐ事が出来ます。』

或人々は経験がない爲め、過をする事もありましよう。然しさう云ふ場合には、親切に教へ、導いてやらねばなりません。かくして牧師は、幾多の男女に責任を負ふ可き教育を施し、働人が少くて困つて居る善き働の缺陷を補ふ事が出来ます。今や責任を以て仕事に従事する人々が入用であります。而して彼等の要する経験を得させる最善の方法は、一生懸命に活動せしむる事であります。

## 他を救はんとして自を救ふ

働く教會は發展する教會であります。教會員は、他人を助ける事により、刺戟を感じ、強壯な力を受けます。私は左の如き物語を読みました。

一人の旅人が、大雪に遇ひ、手足が凍つて、感覺を失ひ、到底凍死するより外なものの覺悟を極めて居ると、折しも人のうめき聲が聞えました。云ふ迄もなく、凍死に瀕しつゝある旅人の叫でありました。彼は自分の苦境を忘れ、彼に同情し、其救済に取掛り、遭難者の氷の如くなつて居る手足を揉み、一生懸命になり彼を立たせやうと致しましたが、到底も立てない事を見て、今迄自分でも歩く事の出来なかつた道を負つて、やつと安全の地點に連れて行きました。其時急に胸に浮んだ事は將に凍死すべかりし自分も、他人を救ふ爲に努力した結果、自分を救つた事實でありました。即ち他人を助けんと熱心に努力した爲、自分の血管に凍つて居た血が、活躍し始め、體中を温めたのであります。



他を助ける事により、自ら助けを受くる事の教訓は、斷へず若い信者に説聞かせ或は訓戒により、或は實例により、彼等の信仰經驗に最善の結果を生ぜしむる様教へ、引込み思案の人や、永生に入る道は辛いものであると思ふ様な人には、他人を助ける爲に働せねばなりません。斯かる努力は、神よりの光を求むる祈禱と結合すれば、彼等の胸中に、恩恵の活かす力を顯しく感じ、一層熱烈に神を慕ひ、彼等の全クリスチャン生涯は、一層現實に、一層熱誠に、一層祈禱り深くなります。

又私共は、此世に於ては、賓旅又寄寓者にして、更に愈<sup>まさ</sup>れる所、すなはち天に在る所を慕つて居るものである事を忘れてはなりません。苟しくも奉仕の契約に於て主と一致した者は、是非共救靈事業に於て、主と共に働く可き義務があります。

教會員をして、平日忠實に其職責を盡させ、安息日に其經驗を語らせるなら、集會は機に協ふ糧となり出席者の凡に新しき生命と元氣とを與へます。

神の民が、罪人の救の爲に働き給ひしキリストの如き働き振りの必要を認める時安息日の集會で述べる證言は、力を以て滿され、一同喜び勇んで他の人の爲に働いて

得た経験の貴さを證するに相違ありません。

※ ※ ※ ※ ※ ※

### 教會は神聖なる信託なり

キリストは昇天し給ひし時、教會及び此に關係せる凡の事柄を、神聖なる委託物として弟子等に遺し給ひましたが、教會の働と云ふものは、教役者許や、少數の重立つた人々にのみ委<sup>ゆた</sup>ねて置く可きものでなく、凡の教會員は如何なる時も、如何なる事情の下にも、神の道の爲に最善を盡して働く爲、主と共に嚴肅なる契約を結んだ事を感じ、各自其立場より、其分を盡し、責任を負はねばなりません。若し凡の教會員が、個人的の責任を深く感ずるなら、必ず靈的方面に一層の進歩を見る事が出来ます。彼等の双肩に懸かる嚴肅にして重大なる責任は、彼等をして屢々能力と恩恵とを神に求むる様に導くものであります。

教會の真相は、其標榜する深遠なる信仰の告白によるものでもなく、或は教會名

簿に記入してある名前でもなく、忠實にして忍耐深い働人の一隊により、實際キリストの爲に盡して居る事によりて、其評價を定める事が出来るものであります。又個人的にして無我の努力は、説教や信條以上に、キリストの道の爲に効力あるものであります。

又教役者は教會員が靈的の成長を就げる爲には、是非主が彼等の上に置き給ひし重荷、——即ち人を真理に導く重荷を負はねばならぬ事を教へねばなりません。而して責任を盡して居ない人があるなら、之を訪問し、共に祈禱り、其人が活動する様に仕込まねばなりません。決して教會員をして、萬事を教役者に一任せしむる様な惡習に陥らす事なく、彼等が其力量を用ひ、周圍の人々に真理を宣傳する様に教へねばなりません。彼等がかうした働をする事により、天使等の協力を受け、又自分達の信仰を増す經驗を得、且つ神に強く依縋る事を得しめます。



## 教役者の妻

教役者の妻が、缺乏や迫害を耐忍たえしのんだ時代もありました。夫が投獄されたり、時としては死に處せられた事があつても、克己犠牲の精神に充てる婦人等は、夫と其苦難を配ちましたから、其報酬も、又夫に與へらる其れと同様でなければなりません。ボールドマン夫人の如き、又チャドソン夫人の如き、孰れも其良人と共に眞理の爲に患難を嘗めた婦人でありました。彼等は、其良人が暗黒裡に彷徨せる人々に光を照し、神の言の隠れたる奥義を啓はす爲に働を助ける爲に、家庭の團欒も、親しき友の交も、一切之を犠牲に供して顧みず、何時如何なる危険に遭遇するやも計られざる生活に甘んじて居りました。

救靈と云ふ此一事が、彼等の大目的にして、此が爲には、喜んで苦難を忍びました……………。

若し教役者の妻が、夫と共に旅行する場合には、自分丈の耳目を悦ばせる特別の所に行つたり、猥りに人を訪問したり、招待を受けたりする事をせず、良人と共に働き、善を爲す事に共に關與せねばなりません。又家政に差支を生じなければ、喜んで夫と同伴し、救靈事業の手傳をなすべく、謙讓と同時に犯す可らざる自重心を以て周圍の人々に偉大なる感化を與へ、且つ克く自己の分を盡し、自己の十字架と公の集會や、家庭禮拜及び爐邊の會話に於ける重荷を負はねばなりません。世人は此事を期待して居ります、又斯く期待するは當然であります。然るに此期待に背くなら、良人の感化は半以上破壊されて仕舞ひます。

教役者の妻は、自分が爲<sup>す</sup>る氣なら多の仕事を爲す事が出来ます。若し犠牲の精神に富み、靈魂を愛する熱情があれば、善事を爲すに、良人と殆んど同じ分量の働が出来ます。

婦人の働人は或る場合、殊に女性の間に於ける了解や接觸の點に於て、男子の教役者では不可能の事を能して行く事が出来ます。

教役者の妻の責任は、輕々しく棄つべきものでなく、又棄てる事の出来ないものであります。神は教役者の妻に貸與し給ひし元手もとてを、其利息と共に要求し給ひます去れば其夫と心を協せ、熱心に又忠實に、靈魂を救ふ爲に働かねばなりません。勿論自分勝手の希望を述べたり、夫の働に對し興味を缺いて居る様な事を口に出したり、又は故郷の事許り想つたり、其他不満足な感情を顯はす様な事があつてはなりません。

苟いやしくも教役者の妻たるものは、かゝる自分を中心にした感情を一切棄て、終生唯一の目的を定め、不撓不屈の精神を以て之を貫徹せねばなりません。而して若し此が自分の嗜好や感情と抵觸する場合には、善を爲し、人々を救ふ爲に喜んで一切を犠牲に供する覺悟がなければなりません。

教役者の妻は、祈禱深き献身的生涯を送るべき筈であります。然るに信仰はして居ると云ふものゝ、毫も自己の十字架を負ふ事もせず、克己も努力もしないで安閑あんかんと日を送るものも間々あります。かう云ふ人々は、神より力を受け毅然として自立



することなく且つ個人的責任を負はず、概して他人を手頼とし、自己の靈的生命も他より受けつゝあります。もし彼等にして嬰兒の如き信仰を以て神に信賴し、其の嗜好はイエスを中心とし、活ける葡萄樹なるキリストより其生命を受けらるなら、彼等の爲し得る善事の量は大したものであります。又他人に多の助を與へ、良人の片腕となり、大に効を奏し、最後に大なる酬を得、『善<sup>ぜん</sup>且<sup>かつ</sup>つ忠<sup>ちゅう</sup>なる僕<sup>しもべ</sup>』との讃辭は最も妙<sup>たみ</sup>なる音樂の如くに耳に響くに相違ありません。而して『汝<sup>なんぢ</sup>の主人の喜<sup>よろこび</sup>に入れよ』との聖言は、貴き靈魂を救ふ爲に忍んだ凡の艱難辛苦に對し千倍も償となりま  
す。(教會の證第一卷四五―四五三頁)

もし既婚の教役者が、其妻を家庭に残し、子女を監督せしめ、自分 外の働に行  
くなら、其妻たり母たりは、夫なり父なりの働と少しも異らない重大の仕事をして  
居るのであります。一方は外にあつて傳道に活動し、他は家にあつて矢張傳道に従

事して居ります。又此家庭傳道者の氣遣、苦勞、重荷は夫たり父たりの其れよりも遙に大なる事が屢々あります。母の働は實に嚴肅にして重大なるものであります、——即ち子女の意思、品性を陶冶し、此世に在りて有用の人物たらしめ、永遠未來の生涯に適する様躰しづけるのであります。

外で働いて居る夫は、時々人から譽を受ける時もありまじやうが、家庭で奮闘して居る妻は、誰からも禮一つ云はれないかも知れませんが、もし子女の幸福を増進せんが爲に最善を盡し、彼等の品性を大模範キリストに倣ならはしめんと努力すれば、天使は彼女の名を世界に於ける最大なる宣教師の一人として記録に載せます。

※ ※ ※ ※ ※

教役者の妻は、もし自分の心の内に常に神の愛を保つて居るなら、良人の重荷を軽減するに與つて力あるものであります。或は子女に聖書を教へ、經濟と深慮を以て家庭を治め、良人と協力し、子女に節儉の美德を養成し、克己の實を擧ぐる道を教ふる事が出来ます。

## 家庭に於ける教役者

聖書を教ふる人の家庭生活は、彼が平素人に教ふる真理の實例たらん事は、神の期待し給ふ所であります。一体、其人となり如何は、其説く所のものより、遙に大なる感化力を有するものにして、日常生活に於いて、神を敬ふ事は公の證に力を與ふるものであります。忍耐、堅實及び慈愛は、説教では人を感ぜしむる事が出来ない人の心に、感動を與へる事が出来ます。

教役者の義務範圍は、頗る廣く、近きもあり遠きもありますが、彼の第一の義務は、自分の子女に對するものであります。されば、決して自分の小兒の要する<sup>しつけ</sup>躰を怠る迄に、外部の働に忙殺されてはなりません。

彼は家庭の義務を輕視するかも知れませんが、實は個人の幸福も、社會の安寧も其基礎は家庭にあります。世の男女の幸福、及び教會の成功は、主として家庭の感



化に依るものにして、永遠の福利は、日常生活の義務を正當に果す事に關與して居ります。而して世の切に要するものは、大思想家より寧ろ家庭にありて祝福を齎らす善人であります。

教役者は、外界で盛に活動するから、内輪うちわの事を等閑に付すと云ふ言譯いひわけは成立ちません。自己の家族の靈的幸福を、第一に顧みなければなりません。最後の審判の日に、神は教役者に對し、養育の責任ある家族の者を、キリストに導く爲何をしたかを尋問し給ひます。如何程他人の爲に盡したからと云ふても其は自分の子女に對し、神に負ふ負債を償却するものではありません。

教役者の家庭には、實行的宗教に對し、有力なる説教となるべき一致がなければなりません。教役者は、其妻と心を協せ、家庭に於ける義務を忠實に果し、指導、訓戒其宜よろしきに適かなふ時は、教會の働に對し更に成功者たらしめ、且つ家庭以外に於ける神の事業を遂行する上に、益々果はかが行きます。斯くて地上の家族は、即ち天の家族となり、其感化を遠に及ぼし、善を爲すの一勢力となります。

之に反し、其子女を我儘、放埒に育てる教役者は教壇に於ける働の感化が自分の子供の不始末により傷けらるゝ事を見出します。苟且かりそめにも、自分の家族を治める事の出来ない人は、神の教會を本式に牧し、色々な紛糾沙汰の起らない様に導いて行く事は出来ません。

### 家庭に於ける禮儀

教役者はやゝもすれば、日常生活の些事に對し、相當の注意を拂ふ事を爲さざる危険があります。教役者は、家族に對し、親切に語り、又鼓舞獎勵の辭を呈する事を忽ゆるがせにしてはなりません。教役者なる我兄弟よ、貴下は家庭にありて、暴々あらうしく振舞ひ、不親切、又無禮の行爲を示しますか、萬一そんな事があるとすれば、貴下の標榜する所が、如何に高潔であつても、貴下は神の誠を破つて居る者であります。又如何に熱心に他人に傳道しても、もし貴下の家庭生活に於て、キリストの愛を顯はす事が出来ないなら、貴下の爲に定められた標準に達しない事の甚だしきもので

あります。又神聖なる教壇を下りた後に、暴い語を吐いたり、諷刺あてこすりを言つたり、又下らぬ戲談くだなど言つて打興する様な人は、キリストの代表者であると思つてはなりません。かゝる人の心の中には、神の愛がなく、只管自己を愛し、自己を尊いものとなして居ります。随つて神聖な事物を重んじて居らぬ事を自分から廣告して居る様なものであります。又キリストは、斯の如き人と偕に居給ひません、而して彼自身も、胸中に、現代の眞理に對する莊重なる使命の重荷を毫も感じて居ません。

教役者の子供は、或る場合に於て、世界中で一番躰の行届かない子供であります。と云ふのは、父親が兎角不在勝の爲、自然子供が、好き勝手な仕事や娛樂を選ぶからであります。もし教役者が、男の子を有するなら、決して之を全然母の手にのみ委ゆたねてはいけません。是は母親にとりて、重過ぎる責任でありますから、是非父親が子供の友となり、惡友などの交際を防ぎ、有爲の人物に養成する事が大切であります。事によると母親自身が自制し難い場合もありしやう、若し夫が、此事に氣が付いたら自ら一層の重荷を負ひ、自分の子を神に導く爲全力を注がねばなりません。



又子女を有する教役者の妻は、自分の家庭こそ、自分に取りて一個の傳道地と心得、不撓不屈の精神を以て働き、其結果は永遠に亘り持續すべきものである事を辨<sup>わきま</sup>へ、奮闘せねばなりません。自分の子供の靈魂は、異教徒の靈魂と其價值に於いては毫も變りはないではありませんか？ 然らば深く之を愛護せねばなりません。斯くて彼女は家庭宗教の實力と優秀とを世に示す大責任を負はされたものであります。故に決して、感情によらず、主義の上に立ち、神が自分の助力者である事を自覺して働き、自家の使命を果す妨となる何ものをも許してはなりません。

キリストと密接に交はつて居る母の感化は無限の價值を有して居ります。斯かる婦人の愛の奉仕は、家庭を一個のベテル（神の家）となします、又キリストは、彼女と働き、日常生活のありふれた水を、天の葡萄酒に變化し給ふのであります。斯くて其子女は、此世に於ても來らんとする世に於いても母親の福祉となり又榮譽となる可く成長致します。

## 『我が羔を牧へ』

キリストが昇天の少し前に、ペテロに與へ給ひし命令は、『我が羔を牧へ、』<sub>1</sub>でありました。而かも此命令は凡の教役者に與へられたものであります。又キリストが、其弟子に對ひ、『孩提を我に來らせよ、彼等を禁しむる勿れ、神の國に居るものは斯の如き者なり。』<sub>2</sub>と仰せ給ひし時、主は此事を各時代の弟子に對し語り給うたのであります。

年若い人々の靈的要求を顧みない事により、真理の爲に多大の損失を招いた事があります。故に福音宣傳者は、會衆中の少青年と親しく交はらなければなりません。然るに此事を喜ばぬ教役者も少くありませんが、かゝる怠慢は、神の聖前に罪であります。又我等の信仰に關し相當の知識を有して居ても、未だ曾て神の恩惠の力に觸れない青年男女が澤山あります。然るに神の僕と稱する者が、彼等の状態に無頓

着にして、荏苒月日を過す事がどうして出来ましようか、若し彼等が警告を受けずして、自己の罪により死ぬならば、彼等の血は警告をなさざりし守望者ものみの手に求められます。

何故に我黨の少青年に對する働が、最高の傳道事業の一として認めないのでありましようか、是の事業は極めて細心の注意と、用意の周到と、天來の智慧に對する最も熱心なる祈禱とを要します。元來青年は、サタンが特別の攻撃をする標的であります。然しイエスを愛する念に充された心より溢れ出づる同情は、彼等の信任を得、敵の多の罟より救ふ事が出来ます。

青年は、時々機に觸れて與へられる注意や獎勵以上のもの、即ち念の入つた、祈禱の伴つた注意深い助力を要します。されば愛と同情に満ちた者のみが、無頓着に見える青年の心を捉とらへる事が出来ます。勿論、凡に對し同じ方法で當る事に出来ません、神は其人の性質に應じて働き給ひますから、私共も其心得で働かねばなりません。又兎角外見で人を判斷する爲め我等が空しく閑却して仕舞つた青年の中に



は、將來教役者となるべき最善の材料を有し、面倒を見てやり甲斐のあるものが度々あります。兎に角、如何に年若き人々を待ふかの問題を、もつと深く研究し、人心を取扱ふ事に要する知識の爲に一層祈らねばなりません。

### 小兒に對する傳道

適當な機會ある毎に、イエスの愛の物語を小兒等に繰返して説き、又説教毎に其一小部分を子供の利益の爲に割き度いものがあります。キリストの僕は、小兒と永久の友となり、彼等をして聖書の知識に一層通曉せしむる爲機會を失つてはなりません。此はサタンの奸計を防遏する點に於て、普通に想像する以上の効力あるものであります。若し小兒が早くから神の言の眞理に通じて居ると、不敬虔に對する防禦線が張られ、彼等は聖書に、『斯<sup>か</sup>く記<sup>し</sup>られたり、』の語を以て、敵に對峙する事が出来ます。

小兒や幼年者に教訓を與ふる人々は、長たらしい話を避けねばなりません。簡單

にして要領を得た話は、聴衆を喜ばせると同時に、氣持よい感化力を有するものがあります。もし言はなければならない事があれば、一度に澤山言はず、度々にした方がよくあります。興味ある短話を、折にふれ度々聽かせゝ事は、一時に凡の訓戒を與へるよりも遙かに有益であります。兎角に長い話は、若い人々の氣力を疲勞させます。又餘り多く語る事は彼等をして靈的の教訓すらも厭ふ様にならせる事は、丁度過食が胃を疲らし食慾を減じ、爲に食物を嫌がらせるに至ると一般であります。教會に對する教訓、特に少年に對するものは、『いましめ誠命いましめにくわ誠命くわを加へ、のり度にのり度を加へ、こゝ此にもすこ少しくかしこ彼處にもすこ少しく』教へねばなりません。要するに小兒を天に導くに無理やりにせず、最も手柔かに取扱はねばなりません。

#### 少年の感情を察知せよ

私共は、少年の身になつて考へ、彼等の喜び、悲み、奮闘及び勝利に對し、同情を寄せん事を努めねばなりません。イエスは、悲める者、罪ある者を避けて、天に

留り給はず、罷々<sup>わざ</sup>地上に降り、墮落せる人類の弱點、苦痛及び試練を親しく觀察し私共の居る處迄出向き、私共に接觸して、向上せしめ給ひました。斯の如く、少年を導かんと欲せば、彼等の居る所へ此方から進んで行かねばなりません。又少年の弟子等が誘惑に負けた時は、先輩者は決して之を手厳しく責めたり、又は彼の奮闘に對し冷淡であつてはなりません。須らく自分も誘惑者の攻撃を拒ぐに力が足りなかつた場合が度々あつた事を記憶せねばなりません。而して自分も、他の人が偕に居て呉れる事を冀<sup>こひねが</sup>ふ如くに、此等羔の群に接するに忍耐を以てせねばなりません。神は一番強い人でも、他の同情を欲する様に私共を造り給ひました。然らば、小兒が同情を要する事は如何許りでありましよう、よし言語を掛なくとも、同情の眼を灌<sup>そそ</sup>ぐ丈でも、試練に疲れて居る小兒を慰め、力付ける事が度々あります。

イエスは、凡の彷徨へる者に對ひ、『わが子<sup>こ</sup>よ汝<sup>なんぢ</sup>の心を我<sup>われ</sup>にあたへよ。』<sup>3</sup>『背<sup>そむ</sup>ける諸子<sup>こどもら</sup>よ、我<sup>われ</sup>に歸<sup>かへ</sup>れ、われ汝<sup>なんぢ</sup>の退違<sup>そむき</sup>をいやさん。』<sup>4</sup>と招き給ひます。

青年は、イエスの愛なくして眞正の幸福を味はふ事は出来ません。主は、道に迷



ひし者を憐み、同情を以て其告白を聴き、其悔悟を受入れんと待つて居給ひます。  
又主は、母親が、嬰兒が彼女の愛を感じて微笑するのを注意するが如くに、青年等より感謝を捧ぐるのを期待して居給ひます。又大なる神は、私共に神を父と呼べと教へ給ひます。而して神が、如何に熱心に、又柔しく、私共の凡の試練に對し、同情して居給ふかを了解せしめんと切望し給ひます。『エホバの己をおそるゝ者<sup>もの</sup>を憐み給ふことは、父<sup>ちち</sup>が其子<sup>そのこ</sup>をあはれむが如し。』よしや母親が自分の子を忘れる様な事があつても、神は己によりたのむ者を、一人でも忘れ給ふ事はありません。

### 少年をして教會の働に關らしむべし

少年等が神に服従するに至つたからと云つて、彼等に對する私共の責任が無くなつたわけではありません。是非彼等をして主の働に興味を持たせ、主の御事業の爲に盡すべき事を期待し給ふ事を悟らしめねばなりません。どれ丈の仕事をなさせねばならないかを示めし、少年にも其一部分を擔當せよと勧める許りで足りません。

必ず主の爲に如何に働くべきかを教へ、人をキリストに導く最善の方法に關する知識を與へ、之を訓練せねばなりません。彼等に、靜肅に、且つ故意わざとしからぬ方法で、同輩を助ける道を教へなさい。傳道事業の各方面を組織的に計畫し、少年輩をして之に關與せしめ、且つ然る可き訓戒と助言とを與ふる時は、必ず神の爲に働く方法を學びます。

諸君は徒らに傳道集會で長い説教をする事により、彼等の感興を惹起し得るものと想像してはなりません。是非生ける興味を感ぜしむる道を計畫し、少年をして毎週如何なる事をして救主の爲に盡し、如何なる成功をしたかを報告させるが如きは蓋し善き工夫であります。かう云ふ風にすれば、傳道集會は決して乾燥無味の集會となる慮はありません。又興味が充滿するから、自然多の出席者を得る事が出來ます。訓練、組織其宜しきを得た幼年の力量は、我等の教會に要する所のものであります。幼年等は其生々した元氣を以て、必ず何かを爲すものであります。此潑刺たる元氣を善導しなければ、少年自身の靈性を毀損する許りでなく其交友にも害を及

ばすものであります。教訓を施す者の心と教訓を受くる者との心が共鳴し又前者は後者の多の誘惑に遭遇するものである事を記憶せねばなりません。私共は、兎角幼年者の有する好しからぬ品性は、生得權として與へられたもので、而も此生得權の結果として、實に多の誘惑が彼等を襲ふかを悟るに鈍いものであります。

キリストの下に働く牧者が、其の群の羔に對する保護と注意とは、彼の『善き牧者』と題する名畫によりてよく説明されてあります。即ち其畫には、牧羊者が先に立つて行み、其跡から羊が少しも間をあけず附隨つて居ります。又牧羊者の腕には助なき羔が抱かれて居りますが、母の羊は安心して牧羊者の側に歩んで居ります。イザヤはキリストの働に關し、『主は牧者の如く其群を養ひ、其臂にて小羊をいだき、之を其懷にいれてたづさへ……給はん。』と申しました。

羔は、日毎の糧以上のもの、即ち保護を要しますから、絶えず能々注意して、之を顧みてやらねばなりません。もし迷ひ出だしたものがあれば、直に之を探索せねばなりません。イザヤの譬に、實に適切にキリストの群を牧ふべき牧者が、如何に



自分の保護の下に置かれた者を顧みるべきか、其愛の奉仕をよく代表して居ります  
教役者諸君！ 試練に悩んで居る青年の前に門戸を開放し、個人的努力により彼  
等に近づきなさい。罪惡は四方八方から彼等を招いて居りますから、彼等の生活を  
向上させるに助となる事柄に、彼等の興味を惹起せらるゝ様に努め、諸君は決して  
高く止つて居てはなりません。彼等を爐邊に招き、家庭の禮拜に列らしめなさい。  
神の私共に對する要求は、天に達する途を人の注意を惹く様、氣持よく爲る事であ  
る事を忘れない様にしたいものであります。



我等は幼年者をして同輩を助けしむる様教育せねばなりません。斯くすれば、彼  
等は經驗を得、將來更に大なる範圍に活躍する献身的の働人となり得る資格を具ふ  
る事が出来ます、又多の人々は、最も單純にして、且つ小規模の方法により之を導  
く事が出来ます。

世から最も力量ある人物と認められ崇められた者、智者、學者にして、神を愛する者の誠心より湧出づる單純なる言により、元氣付けられる事が屢あります。……神の息子、息女の誠實な言語が、ありの儘の單純で語る時は、長らく鎖されて居た心の戸を開くものであります。(教會の證第六卷一一五頁)

テモテは小兒の時から聖書に通じて居りましたが、此知識は、彼を包圍する惡感化や義務の遂行より快樂を求め又我慾を満足させんとする誘惑に對し、安全なる防禦となりました。我等の凡の子供の要するものは、此種の防禦にして、兩親たるもの及びキリストの大使たる者は、小兒をして、適當なる教訓を受けしむる事を以て此働の一部分とせねばなりません。(教會の證第四卷三九八頁)

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1 約翰傳廿一章十五節 | 4 耶利米亞記三章廿二節 |
| 2 馬可傳十章十四節  | 5 詩篇百〇三篇十三節  |
| 3 箴言廿三章廿六節  | 6 以賽亞書四十章十一節 |

## 病者に對する祈禱

福音の心髓は、要するに『恢復』であります。故に救主は、其僕等が病者、望無き者、及惱める者に命じ、主の聖力にたよらしむる事を望み給ひます。神の僕は、神の恩恵を人に傳達する徑路にして、神は彼等を通して、神の治癒の力を發揮せん事を希望し給ひます。然れば信仰の腕により病苦の人々を救主に導く事は、神の僕したがの爲すべき仕事であります。随つて彼等は常に、神に接近し、自分の言行の上に、神の語を實現せしめ、神が彼等を用ひて、靈肉共に其癒を要する人々を幸福ならしむる器うつはとなし給ひ得る様にせねばなりません。

病者と共に祈禱り、彼等を助けて信仰の綱を握らせる事は 私共の特權にして、天使は斯くして人の苦痛を救はんと奉仕せる者に密接して之を助けます。病者を顧み、彼等の注意を神に屬する事物に集注せんと努むる献身的のキリストの大使は、



永遠に涉り持續する事業を成功しつゝあります。且つ彼がキリストを信じ、神の聖約束を受入れて得たる希望を慰藉の材料として病者に接すれば、自分の靈的經驗は彌<sup>い</sup>が上にも豊富になり、其力を増加します。

絶間なく神の律法を犯した結果として、疾病に苦しみ煩悶する多の人の良心が目醒め『主<sup>しゅ</sup>よ罪人なる我<sup>われ</sup>を憐<sup>あは</sup>れみ、我<sup>われ</sup>を汝<sup>なんぢ</sup>の子となし給<sup>たま</sup>へ。』と叫び出しますが、信仰篤き教役者が、慙く苦しめる者に對し罪を悔ゆる者に對する唯一の希望、即ちキリストの助を仰ぐ者に、必ず救濟され平安を見出すべき事を告ぐる好機會は、蓋し此時であります。かく謙遜と慈愛とを以て希望の使命を渴望して居る者に、福音を紹介する者は、實に人類の爲に自己を棄て給ひし主の代言者であります。彼が機<sup>おり</sup>に適ひたる語をかたり、又は祈禱を捧げて病床に横はる者を助け慰むる時、イエスは茲に働き給うて、病者が此等の慰藉を我物となすを得しめ給ひます。即ち神が人の唇を通して語り給ふのでありますが、之を聽く者の心に觸れざるを得ません。慙て茲に、神人の接觸を見る事が出來ます。

教役者は實驗の上に、キリストの恩恵の力は人を和らげ、健康、平安、及び喜悅の充實を與ふるものである事を了解し、キリストこそは、疲れたる者又重を荷ふ者を招き、之に平安を與ふる御方である事を知り、人に靈的の祝福を頒<sup>わ</sup>つ爲に、神より任命されし者の周圍には、絶えず救主が之を愛護し給ふ事を忘れてはなりません。此事を記憶して居ると、信仰は一段の活氣を添へられ、一層熱心に祈る様になります。

恚くして彼は、彼の助を求むる者に健康を與ふる神の眞理の力を願ち、キリストが行ひ給ひし治癒の聖業を語り、病者の心をキリストに導き、主が光又生命にして慰めと平和をも與ふる大醫なる事を示し、救主は彼等を愛し給ふが故、決して失望せず、全然主に降服しさへすれば、其恩恵に浴し得べき事を教へねばなりません。又神の聖約束を信賴すべき事と、此約束を賜ひし御方は、人類の最善又最も誠なる友である事を認むる様勧め勵まされねばなりません。斯く心を天の方に向けんと努力する時、癒の方法を知り給ふ主の同情を想ふ事が、病者に安靜の感じを與ふる事をする時、癒の方法を知り給ふ主の同情を想ふ事が、病者に安靜の感じを與ふる事を

發見します。

癒し主キリストは、必ず病室に臨在し、單純無垢の信仰より出づる祈禱の一言一句に耳を傾け給ひます。今日の弟子たちも古の弟子達と毫も變らず、病者の爲に祈らねばなりません。『信仰しんかうの祈禱いのりは病者びやうしやを救すく』ひますから、疾病は本復致します。

聖書を見ると病氣回復に對して、特別の祈禱に關する教訓がありますが、此種の祈禱を捧ぐる事は、最も嚴肅なる行爲にして、深き考慮なくして、輕々しく行ふべきものでありません。病者の癒を祈る多の場合に、所謂信仰と稱するものが其實推定に過ぎない事があります。

又多の人は、放縱生活の結果、自ら疾病を招きます。即ち彼等は天然の法則や嚴密なる純潔の原則を等閑に附し、又或者は飲食、服裝、勞働に關する健康の法則を無視して居ります。又一種の陋習が、精神及び肉體の衰弱を來らせる場合が屢々あ



ります。若しかゝる人々が、幸にも健康を得るとすれば、其多は神の定め給ひし自然界及靈的の法則を蔑視する行動は毫も改めず、恰も神が自分の祈禱に答へて疾病を癒やし給ひし如くに論じ、依然として其不健康なる惡習慣を繼續し、不法の嗜慾を縱ほしひまにして、更に之を抑制しません。もし神が奇蹟を以て此の如き者の健康を恢復し給ふとすれば、神は罪を獎勵し給ふ譯になります。

人に其不健康な習慣を廢止すべき事を教へずして、彼等の疾病を癒し給ふ者として神を仰げと教ふるは、蓋し無益の業わざであります。もし自分の祈が聽かれ、神の祝福を受けんとせば、惡行を改め、善事を努めねばなりません。又彼の周圍は、必ず衛生的になし又生活の習慣を改善矯正し、靈肉共に神の法則に一致した生涯を送らねばなりません。

## 罪の告白

健康恢復に對する祈禱を希望する者に、先づ教ふべき事は、肉体に關する事にせ

よ靈的の事柄にせよ、神の法則を無視するは罪である事と神の恩恵に接せんと欲せば、是非、罪を告白し之を棄てねばならぬ事であります。

聖書には、『汝等互に過を認はし、且つ病を瘳さるゝことを得ん爲に、互に祈るべし。』<sup>2</sup>と命じてあります。癒の祈禱を求むる者には、左の如き忠告を與へるがよいと思ひます。『私共は、人の心を觀破する事は出来ません。又貴下の行爲の秘密を察知する事も出来ません。此は貴下と神のみが御存じであります。若し貴下は罪を悔いて居られるなら、之を告白するは貴下の義務であります。』

公に犯したのでない罪は、神と人との唯一の仲保者なるキリストに告白すべきものであります。『若し人罪を犯せば、我儕の爲に父の前に保惠師あり、即ち義なるイエス、キリストなり。』<sup>3</sup>凡ゆる罪はすべて神に對して犯したものでありますから必ずキリストを通して、神の前に告白せねばなりません。又誰にでも知れ渡つて居る罪は、公に告白し、個人に對して不都合をした場合には、其對手の人に謝罪し、其赦を受けねばなりません。若し又健康を求めて居る者にして、惡口した覺がある

か、或に家庭、教會若しくは近隣に不和の種を蒔き、紛糾を惹起したか、又は何かよからぬ事をした爲、他人をも其罪に導いた事があつたなら、神の前と被害者の前に其罪を告白せねばなりません。『もし己の罪を認はさば、神は信實なる公義者なるが故に、必ず我儕の罪を赦し、諸の不義より我儕を潔むべし。』<sup>4</sup>

今迄の不都合の始末がついた時、始めて胸中に何等の蟠りなく、聖靈の導きの儘に信仰を以て癒の祈禱をする事が出来ます。神は私共一人、一人を其名前迄を知り其獨子を給ひしは、其者一人の爲にして、他に人類なきかの如くに各自を顧み給ひます。慙く神の愛は洪大無邊であるが故、病者をして神に信賴し、喜び勇む様に勵まさねばなりません。兎角に、くよく／＼心配する事は、衰弱と疾病を醸す傾があります。『視よ、エホバの目はエホバを畏るゝもの並に其憐憫をのぞむものゝうへにあり。』<sup>5</sup>ふて聖言を想ひ幽鬱、煩悶の境域を脱出すれば快癒の見込は一層確になります。



## 聖旨に服従せよ

病者の爲に祈る時、『我<sup>われ</sup>儕<sup>ら</sup>は祈<sup>いの</sup>るべき所<sup>ところ</sup>を知らざる』<sup>6</sup>事を記憶せねばなりません。私共は自分が希望して居る祝福が果して最上のものであるか否やを知りません。故に私共の祈禱には左の如き思想が含まれて居らねばなりません。『主よ汝は心の凡の秘密を知り又此人々を知り給ひます。彼等の仲保者なるイエスは彼等の爲に其生命を棄て給ひました。彼等に對するイエスの愛の大なる事は、私共が彼等に對するものと到底較べる事は出来ません。故にもし此汝の聖榮の爲になり、且つ病者の利益となるならば、イエスの聖名により、彼等の健康が恢復されん事を願ひます。然しもし、彼等の治癒が聖旨でないとするれば、願くは汝の恩恵と臨在を以て、彼等<sup>を</sup>其病苦の裡に慰め且つ支へ給へ。』

神は、凡の事は、始から終迄見透ふし、凡の人類の心を洞察し、胸中の秘密を讀み給ひます。又或人の爲に、病の癒されん事を願出ても、其人がもし生存しても、

來らんとする試練に堪え得るか、得ざるか、又彼等の生涯が自身にとりても、世界に對しても、祝福となるか呪詛となるか、何れなるか熟く知り給ひます。是は私共が、熱心に祈禱する場合にも、『されど我意に非らず、たゞ聖旨のまゝに成し給へ』と云はねばならぬ一の理由であります。イエスはゲツセマネに血の汗を流し、『吾父よ若しかなはば、此杯を我より離ち給へ、』と哀願し給ひし時も、『されど我意の従をなさんこに非らず、聖旨に任せ給へ。』と附加へ給ひました。もし此等の語が、神の子イエスにさへ適當なるものであつたとすれば、不完全極まる誤謬多き人類の唇からは、是非共漏れねばならぬ語であります。

私共の希望が聽許される、されぬは、全知全能の天父の聖旨に一任し、確信を以て一切萬事を神に委ね奉らねばなりません。又私共は其願が聖旨に適つたものなれば、神は必ず之を聽き給ふ事を知りますが、服従的精神なく、無暗に自分勝手の祈願を押し付ける事は、正しくありません。私共の祈禱は、決して命令的でなく、哀訴的の姿を取らねばなりません。

人の健康を恢復する爲に、神が特に其聖力を顯はし給ふ場合は澤山ありますが、何も凡の病者が皆癒されることは限りません。イエスに在りて永眠する者の數も、決して少くありません。さればヨハネは、パトモス島にありて、左の如く録すべく命ぜられました。『今より後主のちしゆに在りて死ぬる死人は福なり、さひにい靈も亦いふ然り、しか彼等は其勞苦を止めて息まやすん、其功これに隨はん。』此聖句に徴しても、健康の恢復を與へられなかつた人は、必しも信仰が缺乏せる爲であると斷定を下す事は出来ません。

私共は、凡べて祈禱が、急速に應へられるのを希望しますが、其答が遅延すれば又は答へられても、自分の期待に相違して居ると、兎角落膽し勝のものであります然し神は、全知に在し、又恩恵深き御方でありますから、何時も私共の希望通の時間と方法とによりて、祈禱に答へ給ふとは限りません。神は私共の願を叶へて下さるより、更に多く、又更に優れる事を私共の爲に行し給ひます、而して私共は、神の智識と慈愛とを信賴して居りますから、私共の意思を遂行し給ふ事を冀こひねがはず、聖



旨に添ひ奉らんと努め、私共の欲望や利害關係は、全然聖旨の中に葬むられて仕舞はねばなりません。

私共の信仰を試むる是等の經驗は、要するに私共の利益を圖る爲に與へられたものであります。即ち之により私共の信仰は、誠實にして神の聖言のみに其根據を置いて居るか、又は事情や境遇に依頼む不確實にして、變り易い信仰であるかを顯はします。抑も信仰と云ふものは、之を働かせる事により力を増すものでありますから、聖書の中にエホバを待望むものに與へられたる貴き聖約束のある事を記憶して飽迄も忍耐をし通す事が大切であります。

然るに此原則を了解しない人も間々あります、實際多の人は、疾病の癒を祈れば必ず直に答へられるに極つて居るものと心得へ、若しさうでない場合には、自分の信仰は駄目であると思ひます。故に病者にはさう云ふ心得違をせぬ様懇々と訓戒、指導せねばなりません。又彼等は、自分が死にでもする場合、後に遺る友人等に對する義務を無視したり、又は健康の恢復に必用なる自然療法を等閑に付してはなり

ません。

此點に謬見を抱くものが間々あります。即ち癒されるのは、祈禱の應驗であるから、苟<sup>い</sup>しくも信仰の缺乏を表白するが如く見える事をするのを恐れる人があります然しもし死を覺悟する様な場合には、自分の希望通に萬事を整頓する事を怠つてはなりません。又臨終に際し、自分の愛する人々に奨勵、訓戒の遺言を爲す事を恐れてはなりません。

## 治 療 機 關

祈禱により治癒を求むる者は自分の手の届く範圍に置かれたる治療機關の利用を等閑に付してはなりません。神が苦痛を和げ健康恢復に對する自然の力を助ける爲に備へ給ひし治療法を講ずるは、決して信仰を無視するものではありません。又神と偕に働き、健康恢復に最も好都合な状態に自身を置く事は、決して信仰の否認ではありません。神は、生に對する法則を知るの力を私共に與へ給ひました。而も此知

識は、私共の到達し得る範圍に置かれてありますから、私共は自然法に一致し、出來得る限の便宜と方法とを活用し、健康の恢復を圖らねばなりません。私共は疾病の癒を祈つた以上は、之が爲に一層努力し、神と偕に働き得る特權を神に感謝し、神が備へ給ひし方法に祝福の降らん事を願ひ求めねばなりません。

治療機關の利用に關する神の言の裁許を、聖書の中に見出す事が出來ます。イスラエル王ヒゼキヤが、病に罹つた時、神の預言者は、王は死すべしとの使命を齎らしました。然るに王は、神に叫び求めましたが、神は彼の祈禱を聽き入れ、十五年生延ばしてやるとの使命を送り給ひました。此場合に於て、神の一言により、ヒゼキヤは立處に癒える筈でありました。然し、『無花果の一團いちじく かたまりをとりきたりて腫物しゅぶつのうへにつけよ、王かならずいえん。』<sup>10</sup>との特別な療法が授けられました。

キリストも或る時、瞽者を癒やし給ふに當り、其目に坭土を塗り、『シロアムの池に往きて洗へ、』と命じ給ひましたが、『彼かれすなはち往て洗ひ目見る事を得て歸かへり。』<sup>11</sup>と記してあります。



癒しは勿論、大なる癒主の力によりてのみ實現し得るものでありましたが、キリストは簡單なる自然療法を應用し給ひました。勿論主は、怪しげなる醫藥を獎勵し給ひませんでした。單純なる天然療法の利用は之を允許し給ひました。

私共に、又疾病の治癒を神に祈つたら其經過がどうであらうと、決して神に對する信仰を失つてはなりません。もし家族と死別れる様な場合があつても、謹んで其苦き杯をお受けし、天父の聖手は之を支へ、私共の唇へ持つて來て下さる事を記憶せねばなりません。又健康が恢復され、癒しの恩恵に浴した人は、創造主に献身の契を新にすべき事を忘れてはなりません。聖書を見ると、十人の癩病患者が癒されたに拘らず、イエスを尋ねて御禮に來たのは一人しかなかったと記してあります。『我等の中誰一人でも、其恩知らずの九人と同じ様なものがあつてはなりません。』<sup>すべてよ　たまもの　まったく　たまもの</sup>『凡の善き賜と全き賜は、皆上より、<sup>みなうへ</sup>諸の光の父より降るなり。父は變ることなく、<sup>すべて　ひかり　ちち</sup>又轉動りて顯はる、<sup>またまは</sup>影もなきものなり。』<sup>あは　かげ</sup><sub>12</sub>

- 1 雅各書五章十五節
- 2 同五章十六節
- 3 約翰第壹書二章一節
- 4 同一章九節
- 5 詩篇三十三篇十八節
- 6 羅馬書八章二十六節
- 7 路加傳二十二章四十二節
- 8 馬太傳二十六章三十九節
- 9 默示錄十四章十三節
- 10 以賽亞書三十八章二十一節
- 11 約翰傳九章七節
- 12 雅各書一章十七節

## 物吝せぬ様教育せよ

此處、彼處に、信者の小き群を造る働人は、新に信仰の道に入つた人々に對し、神は彼等の個人的努力や献金等により組織に働き、斯道の爲に盡す事を要求し給はないと云ふ印象を決して與へてはなりません。眞理を受入れた者の中には、此世の物質に乏しい者がいくらかあります。然しそれだとして、自分等が受けた貴き光の事を想へば、其結果として生じた義務を怠たる言譯としてはなりません。即ち貧困をして、天に財寶を積む妨をさしてはなりません。富者の得らるゝ恩恵は、又貧者にも到達し得る範圍に置かれてあります。彼等にして、もし其有する僅かなるものを用ふるに忠實であるなら、天に積める彼等の財寶は、彼等の忠實に比例して増加します。要するに彼等の献物が、神の聖前に價值あらしむるのは、動機にして、金額ではありません。



各人皆、自分の出來得る事をなして、主の爲に盡し、神の賜ひし資産に準じ、献金すべき事を學ばねばなりません。神は収入の多少に拘す、其十分の一を神に屬する正當の献金として要求し給ひます。されば、若し之を控えて納めないものは、神のものを盜む事に當りますから、神の聖手が加はり富み榮える事を期待する事は出來ません。又教會の大部分が、貧困な兄弟から成立つて居る場合でも、吝みなく組織的に献金する目的を充分に説明し、喜んで此方針を採用せねばなりません。神はこの約束を履行し得る御方にして、其財源は、實に無盡藏にして、聖旨の盡に之を用ひ給ひます。而して什一献金を忠實に納むる者を見給ふ時は、其全知の攝理の下に、収入の益々増加する途を開き給ひます。神が與へ給ひし僅少なものに對し、神の制定し給ひし事を實行するものは多く與へられしものと同様の報を受けます。

此は力量の問題に於ても同じ事にして、與へられた才能を喜んで神の爲に用ふるものは、多く恵まれ、僅かだからといつて之を活用しないものは、全然損失を見るの外ありません。キリストの譬話の中にある、彼の財寶を地中に埋め、主の譴責を

蒙つた者は、銀一千を受けた人でありました。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

神の制定め給ひし什一献金制定は、其單純、其公平な點に於て、申分がありません。此制定の起原は、神の旨でありますが、萬人舉りて信仰と勇氣とを以て之を實行すべく、單純と効用とを兼ね、又其意義を解し、之を實行するには、決して深い學問も要りません。凡の人は、此により救靈の重大事業に干與し得る事を感じる事が出来ます。男も女も、子供も、主の爲に會計となり、神の金庫の要求を充たす動作者となる事が出来ます……………。

此制度により、大事業が完結されます。若し一人残らず之を實行すれば、各人皆神の爲に盡す勇敢にして忠實な會計となる事が出来ます。随つて最終の使命を世に宣傳する一大運動の爲に要する資金の缺乏を見る様な事はありますまい。

(教會の體第三卷三八八、三八九頁)

## 福音の維持

神は、福音の宣傳を彼の民の勞力と、自發的の献金とに委ね給ひました。墮落せる人類に、恩惠の使命を傳ふ者は、尙今一の働があります。——即ち、神の働を支へる爲、資金を供給する義務ある事を民に示す事であります。教役者は、彼等に教ふるに、彼等の收入の一部分は神に屬するが故、敬虔の念を以て之を聖事業に献ぐべき事を以てせねばなりません。而も言行の兩方面より、此教訓を徹底せしめ、自家の行動により、此教訓の力を減ずる様な事があつてはなりせん。

神の屬として、聖書に基き別け置いたものは、福音事業に専用すべき資金にして最早私共のものではありません。自分の爲なり、他人の爲なり、俗事の用途に充つる爲、神の金庫より融通する事は、聖物竊取と何の異ことなるところ所はありません。又或者は特に神に献げしものを、聖壇より他に移す様な罪を犯しますが、かう云ふ點に思違



をせぬやう注意せねばなりません。決して如何に折破せつぱつまつても、宗教上の用途に  
献けんげし金を、便義上融通し、何れ後から返へして置くいづと云つて良心を安んぜしめて  
はなりません。寧ろ、収入に準じ出費を切つめ、自分の金丈で生活し得る様、節約  
する方が、俗事の爲に主の金を流用するに遙か優つて居ります。

### 什一献金の用途

神は什一献金の用途に關し、特別の指圖を爲し給ひました。又資金の缺乏により  
神の事業に故障を來たすは、決して聖旨ではありません。又勸の統一を圖り、誤謬  
なからしめん爲、神は什一献金に關する我等の義務を明白に爲し給ひました。神が  
御自身の爲に聖別し給ひし分は、神が指定し給ひしものゝ外に、決して之を轉用し  
てはなりません。されば何人も、什一献金を手許に控へ置き自儘じまに之を私用しても  
差支ないと思おもつてはなりません。勿論危急の場合にも、之を私用して悪い許りでな  
く、神の事業と認め得る事にすら之を濫用してはなりません。

教役者は、訓戒と模範とにより、人に什一献金を神聖視する様に教へねばなりません。又自分は教役者であるから、什一献金を控へ、又自己の判断に従ひ、之を處置し得るなごゝ想つてはなりません。此献金は決して教役者の屬<sup>もの</sup>ではありません。又孰<sup>いづ</sup>れ、自分が受くべき筈のものと雖も、順序を経ずして之を自用に供してはなりません。又什一献金及び其他の献金を、正當なる用途以外に流用する計畫に對し、決して聲援を與へてはなりません。献金は一切神の金庫を納め、神の指定し給ひし用途に供する爲に、神聖なるものとして取扱ふべきものであります。

神は、神の家宰<sup>いづつかさ</sup>の凡が、神の制定し給ひし處を嚴重に履行せん事を希望し給ひます。何か慈善事業を爲すか又は自分の都合のよい時と方法とにより寄附や献金をして、神の計畫に對し差引勘定をしてはなりません。神の制定し給ひし事を改善せんと試み、自分の氣に向いた姑息手段を弄し、神の要求に對する埋合<sup>うめあは</sup>せとする事は、甚だ醜陋なる方略であります。神は、神の制定し給ひし處のものに、凡の人が其勢力と感化を與へんことを要求し給ひ、其御計畫を明白になし給ひました。されば、

神と偕に働く筈の者は、神の計畫に對し、敢へて改善を加へんと試むる事を止め、其實行に努力せねばなりません。

神は、イスラエル民族の爲に、モーセに左の如く訓戒し給ひました。「汝又イスラエルの子孫に命じ、橄欖を搗て取たる清き油を燈火のために汝に持きたらしめて絶えず燈火をともすべし。』此献物は、絶えず納むべきものにして、神の室が、其奉仕に必用なるものに缺なからしむる爲でありました、されば今日の神の民も、禮拜の室は、主の所有物にして、些細の點迄も注意し、之を管理せねばならぬ事を忘れてはなりません。然し此方法に要する資金は、什一献金に仰ぐ事は出来ません。我團體に屬する人々に對する極めて明確なる使命が與へられ、左の如き誤謬を指摘せよと命ぜられました。即ち什一献金を種々の用途に充つるものがありますが、よし其目的は善いものにせよ、さうする事は神が什一献金に對し制定し給ひし精神に反し、全く其用途を誤るものであります。而して神は、必ず此事は審判かずには置き給ひません。



或人は、什一献金を以て、學校の費用に充つるも差支ないと論じ、又或人は、キヤンパサーを支ふるに什一献金を以てすべしと主張するものもあります。然し是は大なる謬見にして、其正當なる用途、即ち教役者の維持以外に使用すべきものではありません。而も今や、傳道地に於ける教役者の不足は、莫大にして、今、唯一人しか遣はされて居ない所には、充分資格のある教役者を百人に増加せねばなりません。

### 嚴肅なる義務

什一献金は、神聖にして、神が御自身の爲に聖別し給ひしものにして、必ず之を神の金庫に納め、福音事業に働く人々を支ふる爲にのみ専用すべきものであります。什一献金が神に屬すべきものたる事を辨<sup>わきま</sup>へぬ人々がある爲、神は正當に御自身の所有に歸すべきものを奪はれて居給ひました。或者は、不平不満の念を抱き、『私は最早什一献金を納めません、どうも本部のやり口に信仰を置けません。』と云ひま

した。然し事務の取方が悪いからと云つて、神のものを盗んでよいでしやうか、もし不都合な點があれば、明白に又公然と、然る可き徑路を通し、正しき精神を以て其苦情に訴へ、其訂正を要求すべく、他人が間違つて居るからとて、神に盡すべき義務を怠り不忠實な行爲を敢てしてはなりません。

マラキ書の第三章を熟讀し、什一献金に關する神の旨を玩味して御覽なさい。もし我教會が、神の言通を實行し、忠實に其什一献金を神の金庫に納むれば、もつと澤山の教役者が聖職に従事する様になります。即ち傳道資金の缺乏を聽かなければ進んで献身する人も増加します。神の金庫は、是非潤澤でなければなりません。然し我慾の心と手が、什一献金を控へ、若しくは働の他の方面を支ふる爲に用ひさへしなければ、神の金庫に缺乏を見る事はない筈であります。

神が特別の用途に備へ給ひし資金は、斯くの如く勝手次第に用ふべきものではありません。什一献金は神の屬ものでありますから、之に手を付ける者は、若し悔改めなければ、天の金庫のものを私用せし廉を以て罰せられます。されば什一献金を神の

指定以外の用途に供し、爲に働の澁滞を來らす様な事は最早止めねばなりません。他の方面の働に對しては夫々其道を講じ、之を支ふべく、決して什一献金により之を支辨してはなりません。神は決して變り給ひませんから、什一献金も依然として教役者の維持にのみ専用すべきものであります。

新傳道地の開始は、益々聖職の能率増進を要し、隨て之に對する資金が、金庫に充ちて居なければなりません。

教役者として遣はされし者には、嚴肅なる責任が負はされてありますが、不思議にも兎角之が等閑に付せられてあります。或人は、説教するのは好みますが、教會の爲に個人的の努力を致しません。故に、神に對する義務と責任、殊に什一献金を忠實に納むる事に關し、懇々教訓する必要があります。若し我教役者が其支給を速に受ける事が出来なければ、非常に困難するに相違ありません。然し彼等は、教役者を支ふる資金が、神の金庫に充滿して居らねばならぬ事に想おもひ及およすでありませうか、もし什一献金を忠實に納むる様信者を教育する事に全力を注そがなければ、神の



金庫に缺乏を來たし、神の働を前進せしめる事が出来ません。

神の羊群の監督者は、忠實に其義務を遂行せねばなりません。もしそれが嫌に感ずる様であれば、忠實なる働人でありませんか、其職を退き、然るべき他の人に之を委ぬべき筈であります。

彼はマラキ書を開き、什一献金を納めない者は、神のものを盗むのであると、神が譴責し給ひし聖言を讀まねばなりません。全能なる神は、『汝等<sup>なんぢら</sup>は呪詛<sup>のろひ</sup>を以て呪詛<sup>ろ</sup>はれたり、』<sup>2</sup>と仰せになりました。

言を傳へ、教をなして、聖職に従事する者が、信者たちが自分の身の上に神の呪詛を招く行爲を續けて居るのを見た時、之に訓戒を加へず、又警戒を與へずして、彼の義務を怠る事が出来まじやうか。

凡の教會員に對し、什一献金を缺<sup>かけ</sup>なく忠實に納むべきものである事を教へて置かねばなりません。(教會の證第九卷二四六―二五一頁)

1 出埃及記二十七章二十節

2 馬拉基書三章九節

## 食餌と健康

重大なる責任を負はされ、殊に靈的事物の指導に當れる者は、知覺鋭敏、意識明瞭の人でなければなりません。とりわけ、食事に節制し、佳肴珍膳を貪るが如きは決してあるまじき事であります。

責任を有する地位にある人は毎日重大な結果を惹起する問題を決せねばなりません。而も迅速に之を考慮せねばならない場合が度々ありますが、平素嚴密なる節制を實行する者のみ、好結果なる判斷を下す事が出来ます。意思是、肉體及び精神の力を正しく扱ふ事により、強固にせられるものであります。骨折り過ぎさへなければ、努力する毎に、新元氣を生じます。然るに、重大問題に對し、解決を與ふべき人の働が、不適當な食餌の結果、好しからぬ成績を見る事が度々あります。胃腑が整つて居ないと、精神の調子にも不規律を生じ、爲に神經過敏となり、時としては

無情、不公平等の行爲に出でる事もあります。食物に關する惡習慣が原因で、世を幸福ならしむる計畫が除外され、不義、壓制はまだしも、殘酷なる手段の實行せられる事があります。

筋肉労働者は別として、坐業の人、若しくは主として腦を働かしむる人に對し、好個の提案がありますから、充分に道德的勇氣と自制力とを有する人は、宜しく之を試みて御覽なさい。即ち、食事毎に單純なる食物を僅か二三種丈とし、空腹を満たすに要する以上に食せず、而して毎日、身體を運動せしめ、其れで利益を得ないか否やを試みて御覽なさい。(ミニストリーオブヒーリング三〇九、三一〇頁)

或る教役者は、食物の習慣に關し、一向注意せず、過食したり、一時に幾品も變つたものを食べます。又或者は、有名無實の衛生改革者にして、不規律な食事をなし、旺に普通の果物や胡桃類を間食し、消化器管を疲勞せしめます。

食事に注意しない爲め、感覺が麻痺し、遲鈍、不活潑になるものもあります。食欲を恣にした結果、青い顔をして居る教役者は、衛生改革の推薦になりません。



過勞の爲苦む時は、自然をして力を恢復する機會を與ふる爲め、時々食事を廢する事により奇効を奏するものであります。我が働人は、衛生改革を宣傳するに當り口でするよりも、模範を示す方が、大なる働を致します。

友人の好意により、盛大な響應を受ける時などは、兎角主義を枉げんとする誘惑に遇ひますが、さう云ふ時にも、斷乎として太牢たいらうの珍味や、香料及び茶、コーヒの類を退け、忠實にして實行的なる衛生改革者の面目を發揮せねばなりません。

※ ※ ※ ※ ※ ※

食慾を恣にすれば、精神の敏活を缺き、神聖なる情緒を鈍くするものであります。我教役者中には、不適當な食事と運動の缺乏とにより、精神的及道德的能力の衰へて居るものがあります。

過食の性癖ある者は、勉めて食慾を抑制し、克己の實を擧げ、よく筋肉を働かせ腦を平靜ならしめねばなりません。過食は、胃以外の器官に胃の働をなさしめます

から、身體全部を遲鈍ならしめます。

## 衛生改革と教役者

我教役者は、衛生改革に關して明なる理解を有し、……身體を支配する法則、及び精神及び心靈・健康に及ぼす其關係を心得て居らねばなりません。世には、神の與へ給ひし此巧妙なる身體と、其衛生法に關し、殆んど何等の知識を有せざるものが實に澤山あります。此等の人々は、餘りたいした事でない問題を重大視し、之を研究して居ります。教役者は、大に爲すべき仕事を有します。即ち彼等が衛生問題に關し立場を明にして、之を宣傳すれば、必ず得る處があります。先づ第一に、自分の日常行爲の上に、又其家庭に於て、正しき原則の下に健康的の生活を實行し、生命の法則に服従すれば、此問題を誤りなく説き、他人を導き、衛生改革の實を彌が上に發揮する事が出来ます。自ら實驗的の生活を送つて居るものにして、始めて之を宣傳し、丁度さう云ふ證を待つて居た人々に、大なる價值を有する使命を齎ら



す事が出来ます。

もし教役者が、衛生問題の鼓吹を、教會に於る働と結合すれば、必ず貴重な祝福と經驗とを受ける事が出来ます。民衆はどうしても、衛生改革に關し知識を有たねばなりません。然るに此働は、兎角等閑に付せられ、多の人々は、此に關 何等の理解を有せず、隨つて嗜慾に耽けり、毫も之を改善しない爲死を招いて居ります。

我各年會の總理たるものは、此問題の後援を爲すべき機が、既に熟した事を深く悟らなければなりません。又教役者も、教師も自分等が受けた光を他人に紹介すべく、凡の方面に彼等の爲すべき仕事は澤山あります。神は必ず、彼等を助け給ひます。神は堅固なる主義を取つて動かざる者、己が嗜慾を満す爲め、眞理と正義を放抛せざる彼の僕に力しもべを添へ給ひます。

神が此問題に關し、聖言の中に與へ給ひし光は、實に明白にして、人 果して此

を守るや否や色々の方面から試みられます。何れの教會も、何れの家族も、必ず基督者的節制の教訓を學び、凡の者が、悉く健康を維持する爲には、如何に飲食すべきかを知らねばなりません。私共は、今や此世界の終末に切迫せる時代に生存して居ります。而して安息日遵守者は、其行動に一致調和を要します。故に此問題に關する宣傳を等閑に付する人は、大醫師キリストの先導に従ふものではありません。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

福音宣傳と醫事傳道とは、相提携して其働を進むべきものにして、福音には必ず衛生改革の眞髓が伴ふべく、基督の宗教は須く實生活に觸れ、行届いた熱誠な改革事業は是非其實蹟を舉げねばなりません。抑も眞正なる聖書的宗教は、墮落せる人類に對する神の愛の發現でありますから、神の民の爲すべき事は、此切迫せる時代にありて眞理を渴望し、正しき道を歩まんと志す人に、徹底的に使命を宣傳し、民衆の前に衛生の原則を示し、其必要を悟らしめ、進んで之を實行する様世の男女を

導く爲全力を盡さねばなりません。(教會の證第六卷三七六―三七九頁)



## 衛生改革は如何に宣傳すべきか

神は、我教役者、醫師及び一般教會員が、衛生改革を宣傳するに當り、私共の信仰を少も知らない人々に對し、急激な勸め方をなし、卒にはかに食物の變化を強ひ、大早計に陥らぬ様、注意すべき事を希望し給ひます。

衛生改革主義を高く標榜し、神が心直きものを導き給ふ様に祈らねばなりません。斯の如き人は、必ず此使命を聽くと信じます。又神は、折角此衛生法の美はしき真理を説いても、徒に反感を起さしむる様に紹介する事を要求し給ひません。無智暗黒の中に歩んで居る人の足の前に、躓きの石を置いてはなりません。よし善事を稱賛するに際しても、過度の熱心を示めず事は、却つて聽く者に嫌惡の情を起さしめ、ますから注意せねばなりません。必ず人の注意と興味を惹起ひきおこす様に、節制の原則を紹介せねばなりません。

又私共は、決して僭越な行動に出てはなりません。教會を組織せんと新傳道地に遣はされた働人は、食物問題にのみ重を措き、爲に困難を惹起してはなりません。此點を餘りやかましく云つて、折角眞理に來らんとする者の途を遮る様ではなりません。人を追ふのではなく、導かねばなりません。

又眞理の宣傳せらるゝ處には、必ず衛生食料品の調製に關する教訓を與へねばなりません。神は何處に於ても、其地方にて産出し、又は容易に手に入る生産物を、巧に利用する法を然るべき教師によりて習得せん事を希望し給ひます。かくて、貧しき人々も、境遇の善い人々と同じ様に、衛生的の生活を送る道を學ぶ事が出來ます。

## 教役者と作業

使徒パウロは、彼の導きし改心者に對し、神の事業の正當なる維持法に關し、聖書の明白なる教訓を與ふるに力を盡し、又自分は、使徒の職の印を帶びて居るのであるから、『工を止る事を得ざらん乎、』と云つて、有給傳道の資格ありと主張したに拘らず、彼は當時、文明の中心と歌はれし地方に於て、己が作業を以て生活費を得た事が度々ありました。

彼が己が手で働き乍ら、福音を宣傳し、自給傳道をして居た事を始めて聖書に讀む所は、テサロニケでありました。彼はテサロニケ教會に書を贈り、『我儕キリストの使徒にして、人に重ぜらるべしと雖も、或は爾曹にも、或は他人にも、人に榮耀を求ず』と云ひ、尙左の如く附加へました、『兄弟よ、爾曹われらの勞と苦をしる、爾曹のうち一人をも累はせざる爲に、夜晝工を作して神の福音を爾曹に宣傳



へたり』斯くて彼は、自分がテサロニケに於ける働き振を信者に想起さしめました  
又テサロニケ後書には、彼も彼の同勞者も、『人のパンを價なしに食する事なく、  
唯人を累はせざらん爲に、勞と苦をして晝夜工を作せり、是われら權威なきが故  
は非らず、たゞ自己を模倣とし爾曹をして倣はしめん爲なり』と書贈りました。

パウロが最初コリントを訪れた時、相手の人々は、兎角面識なき人々の動機を疑  
ふ連中でありました。又海岸に居住せる希臘人は、機敏な貿易家にして、金儲の道  
にかけては、長い間の訓練を受け、射利を神聖視し、手段が正當であつても、又は  
陋劣であつても、兎に角金を手に入れる事を稱揚して居りました。パウロは、此特  
徴を熟知して居りましたから、彼等をして、パウロの傳道は、營利を目的として居  
るなど、云ふ機會を與へまいと努めました。彼はコリントの信者より、支給を仰ぐ  
權利を得ん爲の傳道であると疑はれ、随つて教役者としての彼の有用と成功の害は  
れん事を恐れ、喜んで此特權を拋棄し、誤解を生じさうな事柄は、一切排除し、彼  
の使命の力が失はれぬ様努力致しました。

コリントに着後間もなく、パウロは、『新近ちかごろイタリヤより來きたれる者ものにて、ポントに生うまれしアクラと名なづくるユダヤ人びと、および其妻そのつまプリスキラ、』と知合になりましたが、此人々はパウロと、『その業げうを同おなじく』しました。アクラとプリスキラとは、羅馬皇帝クラウデアスが、ユダヤ人羅馬退去令を發した爲、追放され、コリントに來り、天幕製造業を開始したものでありました。パウロは、此夫婦の者が、神を畏れ周圍の惡感化に感染せざらん事を努めて居ると聞き、『之これと偕ともに止とどまり、工わざを作な』しました。而して彼は、『安息日毎あんそくにちごとに、會堂くわいどうに於おいて論ろんじ、ユダヤ人びととギリシヤ人びとを勸すすめました。』

エペソに於ける彼の傳道は、可かなり成長く、三年間に互り、其地方到る處に進擊的に福音宣傳を試みましたが、此時も又天幕製造に従事しました。

パウロは、エペソに於ても、コリントに於ける如く、アクラとプリスキラの居た事により、大に勵まされました。此夫婦の者は、パウロの第二の傳道旅行の終頃に彼と共にアジアへ參りました。

或人は、パウロが作業をした事を非難し、聖職に矛盾した行動であると説き、何故パウロの如き最高位の教役者が、福音宣傳と俗界の職業とを一緒にやつたのであるか、働く者の其價を得るは宜なりではないか、天幕製造に使用せし時間はどうかへても、もつと有益に利用された筈であると論じます。

然しパウロは、天幕製造に用ひた時間は、徒費されたものとは認めません。彼はアクラと働き乍ら、常に大教師キリストとの接觸を斷つ事なく、救主の證をなし、助を要する人々を助ける機會を取逃がしませんでした。彼は常に、靈的知識の欲求に餘念なく、自分と偕に働いて居る人々に、靈的事物に關する教訓を與へ、同時に勤勉、徹底の實例を示めました。

パウロは敏活、熟練の働人にして、業務に勤勉である許りでなく、『心を熱くして主に事』へた人でありました。彼が天幕製造に従事した時には、他の事では接觸する事の出来ない階級の人々に近く事が出来ました。彼は普通の技術の熟練も神よりの賜である事並に、神は之を正當に用ふる様に、又知識を給ふ御方である事を其



友に示し、日常の労働によりてすら、神を崇め得べき事を教へました。されば彼が基督教々役者として立つて福音を傳へ罪の悔改を勧告するに當り、労働で固くなつた彼の手は、毫しも熱誠なる彼の使命の力を減殺しませんでした……。

もし教役者にして、キリストの道に盡すが爲、困難貧苦の境遇を啣つものがあるなら、須らく想像の翼<sup>つばさ</sup>を借りて、パウロが働いた工場を訪れるがよいと思ひます。而も神の選び給ひし此の使徒は、當然聖職に對し支給を受く可き筈なるに、糊口の爲に天幕の布をりつたり、縫つたりして居るのである事を念頭に置かねばなりません。

労働は祝福にして、決して呪詛ではありません。怠慢の精神は、敬虔の念を傷ひ神の靈を憂ひしめます、溜水は直に腐つて嫌なものでありますが、滾々と流れる清水は、地上に健康と喜悅とを與へます。

パウロは、肉體の働を怠れば、直に弱くなる事を知つて居りましたから、青年教役者に筋肉を働かして、手の業をなし、將來傳道地で遭遇しなければならぬ困苦

に耐へ得る様、強固な身体に鍛へ上げる道を教へんと希望しました。又彼は、自分の身体の組織の凡の部分に適當に働かせないならば、彼の教訓に活力を缺くべき事を認めて居りました……。

傳道の召を受けたと自覺する凡の者を獎勵して、直に傳道界に身を投せしめ、其當人や家族の維持を斷えず教會に訴へさせてはなりません。經驗の乏しい者が、人の追從輕薄を直に受たり、又は教役者になれば手を拱こまいて居ても充分の給料が貰へるなどゝつまらぬ煽おだてに乗せられ、前途を誤る様な事もあります、苟いやしくも神の働きの擴張を目的に献じた資金が、單に給料欲しさに傳道に従事し、安逸を貪らんと欲する人々に費消されてはなりません。

聖職に従事し、天與の賜を發揮せんと志す青年は、テサロニケ、コリント、エペソ其他の地方に於けるパウロの實例より、多く學ぶ事が出來ます。パウロは、雄辯家にして且つ特別の働をなす爲、神の選えらび給ひし器であつたに拘らず、決して勞働を輕じた事なく、又彼が愛せし道の爲に、犠牲となる事を厭つた事は、決してあり

ませんでした。彼はコリントの信者に贈つた書翰の中に、『今の時に至るまで、我  
儕は飢ゑ又渴き、又裸又撻れ、斯くて定まれる住處なく、勞りて手づから工をなし  
詈らるゝときは祝し窘らるゝときは忍びたり』と記しました。

世の教師中最大者の一人なるパウロは、最も低い仕事も、最も高き義務と同様に  
念を入れて之を就行しました。彼は主の御用を務むるに當り、事情が要求する儘に  
喜んで手仕事を致しました。然し福音に敵する者の反對を防ぎ、又は人をキリスト  
に導く特別の機會に遭遇する様な場合には、何時でも俗務を抛つて、此が爲に熱中  
しました。彼の熱誠と勤務とは、怠惰、安逸を貪る者をして、顔色なからしめまし  
た。(使徒行傳演義三四六―三五五頁)



我教役者中の或者は、身体の各器官を均整に働かせない結果、或器官は過勞に陥  
り、他の器官は之を使用せざる爲衰弱を來します、餘り一方の器官なり筋肉なり、



殆んど其のみを働かせれば終には過勞の爲大に其力を失ひます。

精神にまれ、筋肉にまれ、各自特殊の役目がありますから、其順調の發達を望み健康を維持せんとするには、是非均等に働かせねばなりません。器械には大小各種の車が澤山ありますが、皆其場所々々で活動運轉する如く、人体各種の器官も、各自其定められた働をなすべき筈であります。又どの器官も相互間に密接な關係を有して居りますから、之を適當に發達せしむるには、凡の器官を働せる必要があります。(教會の證第三卷三一〇頁)

- 1 哥林多前書九章六節
- 2 帖撒羅尼迦前書二章六・九節
- 3 同後書三章八・九節
- 4 使徒行傳十八章二・四節
- 5 羅馬書十二章十一節
- 6 哥林多前書四章十一・十二節

## 健康維持に對する吾人の義務

私は、身体の弱い教役者が澤山あつて、或は病床に呻吟し、或は年若くして此世を去らねばならぬ様な人を多く見る時實に悲しく思ひます。——此等は、孰れも神の働の重任を負ひ、之が爲に熱中した人々でありますが、折角愛して居た道の爲に盡す其働を止めねばならない事を想ふ時、病氣で苦しい事よりも、又死にはしないかと心配する事よりも、其苦痛は更に大なるものであります。

天に在す我等の父は、徒に人の子に苦痛を與へたり、悲嘆に陥らせ給ひません。神は、決して病氣や死の創造者に非らずして、生命の源であります。神は、人の生くるを好み給ふが故、人がよく生命と衛生の法則に従ひ健康なる生活を送らん事を希望し給ひます。

現代の眞理を信受し、之によりて潔められた者は、自分の生活と品性により、

眞理を代表せんとの志<sup>こころざしあつ</sup>熱く、如何にしても他人をして光を認め、其恩恵に浴せしめんと、切なる希望を生じます。

救靈者として忠實に責務を果たし、貴き種を携へ出で、涙と祈禱と共に之を凡の水の邊に蒔く者の働の重荷は、精神を非常に疲<sup>つか</sup>らせます。斯く間斷なく緊張をゆるめまいと努力し、心に一寸の油斷もないときは、自然衰弱の時機を早からしめざるを得ません。

又説教は、必ず元氣と能率とを要し、時々新しきもの、古きものを聖言の寶庫より、其都<sup>つぎ</sup>度供給されねばなりません。斯くすれば、聽者に生氣を與へます。神は教役者が、餘りに力竭き、其努力に元氣がない様になる事を要<sup>もと</sup>め給ひません。

勉學にせよ、説教にせよ、絶えず頭を使ふ人は、休養と變化とを要します。熱心に勉強する眞理の探究者、腦を間斷なく使ひ、身體の運動が怠り勝になり、其結果體力が弱くなり、延<sup>ひ</sup>いては精神的努力にも故障を生ずるに至ります。かくて、其人は、智<sup>かし</sup>こく振舞つたら成功した筈の仕事を、失敗に歸せしめます。



教役者にして、もし精神も身體も、適度に之を働かせ、智<sup>かし</sup>こく活動するなら、さう容易に病に斃れるものではありません。

もし凡の教役者が毎日幾時間かを戸外の働に費<sup>つひ</sup>やし、而も自由にそれが出来る地位に置かれ、ば、實に幸福であります。かうする事により、其召に對する義務の遂行に、一層の成功を與へます。又もし全然仕事を止めて休む譯に<sup>や</sup>いかなければ、手で仕事をしながら、計畫もし、祈禱もする事が出来ます。さうすれば、身體にも精神にも、元氣を與へられ、仕事を繼續する事が出来ます。

我教役者の或者は、本部に報告し得べき何かの働を毎日せねばならないと思ふ人があります。恁く形式的な仕事をする爲、切角の努力も弱くなり、念が入らない事が度々あります。是非全く仕事を止め、充分に休む時期がなければなりません。然し此とても、日毎筋肉を働かせる運動の代りにはなりません。

兄弟よ！ 貴下が畠を耕やして身體の強健を計るのは、集會を開くのと同様、神の働をして居るのであります。神は、私共の父にして、私共を愛し、誰一人神の僕

が、其身体を誤用する事を要め給ひません。

又不健康と、随つて働の能率の低い今一の原因は、不消化であります。消化器を誤用して、腦に其最善の働を望むは、不可能事であります。色々の食物を急いで食べる人が澤山ありますが、そんな事をすれば胃の内は丸で戦争の様になりますから腦を亂すは當然であります。不健康な食物を攝取したり、又よし衛生的な食物と雖も、過食する事は、等しく避けねばなりません。

又衛生法を無視し、時を關はず食する人が澤山あります。其結果、精神が朦朧として來ます。斯く惡習慣を平氣で續行し、此等の事に關し、神の與へ給ひし光を顧みざる人が、神より智慧を與へられる筈がありません。

兄弟よ！今は此種の放縱より悔改むべき時ではありますまいか、『なんぢら知らずや、馳場に趨るものは皆はしれども、褒美を得る者は唯一人なるを。爾曹も得ん爲に趨るべし。凡て勝を競ふ者は、何事をも節へ謹むなり。彼等は壞れ易き冕を得んが爲に之を行ひ、我儕は壞れざる冕を得んが爲に之を行ふなり。然れば、

我<sup>わが</sup>趨<sup>はし</sup>るは定向<sup>めあて</sup>なきが如<sup>ごと</sup>きに非<sup>あ</sup>らず、我<sup>わ</sup>が戰<sup>たたかひ</sup>は空<sup>くう</sup>を撃<sup>うつ</sup>が如<sup>ごと</sup>きに非<sup>あ</sup>らず、己<sup>おのれ</sup>の體<sup>からだ</sup>を撃<sup>うち</sup>て之<sup>これ</sup>を服<sup>く</sup>せしむ、蓋<sup>そは</sup>ほかの人<sup>ひと</sup>を教<sup>おし</sup>へて自<sup>みづか</sup>ら棄<sup>すて</sup>られんことを恐<sup>おそ</sup>るれば也<sup>なり</sup>。』<sub>1</sub>

### 不 充 分 な る 食 料

とは云ふものゝ不充<sup>ふ</sup>分<sup>ぶん</sup>なる食料で生活するのが義務であると思つてはなりません何<sup>なに</sup>を食<sup>く</sup>ふべきか、又如何なる種類<sup>しゆるい</sup>の食物が身体<sup>からだ</sup>の一番<sup>いちばん</sup>滋養<sup>しやう</sup>になるかを自<sup>みづか</sup>ら學<sup>まな</sup>び、後<sup>あと</sup>に理性<sup>りていせい</sup>と良心<sup>りんしん</sup>の指揮<sup>しき</sup>に従<sup>したが</sup>ひなさい。又食事<sup>じし</sup>時には、一切<sup>いっけつ</sup>の憂慮<sup>ゆうりょ</sup>を打<sup>う</sup>忘れ、神<sup>かみ</sup>の一切<sup>いっけつ</sup>の祝福<sup>しゅくふ</sup>に對<sup>たい</sup>し、感謝<sup>かんしゃ</sup>の念<sup>ねん</sup>に満<sup>み</sup>ち、愉快<sup>ういかい</sup>に食卓<sup>じきしやく</sup>に就<sup>つ</sup>き、急<sup>いそ</sup>がずに徐々<sup>じゆじゆ</sup>と食事<sup>じし</sup>をなさい而<sup>しか</sup>して、食後<sup>じきご</sup>直<sup>ただ</sup>に腦<sup>のう</sup>を使<sup>つか</sup>ふ仕事<sup>しごと</sup>に従<sup>したが</sup>事<sup>こと</sup>してはなりません。輕<sup>かろ</sup>く運動<sup>うんどう</sup>して、胃<sup>い</sup>をして其<sup>その</sup>運動<sup>うんどう</sup>を始めしめる爲<sup>ため</sup>少<sup>すこ</sup>しの時間<sup>じかん</sup>を與<sup>よ</sup>へねばなりません。

此<sup>この</sup>等<sup>ら</sup>は決<sup>き</sup>して、ごうでも宜<sup>よろ</sup>い事<sup>こと</sup>でありませぬ。働<sup>はたら</sup>の各<sup>おの</sup>方面<sup>くわ</sup>面に健實<sup>けんじつ</sup>の進歩<sup>しんぷ</sup>、發展<sup>はつぜん</sup>を望<sup>のぞ</sup>むならば、此<sup>この</sup>問題<sup>もんだい</sup>を重要<sup>じゆうじやう</sup>視<sup>し</sup>せねばなりません。働<sup>はたら</sup>の性質<sup>しやうしやう</sup>及び能率<sup>のうりつ</sup>は、働<sup>はたら</sup>人<sup>ひと</sup>の身體<sup>しんたい</sup>の狀態<sup>じやうたい</sup>に關<sup>かん</sup>する處<sup>ところ</sup>が多<sup>おほ</sup>大<sup>だい</sup>であります。多<sup>おほ</sup>の委員會<sup>わいぎひかい</sup>其他<sup>そ</sup>各種<sup>しゆしゆ</sup>の相談會<sup>さうだんかい</sup>が、出席者<sup>しゅつせきしや</sup>の胃



弱狀態の爲、活氣を缺く事もあります。又教役者が消化不良の爲、折角の説教に瑕瑾を遺す様な事も間々あます。

健康は蓋し、無上の祝福にして、多の人が思ふより一層密接な關係を、良心と宗教とに有し、人の才能を左右し得るものであります。苟しくも教役者たる者が、神の羊群の忠實なる監督者を以て任ずるならば、最善の奉仕を爲し得る状態に、全力を蓄へて置かねばなりません。

我教役者は、生と健康の法則に關する知識を使用すべく、此問題の關する最善の著書を読み、理性が眞理であると告げた事柄に對しては、宗教的に服従せねばなりません。

※  
※  
※  
※  
※  
※

主は衛生改革の實際的感化により、肉體、精神及び道德の衰頹より救済さるべきものが、實に澤山ある事を私に示めし給ひました。又衛生講話を開き、又之に關す

る出版物を盛に印刷さるべき事、並に衛生改革主義は、世人に歓迎せられ、多の者は一步、一步と進んで現代の眞理を受入れる様になる事も示されました。

(教會の證第六卷三七八・三七九頁)

1 哥林多前書九章二十四―二十七節

## 過勞の害

使徒等が、最初の傳道旅行より歸つた時、救主は彼等に命じ、『爾曹衆を避けて、我と偕に暫く、寂寞ところに往きて休むべし。』と仰せになりました。彼等は民衆に一生懸命に盡したので、身心共に疲れ果て居りましたから今や暫時休息するのが、彼等の義務でありました。

今日の教役者に賜ふキリストの同情に富める聖言は、昔の聖弟子らに仰せになつたものと毫しも變りません。『爾曹衆を避けて……休むべし。』主は此聖言を、疲勞した人々に與へ給ひましたが、よし人の靈的の必要を満す爲めの奉仕ですら、間斷なく忙殺されて居る事は、智くありません。さうした状態にあると、兎角自分の信仰が閑却され勝になり、意思、精神及び肉體の力を過勞せしめるものであります。



勿論キリストの僕には、克己と犠牲は缺く可らざるものでありますが、神は凡の者が、衛生の法則を學び、之の御用を務むるに當りても、よく理性を用ひ、主が與へ給ひし生命を維持する事に務めねばなりません。

イエスは、自身奇蹟を行ひ給ひしのみならず、亦弟子をして、奇蹟を行ふ力を賜ひしに拘らず、疲勞せる弟子を、暫時閑靜の地に退かしめ、休養を與へ給ひました又收穫は多く、働く者は少ないと仰せになりましたが、主は、決して弟子等をして少の隙なく働かねばならぬとせき立て給ふ事なく、『故に其稼主に、工人を收稼場に送らん事を願ふべし。』と、仰せになりました。神は各人に、其力量に應じてすべき業を定め、少數の者が重任を負はせられ、他の者は何等の勞苦なく、閑散として居る事を望み給ひません。

キリストの僕は、自分の健康に對し、無頓着であるべきものでなく、決して極度の過勞に陥り、將來活躍する事が出来ない様になつてはなりません。又二日分の仕事を一日でやつて仕舞ふ様な無理をしてはなりません。

結局、平素注意して賢かしく働く者は、心身を過勞せしめ、イザ必要と云ふ場合に何等の餘裕がない程に奮闘する人より、遙に澤山の仕事を成就した事を發見します。

神の働は、實に世界的にして、苟しくも與へられた才能、力量は、悉く之を捧げて召に應ぜねばなりません。然るに、兎角教役者が陥り易い點は、畠が色づき、收穫を待つて居るのを見る時、自分の力を誤用する事であります。然し、神は決して此を要し給ひません。主の僕は、最善の努力をした後、收穫は實に多く働人は少ない、然し、『エホバは、我われら儕からの身體からだの構造つくりを知り、われらの塵ちりなる事ことを念おもひ給ふ』と、云ふ事が出来ます。

飲食の不節制、勞働の不節制、殆んど凡の事の不節制は、どちらを向いても存在して居ります。或一定の時間、一生懸命に働いた後、自分の判斷力が休息を命じても、尙仕事を繼續する人は、決して賢者と云ふ事が出来ません。かくの如き人は、將來入用の力を徒費しますから、やがて活動を要する場合に當り、精力がない爲、

之に應ずる事が出来ません。即ち體力は、失<sup>う</sup>せ去り、頭の働は鈍くなり、イザと云ふ時の間に合ひません。

毎日、其日に果すべき責任と義務とがありますから、明日なすべき筈の仕事を、今日の時間に押込めてはなりません。神は、恩恵深く、同情の厚い御方でありますから、決して無理な要求はなし給ふ事なく、健康を害し、精神を衰弱せしむが如き結果を招く行動を採れど、命じ給ひません。神は、私共が多忙、過勞の極、神經衰弱を惹起する様な働方をするのを喜び給ひません。

神の選<sup>さ</sup>び給ひし働人は、暫し人を避<sup>さ</sup>けて休養すべしてふ命令を聞くべき必要があります。然るに、此命令を無視した結果、多の貴重なる生命が、犠牲に供されしました。實際時機の後れぬ前に、休養の必要を認めさへしたなら、今日、私共と偕に傳道界に活躍して居る可き筈の人が澤山あります。此等の人々は、任重くして途遠<sup>みち</sup>しの念に打たれ、何を犠牲に供しても奮闘せねばならぬと感じ、自然が反對を唱へても、毫も意に介せず、一人で二人前の働もしたのでありました。然し神は、彼を墓



に送り、彼處にありて、最後のラツバが義者を永遠の甦に召集する日迄、休息せしめ給ひました。

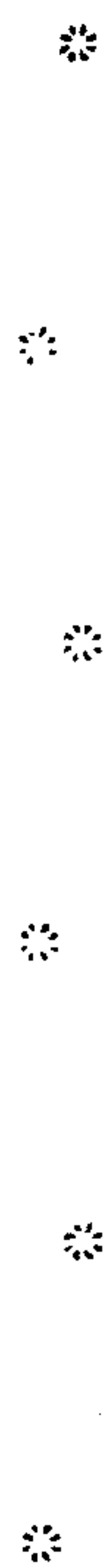
教役者にして、苦慮其度を過し、身心共に疲勞を感じた時は、須らく暫時仕事を抛ち、休養せねばなりません。是は決して、我慾を満足させる爲でなく、一層善く將來の義務を遂行し得る準備であります。

サタンは、常に私共に付き纏ひ、何處かに弱點を見出し、此を利用して、彼の誘惑を有効ならしめんとして居ります。故に、私共の精神が疲れ、身体が弱つて居ると、其處に付け込んで、激しく誘惑の火矢を浴びせ掛けます。されば、教役者は、注意して其能力を節用し、もし疲勞を感じた場合には、イエスを仰ぎ見、主と交はらねばなりません。

私は、此事を生來元氣のよい人々や、自分は他の人よりも重荷を負つて居ると思つて居る人々に云ふのではありません。働かない人は、何にも休むには及びません。世には、徒手傍觀し、一向責任を負はない人々があります。かうした人々は、口に

は責任の重大を語つても、實際之を負ふ経験を有ちませんから、其人々の働の結果は、取るに足りません。

キリストが、あの難有い聖言を賜はつた人々は、實際主の御用をして疲勞した者にして、決して徒手傍觀の徒に對してとはありません。今日も同様、『衆を避け  
て……休むべし。』と救主が命じ給ふ人々は、己を忘れ、力のあらん限を盡し、此上如何に奮發しても、到底進む事の出来ない迄に努力し、其結果疲勞した者でなければなりません。



神より訓練を受けて居る凡の者は、世俗と其習慣や行爲と調和しない生活を發揮すべく、且つ神の旨を知つた個人的経験を有たねばなりません、神は『汝等しづまりて我の神たるを知れ。』と仰せになりましたが、眞正の休養は、茲にのみ見出ます事が出来ます。而して、此が凡の神の爲に働く者に對する、有効な準備であります

斯くして、元氣を與へられた者は、煩雜喧騒を極むる、俗界に在りても、光明と平和の雰圍氣の中に浸<sup>ひ</sup>たる事が出来ますから、彼等の生活は、自然馨香を放ち、人の心に到達する神の力を發揮する事が出来ます。(各時代の希望三六三頁)

1 馬可傳六章三十一節

2 馬太傳九章三十八節

3 詩篇百三篇十四節

4 詩篇四十六篇十節



# 福音宣傳者の助け

誰か智慧ある者ぞ、たれ ちゑ もの其人はこの事を曉らん。そのひと このこと さつらん  
誰か穎悟ある者ぞ、たれ さうり もの其人は之を知らん。そのひと これし

## 聖書研究

救靈事業に功績を收めんと欲する教役者は、必ず聖書研究家にして、同時に祈禱の人でなければなりません。自分で、聖書研究を等閑に付し、他人に聖言を教へんと試むる事は罪であります。教役者の取扱つて居る真理が偉大なるものとすれば、之を宣傳するにも、熟練を要し、明瞭確實に紹介せねばなりません。

何人と雖も、聖書に通じなければなりません。殊に現代の使命を宣傳する者は善く聖言を理解し、自家の信仰の證據を充分に握つて居らねばなりません。自分で

生命の言の知識を有せざる者は、天に達する道を他人に教ふる資格がありません。

私共の信仰も、教理も其標準は、聖書にして、聖言の研究程、智能を開發するに與つて力あるものは他にありません。如何なる書物と雖も、思想を向上し、活力を増進する點に於て、該博にして高貴なる聖書の眞理に如くものはありません。

もし神の言の研究が、忠實になされたなら、人の度量は濶くなり、品性は高潔に意思は鞏固になる筈ですが、此等の美德は、現時代に稀に見る處のものであります。

教壇に奉仕する者にして、自家の聖書研究を等閑に付する爲、意思及び品性に必用なる要素を缺いて居る人が實に澤山あります。此種の人々は、聖言の眞理の表面的知識に満足し、隠れたる寶を熱心に探らんとするよりも、寧ろ有てるものをも、各方面に損失せしむる方を選んで居ります。

詩篇記者は、『われ汝にむかひて罪を犯すまじき爲に、なんぢの言をわが心のうちに藏へたり。』と述べ、パウロは、テモテに贈りし書の中に、左の如く記しまし

た。『聖書はみな、神の默示にして、教誨と督責、また人をして道に歸せしめ、又義を學しむるに益あり。これ神の人の完全を得て、諸の善事を行ふに缺なからん爲なり。』

凡ての生物に生命を與ふる神の生命は、聖言の中に含まれて居ります。イエスが疾病を癒やし、惡鬼を追出し給ひしは、彼の聖言でありました。聖言により、主は逆捲く怒濤を静め、死者を甦へらせ給ひましたが、民衆は其聖言には力が伴つて居た事を證しました。イエスは、又凡の舊約聖書記者に語り給ひし如く、神の言を語り給ひました。實に聖書全体は、キリストの表明と云ふを得べく、私共が力を得る唯一の源泉は、聖書であります。

此聖言は、決して活動を妨げるものでなく、却て本氣になつて研究する人には活動の徑路を開くものであります。又人をして、確固たる目的なき不定見の裡に彷徨せしめるものでなく、人生最高の目的、——即ち人をキリストに導き、救を得しむる大事業の爲に、活躍せしめるものであります。聖言は、天に行く路を照らす燈火



にして、其測る可らざる富と寶とは、實に無盡藏であります。

神の言は、又品性の標準にして、神は、此言を私共に賜うて、救の缺く可らざる一切の眞理を握る事を得しめ給ひました。此生命の泉より水を汲んだ者は、數限りがありませんが、其供給は決して減じません。又キリストの前に出て、主を仰ぎ見其同じ像に化せられた人は、實に澤山あります。然し是等の人々は、かく熱心に聖言を研鑽しても、其偉大にして神聖なる問題は、決して竭くる事なく、尙も幾千、幾萬の人が、救の奥義の研究に身を委ねる事が出来ます。

教役者が、キリストの生涯を研究し、彼の使命の特徴を學ぶ時には、其度毎に、未だ曾て發見せざりし、新しき事實が啓示され、更に深い、興味を感ずるに至ります。實に、其問題は、竭くる處を知りません。キリストのインカーネーション（化身）、贖罪の犠牲、及仲保の働等は、篤學の士が終生其研究に没頭するも、尙餘りある大問題にして、其長年月に亘る出精を想ひ、天を仰ひて、「敬虔の奥義は大なる哉」と嘆ぜざるを得ません。

私共は、第一天使の使命を論じ、又二天使の使命を説きます。而して、第三天使の使命に關しても、或る理解を有するものと自信して居ります。然し、小限度の知識を以て、満足して居る限りは、決して眞理に對し、明瞭なる見解を得る事が出来ません。生命の言を人に宣傳する者は、必ず、聖書研究と自省の爲に充分に時間を費やさねばなりません。此點を怠つては、決して道を求めて居る人に奉仕する術を知る事が出来ません。熱心なる祈禱と、研究とを以て、イエスに顯れたる眞理の研究に努力する勤勉にして謙遜なる研究者は、必ず、之に對して最も確實に報ひられます。人間の著者の思想よりでなく、知識の泉なるキリストよりの助を求めるならば、神聖なる理解力に導かれ、眞理を明瞭に悟る事が出来ます。

眞理が、人心に深い印象を與へるのは、人間の權勢に由らず、能力に由らず、『我靈に由るなり。』と、萬軍のエホバは仰せ給ひました。

道を傳ふ者の働を成功せしむるものは、彼の資質や雄辯ではありません。パウロは植え、アポロは灌ぎますが、生長つるものは神のみであります。されば、教役

者の成功は、彼が聖書に精通し神の旨に服従する事であります。

神の言を信受した心は、蒸發する水溜や、中味の漏れる破甕の如きものでなく、恰も岩間を迸り滾々と流れ出する清冽なる冷水が、重を荷ひ疲れ、且つ渴ける者を、爽かならしむ深山の泉の如きものであります。

聖書の眞理に通ずれば、之を教ふる者に、キリストの代表者たる資格を與へますから、救主の教訓の精神は、彼の指導と祈禱に一致の能力と徹底とを與へます。随つて、其證は、範圍を限られた活氣なきものではなく、又彼の胸中には、絶えず、聖靈の光明が輝いて居りますから、其説教も、決して千篇一律同じ問題を繰返しては居りません。

キリストは、左の如く仰せになりました。『わが肉を食ひ、我血を飲者は、永生あり、……生ける父、われを遣はす、父によりて我生る如く、我を食ふ者も我に由りて生くべし。……生命を賜ふる者は、靈なり。肉は益なし。我なんぢらに曰ひし言は、靈なり、生命なり。』



神の僕が、此等の聖言の眞意を理解する時には、永生の要素を彼の奉仕の凡の點に見出す事が出来ます。而して、平凡にして活氣なき説教は、止んで仕舞ひ、福音の根本的眞理が、新しき光を得て紹介され、生々とした眞理の理解、及び明晰と能力とは、何人も容易に之を認める事が出来ます。かう云ふ風に、使命を宣傳する人の話を聽く特權を有する者にして、聖靈の導に従ふならば、必ず、新生命の活力を感ぜずには居られません。即ち、神の愛の火は、彼等の胸中に燃え、彼の能力は、敏活となり、眞理の美と、偉大とを認め得る様になります。

神の言を、不斷の友とする教役者は、何時も新しい美を以て眞理を紹介します。而して、神の靈が、彼の上に降り、神は他の人を助ける爲に、彼を通して働き給ひます。又聖靈は、希望と勇氣とを以て、彼の心に滿さしめ、聖書の比喻形容に精通せしめ給ひます。而して、此等一切のものは、彼の教を受くる者に傳達されます。



私共は、聖書の中に、神の謬なき勸告を見出します。もし其教ふる所を實行しさへすれば、いかなる地位にある人でも、其責務を果す資格を與へます。此は、日毎人の心に語る神の聖聲であります。……由來聖靈の働は、鈍い理解力を開發し、冷血無情の心を溶し、神に叛行せる罪人を服従せしめ、世俗の腐敗せる感化の裡より、彼を救ひます。キリストが、其弟子に對する祈禱は、『爾の眞理を以て彼等を潔め給へ、爾の言は眞理なり。』聖靈の劔は、即ち神の言にして、罪人の心を刺透し、之を寸斷するものであります。如何に眞理であつても、之を語る者の心に、聖言の神聖なる感化なくして唯理論丈宣傳する時は、聽者を動かす事は出來ず、却つて謬説として排斥され、語る者は、救靈上の損失に對し責任を負はねばならぬ事となります。(教會の證第四卷四四一頁)

1 詩篇百十九篇十一節

2 提摩多後書十六章十七節

3 提摩多前書三章十六節

4 撒加利亞書四章六節

5 約翰傳六章五十四・五十七・六十三節

## 密室の祈禱

家庭の祈禱も、公けの席上に於ける祈禱も、其場所々々に於て、大切であります。が、個人の靈的生命を維持するものは、密室に於て、親しく神と交はる事でありま  
す。モーセが、地上に於ける神の住處たるべき聖所建築に關する啓示を蒙つたのは  
山に於て神に見えた時でありました。

私共が、神の人類に對する榮ある理想を默想するのは、神と共に山に在るの時  
あります。——此山とは、あながち、文字通の山でなくとも、神と交通し得べき密  
室を指します。斯くて、『我（神）かれらの中に住り、且あゆまん。我かれらの神  
となり、彼等わが民とならん。』<sup>1</sup>との聖約束が、私共に成就すべき品性を築き上げ  
る事が出来ます。

又日毎の働に従事し乍らも、時々、心に神を念じ、祈禱せねばなりません。此等



の黙禱は、馨しき香の如く、恩寵の座に立ち昇り。敵の計畫は破られて仕舞ひます而して、斯く神に依頼む基督者は、敗北する事なく、惡魔の奸計も彼の平和を攪亂する事は出来ません。神の聖言の凡の約束、神の恩寵の凡の力、エホバより出づる一切の賜の源泉は、彼の救済を保險して居る、エノクが神と歩んだのも、此があつた爲にして、神は必要に迫りし時の最も近き助でありました。

基督に仕ふる教役者は、目を醒し、且つ祈禱る人物たるを要します。怒り、又疑の念なく、聖き手を舉げ憚らずして恩寵の座に來り得る人たることが、彼の特權であります。即ち、彼は、如何に活動し、如何に人の心を取扱ふ可きか、其知識と靈感を得ん爲に、信仰を以て天父に祈り得る人でなければなりません。

抑も祈禱とは、心靈の呼吸にして、靈的能力の秘訣であります。如何なる恩寵と雖も、祈禱の代用とはならず、随つて心靈の健康は、祈禱を除外しては、之を維持する事は出来ません。祈禱は人心を生命の源泉に接觸せしめ、宗教的經濟の筋肉を強固にするものであります。

祈禱を怠たり、又は時々都合のよい時節に觸れてしたり、しなかつたりする様な祈禱の捧げ方をして居れば、必ず、神の聖手<sup>みて</sup>を離れて仕舞ひ、靈的管能は、其活力を失ひ、宗教的經驗は、其健康と元氣を缺<sup>か</sup>いて仕舞ひます。

私共の燈火に神の火を移し得るのは、唯神の祭壇に於てのみ爲し得るものにして神の光のみが、能く人間の力量の貧弱と不完全とを示めし、キリストの完全と純潔とを、明に認めしめます。又私共が、キリストに似ん事を欲求する様になるのは、イエスを仰ぎ見る時のみであります。又イエスの義を認める時のみ、飢渴く如く、之を得んと求めるのであります。而して、熱誠に祈禱する時のみ、神が私共の心中の希望に應じ給ふのであります。

神の使命宣傳者にして、若し其働に成功せんと欲せば、密室に於いて、深く神と交はらねばなりません。曾て某所に數名の教會員が、自分達の教師の成功を論じ、或は彼には、しかぐ<sup>たまもの</sup>の賜がある、或は彼は、説教が上手である、など色々其理由を述べて居たが、之を聞いて居た一人の老婆が、『否とよ、あの教師さんの偉い

のは、全能なる神様と、大變仲善しだからです。』と云つたと云ふ話があります。

誰でも、エリヤの如く、忠實に神に事<sup>つか</sup>へ、而して、彼の有せし如き信仰を有<sup>も</sup>つて居れば、神は其時の如く、御自身を顯はし給ひます。又誰でも、ヤコブの爲せし如く、熱心に神に求めるなら、其時と同様の結果を見る事が出来ます。要するに、能力は、信仰より出づる祈禱に對す應答として與へられるのであります。

イエスの生涯は、間斷なき神との交通により與へられた永續的信賴の生涯でありましたから、天に對する彼の奉仕に、失敗も挫折もありませんでした。日毎誘惑に遇ひ、絶えずユダヤ人の宰たちから反對され給ひしイエスは、祈禱により、彼の人性の方面を強めねばならぬ事を知り給ひました。人類に對して、祝福の器<sup>うつわ</sup>とならんが爲に、彼は、深く神と交はり、能力、忍耐、確乎たる精神を得給ふ必要がありました。

救主は、好んで寂寞たる山地に退き、人を避け、獨り天父と交り給ひました。彼は一日中熱心に働き、滅亡より人を救ふ爲に努力し、或は、病者を癒<sup>い</sup>し、或は患<sup>うれ</sup>ふ



る者を慰め、或は死者を復活せしめ、或は失望、落膽せる者を鼓舞、奨励し給ひました、かくて一日の激務を畢り給ふや、毎夜市街の喧騒を脱し、親しく天父に祈らんが爲、地に身を屈め給ひました。而も夜を徹して祈り給ひし事も屢々ありました然し、主は、斯く親しく天父と交り給ひし後、元氣を得、能力に満ち、再び、各種の義務を遂行し、幾多の試練と奮闘し給ひました。

キリストの福音を宣傳する者は、誘惑に遇ひ、劇しくサタンに攻撃を受けますが一點の罪をも犯し給はざりし救主も、又斯く苦しみ給ひましたが。彼は患難の時に天父を仰ぎ見給ひました。主は御自身幸福と能力の源にして、病者を癒し、死者を甦らせ、暴風雨を一言の下に静め給ひ得る御方であるに拘らず、屢々涙を流し、號泣して祈り給ひました。主は弟子の爲許りでなく、御自身の爲にも祈り給ひしことにより、彼自らも人間たることを顯し給ひました。實に、彼は、偉大なる祈禱家にして、彼は、生命の君として、神と共に力を有し、而して勝利を得給ひました。

眞實キリストの代表者たる教役者は、必ず祈禱の人でなければなりません。當る

可らざる熱誠と信仰を以て、神に祈り、奉仕に對する能力と、鞏固なる意志を與へられ、又熱き炭火を唇に觸れて、之を潔め、世人に神の聖言を傳ふる正當の道を知らしめ給はん事を願ひ求めねばなりません。

抑も、祈禱と云ふものは、友人に對する如く、自分の心を神に打明ける事であります。信仰の目は、神が最近く居給ふ事を認め、祈禱する者は、自分に對する神の愛と保護の確證を握る事が出来ます。彼のナタナエルの捧げた祈禱は、彼の赤心より出たものでありましたから、主は之を聽許し給ひました。主は凡の人の心を洞察し給ひます。而して、『直き人の祈は、彼に悦ばる』と、聖書に記してあります。彼は、自己を卑うし、誠實に我弱點と無價值とを感じ、神に訴ふる者の聲を聽くに客であります。

今や、ダビデの捧げた様な熱烈、煩悶の祈禱が必要です。彼の祈の叫の二三の例を挙げれば、左の如であります。『あゝ、神よ、鹿の溪水をしたひ喘ぐが如く、我靈魂は、爾をしたひ、あへぐなり。』『我汝の訓諭をしたへり』『エホバよ、

我<sup>われ</sup>汝<sup>なんぢ</sup>の救<sup>すくひ</sup>をしたへり。』『わが靈<sup>たま</sup>魂<sup>しひ</sup>は、たえいる許<sup>はか</sup>りにエホバの大庭<sup>おほには</sup>をしたひ、我心<sup>こゝろ</sup>、我身<sup>わがみ</sup>は活<sup>い</sup>ける神<sup>かみ</sup>にむかひて呼<sup>よ</sup>ぶ。』<sup>3</sup>

人を教へ、道を傳ふるに最効力ある人は、謙遜りて神を俟望<sup>まちのぞ</sup>み、其導と恩恵を渴望する人であります。『警醒せよ、祈禱せよ、活動せよ、』是は基督者の標語であります。故に眞正の基督者の生涯は、絶えざる祈禱の生涯でなければなりません。彼は、今日の光と力とは明日の試練と奮闘に對し充分でない事を知つて居ります。而して、サタンは、手を變へ、品を替へ、間斷なく誘惑します。又私共は毎日異つた境遇に置かれ、今迄經驗した事のない場面が私共を待つて居り、しかも危險に圍繞され、且つ、全く趣を異にせる、想ひ掛けない誘惑に襲はれます。私共が各種の誘惑に打勝ち、爲すべき義務を遂行し得るは、天來の能力と恩恵の助によるのみであります。

私共が、力ある祈禱を捧げ、價值なき、缺點だらけの人が、自分の願望を神に提出する力を有するは、實に驚く可き事實にして、無限の神と結合する事以上に、大



なる力を欲する事が出来ませうか、斯くて、弱き罪人も、其創造主に物言ふ特權が與へられ、私共は、全宇宙の統御者の寶座に達する言語を發する事が出来、道を歩んで居る時も、イエスと交談する事が出来ます。而して、主は、汝の右に在すと宣給ひます。<sup>4</sup>

私共は、心の中に神と交通する事が出来ます。又キリストに伴はれて、路を歩く事が出来ます。而して、日毎に業務に従事して居る時にも、心中の願望を默禱する事が出来ます。此種の祈禱は、人の耳には聽えませんが、決して其儘立消になつて仕舞ふものでなく、街路の喧騒、器械の響を超越して、上に登ります。斯くて、私共が物言ふ相手の方は、神でありますから……。

されば求めなさい、『求めよ、さらば與<sup>あた</sup>へられん、』とは、キリストの聖約束ではありませんか。謙讓、知識、勇氣及び信仰の増加を求めなさい、誠實に祈禱する人には、必ず答が来るものであります。とは云へ、其人が希望して居た通の事で答へられないかも知れませんが、又豫期して居た時期に來ないかも知れませんが、然し、其

人の必要に對し、最も善く適當せる方法と時間とにより與へられます。寂寞の中に又は疲勞せる時に、又は試練の時に捧げた祈禱は、必ずしも、其の當人の希望通に答へられるとは限りませんが、常に其人の利益になる様に答へられるものであります。

1 哥林多後書六章十六節

2 箴言十五章八節

3 詩篇四十二篇一節・百十九篇四十、百七十四節・八十四篇二節

4 詩篇十六篇八節參照

## 信 仰

神の道の爲に得られた最大の勝利は、精練せる議論、充分なる便宜、範圍の廣い勢力又は資金の潤澤の結果ではなく、密室に於て親しく神に見え、熱烈、至誠の信仰を以て人が全能の聖腕により縋つて得たものであります。

眞正の信仰と眞正の祈禱、——其力は實に偉大なものであります。是は祈禱する者が、慈愛に富み給ふ全能者の力を握る、兩腕の如きものであります。信仰とは、神に一切を委せ、より縋る事にして、神は、私共を愛し、且つ私共の最も爲になる事を知り給ふ事を、疑はぬ事であります。斯くて、信仰は、私共をして自信の行動を取らずに、神の道を書ばしめます。又自己の無智の代りに、神の智慧を受入れしめ、自己の弱に引換へ、神の力に依頼ましめ、自己の罪深き状態の代りに、神の正義を認めしめるものであります。私共の生涯及び私共自身も、既に神のものにして



信仰は、神の所有權を認め、其祝福を信受せしむるものであります。而して眞理、正義、純潔は、人生成功の秘訣にして、私共をして是等の美德の所有者たらしむるものは、信仰であります。又一切善良なる感情、抱負は、神の賜にして、信仰は、眞正の發達及び能率を生じ得る唯一の生命を神より受けるものであります。

『我儕<sup>われら</sup>をして世<sup>よ</sup>に勝<sup>か</sup>たしむるものは、我儕<sup>われら</sup>が信<sup>しん</sup>なり。』<sub>1</sub>

現在は各種の艱難辛苦に悩まされて居りますが、やがて今不可解の一切の問題が明白となる未來を見越さしむるものは信仰であります。私共の仲保者として、神の右に座し給ふイエスを見る事を得しめます。又信仰は、キリストが彼を愛する者の爲に往いて、其備を爲し給ひし第宅<sup>すまい</sup>を見せしめます。而して信仰は、勝利者に與んと準備してある、衣と冠とを見せしめ、贖はれし者の歌を聽く事を得せしめます。

完全なる信仰、自己を棄て、神への絶對的の服從、聖約束に對する單純なる信賴は、必ず凡ての教役者の經驗の一部分でなければなりません。教役者にして此經驗を持つてこそ、始めて信仰問題を懷疑、不信の徒に明白に説明する事が出來ます。

信仰は感情ではありません。聖書には、信仰を解釋して、『それ信仰は、望む所を疑はず、未だ見ざる所を憑據とするもの也。』と、記してあります。眞正の信仰は、推量と全く其選を異にして居りますが、推量は、サタンの送つた信仰の贗造物であります。されば、眞正の信仰を有する人は、此贗造物を掴まされる憂はありません。

信仰は神の聖約束を信じ、聖旨に服従して、果を結びます、推量も、又聖約束を信じない譯ではありませんが、サタンの遣り口の如く、神の律法を蹂躪しても、何とか之に對する言譯を造ります。アダム、エバは、信仰により、神の愛に信賴し、其律法に服従する事が出来ましたが、彼等が、神の律法を犯す様になつたのは、神の大なる愛は、必ず自分等の罪の結果より救つて下さるであらうこの推量でありました。

神の慈悲に浴し得べき状態に身を置かずして神の恩恵を求むる事は、決して信仰ではありません。純粹の信仰は、必ず聖書の約束と規定とに其根據を置く可きもの

であります。

不謹慎の態度で、宗教を論じ、心の飢渴なく、活ける信仰なくして、漫然祈つても何の効もありません。又キリストを單に世界の救主として認めるに過ぎない名丈の信仰では、決して心の癒しいやを受ける事は出来ません、救に至る信仰は、頭に眞理を理解する事ではなく、信仰を働かせずして、何んでもかでも知り度いと欲望する人は、神より祝福を受ける事は出来ません。

キリストに就て、信する丈では充分ではありません。キリストを自分の個人的の救主として信せねばなりません。斯く救主の功績こうせきを我物となす信仰のみが、私共を利するのであります。又多の人は、信仰と見解とを履違はきちがへて居ますが。罪を赦され、救に與かる信仰とは、キリストを信受し、神と契約關係を生ぜし者の取引であります。即ち、純粹の信仰は、生命にして、活ける信仰とは、元氣、信任の増加を意味し、人をして勝利者たらしむるものであります。



## 不信と懷疑

信仰は、神の聖言を、其儘信受するものにして、今自分の身の上に降り懸つて來た、辛い經驗の意味を知らうと努めません。然し世には兎角に、信仰の貧弱な者が澤山あつて、何時も不安の状態にあり、いらぬ取越し苦勞をして居ります、此等の人々は、毎日神の愛の實證に取巻かれ、日毎豊けき神の恩恵に浴しつゝあるも、此等の祝福を閑却し、一向氣に止めません。而も、一朝、何か困難に遭遇すると、神の聖前に駐付け様とはせず、不安の念に驅られ、愚痴を零ばして神より離れます。彼等は、かく不信の状態にあつて、果して何の利する所がありましたやうか、イエスは彼らの友にして、諸の天は、彼等の幸福を得ん事を切望して居ります。而して彼等の畏懼と不平とは、聖靈を憂ひしめます。

一体、私共の信ずるのは、神が、私共の願事を聽き給ふ事を明に認め、或は感ずるからでなく、神の聖約束に信賴すべきものであります。されば、信仰によりて、

神の聖前に來る時、凡の願事は、盡くキリストの心の中に入るものであります。私共は、主の祝福を願ひ求めた時には、必ず、其は、受く可きものであると確信し、之を得たものとして感謝せねばなりません。かくして、其祝福が、是非必用の場合には、必ず與へられる事を確信し、平然として義務の遂行に従事すべきものであります。而して、斯く爲す事を學んだ時、私共は、祈禱が聽かれた事を知るのであります。神は、私共の爲に、『其榮そのさかえの富とみに循したがひ、』『神かみの大能たいのうの勢威いきほひの活動はたらきにより』『我儕われらの求もとむるところよりも甚いたく過まされる事ことを行な』し給ひます。

基督者の生涯は、危険に襲はれ義務の就行が、困難に見へる事も度々あります。而も、かう云ふ場合には、危険が前途に横はり、束縛と死が後から追驅て來るかの如く、色々想像を描き、杞憂を抱くものであります。然し神の聖聲は、明瞭に前進せよと命じ給ひます。されば、よし暗黒に取巻かれ、一向前途の見極めが付かない時にも、神の命に服従せねばなりません。躊躇逡巡し、又狐疑する人の前からは、決して行路を遮さへぎる防害物が除去されるものでありません。一切の不安が消失きえうせ、又

失敗、不覺等の心配が悉く無くなる迄、服従を延引する人は、決して服従の期を見出す事は出来ません。信仰は、眼前の困難を認めず、其先を見越すものにして、見えざるもの、即ち全能力を捉へ得るものでありますから、意氣沮喪する筈はありません。而して信仰は、一切の危急に際し、キリストの聖手を握るものであります。

神の働に従事する人は、強固なる信仰の所有者でなければなりません。どう見ても、最も望のない様な場合もありまじやう。然し、最も暗黒な時に於ても、其先には光明が輝いて居ります。信仰により、神を愛し、神に仕ふる者の力は日毎に新にせられます。而して、彼の奉仕には、全能者の理解が添ひ、誤りなく聖旨を遂行する事を得しめます。是等の働人は、其確信を終始一貫し、神の真理の光は、全世界を包圍せる暗黒の裡に光り輝くものである事を忘れてはなりません。

神に對する奉仕に關しては、些でも意氣沮喪する様な事があつてはなりません。献身せる働人の信仰は、之に對する一切の試練に耐え得べきものたるべく、神は、其僕に其要する凡の能力と、其場合に應じて必要なる各種の智慧を與へ得る御方に



して、又喜んで之を與へ給ひます。神は實に、彼を信賴する者の最高の期待以上の事を成就し給ふ御方であります。

イエスは、私共をして一旦主に従はしめ、後暫くして棄て給ふが爲に、私共を召し給ひません。もし全然献身して、主の奉仕に盡すなら、神が何とか設備を爲し給はぬ様な地位に置かれる事は、決してありません。どんな境遇にあつても、キリストは、案内者となり、私共の進むべき道を示し給ひます。又如何に困惑せる事情が起つても、キリストは誤らざる相談役になり給ひます、又悲しい時、愛する者に死別れた時、寂寞を感じる時、其他凡て悲しい時に、キリストは同情ある友となり給ひます。又私共が、無智の故により、何か誤をする様な場合にも、主は決して私共を棄て給ふ事なく、『我は途なり、眞理なり、生命なり。』<sup>4</sup>と宣給ふ聖聲は明瞭に聽えます。

『かれは、乏しき者を其叫ぶ時にすくひ、助なき苦しむ者をたすけ給ふ。』<sup>5</sup>  
『汝は、完き平安を以て、其心汝を離れざる者を守り給ふ。彼は、汝に依頼め

ばなり。』全能者は、私共を彌いが上にも前進せしめんと其聖腕みうでを延べ私共を導き、進め、我汝に助を送らん、汝の求むる所は我名の榮の爲であるから、汝は之を受けらるであらう。汝の失敗せん事を冀こひねがひ注視する者は、やがて我言が榮ある勝利を得るを見るであらうと仰になります。『汝等信じて祈いのらば、願ねがふ所悉きこるこころく得べし。』

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

神は善と惡、義と不義を辨別し得る者なしに、此世を棄て置き給ふ事はありません。神は危急の場合に戦鬪の前線に立つべき任命を與へ給ひし人を有し給ひます。

- 1 約翰第一書五章四節
- 2 希伯來書十一章一節
- 3 以弗所書三章十六節・同一章十九節(改)・同三章二十節
- 4 約翰傳十四章六節
- 5 詩篇七十二篇十二節
- 6 以賽亞書二十六章三節(私譯)
- 7 馬太傳二十一章二十二節

## 勇 氣

神の僕は、困難や反對に遭遇して容易に勇氣を挫く様なものであつてはなりません。苟しくも、第三天使の使命を宣傳する者は、誹謗、虚偽に對し、毫も臆する事なく、信仰の善き戦を戦ひ、キリストの用ひ給ひし、『聖書に斯く記されたり』てふ武器を以て敵を撃退し、大膽に自分の立場に踏止まらねばなりません。而して、神の僕は、間もなく経験すべき一大危機に際し、昔キリストや使徒等の遭遇せし同一の頑迷、同一の冷酷、及び同一の憎惡（おどろ）とに邂逅（かいこう）せざるを得ません。

其惡しき日に當り、良心の命に従ひ、神に忠誠を盡さんと冀（こひねが）ふものは、勇猛にして且つ鞏固なる意思を有し、神と其聖言に關する知識を具（そな）へて居らねばなりません。蓋し、神に忠實なる者は、必ず迫害を受け、其動機は誤解され、其最善の努力は曲解され、而して惡者の汚名を衣（き）せられるからであります。



サタンは、彼の欺術を以て人心を迷はせ、判断を謬らせ、惡を善に、善を惡に見える様に致します。神の民の信仰が強く、且つ純潔になればなる程、又彼等が神に従はんとする決心が固くなればなる程、サタンは一層劇烈に活躍し、自ら義しと稱し、而も神の律法を蹂躪するものをして神の民に對する怒を激昂せしめます。故に『一度聖徒せいといとに傳つたへられし真理しんり』を擁護するには、最も堅固なる確信と最も勇敢なる精神とを要します。

十字架の使命宣傳者は、常に警醒と祈禱を以て自ら装ひ、絶えずイエスの名によりて働き、信仰と勇氣を以て前進せねばなりません。而も、患難の時代は眼前に迫つて居りますから、彼等の教導者なるイエスに、厚き信任を措おかねばなりません。今や神の刑罰は、各地に下り、各種の災害は後から後へと頻發しつゝあります。而して神が其御座より起ち出で、地を震動かし、惡者の罪を罰し給ふ時は、もう間もありません。其時神は、其神の民に味方し、之に保護を加へ、其永遠の聖腕を延ばし、一切の危害より彼等を防禦し給ひます。

## 『主にありて男々しかれ』

千八百四十四年の大失望の後、一團の兄弟、姉妹が、某處に會合しましたが、孰れも失望の傷手を負ひ、甚だ元氣がありませんでした。折しも一人の男子が、『主にありて男々しかれ、兄弟よ、主にありて男々しかれ。』と叫びつゝ這入つて來ましたが、彼は、此語を再三繰返しましたが、終に一同の顔は輝き始め、皆聲を合せて神を讚美しました。今日、私も、主の爲に働く者に對し、『主にありて男々しかれ』と申します。千八百四十四年以降、私は現代の眞理宣傳に従事して居りますが今日では、私に對し此眞理は、以前に優りて貴きものとなつて居ります。

或人々は、常に氣勢を殺ぐ様な不快の方面のみを凝視して居りますから、失意、落膽の虜となつて仕舞ひます。かう云ふ人々は全天が彼等をして、世界に祝福を齎らす機關たらしめんと俟つて居る事も、主イエスは人間が能力と勇氣との供給を仰ぎ得べき、無限の寶庫である事實を忘れて居るのであります、疑懼、恐怖の必要は

少しもありません。サタンが我らの前途に暗雲を以て閉さない様な時は決して参りません。かくて、敵は、キリストなる義の太陽より輝く光を遮らうと努めますが、私共の信仰は、暗雲を透視する事が出来ます。

神は、反対や攻撃を受けても、失望や、落膽を許さず、喜び勇みつゝ、神と共に働く人を要求し給ひます。神は、私共の先に立つて導き給ひますから、過去に於て微々たる状態の時に當り、とは云へ聖靈の力の下に働いて居た時、神が私共と偕にあり給ひし如く、今も、必ず私共を離れ給はぬ事を確信し、勇氣を以て前進する事が出来ます。

天使は、キリストに奉仕しました。然し、天使の臨在は、主の生涯を安逸のものとしなければ、誘惑より没交渉のものともしませんでした。『彼は、凡の事に我等の如く誘はれたれど、罪を犯さざりき。』<sup>1</sup> 教役者にして、主の命じ給ひし働にたづさはつて居る時、試練や困惑、又は誘惑に遇ふからと云つて、失望落膽すべきではありませんやうか、又は自分の働が、豫期通の結果を見ないからとて、確信を棄て、ど



なりましやうか、眞正の働人は、自分の爲すべき仕事が、如何に骨が折れさうであつても、決して之により逡巡するものでありません。勞苦を厭ひ、困難を託<sup>かこ</sup>つ事は神の僕を弱くして、其力を奪ひ去ります。

戰鬪の前線に立つ者は、サタンの攻撃の火矢が、特別に彼等に向け放たれるを知るが故、神よりの力の必要と、神の力によりて働かねばならぬ事を悟るのである。又勝利を得たからと云つて、自己の力を誇る事なく、一層全能者に深く依頼せしめます。斯くて、神に對し熱誠なる感謝の念は、胸中に湧き出で、敵に襲はれ、如何なる患難に遇つても、喜んで奮闘します。

### 信任と特權の時機

現時代は、嚴肅なる特權と神聖なる信任の時機であります。もし、神の僕にして與へられた信任に對し忠實に其責務を果して居らんか、やがて主が、『其扱<sup>そのあつか</sup>ひたる事柄<sup>ことば</sup>を我<sup>われ</sup>に陳<sup>の</sup>べよ、』と仰せ給ふ時、其報は蓋し大なるものでありましやう。刻苦

精勵、忍耐、及び無我の努力は豊に報ひられ、イエスは『いま今よりのちわれなんぢら後我爾曹をしもべ僕と稱いはず友と呼ばん。』と仰になりましやう、主の稱賛は、あなが強ち大きい働をしたから與へられるのではなく、其爲せし凡の事に忠實であつた故であります。神の重んじ給ふ所は、私共の得た結果に非らずして、行爲の動機にして、神は何物よりも、美德と忠實をも賞し給ひます。

私は、キリストの福音の傳令使に勸告します。決して失望落膽してはなりません。又如何なる頑迷の罪人でも、あの人は、神の恩恵に浴する事は出来まいなど、想つてはなりません。見た處では、望の無い人が、眞理を愛し之を信受する事があります。河水の方向を變ふるが如くに、人の心を變へ得る神は、最も利己的にして、罪に頑になつて居る人を、キリストに導き得る御方であります。『わが口より出づる言は、空しくは我にかへらず。わが喜ぶところをなし我命じ遣りし事を果さん』

新傳道地に働を築き上げんと努力する者は、一層の便宜の與へられん事を痛切に感ずる事が屢々あります。實際、此等の便宜の缺乏により、働が遅々として進まな

い様に見へる事もありましやう、決して信仰を失つたり、勇氣を挫くじいてはなりませ  
ん。彼等は、屢々財源の極小限度に追詰められる事もありましやう。又到底此上一  
歩も前進する事が出来ない様に感ずる事も、一兩にして止りますまい。然し、もし  
信仰により祈禱り、且つ働くなら、神は必ず、彼等の願を聽許し、資力を送つて、  
働を前進せしめ給ひます。困難は到底避さける事は出来ません。随つて、教役者は、  
どうして職責を全うし得るや途方に暮れ、前途頗る暗膽たる事が度々ありましやう  
然し働人は、神の約束を念頭に置き、且つ過去の恩恵に對し、神に感謝すれば、道  
は自ら彼等の前に開かれ、目前の義務を就行する力を與へられます。

※ ※ ※ ※ ※

パウロが、兄弟達に遇つた時、『之これを見て神かみに謝しゃし、其心そのこころに力ちからを得たり。』と記  
したルカの語の、深意を悟る者は罕まれであります。パウロが、囚人である事を恥とせ  
ず、泣いて、歡迎せる同情深き信者に圍まれた使徒は、大聲に神を讚美しました。



此刹那、今迄彼の心を閉ざして居た悲哀の雲は消去りました。由來、彼の信仰生涯は、試練、苦難、失望の連続でありましたが、彼は此時豊に報ひられた感を抱きました。かくて彼は、一層堅固なる歩調を以て、心中喜悅に満ち、過去を啣たず、將來を懼れず、泰然として途に進みました。彼は、素より累綯なわめと患難彼を待てる事を知つて居りました。同時に、今迄多の人を此世の累綯なわめより一層畏ろしき無限の苦痛の中より救つた事を知り、キリストの爲に彼の苦に與あづかる事を喜びました。

ザ、アクツ、オプ、ザ、アポツスルス四四九頁

- 1 希伯來書四章十五節
- 2 路加傳十六章二節
- 3 約翰傳十五章十五節
- 4 以賽亞書五十五章十一節
- 5 使徒行傳二十八章十五節

## 神は働人を如何に訓練し給ふか

主は、働人が自分達に命ぜられし職責を完ふする準備をなし得る爲に、教導し給ひます。神は、教役者が一層聖旨に適ふ奉仕を爲す資格を得しめんと希望し給ひます。然るに、兎角人の上に權を取らん事を欲望す者がありますが、此種の人々は、潔き精神の服従を要します。故に、神は、彼等の生涯に變化を生ぜしめ給ひます。之が爲に、神は彼等が擇ぶ事を喜ばない義務を、彼の前に置き給ふ事もありましよう。もしも彼等にして神の導に従ふ事を肯ずるならば、神は彼に恩恵と力とを與へ服従と要用の精神に於て義務を就行する事を得しめ給ひます。斯くて彼等は、重要な地位を占むる資を得、其訓練された力量が非常に役に立ちます。

神は、或者に失望を與へ、且つ一見失敗の状態に陥らしめ、之を訓練なし給ひます。兎に角、彼等をして困難に打勝つ道を學ばしめるのが、神の目的でありますか

ら、凡て失敗と見ゆるものを變じて成功となさしむる決心を彼等に與へ、之を鼓舞獎勵し給ひます。人は、前途に横はつて居る困難か妨害物の故により、屢々泣いて祈ります。然し、もし彼等にして信任の初一念を貫き、終に至る迄愈らないなら、神は必ず彼の道より障礙を除去し給ひます。抑も成功は、到底凌駕す可らざる如く見ゆる困難と奮闘した結果之を見るものにして、かくして得た成功は、最大の喜を持來すものであります。

單調の生涯は、靈的成長に決して有利なものではありません。或者は、何か日常の經驗に變化を生ずる事によりてのみ、靈的の最高標準に到達する事が出来ます。故に、神は、其攝理の中に、斯かる變化が品性建造に缺く可らざるものである事を認め給ふ時に、順調な生活を攪亂し給ふ事があります。神は、教役者が一層密接に神と交らなければならぬ事を認め給ひます。而して此事を實現せしむる爲、親しき友の交や親しみより隔離し給ひます。

神は、エリヤを天に移し給ふに先ち、彼を一定の場所に永住せしめず、所々に轉



々流寓し、逸居するの機會を與へ給はざりしは、彼が靈肉能力を得るに缺なからしめんが爲でありました。而して、エリヤの感化が、多の者をして一層廣き、一層有利なる經驗を得る助とならしめん事は、蓋し神の希望でありました。

世には、神の指定し給ひし場所で喜んで神に任へ、若しくは神のゆだ委ね給ひし働に不平なく従事するに満足せざる人があります。義務就行の方法にあきた慊らないのは、已を得ませんが、義務其ものに不満足なるは、要するに他の事をなさんとこひねが冀ふのであるから、不都合であります。神は、其攝理の中に、人の病的意思を癒すべき藥劑として、或種の作業を課し、以て自儘の撰擇を棄てしむる様に導き、神が折角彼等の爲に備へ給ひし働に對する資格を失ふ事なからしめ給ひます。故に、もし此務を受入れ、之を就行しさえすれば、彼等の精神は癒いされますが、もし之を拒絶すれば自他に對し平靜を保つ事は出来ません。

靜養の機會なく、間斷なく活動し、今日或る處に天幕を張つたかと思へば、明日は又他の處に張る様に忙殺されて居る人は、是は主が導き給ふ處にして、神は恚く

して完全なる品性を形成せんと、彼等を助け給ふのである事を記憶せねばなりません。遭遇する一切の變化に於て、神は彼等の親友、案内者、又たよりである事を認めねばなりません。

## 充分時間を費やして神と語れ

我教役者に關して、特別の訓戒が私（ホワイト夫人）に與へられました。教役者が富まん事を欲するは、決して神の聖旨ではありません。故に、彼等は世俗的の企業に手などを出してはなりません。かゝる事をすれば、靈的事物に對し、最善の努力を與ふる事の出來なくなるは、火を觀<sup>み</sup>るより明な事實であります。彼等は、自己及び家族を支へ得る丈の支給を仰ぐを以て足れりとせねばなりません。而して、我家族の教會に、適當なる注意を與ふる事が出來ない程に多の重任を負つてはなりません。自分の子女を、神の聖旨<sup>みしめ</sup>に従つて養育するは、彼等の爲すべき特別の義務であります。

又教役者が、絶えず事務の方面にのみ奔走し、夜遅く迄、理事會や委員會に列席せしめるのは、大なる誤にして、かくすれば、疲勞を來たし、倦怠の念を生ぜしめ



ます。教役者は、神の言より生命のパンの豊富なる滋養を得る爲、又活ける泉の流より、慰藉の水を飲み、氣を爽さはやかにする爲、休息の時間を要します。

教役者及び教師たる者の忘れてならぬ事は、彼等の力量の最善を盡し、其職責を完ふし、力の限り奮闘すべき責任を神の前に有する事であります。故に、神が彼等に授け給ひし業務に抵觸する義務を負おつてはなりません。

もし教役者若しくは教師が、財政上の責任に壓迫され、疲勞衰弱せる腦と神經とを以て教講に立ち、又は教場に臨んだ時、其與ふる火は、神の點じ給ひし神聖なる火に非らず、普通の火たる事を免れないのは、蓋し當然の結果であります。無理やりの努力は、聽者を失望せ、語る者を害します。かくの如き人は、神を求める時間もなく、又信仰を以て聖靈の油を注がれん事を求むる時間も有しません……。

私は私の働の友に對し、左の如く言へと訓戒されました。もし諸君は、天の豊けき寶を持たんと欲せば、密室に於て深く神と交はらなければなりません。もし此事をしなければ、必ず、聖靈の恩恵に缺け、恰も露と雨とのなきギルボアの山の如く

になります。徒らに齷齪として、神と充分語る時間なくして、働に力を得やうとするのは、蓋し無理な注文であります。

我教役者の多が、平凡にして活氣なき説教しか出来ないのは、要するに、世俗の事物に多の時間と考慮を費やすからであります。もし、絶えず恩恵に成長しなければ、機をりに適ふ語に缺乏するのは當然であります。されば先づ自制し、沈思默考し、而して後、神と語りなさい。これを、やらなければ、勞して功なく、徒らに喧騒、混亂を生ずるのみであります。

教役者及び教師たちよ、諸君の働をして豊富なる靈的恩恵の佳香を放たしめ、決して凡俗の事物と混同して、聖事業を俗化せしめてはなりません。向上と前進を主義となし、『肉にくと靈れいの凡すべての汚けがれを去りて自己じこを潔きよくし、神かみを畏おそれて聖潔きよきことを成就じょうじゆ』せねばなりません。

又私共は日毎に悔改める必要があります。而して、私共の祈禱は、一層熱誠たるべく、随つて一層力あるものでなければなりません。かくて、神の靈が私共と偕に

あり、私共を純潔になし、レバノンの香柏の如くに、直く又馨しきものとなし給ふ  
どの確信が、彌いが上にも強くならねばなりません。

(教會の證第七卷二五〇―二五二頁)

1 哥林多後書七章一節



## 最大の必要物

『汝等、我證人となるべし。』<sup>1</sup>とは、古の弟子等に仰せになつたイエスの聖言であります。今日となりても、少も其効力を失ひません。救主は、兎角形式に泥み易い宗教の流行する此時代に當り、忠實な證人を要し給ひます。然し、キリストの大使と自稱するものゝ中にすら、實際其主の爲に、忠實にして個人的の證を立てんと覺悟せる者は、甚だ少い事であります。

多の者は、過去の時代に生存せし偉人の敢行せし事業や、彼等の苦難や、喜悅に關する説話を試み、福音の力は、人をして如何なる逆境に處しても、如何なる激烈な誘惑に遇ても、之に動かされざらしむるものである事を滔々辯ずるが、要するに他人を引合に出すに過ぎずして、慫<sup>か</sup>熱心に或る基督者は忠實に主の證人となつたと説くに拘らず、自分の經驗談に至つては何等力ある精新なる證を立てる事が出來

ないやうであります。

基督の教役者よ、諸君は自分に關し何を言ふ事が出来ますか、自他の幸福、又神の榮の爲に、如何なる苦悶奮闘の實驗を有<sup>も</sup>つて居りますか、嚴肅なる最終の福音的使命を宣傳すると稱する諸君よ、真理の知識に關する諸君の經驗は果して如何でありますか、而して真理は、諸君の心に如何なる効果を與へましたか、諸君の品性はキリストの爲に證をする價值がある如く、自分を琢磨し、向上し、而して潔めたと證する事が出来ますか。

諸君はキリストの力に關し如何なるものを見、又如何なる事を知つて居りますか、主の要め給ふ證は、此種のものにして、教會の缺乏を感じて居る處のものも、又此であります。

キリストを我個人的救主として受入れる活ける信仰なくして、自家の信仰を懷疑者間に感ぜしめる事は、不可能であります。もし激流の中より罪人を救はんと欲せば、自分の足が滑<sup>すべ</sup>りさうな處に立つて居てはなりません。

私共は絶えず、キリストの新鮮なる啓示、即ち彼の教訓に一致せる日毎の経験を要します。高潔なる學識、智能は、私共の到達し得る範圍に置かれてあります。而して知識と徳行に不斷の進歩を見る事は、私共に對する神の思召であります。神の律法は神の聖聲の反響にして、『尙も高く上れ、聖かれ、尙も潔かれ』とは、凡人に與へられた勸告であります。故に、私共は、日毎に基督者的品性の完全に進歩する事が出来ます。

キリストの爲に、奉仕の生涯を送つて居る者は、多の人が想つて居るより、遙に高く、深く、又廣き経験を要します。既に、神の大家族の一員となつて居る者でも主の榮を見、榮に榮いや増りて、其おなじ像かたちに化はるとは、何を意味するかを知らない人が澤山あります。又多の人は、キリストの美しさの閃を僅許り認め、心に飛立つ許りの喜を抱き尙充分に、尙深く、キリストの愛を知らん事を欲求します。斯の如き人は、神を求むる心中の希望を、益々厚くせねばなりません。

聖靈は神の聖旨みことば通りに服従し、どうにでもなる人のみに働き、之を形造し給ひま



す。故に、靈的思想と、神聖なる交通の涵養に一身を委ねゝばなりません。要するに、諸君は主の榮光の曙光に接した許りでありますから、此上とも益々進んで、主を知る時『義<sup>だぎしきもの</sup>者の途<sup>みち</sup>は旭日<sup>あさひ</sup>のごとし、いよく光輝<sup>かうき</sup>をまして晝<sup>ひる</sup>の正午<sup>もなか</sup>にいたる』事實を悟るでありましやう。

1 使徒行傳一章八節

2 箴言四章十八節

## 自 省

教役者の行動に、改善を要する點は澤山あります。又多は、自分の缺點を承知はして居るが、其及ばず感化に付て、無知である様であります。彼等は、自分の行動に氣が付かないではありませんが、之を放任して顧みませんから、毫も改善されません。

苟しくも、教役者は毎日の行動に對し慎重な態度を以て自省し、自家の性癖を熟知せねばなりません。日常生活の凡の事情を嚴密に吟味する事により、如何なる動機と主義により自分は統御されて居るかど、一層よく解わかります。自分の日々の行動が、良心の是認するものであるか、それとも非難するか、之を精査する事は、基督者的完全に到達せんと希望する者に必要なる事柄であります。善良なる事業として認めらるゝもの、——慈善行爲ですら、之を嚴密に調査すると、悪い動機から出て

居る事があります。

多の人は、自分が持つて居ない徳に對し、稱賛を受けますが、人の心を探り給ふ神は、動機を看破し給ふが爲、人からは甚しく稱賛された行爲でも、神は之を利己心と賤むべき偽善より出たものとして認め給ふ事が屢々あります。私共の行爲は其が稱賛に値するものでも、又は非難すべきものでも、人の心を探り給ふ神は、之を行ひし動機に照らして判斷を下し給ひます。

又多の人は、品性の缺點を明示する鏡に自分を映して見る事を等閑に付します。故に、醜陋及罪惡は、決して除去られず、且つ自分で氣が付かなければ、必ず他人に見へるものであります。又利己主義の憎むべき罪は神の働きに献身するに稱する者の中には、少からず存在して居ります。彼等にし、若し、熱誠な自省家であるなら、自分の品性を神の要求、殊に神の聖なる律法なる一大標準に照す時、其及ばざるの甚しき事を認めるに相違ありません。然るに或者は、自分の心の缺點を發見せんが爲、深遠なる觀察をする事を肯じません、故に、この方面にも、缺點だらけ



であるに拘らず、故意に、己が罪に對し識らず顔して之を改めやうと致しません。

※ ※ ※ ※ ※ ※

自分の性質を克く理解し、自分はどう云ふ種類の罪に一番陷り易いか、又どう云ふ誘惑に最も負け易いかを熟知する者は、用もないのに敵地に侵入し、誘惑を招く様な事をするものではありません。若し己を得ざる義務の爲、不利の境遇に立たねばならぬ場合には、必ず神より特別の助を得、敵と奮闘し得る充分の設備を與へられ、前進する事が出来ます。

自己を知ると云ふ事は、幾多の懼るべき誘惑に陥らんとする危険より、多の人を救ひ、多の不面目な不覺を防ぐものであります。又己を知らんと欲せば忠實に自分の行爲の動機や主義を調査し、神の聖言に示された義務の標準に照らして見る事が肝心であります。

## 自己改善

老練なる教役者は、神に召された僕として、日毎に進歩を見、間斷なく能率の増進を計り、常に民衆に傳ふべき新しき材料の蒐集に努力する事を以て自家の責務と感ぜねばなりません。たとへば、福音の解釋に努める毎に前回に比して、一段の進歩を見、年を重ねるに従ひ、敬虔の念は一層深く、慈愛の精神は一層厚くなり一層靈的の人物となり、聖書の眞理に關し、一層徹底せる知識を有する様にならねばなりません。又年齢が進み經驗が増せば増す程、世態に關し、一層完全なる知識を有して來ますから、人心を善く了解し、益々近く、之に接觸する事が出來ます。

(教會の證第四卷二七〇頁)

神は、怠惰者を聖事業に要し給ひません。神の要し給ふ働人は、思慮深く、親切にして、愛に富み、且つ熱心でなければなりません。我教役者を善化するものは、活動にして、怠惰は、要するに墮落の證據であります。一切の心神の器能は、之を使用し、決して休止せしめてはならぬ事が神の旨である事を示して居ります。……故なくして午睡を貪る様な人は、貴重なる光陰の價值を辨<sup>わきま</sup>へぬ者であります。……

我々として事に當らず、且つ時間の經濟に對し觀念なき人は須らく規則正しく、且つ迅速に、事を處理する習慣を造らねばなりません。ジョージ、ワシントンは、規律と秩序を重んじ、周到綿密の人でありましたから、山なす事務を處理する事が出来ました。數ある書類は、一々日附を記入し、然る可き場所へ仕舞つて置きましたから、入用の時、見當<sup>みあた</sup>らなくて、之を探<sup>さが</sup>す爲、無益の時間を費やす様な事はありませんでした。

神の人は、知識の追求に熱心なる篤學の人にして、決して時間を空費してはなりません。努力奮闘しさへすれば、基督者として、又有力の人物として、殆んど如何



なる重要な地位にも到達する事が出来ます。然るに多くの者は講壇の人となつても、又は事務家としても、一向優秀の技量を發揮する事が出来ません。其は要するに、平素確固たる目的なく、少年時代より緩慢なる悪習慣を脱却せず、何をしても、身に泌みてやらないからであります。

時に、急に思ひ立つて事をするのは、此等安逸を貪る怠惰者を改革するには足りません。どうしても、間斷なく忍耐して、改革を計らねば、決して其實を擧げる事は出来ません。事務家は、起床、祈禱、食事及就寢等皆其時間を定むる事によりてのみ、眞實の成功を收むる事が出来るものであります。もし世俗の業務にも、規律が缺く可らざるものとすれば、神の事業には尙更大切であります。

又朝まだき、床離の悪い人が澤山ありますが、かく寢床の中で空費された貴重な時間は、一度失つた以上は、決して戻つて來ません。此は、其時丈の損失でなく、永遠に失はれたものであります。一日僅か一時間の損失でも、一年間に積もれば、大した事になります。惰眠を貪る者は克く此事を考へ、やがて神の聖前<sup>みまへ</sup>に立つ時、

失はれた機會に付て、何と辯明すべきかを考へなければなりません。

## 寸暇の利用

教役者は、讀書、勉學、默考及び祈禱に時間を費やし、有用なる知識を蓄藏し、善く聖句を暗んじ、預言の成就を審にし、キリストが弟子に教へ給ひし教訓を學ばねばなりません。されば、旅行する際などは、必ず何か書籍を携帶し、或は列車内に、或は停車場で待つて居る時に、之を讀む様になさい。兎に角、僅の時間でも、何事が爲して、之を空費しない様にすれば、各種の誘惑に陷る機會を避ける事が出來きます。

多の人は、當然成功せねばならぬ筈なるに、全く失敗しました。と云ふのは彼等は働の重荷を痛切に感せず、又恰も福千年でも夢みる者の如く、悠々として、救靈事業に、従事するからであります。……神の事業に最も要する者は、平凡の説教者に非らずして、熱誠、奮闘を旨とする働人であります。又人心の力を量り得る者は

唯神のみにして、神は、私共が、小成に安んじ、無智の境涯に甘んじて居るを喜び給はず、益々智能を啓發し、進歩向上せん事を切望し給ひます。

故に、教役者は、知識の増進を計る責任を負はされたものである事を自覺せねばなりません。勿論、學習して得た知識に誇つてはなりません、之が爲に、神の榮を揚ぐるに一層便益を得る様になつた事を認め、喜を抱くは、凡の人の特權であります。要するに、教役者は、凡の智慧と知識の源なるキリストの盡きざる泉より飲む事が出来るものであります。

キリストの學校に入り學ぶ者は、自分が登りつゝある高處で目が暗らむ様な事なくして、知識の上達を計り、眞理より眞理に進み、科學と自然との驚くべき法則に對し、一層明瞭なる觀念を抱くに從ひ、益々深く、人に對する神の愛の顯現を驚異し、稱嘆せざるを得ない様になります。かくて、彼は、才能ある目を以て、無限に亘る神の完全、知識を見る事が出来ます。而して、心が廣く、又大くなれば、純潔なる光明は、流の如くに胸中に注ぎ込みます。又生命の泉より飲めば飲む程、神の



無限大に對する瞑想が、一層深く、一層楽しくなり、神の深き事を悟らんとする知識慾が、一層大きくなります。

\* \* \* \* \*

### 精神的修養の必要

團體として、私共の切に要し、又時代の要求に應ずる爲に有せざる可らざるものは、精神的修養であります。貧困だの、身分が卑い事が、逆境等の事情により、精神的修養を妨げられてはなりません……。

何を研究しても、必ず困難の伴はぬものはありませんが、之が爲、沮喪して研究を中止してはなりません。須らく、研鑽、勉勵し、且つ祈り、各種の困難に臆せず之と奮闘し、意思の力と忍耐の徳とを我助となし、真理の美玉を手に入れる迄、努力して發掘せねばなりません。而かも、是は困難が伴ふ丈に、一層の光輝を放ちま

す。然し同時に、此一點にのみ精神を集中して離れず、又他人にも之を強ゆる事は決して得策ではありません。他の問題をとり、注意して之を檢閲すれば、後から後へと、奥義を了解する事が出来る様になります。

此方法により、二の價值ある勝利を得る事が出来ます。即ち單に有用なる知識を獲得するのみならず、精神を活動させる事により、智力の増加を齎もたらします。一の奥義を開く事の出来た鍵は、又今迄發見されなかつた他の知識の寶を發見せしめます。

我教役者の多は、教理問題に關し、ホンの僅許を人に紹介し得るに過ぎませんが自分で努力研鑽した教理は、自然之に通曉し、進んで他人をして之を理解せしめ得る筈であります。預言や、其他の教理問題は凡の教役者により充分に理解されねばなりません。然るに長年間傳道に従事し乍ら、僅かの問題に關する知識に満足し、進んで熱心に、且つ祈禱深く聖書を研究し、教理とキリストの實際的教訓とに精通しやうと心掛くる熱誠の足りない人々があります。

教役者の胸中には、必ず聖書的眞理の知識を蓄積し、何時でも、必要の場合には其心の庫より新しいもので、古いものでも、自由に取出し得る準備をして置かねばなりません。今や、多の人の精神は、熱誠、努力の缺乏により、發達を妨げられて居ります。されば、神が私共に對し、前進せよ、而して我汝に與へし力量を開發せよと宣給ふ時が參りました。

世は、各種の邪説と、謬論とで充滿して居ります。又挑發的の戯曲を仕組んだ小説類は、續々刊行され、人心を腐敗せしめて居ります。尙其他虛妄の學説は、到る處に唱道され、道德を亂し、靈的進歩を破壊して居ります。

神の事業は、反對の風潮に對抗し得る爲、才能あり、思想あり、且つ聖書に通曉せる人物を要して居ります。私共は外部に敬虔を装ふとも、内心、尊大であつたり狭量であつたり、又は矛盾したりする態度を許す事は出来ません。心に眞理の潔の力を有する者は、自來外形に顯はれ、抵抗すべからざる感化力を發揮するものであります。随つて、かゝる人は、誤謬の鼓吹が、眞理を創造する事も、破壊する事も



出来ない事を知るが故に、平靜、沈着の態度を取る事が出来ます……。

我教役者間にすら、何等の努力なくして出世したいと欲望する者があります。彼等は、何か大した働をして、有用の人物たらんとの野心を抱いて居るに拘らず、日常の小事を等閑に付して居ります。然し、此些々なる義務が、キリストに倣ふ教役者を養成するに、與つて力ある事を認めません、又彼等は、他人の仕事をしたがりますが、之に適する訓練を受くる事は好みません。斯くて現今、自分の有する力量では、到底難い事業に當らうと熱望する者がありますが、結局大失敗を招く原因となります。要するに、彼は、階段を一步、一步と登る煩を避け、一足飛に高に登らんとする愚者に過ぎません。(教會の證第四卷四二一—四二七頁)

※ ※ ※ ※ ※

私は、私共の前に、人は如何なるものであるべきか、又如何なる事をなし得るか其例證を示されて居るのに、正義の善事業の敢行に熱中する程に感激されないのを

見て驚きました。勿論、凡が樞要の位置を占めるとは限りません。然し、誰でも有用、信任の人となり、其努力と忠實とにより、自分で想像する以上の善事をする事が出来ます。(同前書三九九頁)



人間の價值と云ふものは、其仕事の種類により批判すべきものでありません。是人一人々々の爲に、其價を拂ひ給ひしキリストによりて定めらるゝものであります。愛に於て、單純に於て、又廉潔に於て、内住のキリストと一致し、榮の望を抱く者は、神と偕に働くものであります。かくの如き人こそ、實に神の<sup>はたけ</sup>畠又神の<sup>いへ</sup>室であります。

キリストの愛の宿れる心は、彌<sup>いや</sup>が上にも純化され、生命の泉は、神と人とに對する愛である事實を證明します。要するにキリストは、即ちキリスト教であります。此は、至高き處には神の榮となり、地には平和、人には恩恵であります。而して、

是は神の目的の實施であります。

眞正の基督者の成長は、キリストに在る男女の靈的の身長の充分に達する様に向  
上する事であります。思想にせよ、行爲にせよ、其眞正なる修養、琢磨は、キリス  
トの學校に於て實際的敎訓を學ぶ事により、最も好結果を見るのであります。心が  
神の靈に統御されずして、徒らに條規を守らんと、努力、煩悶するも、さ迄の効あ  
るものではありません。

キリストの僕たるものは、絶えず、態度、習慣、精神、勞作等の改善を計らねば  
なりません。然し是は、單に外部に顯れた皮想な藝能にのみ目を注いだのでは、其  
目的を達する事は出来ません。必ず、イエスを仰ぎ見、精神と品性に、内的變化が  
起らねばなりません。クリスチャンは、必ずキリストの學校で教育を受け、主の謙  
遜の徳を涵養すべきものにして、斯くてこそ、天使と交り得る資格が與へられるの  
であります。



※  
※  
※  
※  
※  
※

神の言の光を得た者は、其希望も事業も、凡の他の人より優れて居りますから、地上の何人を措いても、専ら聖書の研究に最大の努力を費やし、兼て科學の研究も之を怠つてはなりません。人は、凡の知識と智慧の源なるキリストとの關係が、密接なればなる程、智的にも、靈的にも、其助を受くる事が、益々大くなります。兎にも角にも、神に關する知識は、缺く可らざる教育にして、苟しくも、眞正の教役者は、此知識を追及するを以て、平素の心掛とせねばなりません。

（教師に與ふ書五一〇頁）

## 聖　　靈

『彼<sup>かれ</sup>すなはち、真理<sup>まこと</sup>の靈<sup>みたま</sup>の來<sup>きた</sup>らんとするとき、爾<sup>なんぢら</sup>曹<sup>みちび</sup>を導<sup>みちび</sup>きて、凡<sup>すべて</sup>の真理<sup>まこと</sup>を知<sup>し</sup>らしむべし。』『かれ來<sup>きた</sup>らんとき、罪<sup>つみ</sup>につき、義<sup>たゞしき</sup>につき、審判<sup>さはん</sup>につき、世<sup>よ</sup>をして罪<sup>つみ</sup>ありと曉<sup>ささ</sup>らしめん。』<sub>1</sub>

聖靈は、神の眞理を啓示する唯一の力ある教師でありますから、聖靈の臨在と、其補佐なくして、徒らに聖言を宣傳するも、何の効力もありません。而して、眞理が聖靈により、心に導かれた時のみ、良心を喚起し、生涯を改造する事が出来るものであります。教役者にして、神の誠命と約束とを暗んじ、聖言の儀文のみを紹介し得るも、此種の人の福音の種蒔は、もし天來の露により霑<sup>うる</sup>はされ、生命を發揮するに非ざる限り、無効であります。神の靈が、共に働き給はざる時は、如何に教育があつても、又如何なる有利の地位にあつても、決して人を光の徑路とする事は

出来ません。新約聖書中の、どの一卷も、未だ録されざるに先ち、キリストの昇天後、未だ一回も福音的の説教を爲さざりしに先ち、聖靈は、祈禱つゝありし弟子等に降りました。而して、『汝等<sup>なんぢら</sup>は其教<sup>そのおしへ</sup>をエルサレムに満<sup>みた</sup>せたり。』<sup>2</sup>とは、當時敵の口より漏れし證言でありました。

### 神の約束は條件付なり

キリストは、聖靈の賜を、其教會に約束し給ひました。而して、此約束は主の直弟子に與へられしと同じく、今日の私共にも屬するものであります。然し、どの約束もさうでありますが、此は條件の下に與へられたものであります。多の人が、主の約束を信じ、之を履行して戴くと告白し、又多く、キリストや聖靈に關し語るに拘らず、一向其利益を見ないのは、何故でありませうか。他でもありません、彼等は依然、自我を主張し、神の聖手の指導と統御に従はないからであります。

私共は、聖靈を使用する事は出来ません。聖靈が私共を用ひ給ふのであります。



神は聖靈を通し、『其善き旨を行はんとて、爾曹の衷に働らき、爾曹をして志を立て事を行はしめ、』給ひます。然るに、多くの人は、神の導に任せず、自分で處理しやうと欲しますから、天來の賜を受ける事が出来ないであります。己を卑ふし、神の聖前に出じ、其指導と恩恵を待望む者には、聖靈が與へられます。而して此約束されたる祝福は信仰により要求すれば、一切の他の祝福も之に添へて、續々與へられます。且つ、是は、キリストの恩恵の富に従ひて與へられるのであります。而してキリストは、私共の之を受け得る容量に應じ、賦與せんと準備して居給ひます。

要するに、聖靈の賦與は、キリストの生命の賦與にして、斯くの如く神より教へられし者のみ、又聖靈の内住を實驗し、其生活にキリストの生活を發揮する者のみは、救主の真正なる代表者として立つ事が出来るのであります。

## 教師たる聖靈

神は、未だ琢磨されない人物を、其儘受入れ、もし彼等にして、聖旨に服従しさへすれば、之を神の奉仕に應<sup>ふさ</sup>はしき人物に教育し給ひます。心の中に受入れられた神の靈は、一切の管能を活躍せしめます。故に、聖靈の導の下にあり、一切を神に献げて餘す處のない心は、順調に發達し、益々力付けられ、神の要求を理解し、且つ之に應ずる事が出来ます。かくて、意思薄弱にして優柔不斷の者も、變じて、決斷力に富める鞏固の人となります。不斷の献身は、イエスと其弟子等の關係を、益々密接ならしめ、終に基督者は、其品性に於て、主の如くになります。かゝる人の見解は、益々明かに、又益々廣くなり、其識別力は、一層聰慧となり、其判斷は、益々正確になります。かくて、彼は、義の太陽により、生命の力を受け、活動しますかり、多の果を結び、神の榮を揚げる事が出来ます。

キリストは、罪に打勝んと奮闘する者の心の中に聖靈を送り、神の力が人に與へ

られ、超自然の能力により、神の國の奧義に關し、無識の者を教ふべしと約束し給ひました。もし聖靈が間斷なく、各個人に活動し、救世主の聖業をして有効ならしむる爲に與へられなければ、神の生給ひし獨子が、己を卑ふし、憎むべき敵の誘惑と奮闘し、一點の罪なき身を以て、不義の人類の爲に死に給ひし事も、私共に何の効果を與へません。

聖靈は、弟子等をして、主のみを崇めしむる事を得しめ、又四福音記者の筆を指導し、キリストの言行を世に傳ふる事を得しめました。今日も此同じ聖靈は、間絶なく活動し、世人の注意を、カルバリーの十字架上に献げられし大犠牲に向けしめ人類に對する神の愛を、世に啓示し、人心を披ひらいて、聖書の約束を信ぜしめんと求めて居給ひます。

義の太陽の光輝を暗き心の中に照らさしめ、人心をして、永遠の眞理を認め覺醒せしめ、正義の大標準を示めし、罪惡の何たるを悟らしめ、罪より人を救ひ得るキリストに對する信念を喚起せしめ、浮雲の如き此世の事物に對する愛着の念を變じ



永遠の嗣業を慕ふに至らしむるものは、齊しく聖靈の業であります。聖靈は、人を改造し、琢磨し、且つ潔めて、天の王の子となし、其家族の一員たるに適はしからしめます。

### 聖靈を受く事の効果

自己が全く空しくなり、一切の偶像が胸中より除去された時、其跡にキリストの充溢るゝ靈は來つて之を満たし給ひます。斯の如き人は、腐敗より心を潔むる信仰を有する人と云ふべく、即ち彼は、靈に従ひ、靈の事を想ひ、毫も自己を恃まず、キリストを以て、凡の凡と致します。彼は、又續々啓示される眞理を謹んで信受し凡の榮を神に歸し、『されど神は其靈をもて之を我儕に顯せり。』『我儕の受けしは、此世の靈に非らず、神より出る靈なり。是神の我儕に賜し所のものを知べき爲なり。』と云はねばなりません。

靈は又、其人の心の中に結んだ義の果を顯はします。即ち、キリストは、彼の中

に在りて、『泉いづみとなりて湧出わきいでて、永生かぎりなきいのちに至いた』ります。又彼に眞の葡萄樹の枝にして、房々とした美事な果を結び、神の榮を顯はします。斯くして結んだ果は、抑も如何なるものでありましかうか。聖靈の果は『仁愛じんあい、喜樂きらく、平和へいわ、忍耐にんたい、慈悲じひ、良善りようぜん、忠信ちうしん、溫柔おんじゆう、擗節そんせつ』等にして、憎惡、不満足、沈鬱、憤怒、不安、若しくは自ら造る試練等は、全然之と沒交渉のものであります。

此靈を有する者は、熱心に神と偕に働く人にして、天使は彼等と力を協あはせます。故に、彼等は、其傳ふる使命の精神を體得し、隨したがつて其語る處は、極めて緊要の意義を有し、其心の庫より、キリストの例に倣ひ、純潔、神聖なものを出します。

私共の宣傳すべき使命は、決して之を齎らすに當り、遠慮、畏縮する筈のものでありません。苟くも、之を鼓吹する者は、使命の本體を曖昧にしたり、其起原や目的を隠かくしたりすべきものでなく、一旦神の前に嚴肅なる盟をなし、キリストの使命宣傳者として、又恩惠の奧義の家宰いんづさとして、任命されし私共は、神の與へ給ひし一切の教訓を忠實に宣傳せねばなりません。

世俗と私共とを隔離せしむる、特色を有する使命は、永遠の利害に關するものでありますから、之を顯著にして、毫も控へてはなりません。神は現在起りつゝある事柄に關し、光を與へ給ひました。されば、ペンを以て、口を以て、此眞理を全世界に宣傳せねばなりません。然し、私共の宣<sup>の</sup>ぶる言をして、効果あらしむるものは胸中に收めたるキリストの生命にして、又聖靈により賦與せられし愛の活動力であります。實にキリストの愛は、神の爲に、人の唇により、宣傳せし一切の使命の原動力でありました。

### 終末近けり

日一日と、永遠を指して經過するに隨ひ、恩恵時代の終末に益々接近して参ります。されば、私共は、前例なき程、一層豊に聖靈の與へられん爲に祈り、教役者の上に、其潔めの感化が顯しく及び、誰が見ても、彼はイエスと共に在り、主より學びたりと信じ得る迄に進まねばなりません。



私共は、又敵の計略を看破し、又危難を察知し得る忠實なる哨兵として、靈的眼光を要します。又人智の及ぶ範圍に於て、基督教の大問題と、其奧妙の原則とを了解し得る様、上よりの力を要します。

聖靈の感化の下にある人は、決して狂氣じみた熱心でなく、泰然として迫らず、其思想に於ても、言行に於ても、毫も誇大の點を見ません。種々怪しげな教理の混雜中に、神の靈は、真理の證據を拒まない人に對し、指導者となり、又防禦者となり、『真理』で在し給ふ主の御聲以外の、一切の叫を沈黙せしめます。

私共は、今や甚しき謬説が信受され、真理が顧られない末の時代に生存して居ります。故に、主は、教役者にも、民衆にも、彼等の上に照らされたる光に對して、其責任を問ひ給ひます。又神は、私共を召して、真理の寶玉を集め、福音の骨組に鏤ちりばめしめ給ひます。而して、其神聖美を放ち、世の道德的暗黒を輝すのであります。此は聖靈の助なくしては、決して成就する事は出来ません。然し、此助さへあれば、何事と雖も出来ない事はありません。又私共は、聖靈を與へられた時、信

仰により、無限の力を握ります。苟しくも、神から來るもので損失するものは一もありません。救世主は、誤謬の暗黒が、散逸せんが爲、世人に彼の使命を遣り給ひました。而して、聖靈の働は、實に無限大にして、此源泉より、神の爲に働く者に能力も能率も來るのであります。

- 1 約翰傳十六章十三・八節
- 2 使徒行傳五章二十八節
- 3 腓立比書二章十三節
- 4 哥林多前書二章十・十五節
- 5 約翰傳四章十四節
- 6 加拉太書五章二十二・二十三節

## 進歩と奉仕

基督者の生涯は、世の多の人が評價する以上のものがあります。温順、忍耐、謙遜、慈愛のみが、其全部を形成して居るのでありません。勿論、如上の美德は、缺く可らざるものでありますが、之に加ふるに、勇氣、活力、及び堅忍不拔の精神が必要であります。キリストが、私共に踏めと指し給ふ途は、窄き門より入る克己の道にして、此途に上り、各種の困難と失望と奮闘して前進するには、薄志弱行の徒では到底出来ません。

要する所のものは、精力家にして、前途に横はる難關が除去され、其途が平滑になるのを待たずして突進する人、新銳の元氣に横溢し、意氣沮喪せる者を鼓舞奨勵する人、而して其心は基督者の愛情熱く、其手は、主の業を爲すに強き人が入用なのであります。



然るに、傳道事業に従事して居る者の中には、意思薄弱にして、活氣なく、容易に失望する者がありますが、此種の人々は、進取の氣性乏しく、何事か爲さずんば止まないと云ふ積極的性質、即ち奮闘、熱誠の精神を缺いて居ります。苟しくも、事に成功せんと欲する者は、勇氣あり、且つ希望に満ちた人で、單に消極的の品性許りでなく、積極的の方面も具備した人でなければなりません。勿論、憤恨をとどむる柔和なる答をなすと同時に、惡に對しては、嚴として犯すべからざる勇氣を以て之を却けねばなりません。又凡の事を忍ぶ慈愛と偕に、自己の感化をして積極的の威力たらしむる事を要します。

又或人は、鞏固なる品性を有せず、其計畫、其目的は、漠として極めて不徹底であります。かゝる人は、此世にありて、一向實際の益に立ちません。されば、此軟弱、優柔不斷の惡癖は、是非共打勝なければなりません。

直正なる基督者品性には、如何なる逆境に處しても、毫も犯されない不撓不屈の精神があります。されば、私共は必ず、道德的自覺を有し、人の阿諛や賄賂や將又

脅喝等により、主義主張を<sup>ま</sup>枉げる様なものであつてはなりません。

神は、又私共が、神の事業の準備を爲すために、一切の機會を利用すべき事と、全力を盡して之を實施し、常に其神聖と極めて重大なる責任とを自覺すべき事を期待し給ひます。

充分力量があるに拘らず、一向功績の擧がらない人が澤山ありますが、蓋し其企圖する處が小さい爲であります。世には、生に對し何等の定見なく、到達せんとする高標準なくして、空しく一生を了る人が、數へ切れぬ程あります。此理由の一は自分で自分を卑<sup>ひ</sup>く、評價して居る事であります。キリストは、私共の爲に、無限の價を拂ひ給ひました。而して、主は、其價に準し、私共が自己を價積る事を希望し給ひます。

低い標準に達したからと云ふて、決して満足してはなりません。私共は、決して理想通りにもなつて居りません。又神の聖<sup>み</sup>旨<sup>ひね</sup>にも全然添つて居りません。神は、私共に推理の能力を與へ給ひましたから、徒らに閑散の時を費やし、若しくは世俗の

事物に没頭する事なく、彌が上にも向上され、琢磨され、然して潔められ神の王國の利益を増進する爲に用ひられる様にならねばなりません……。

如何なる地位に置かれても、其の働の上に、自分の動機と品性が顯はれるものである事を忘れてはなりません。苟しくも、働に従事する以上は、本氣になり、精勵し、容易の業を選ぶ様な惡癖に打勝たねばなりません。

日常の事物に顯はれる同一の精神、主義は、全生涯に及ぶものであります。或る一定の仕事をなし、一定の給料を受け、進んで辛苦、勉勵して進歩を計らうとしな  
い者は、神が其御事業の爲に召し給ひし人物ではありません。體力にせよ、智力に  
せよ、又道德力にせよ、成るべく之を少しく使はうと計る教役者は、神が豊に其祝  
福を與へ給ふ人ではありません。而かも、其惡例は、得て他人が模倣するものであ  
ります。要するに、彼等は、自己の利を計る事が動機の源にして、人の看守を要し  
又は課せられた仕事丈を爲すに止まる人は、決して善且つ忠なる僕との賛辭を受け  
る價值はありません。要する處のものは、努力奮闘、熱誠の人にして、爲さねばな



らぬ事は、何事にせよ喜んで之に當る者であります。

多の人は、失敗を懼れて、責任を避け、遂に能力を失つて仕舞ひます。かくて、經驗の結果得らるべき教育を受け損んじます。此經驗てふものは、書物の上や、其他の研究や、好機會によりても得られぬ大なる利益を與ふるものであります。

人は、境遇を作る事が出来るものであります。決して境遇をして、人を作る事を許してはなりません。私共は、境遇を捉へて事業をなす道具に供せねばなりません。要するに、人は境遇の主となるべく、境遇をして吾人の主とならしむべきものではありません。

世に能力を有する人は、概して各種の反對、妨害とに遭遇した者にして、而も奮闘の結果、禍を轉じて福となし、自信獨立の氣象を養ひます。又困苦、難關は、人をして神に頼るの念を熾さかんならしめ、且つ之により能力を發達せしむるものであります。

キリストの働は、實に精神が籠つて居りました。彼は時間で事をなす様な事なく

時も力も精神も、一切を擧げて人類の福祉の爲に之を提供し、朝から晩迄、忙しく働き給ひし上、夜を徹して迄も、身を屈めて天父に祈禱り、更に大なる働をなし得る力の與へられん事を求め給ひました。彼は、血涙を灑ぎ、號泣して、彼の人性が強められ、凡の敵の奸計に勝ち、人類向上の大使命を果し得る様、天父に祈り給ひました。故にキリストは、己が働に關し、『我汝等に例を示せり、此は我汝等に行し如く爾曹にも行しめんが爲なり。』と、仰せになりました。

使徒パウロは、『キリストの愛我を勵ませり。』と叫びましたが、此ぞ、實に勇敢なる行動の原動力にして、彼と雖も、義務の就行に對し、一時は逡巡した事があつたかも知れません。然しさう云ふ場合にも、一目十字架を仰ぎ見れば、懦氣立どころに去り、奮然として克己の道に前進しました。又彼は、其兄弟等に對する働に於て、キリストの犠牲に顯はれた無限の愛と、其抵抗すべからざる力を紹介するに重を措きました。

彼の勸告は、言々肺肝を掖ぐるが如く、熱誠が溢れて居りました。『爾曹われら

の主しゅイエス、キリストの恩めぐみを知る、彼は富とみるものなりしが、爾曹なんぢらの爲ために貧まさしきものとなれり。是爾曹これなんぢらが、彼の窮乏さほしきに由よりて、富とみるものとならん爲ためなり。』と、實に其通であります。キリストは、至高き處に在し給ひしに、其地位を棄て、自己を卑ふし、謙遜の最低處に下り、克己犠牲の途を歩み、最後に生命を棄て給ふ時迄、決して横に外れ給ひませんでした。故に、天上の寶座と、十字架との間に、主の休み給ひし處は、一もなく、人類に對する深き慈愛は、主をしてあらゆる無禮を甘受せしめ、あらゆる侮辱を厭はざらしめました。

パウロは又左の如く勧めました、『又、各己が事のみを顧みず、人の事をも顧みよ、爾曹キリスト、イエスの意を以て意とすべし。彼は神の體にて居りしかども自みづから其神と匹ひしく在る所の事を棄難すてがたき事と意はず、反て己を虚かへつうし、僕しもべの貌かたちをとりて人の如ごとくなれり。既に人の如ごとき形狀にて現れ、己を卑し死に至るまで順したがひ、十字架の死をさへ受くるに至れり。』<sup>4</sup>

キリストを自己の個人的救主として受入れた人は、必ず神へ奉仕する特權を重ん



じ、神が自分になし給ひし恩惠の如何に大なりしかを憶ひ、其無限の愛に對し、感恩の念を禁ずる事が出来ません。而して、神の奉仕に我力量を献げ、御恩報じの萬一にしようと思ひます。又キリストと、彼が贖ひ給ひしものに對する愛を顯はさんと望みますから、困難勞苦は寧ろ之を歡迎する様になります。

神の爲に本氣で働かうとする人は、自分が最善を盡して働けば、主の榮を揚げ得るが故、必ず怠る様な事はありません。又神の要求を缺なく行ひ、自分の管能の凡を改善せんと努力し、如何なる義務でも、神の爲と思つて忠實に盡します。斯くて彼の唯一の希望は、キリストが崇められ、完全の奉仕を受け給はん事であります。

犁と燔祭の壇の間に立つて居る牡牛の圖がありますが、“Ready for either”（どちらに用ひられても用意は出来て居る。）との語が、記してあります。即ち、此牛は耕作を命ぜらるれば喜んで之を爲し、又燔祭の犠牲に献げられるなら、是又辭する處でないと云ふ意味であります。是は神の子等の精神でなければなりません。即ち、聖旨なら、義務の要する處へ、何處なりとも之を選ばず喜んで行き、贖主の爲

に犠牲となる覺悟が必要です。

(ミニストリー オブヒーリングス 四九七―五〇二頁)

- 1 約翰傳十三章十五節
- 2 哥林多後書五章十四節
- 3 哥林多後書八章九節
- 4 腓立比書二章四―八節

……福音宣傳者 完……





大正九年十二月一日印刷  
大正九年十二月一日發行  
大正十四年十一月三日再版

■福音宣傳者■

【定價四圓】

原著者

イー・ジィ・ホワイト

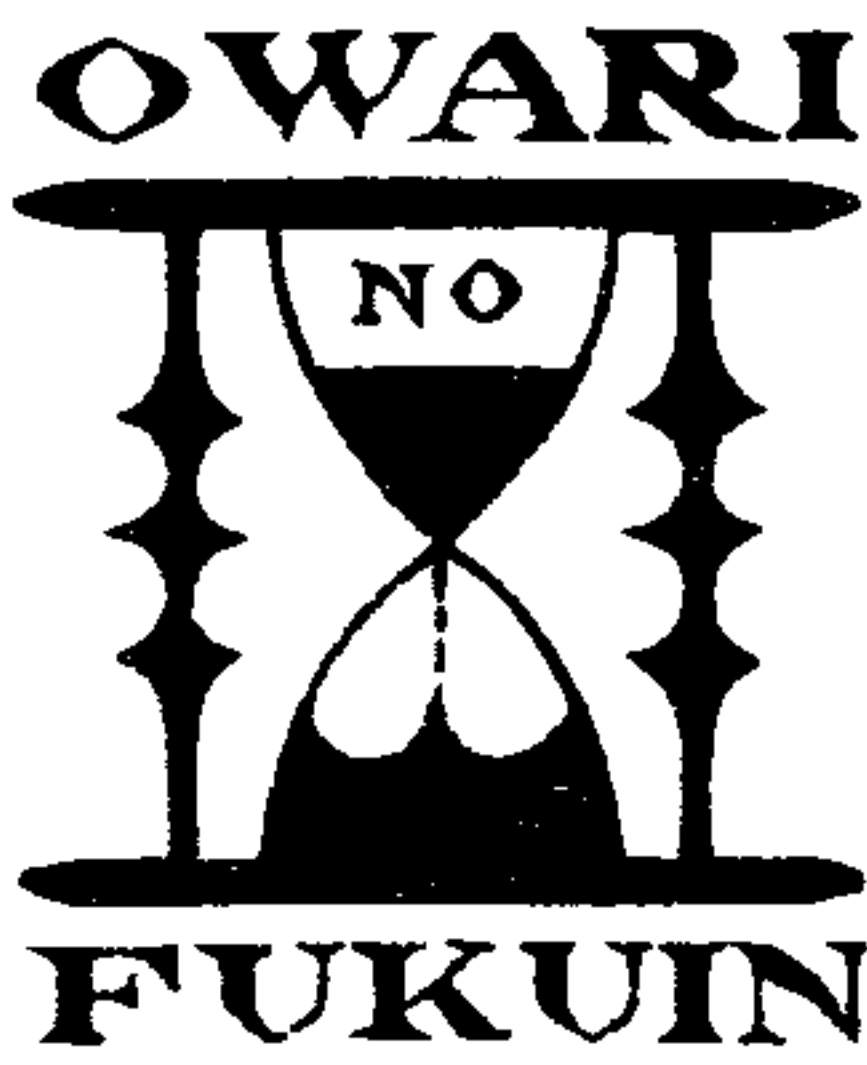
翻譯者

末世之福音社編輯部

東京府豊多摩郡杉並町天沼一七一

發行兼  
印刷者

エー・ビー・コール



印刷所

東京府豊多摩郡杉並町天沼一七一  
末世之福音社印刷部

發行所

東京府豊多摩郡杉並町天沼一七一  
末世之福音社

東京淀橋局私書函第七號  
振替口座・東京貳壹參貳七番



# 福音宣伝者

本書は大正9年12月1日発行の復刻版です。

転載・複製を禁ず

---

昭和50年4月1日 発行

定 価 1,200円

|       |            |
|-------|------------|
| 著 者   | エレン・G・ホワイト |
| 発 行 者 | 広 田 実      |
| 印刷・製本 | 福 音 社      |

---

〒 241 横浜市旭区上川井町1966

発行・発売所 福 音 社

電 話 (045) 954—1414 振 替 横浜 599番

---

PRINTED IN JAPAN